宮城県文化財調査報告書第167集

山 王 遺 跡 Ⅱ

－多賀前地区遺構編－

平 成 7 年 3 月

宮 城 県 教 育 委 員 会
建 設 省 東 北 地 方 建 設 局

遺跡遠景（調査区南上空より）

SD1020 溝跡と建物跡群　（南から）

序　　文

宮城県には、現在約 5,600 カ所の遺跡の存在が知られています。これらの遺跡には、旧石器時代以来各時代にわたって築かれた祖先の歴史が刻み込まれています。このようなかけがえのない文化遺産を後世に伝えることは、私達にとって重要な責務であると考えます。

近年の文化財を取り巻く状況をみますと、従来の経済優先に対する反省から、物資のみならず精神的･文化的な面を大切にしようとする価値観の転換がなされつつあるのは、すでに私達の知るところであります。こうした時代の趨勢にあって、文化財や歴史的環境を保存し、地域づくりの一環として積極的に整備活用してゆこうとする気運が徐々に高まる傾向にあることは、文化財保護思想のより一層の普及・啓蒙につながるものであり、まさに歓迎すべきことといえましょう。

しかし、一方では絶えることのない開発事業により、遺跡の多くは依然として破壊・消滅の危機にさらされているのが実情です。こうしたなかにあって、当教育委員会では遺跡の所在等について関係者への周知を図るとともに、協議調整を重ね、可能な限りの保存に努めているところであります。

本書は、仙塩道路建設工事に伴い、平成 4～6 年度に実施した「山王遺跡」多賀前地区の発掘調査成果をまとめたものです。これらの成果が広く活用され、地域の歴史の解明に資するところとなれば大きな喜びであります。

最後に、遺跡の保存に御理解を示され、調査に際しては多大なるご協力をいただいた関係機関の方々、さらに実際に調査にあたられた皆様に対し、厚く御礼申し上げる次第であります。

平成 7 年 3 月

宮城県教育委員会教育長

鈴　鴨　清　美

例　　言

1．本書は建設省東北地方建設局仙台工事事務所が担当する仙塩道路建設工事に伴う山王遺跡の発掘調査のうち、平成 4～6 年度に調査した多賀前地区の調査成果をまとめたものである。仙塩道路建設関係遺跡発掘調査報告書の第 2 分冊（『山王遺跡Ⅱ－多賀前地区遺構編』）にあたる。

2．調査は宮城県教育委員会が主体となり、宮城県教育庁文化財保護課が担当した。

3．発掘調査および整理・報告書の作成に際しては、次の方々および機関から指導、助言を賜った。（五十音順、以下敬称略）。

相沢清利、阿部義平、石川俊英、石本敬、井上和人、井上喜久男、今泉隆雄、宇野隆夫、岡田茂弘、岡村道雄、小野正敏、亀井明徳、菊池豊、佐川正敏、佐藤和彦、茂原信生、進藤秋輝、鈴木拓也、関口廣次、高倉敏明、高野芳弘、高橋照彦、滝口卓、田中琢、千葉孝弥、辻誠一郎、手塚均、中村敦、楢崎彰一、丹羽茂、平川南、古川雅清、前川要、松井章、松本秀明、百瀬正恒、柳沢和明、山中敏史、山本信夫

東北歴史資料館、宮城県多賀城跡調査研究所、多賀城市埋蔵文化財調査センター

4．本書の整理、遺構のトレースは、菅原弘樹・高橋栄一・佐藤憲幸・古川一明が行った。

5．本書の執筆は、調査担当者との協議の後に以下のような分担で行い、菅原が編集した。なお、第Ⅰ章については、平成 2～5 年度の概報に一部加筆し、転載した。

第Ⅱ章 2、第Ⅴ章Ｂ-2～4……高橋

第Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ章Ｂ-1……菅原

第Ⅴ章Ａ、Ｂ-9……古川

第Ⅴ章Ｂ-5～8……佐藤

6．第Ⅱ章の「1．山王遺跡の位置と遺跡周辺の地形環境」については、東北大学理学部の松本秀明氏に執筆をお願いした。

7．仙塩道路建設に伴う本遺跡の調査成果については、これまでに調査概報および報告書などでその内容の一部を報告しているが、これと本書の記載内容が異なる場合は、本書がこれらに優先する。

8．発掘調査の記録や整理した資料・出土遺物は宮城県教育委員会が保管している。

凡　　例

1．本書の遺構番号は、遺構の種別に関わらず、調査現場で検出順に番号を付したものをそのまま使用した。遺構の種別については次の番号を使用して区別した。

掘立柱建物跡（ＳＢ)、竪穴住居跡･竪穴遺構（ＳＩ)、井戸跡（ＳＥ)、土壙（ＳＫ)、材木塀跡・柱列・杭列（ＳＡ)、溝跡・河川跡（ＳＤ)、小溝状遺構群・水田跡（ＳＦ)、道路跡･土器埋設遺構･整地層・その他性格不明の遺構　（ＳＸ）

2．遺構の記述や遺構実測図の順番は、原則として遺構の配置により北西から南東の順に行っているため、遺構番号順になっていない。本書では、遺構の検索の便をはかるため、おもな区画については文末に遺構番号順に並べた各種遺構の一覧表を掲載し、本文・遺構実測図（全体図・分割図、個別図）の頁を示した。適宜参照されたい。

3．発掘調査の測量は、山王遺跡八幡地区内の第Ｘ系国家座標Ｘ＝－188,880.000、Ｙ＝13,230.000 を原点とした東西・南北の基準線をもとに 3m方眼を設定して行った。本書に掲載した遺構図中に示される方位はすべて座標北を指している。磁北の座標北との偏差は西に 8° 30′ 40″である。

4．本書で扱う遺構は、すべて縮尺 1/150 の全体図･分割図の中に示した。分割図は区画内の遺構図が 1 枚に収まらない場合に、各区ごとに北西から南東の順に、1 枚に収まる範囲をブロックに分けて掲載したもので、各図版の位置は隣接する図版とともに略図で図示した。これらの区画の全体の遺構配置については、1/800 の遺構配置概略図で示した。各遺構の個別の実測図については、原則として道路跡（1/200)、掘立柱建物跡･河川跡（1/100)、竪穴住居跡（1/60)、材木塀跡・溝跡（1/80)、井戸跡・土壙（1/40)、土器埋設遺構（1/20）の縮尺で図示した。

5．本文中で使用した「灰白色火山灰」（庄子･山田：1982）については、現在 10 世紀前葉頃に降下したものと考えられている（白鳥：1980、山田･井上：1990)。本書では、遺構の土層注記表等において、省略して「灰白」と表記した場合もある。

6．本書における土色についての記述にあたっては『新版標準土色帳』（小山･竹原；1973）を利用した。

7．本書の第 1･5･6 図は1/5,000 の多賀城市都市計画図、第 4 図は建設省国土地理院発行の 1/50,000「仙台」「塩釜」を複製して使用した。

8．本書の写真図版 1 は、昭和 24 年米軍撮影の空中写真（R365-7）および平成 5 年建設省国土地理院撮影の空中写真（C3-22）を国土地理院の了承を得て、掲載した。

目　　次

第Ⅰ章　調査に至る経過 …… 1
第Ⅱ章　遺跡の概観 …… 3
　1．山王遺跡の位置と遺跡周辺の地形環境（東北大学理学部 松本秀明） …… 3
　2．山王遺跡と周辺の遺跡 …… 5
第Ⅲ章　調査の方法と経過 …… 14
　1．試掘調査 …… 14
　2．本調査 …… 14
第Ⅳ章　基本層序 …… 17
第Ⅴ章　発見された遺構 …… 20
　A．古墳時代 …… 20
　1．旧地形と水田域 …… 20
　2．Ⅰ地区の水田域 …… 20
　3．Ⅱ地区の水田域 …… 24
　4．Ⅲ地区の水田域 …… 27
　5．微高地の遺構 …… 29
　6．河川跡 …… 31
　B．奈良・平安時代 …… 32
　1．道路跡 …… 33
　2．北 1 西 4 区 …… 66
　3．北 1 西 3 区 …… 68
　4．南 1 西 3 区 …… 154
　5．南 1 西 2 区 …… 158
　6．南 1 西 1 区 …… 226
　7．南 2 西 1 区 …… 228
　8．南 2 西 2 区 …… 284
　9．南 3 区 …… 290

調　査　要　項

遺 跡 名：山王遺跡多賀前地区（宮城県遺跡地名表登載番号18013）

遺跡記号：ＦＸ

所 在 地：宮城県多賀城市市川字多賀前

調査面積：約 17,500 ㎡

調査期間：試 掘 調 査　平成 3 年10月 16 日～11 月 16 日

第 1 次調査　平成 4 年 5 月 11 日～12 月 25 日

第 2 次調査　平成 5 年 3 月 3 日～12 月 24 日

第 3 次調査　平成 6 年 4 月 7 日～10 月 25 日

調査担当：宮城県教育庁文化財保護課

調 査 員：試 掘 調 査　後藤秀一

第 1 次調査　後藤秀一、菅原弘樹、岩見和泰、高橋栄一、吾妻俊典、金子勇一
窪田忍、吉野武、東理浩明

第 2 次調査　後藤秀一、古川一明、村田晃一、菅原弘樹、高橋栄一、佐藤憲幸
吾妻俊典、金子勇一、太田肇、吉野武、東理浩明、笠原俊哉

第 3 次調査　古川一明、佐久間光平、菅原弘樹、佐藤憲幸、吉野武、星清

調査協力：建設省東北地方建設局、東北歴史資料館、宮城県多賀城跡調査研究所、多賀城市埋蔵文化財調査センター

挿　図　目　次

第１図　調査区配置 …… 2
第2図　仙台平野北部の地形と山王遺跡 …… 4
第3図　過去5,000年間の海岸線の変化 …… 4
第4図　山王遺跡の位置と奈良・平安時代遺跡の分布 …… 6
第5図　山王遺跡周辺の遺跡 …… 7
第6図　試掘調査トレンチ配置図 …… 14
第7図　調査区と基本層位柱状図 …… 18
第8図　古墳前期の水田跡平面図 …… 21
第9図　古墳前期の水田跡断面図 …… 22
第10図　Ⅰ区の水田域 …… 23
第11図　Ⅱ区北半の水田域 …… 25
第12図　Ⅱ区南半の水田域 …… 26
第13図　Ⅲ区の水田域 …… 28
第14図　ＳＡ3136打ち込み杭列 …… 29
第15図　ＳＤ1943・3226溝跡断面図 …… 29
第16図　微高地の遺構 …… 30
第17図　ＳＤ4060河川跡木材集積部分 …… 31
第18図　多賀城外検出の道路遺構 …… 32
第19図　ＳＸ4012・4013北1道路、ＳＸ4014西3道路平面図 …… 34
第20図　道路交差点の形状分類と路幅・側溝規模の形測方法 …… 35
第21図　ＳＸ4012・4013北1道路、ＳＸ4014西3道路平面模式図 …… 36
第22図　ＳＸ4012・4013北1道路、ＳＸ4014西3道路変遷図 …… 36
第23図　ＳＸ4013北1道路南側側溝断面図 …… 37
第24図　ＳＸ10東西大路、ＳＸ20・30西2道路平面図 …… 38
第25図　ＳＸ10東西大路、ＳＸ20・30西2道路断面模式図 …… 40
第26図　ＳＸ10東西大路、ＳＸ20西2道路断面図 …… 41
第27図　ＳＸ10東西大路、ＳＸ20・30西2道路変遷図 …… 42
第28図　ＳＸ30西2道路変遷図 …… 42
第29図　ＳＸ30西2道路東側溝断面図 …… 43
第30図　ＳＸ10・30Ｂ・Ｃ側溝と枡跡、ＳＫ320・323枡跡断面図 …… 45
第31図　ＳＸ1300・1400南1道路、ＳＸ1250・1350西1道路平面図 …… 48
第32図　ＳＸ1300・1400南1道路、ＳＸ1250・1350西1道路断面模式図 …… 50
第33図　ＳＸ1300・1400南1道路、ＳＸ1250・1350西1道路変遷図 …… 50
第34図　ＳＸ1400南1道路、ＳＸ1250・1350西1道路断面図 …… 51
第35図　ＳＸ3461南1－2間道路平面図 …… 53
第36図　ＳＸ3461南1－2間道路断面模式図 …… 54
第37図　ＳＸ3461南1－2間道路変遷図 …… 54
第38図　ＳＸ3461南1－2間道路断面図 …… 54
第39図　ＳＸ1900南2道路、ＳＸ1850・1950西０道路およびＳＤ2000河川跡変遷図 …… 56
第40図　ＳＸ1900南2道路、ＳＸ1850・1950西０道路ＳＤ2000河川跡平面図 …… 57
第41図　ＳＸ1900南2道路断面図 …… 59
第42図　ＳＤ2000河川跡断面図 …… 59
第43図　ＳＸ1950西０道路とＳＤ2000河川跡変遷図 …… 61
第44図　道路検出の土器埋設遺構(1) …… 64
第45図　道路検出の土器埋設遺構(2) …… 65
第46図　北1西4区遺構全体図 …… 66
第47図　北1西3区遺構全体図 …… 68
第48図　北1西3区建物跡平面図(1) …… 70
第49図　ＳＢ859柱穴断面図 …… 71
第50図　ＳＢ895柱穴断面図 …… 71
第51図　ＳＢ925柱穴断面図 …… 72
第52図　ＳＢ928柱穴断面図 …… 72
第53図　ＳＢ909柱穴断面図 …… 73
第54図　ＳＢ936柱穴断面図 …… 73
第55図　ＳＢ879柱穴断面図 …… 73
第56図　北1西3区建物跡平面図(2) …… 74
第57図　ＳＢ929柱穴断面図 …… 75
第58図　ＳＢ969・970柱穴断面図 …… 76
第59図　ＳＢ857柱穴断面図 …… 77
第60図　ＳＢ858柱穴断面図 …… 78
第61図　ＳＢ943柱穴断面図 …… 78
第62図　ＳＢ899柱穴断面図 …… 79
第63図　ＳＢ896柱穴断面図 …… 80
第64図　ＳＢ923柱穴断面図 …… 80
第65図　ＳＢ765柱穴断面図 …… 81
第66図　ＳＢ758柱穴断面図 …… 82
第67図　北1西3区建物跡平面図(3)
ＳＢ860・862・863横穴断面図 …… 83
第68図　ＳＢ510柱穴断面図 …… 84
第69図　北1西3区建物跡平面図(4)
ＳＢ584・585柱穴断面図 …… 86
第70図　ＳＢ757柱穴断面図 …… 87

第71図　ＳＢ756柱穴断面図 …… 87
第72図　北1西3区建物跡平面図(5)
ＳＢ586・751・752・753・754柱穴断面図 …… 89
第73図　ＳＢ587(755)柱穴断面図 …… 91
第74図　ＳＢ762(494)柱穴断面図 …… 91
第75図　北1西3区建物跡平面図(6) …… 92
第76図　北1西3区建物跡平面図(7) …… 95
第77図　ＳＢ749柱穴断面図 …… 96
第78図　北1西3区建物跡平面図(8) …… 98
第79図　ＳＢ813柱穴断面図 …… 101
第80図　ＳＢ695柱穴断面図 …… 101
第81図　ＳＢ597柱穴断面図 …… 102
第82図　ＳＢ695柱穴断面図 …… 103
第83図　ＳＢ595柱穴断面図 …… 103
第84図　ＳＢ685柱穴断面図 …… 104
第85図　ＳＢ816柱穴断面図 …… 104
第86図　ＳＩ822・987住居跡 …… 106
第87図　ＳＥ821・892井戸跡 …… 107
第88図　ＳＥ864井戸跡 …… 109
第89図　ＳＥ864井戸跡井戸粋側面および組み方模式図
…… 110
第90図　ＳＥ502・659井戸跡 …… 111
第91図　ＳＥ660井戸跡面図 …… 112
第92図　ＳＸ990土器埋設遺構 …… 113
第93図　ＳＩ552・560・531竪穴遺構 …… 114
第94図　ＳＩ579竪穴遺構 …… 116
第95図　北1西3区土壙断面図(1) …… 119
第96図　北1西3区土壙断面図(2) …… 122
第97図　北1西3区土壙断面図(3) …… 125
第98図　ＳＡ823区画施設・ＳＡ831材木塀跡 …… 127
第99図　ＳＤ553溝跡平面図 …… 130
第100図　ＳＤ553溝跡断面図 …… 131
第101図　ＳＡ526材木塀跡断面図 …… 132
第102図　ＳＡ735材木塀跡断面図 …… 133
第103図　北1西3区溝跡断面図 …… 135
第104図　北1西3区分割図(1) …… 139
第105図　北1西3区分割図(2) …… 140
第106図　北1西3区分割図(3) …… 141
第107図　北1西3区分割図(4) …… 142
第108図　北1西3区分割図(5) …… 143
第109図　北1西3区分割図(6) …… 144
第110図　北1西3区分割図(7) …… 145
第111図　北1西3区分割図(8) …… 146
第112図　北1西3区分割図(9) …… 147
第113図　南1西3区遺構全体図 …… 154
第114図　ＳＥ306井戸跡、ＳＫ303土壙断面図 …… 155
第115図　南1西2区遺構全体図 …… 158
第116図　ＳＢ201・202柱穴断面図 …… 159
第117図　ＳＢ197柱穴断面図 …… 160
第118図　ＳＢ198柱穴断面図 …… 160
第119図　ＳＢ209柱穴断面図 …… 160
第120図　ＳＢ136柱穴断面図 …… 161
第121図　ＳＢ14 柱穴断面図 …… 161
第122図　ＳＢ111柱穴断面図 …… 162
第123図　ＳＢ15 柱穴断面図 …… 162
第124図　南1西2区北西部建物跡平面図 …… 163
第125図　ＳＢ1102柱穴断面図 …… 167
第126図　ＳＢ2035柱穴断面図 …… 168
第127図　ＳＢ1183柱穴断面図 …… 168
第128図　ＳＢ1075柱穴断面図 …… 169
第129図　ＳＢ2023柱穴断面図 …… 169
第130図　ＳＢ1155柱穴断面図 …… 170
第131図　南1西2区中央部建物跡平面図(1) …… 171
第132図　ＳＢ2010柱穴断面図 …… 172
第133図　ＳＢ2069柱穴断面図 …… 172
第134図　ＳＢ1176柱穴断面図 …… 172
第135図　ＳＢ1091柱穴断面図 …… 173
第136図　ＳＢ1086柱穴断面図 …… 174
第137図　ＳＢ3126柱穴断面図 …… 174
第138図　南1西2区中央部建物跡平面図(2) …… 175
第139図　ＳＢ3128柱穴断面図 …… 176
第140図　ＳＢ1242柱穴断面図 …… 176
第141図　南1西2区南東部建物跡平面図 …… 177
第142図　ＳＢ1241柱穴断面図 …… 178
第143図　ＳＢ3030柱穴断面図 …… 178
第144図　ＳＢ1246柱穴断面図 …… 179
第145図　ＳＢ1245柱穴断面図 …… 179
第146図　ＳＢ1243・1244柱穴断面図 …… 179
第147図　ＳＢ3035柱穴断面図 …… 180
第148図　ＳＢ1551柱穴断面図 …… 180
第149図　南1西2区ＳＥ50井戸跡 …… 182
第150図　ＳＥ3026井戸跡 …… 183
第151図　ＳＥ2265・2267・11434井戸跡 …… 185
第152図　ＳＸ76・1040・1206土器埋設遺構 …… 186
第153図　ＳＩ3023竪穴遺構断面図 …… 187
第154図　南1西2区土壙断面図(1) …… 189
第155図　南1西2区土壙断面図(2) …… 193
第156図　ＳＡ200材木塀跡断面図 …… 196

第157図 南1西2区材木塀跡断面図 …… 198
第158図 ＳＤ1020溝跡と建物跡群 …… 200
第159図 ＳＤ1020溝跡、ＳＫ1021・2051土壙断面図 …… 202
第160図 南1西2区溝跡断面図 …… 206
第161図 南1西2区分割図(1) …… 211
第162図 南1西2区分割図(2) …… 212
第163図 南1西2区分割図(3) …… 213
第164図 南1西2区分割図(4) …… 214
第165図 南1西2区分割図(5) …… 215
第166図 南1西2区分割図(6) …… 216
第167図 南1西2区分割図(7) …… 217
第168図 南1西2区分割図(8) …… 218
第169図 南1西2区分割図(9) …… 219
第170図 南1西1・2区分割図 …… 220
第171図 南1西1区ＳＡ2280塀跡断面図 …… 226
第172図 南2西1区遺構全体図 …… 228
第173図 ＳＢ1553柱穴断面図 …… 229
第174図 南2西1区北西部建物跡平面図 …… 230
第175図 ＳＢ1555柱穴断面図 …… 231
第176図 ＳＢ1554柱穴断面図 …… 231
第177図 ＳＢ1556柱穴断面図 …… 231
第178図 ＳＢ3211柱穴断面図 …… 232
第179図 ＳＢ3215柱穴断面図 …… 233
第180図 ＳＢ3216柱穴断面図 …… 233
第181図 ＳＢ1536柱穴断面図 …… 233
第182図 ＳＢ1616柱穴断面図 …… 234
第183図 ＳＢ1617柱穴断面図 …… 234
第184図 ＳＢ3441・3440柱穴断面図 …… 234
第185図 南2西1区南東部建物跡平面図 …… 235
第186図 ＳＢ3447柱穴断面図 …… 236
第187図 ＳＢ3438・3441柱穴断面図 …… 236
第188図 ＳＢ3447柱穴断面図 …… 236
第189図 ＳＢ3439柱穴断面図 …… 237
第190図 ＳＢ3442・3448柱穴断面図 …… 237
第191図 ＳＢ3443・3450柱穴断面図 …… 237
第192図 ＳＢ3449柱穴断面図 …… 238
第193図 ＳＢ1873柱穴断面図 …… 239
第194図 ＳＢ1864柱穴断面図 …… 239
第195図 ＳＢ1690柱穴断面図 …… 239
第196図 南2西1区中央部建物跡平面図 …… 240
第197図 ＳＢ1691柱穴断面図 …… 241
第198図 ＳＩ1508、1541・1542住居跡 …… 243
第199図 ＳＩ1514・1543住居跡 …… 245
第200図 ＳＩ3213・3435住居跡 …… 246
第201図 ＳＩ1615住居跡 …… 248
第202図 ＳＩ1738住居跡 …… 249
第203図 ＳＩ1635・1639住居跡 …… 251
第204図 ＳＩ1735・1737・1742住居跡 …… 252
第205図 ＳＩ1932住居跡 …… 253
第206図 ＳＥ3207・1898井戸跡断面図 …… 254
第207図 ＳＥ1739井戸跡 …… 256
第208図 ＳＥ1606井戸跡 …… 257
第209図 ＳＸ1749・1799土器埋設遺構 …… 257
第210図 ＳＩ1560竪穴遺構 …… 258
第211図 南2西1区土壙断面図 …… 260
第212図 ＳＡ1609材木塀跡断面図 …… 261
第213図 ＳＤ3217溝跡断面図 …… 261
第214図 ＳＤ1538溝跡断面図 …… 262
第215図 南2西1区河川跡断面図 …… 264
第216図 ＳＤ3625河川跡断面図 …… 267
第217図 南2西1区分割図(1) …… 270
第218図 南2西1区分割図(2) …… 271
第219図 南2西1区分割図(3) …… 272
第220図 南2西1区分割図(4) …… 273
第221図 南2西1区分割図(5) …… 274
第222図 南2西1区分割図(6) …… 275
第223図 南2西1区分割図(7) …… 276
第224図 南2西1区分割図(8) …… 277
第225図 南2西1区分割図(9) …… 278
第226図 南2西1区分割図(10) …… 279
第227図 南2西1区分割図(11) …… 280
第228図 南2西1区分割図(12) …… 280
第229図 南2西2区遺構全体図 …… 284
第230図 ＳＢ3051柱穴断面図 …… 285
第231図 ＳＢ3122柱穴断面図 …… 285
第232図 南2西2区土壙・溝跡断面図 …… 286
第233図 ＳＸ3620土器埋設遺構 …… 291
第234図 Ⅲｆ層層上面の遺構平面図 …… 295
第235図 Ⅲｅ層上面の遺構平面図 …… 296
第236図 Ⅲｂ層上面の遺構平面図 …… 297
第237図 Ⅲｃ層上面の遺構平面図 …… 298
第238図 ＳＦ3627Ａ・Ｂ小溝状遺構群部分拡大図 …… 299
第239図 ＳＦ3700Ｂ水田跡部分拡大図(1) …… 300
第240図 ＳＦ3700Ｂ水田跡部分拡大図(2) …… 301
第241図 ＳＦ3700Ａ水田跡部分拡大図 …… 302

表　目　次

第１表　ＳＸ4012・4013 北１道路、ＳＸ4014 西３道路一覧表 …… 35
第2表　ＳＸ10東西大路、ＳＸ20・30西2道路一覧表 …… 39
第3表　ＳＸ1300・1400南1道路、ＳＸ1250・1350西1道路一覧表 …… 49
第4表　ＳＸ3461南1－2間道路一覧表 …… 52
第5表　ＳＸ1900南2道路、ＳＸ1850・1950西０道路一覧表 …… 55
第6表　道路検出の土器埋設遺構一覧表 …… 62
第7表　北1西3区掘立柱建物跡一覧表（その1） …… 148
第8表　北1西3区掘立柱建物跡一覧表（その2） …… 149
第9表　北1西3区土壙一覧表（その1） …… 150
第10表　北1西3区土壙一覧表（その2） …… 151
第11表　北1西3区土壙一覧表（その3） …… 152
第12表　北1西3区溝跡一覧表 …… 153
第13表　南1西2区掘立柱建物跡一覧表（その1） …… 221
第14表　南1西2区掘立柱建物跡一覧表（その2） …… 222
第15表　南1西1・2区土壙一覧表（その1） …… 223
第16表　南1西1・2区土壙一覧表（その2） …… 224
第17表　南1西2区溝跡一覧表 …… 225
第18表　南2西1区掘立柱建物跡一覧表 …… 281
第19表　南2西1区竪穴住居跡一覧表 …… 282
第20表　南2西1・2区土壙一覧表 …… 282
第 21 表　南２西１区溝跡一覧表 …… 283

写真図版目次

巻頭カラー　遺跡遠景、ＳＤ1020溝跡と建物跡群
図版1　遺跡周辺の空中写真 …… 305
図版2　遺跡遠景 …… 306
図版3　遺跡遠景、調査区全景 …… 307
図版4　北1西3・4区全景 …… 308
図版5　南1西2区、南2西1区全景 …… 309
図版6　ＳＸ4012・4013北1道路、ＳＸ4014西3道路、ＳＸ4041・4042土器埋設遺構 …… 310
図版7　ＳＸ10東西大路 …… 311
図版8　ＳＸ10東西大路・ＳＸ30西2道路、枡跡など …… 312
図版9　ＳＫ320・323枡跡断面、ウマ出土状況 …… 313
図版10　ＳＸ1300・1400南1道路、ＳＸ1250・1350西1道路 …… 314
図版11　ＳＸ1300南1道路、ＳＸ1350西1道路、ＳＸ1227土器埋設遺構、ＳＸ1207土壙 …… 315
図版12　ＳＸ3461南1－2間道路、ＳＸ1900南2道路 …… 316
図版13　ＳＸ1950西０道路断面、ＳＸ1893・1964土器埋設遺構 …… 317
図版14　ＳＤ2000河川跡 …… 318
図版15　ＳＡ3624杭列、ＳＸ3620土器埋設遺構、ＳＤ2000河川跡遺物出土状況 …… 319
図版16　北1西2区中央～北西部および建物跡群 …… 320
図版17　ＳＢ862・863建物跡 …… 321
図版18　ＳＢ584・585・757・756建物跡 …… 322
図版19　ＳＢ588・589、ＳＢ586・587、ＳＢ595・685建物跡 …… 323
図版20　ＳＡ823区画施設、ＳＡ831材木塀跡、ＳＤ553・991・624溝跡 …… 324
図版21　ＳＤ553溝跡断面、ＳＡ735材木塀跡、ＳＥ864井戸跡 …… 325
図版22　ＳＥ821・892・660井戸跡 …… 326
図版23　ＳＥ660・659井戸跡、ＳＸ990土器埋設遺構 … 327
図版24　ＳＩ560・579竪穴遺構、ＳＫ952土壙 …… 328
図版25　ＳＫ503・820・551・507土壙土器出土状況 …… 329
図版26　南1西2・3区北半部、ＳＥ606井戸跡南1西2区中央部 …… 330
図版27　ＳＤ1020溝跡と建物跡群など …… 331
図版28　南1西2区北西部建物跡群 …… 332
図版29　南1西2区中央部建物跡群 …… 333
図版30　ＳＢ1091・1086、ＳＢ1241・1242建物跡 …… 334
図版31　ＳＢ1243・1244、ＳＢ3035建物跡 …… 335
図版32　ＳＡ19・89材木塀跡、ＳＤ3050溝跡断面ＳＸ76・1040土器埋設遺構 …… 336
図版33　ＳＥ2267・2265井戸跡 …… 337
図版34　ＳＥ1434・3026・3021井戸跡 …… 338
図版35　ＳＩ3023竪穴遺構、ＳＫ3002・2266土壙 …… 339
図版36　南2西1区北西部遺構群、ＳＢ1553・1554・1555・1556建物跡 …… 340
図版37　ＳＢ1864、ＳＢ3515・3516、ＳＢ1549・1812建物跡 …… 341
図版38　南2西1区南東部建物跡群 …… 342
図版39　ＳＩ1508、ＳＩ1513・1514・1515・1543住居跡、ＳＩ3213住居跡 …… 343
図版40　ＳＩ3435、ＳＩi1535・1639住居跡 …… 344

図版41　ＳＡ1609材木塀跡、ＳＥ3207・1739井戸跡 …… 345
図版42　ＳＡ1606井戸跡、ＳＩ1560竪穴遺構、ＳＸ1799土器埋設遺構 …… 346
図版43　ＳＤ3458・1602河川跡、南２西２区遺構群、ＳＢ3122・3051建物跡 …… 347
図版44　ＳＦ3700Ｃ水田跡、ＳＦ3627小溝状遺構群 …… 348
図版45　ＳＢ3705建物跡、ＳＦ3700Ｂ水田跡 …… 349
図版46　Ｉ区ＳＦ3624水田跡 …… 350
図版47　Ⅱ・Ⅲ区ＳＦ3124水田跡、Ⅱ－Ⅲ区間低湿地断面 …… 351
図版48　ＳＤ1943水路跡、ＳＤ3226溝跡、ＳＡ3136杭列 …… 352

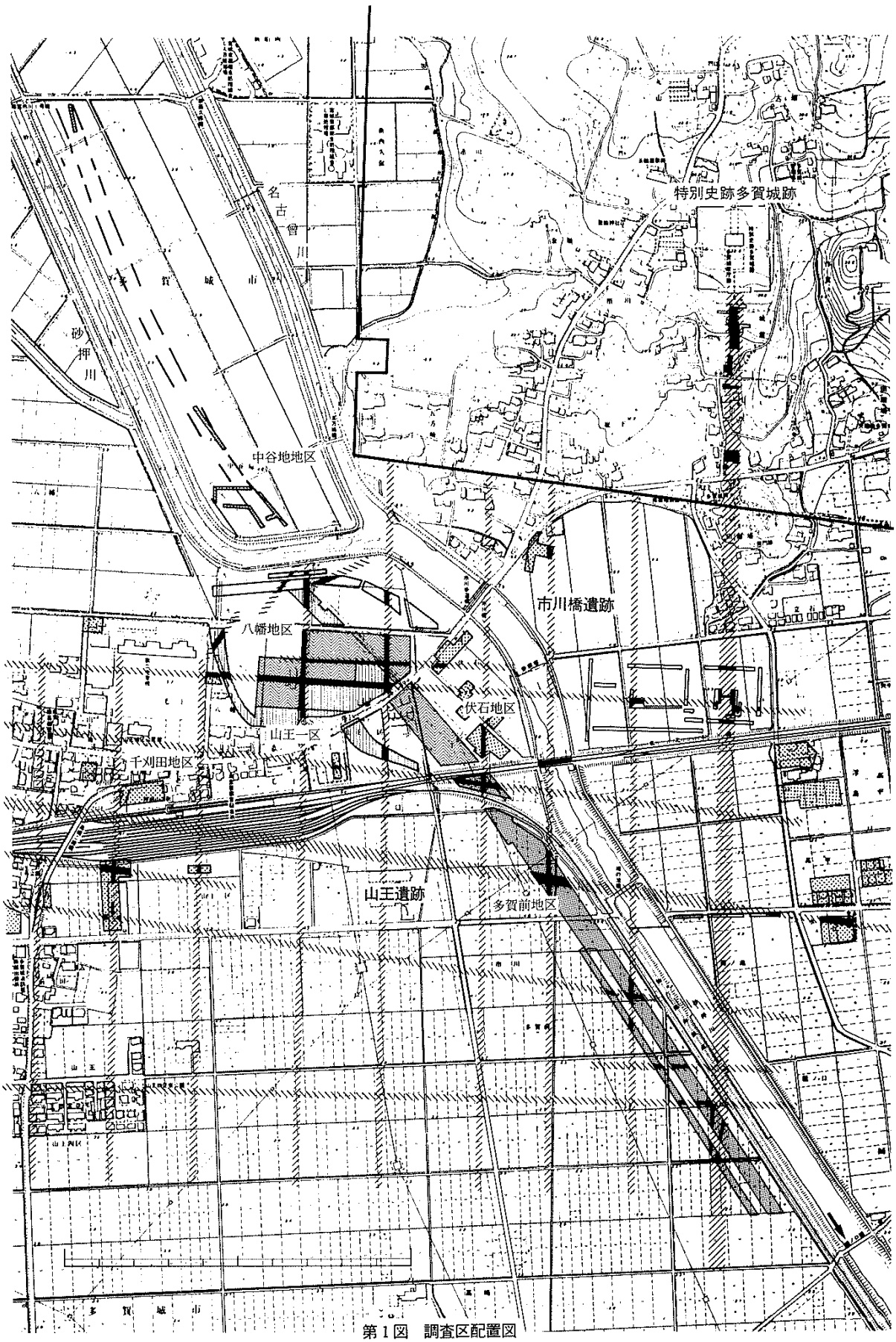
第Ⅰ章　調査に至る経過

建設省東北地方建設局、日本道路公団、宮城県道路公社、宮城県、仙台市で構成する仙塩地区総合交通計画委員会は昭和47～52年に仙台湾高規格幹線道路事業計画を立案した。その路線は亘理町中泉で国道6号線に連結して仙台市、多賀城市、利府町、松島町、鳴瀬町、矢本町、石巻町、桃生町を経て、岩手県宮古市に至るものである。そのうち仙台松島道路は松島ＩＣ－利府中ＩＣ間が昭和62年に開通し、仙台東道路も仙台東ＩＣ－仙台空港ＩＣ間が平成6年に供用を開始している。この両道路を結ぶ利府町春日から仙台市宮城野区中野までの7.1ｋｍが、東北地方建設局仙台工事事務所が担当する仙塩道路である。

仙塩道路の計画決定に伴い、宮城県教育委員会は、東北地方建設局仙台工事事務所からの依頼を受けて、昭和57年3月に路線敷地内の埋蔵文化財の分布調査を実施した。その結果、利府町の丘陵部で5遺跡、特別史跡多賀城跡の西から南に隣接する沖積地地域で市川橋遺跡、山王遺跡、六貫田遺跡の3遺跡が関わることとなった。これらの地域は奈良・平安時代の陸奥国府多賀城をとりまく地域にあたるため、路線敷のほぼ全てに遺構の存在が予想され、とくに山王遺跡はこれまでの他の事業に関わる調査結果からみて、きわめて濃密な遺構の存在が推定された。

道路は当初の計画では基底幅80ｍで10数ｍの高さに盛土するものであったため、調査対象面積は40haにおよび、しかも縄文時代から中･近世までの文化層が予想されることから、膨大な時間と費用が見込まれた。そこで宮城県教育委員会は、埋蔵文化財の保護のみならず、供用開始の時期も考慮して、昭和62年11月に東北地方建設局に対して盛土工法から高架工法への変更を申し入れた。仙台工事事務所からは設計変更を進めるにあたり、文化層の具体的な数と遺構の密集度についての資料が求められたため、昭和63年11･12月に山王遺跡と市川橋遺跡のうち1,500㎡について確認調査を実施した。その結果、山王遺跡八幡地区では古代の掘立柱建物跡や多賀城に関わる道路遺構などが検出されたほか、その下層からは古墳時代後期・中期、縄文時代の遺構や遺物が発見された。また、市川橋遺跡中谷地地区でも8枚にわたる水田遺構が重複していることが確かめられた。この結果を踏まえて、仙台工事事務所は東北地方建設局、建設省との協議を経て、起点部の国道45号線から利府町の丘陵地までの3.7ｋｍを長大な高架橋（多賀城高架橋）で結ぶ工法に計画変更することとなった。

道路建設に伴う本格的な調査は、平成元年度より宮城県教育委員会と多賀城市教育委員会が分担して行い、これまでに多賀城ＩＣ予定地（山王遺跡八幡地区）約49,000㎡のうちの約27,000㎡について調査を終了した。一方、道路本線部分については、平成3年10･11月にＩＣ以南の路線敷約45,000㎡を対象として試掘調査を行った結果、山王遺跡多賀前地区ではきわめて濃密な遺構の存在が確認された。このため、調査に要する時間と工事の工程を考慮し、平成4年度以降本地区の調査を優先して行うこととなった。ＩＣ以南の調査対象地は路線幅30ｍ、総長約750ｍ、面積にして約22,500㎡であるが、道路建設の計画が当初の4車線から暫定2車線開通に変更されたことから、今回は主に道路本線のうちの上り線と側道部分の約17,500㎡について調査を行うこととなった。


特別史跡多賀城跡
名古曽川
砂押川
中谷地地区
市川橋遺跡
八幡地区
伏石地区
山王一区
千刈田地区
山王遺跡
多賀前地区
多賀城市
多賀城市
多賀前地区
（今年度報告分）
八幡・伏石地区
（平成8年度刊行予定）
仙塩道路関係
多賀城市調査分
都市計画道路関係
調査分
多賀城市・多賀城跡調査
研究所調査分

第1図　調査区配置図

第Ⅱ章　遺跡の概観

1．山王遺跡の位置と遺跡周辺の地形環境

山王遺跡の地形的位置

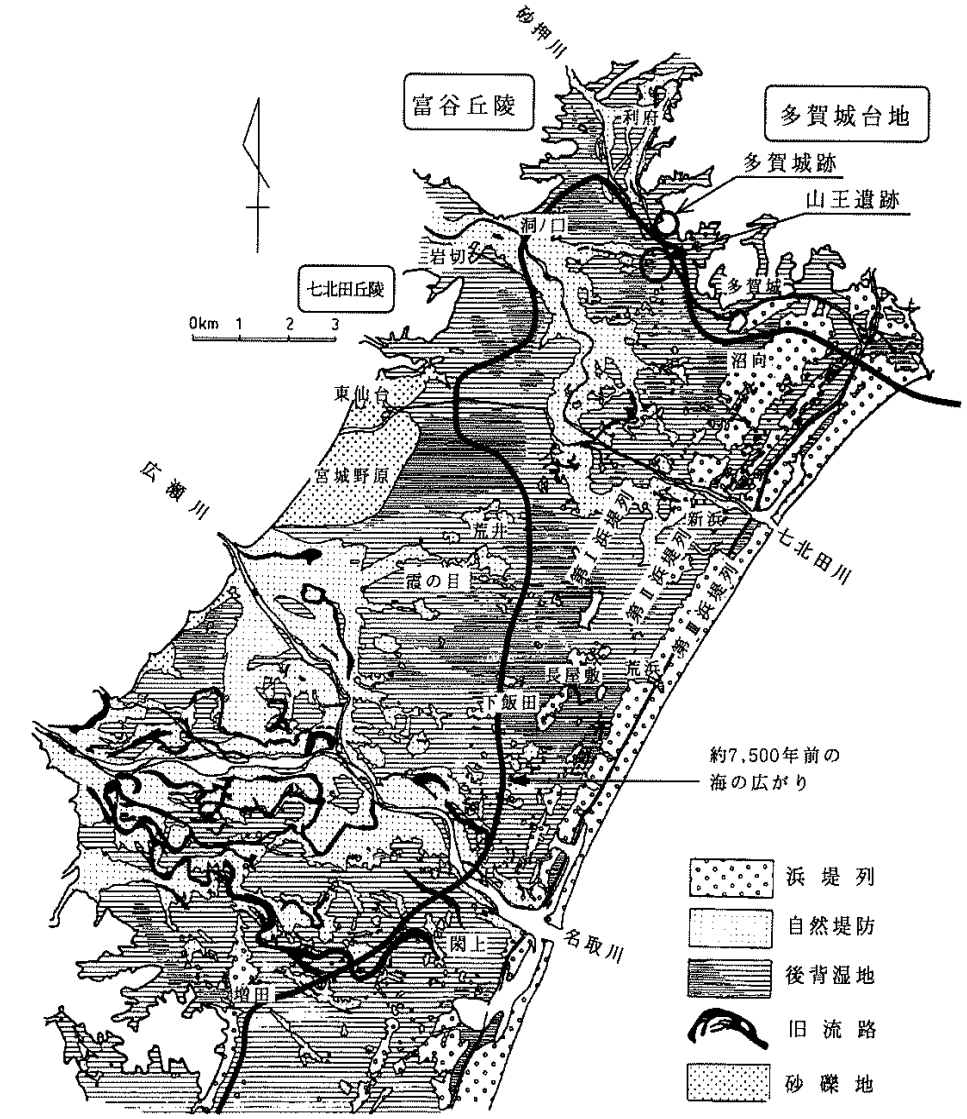
山王遺跡は仙台平野北端部、七北田川左岸の沖積低地上に位置している（第１図）。沖積低地は周囲を台地や丘陵地に囲まれ、山王遺跡の北東に隣接して緩やかな起伏を有する丘陵地状の多賀城台地が広がる。多賀城台地の高度は50m前後であるが塩釜、松島方面へ海抜高度を上げながら連続する。地質は主として第三紀の塩釜層および佐浦町層であり、火山角礫岩、凝灰角礫岩および凝灰質砂岩が広く分布している。これらの基岩を侵食して、70～60mおよび50～40mの海抜高度にそれぞれ侵食平坦面が認められる。平坦面は赤色風化した厚いローム層により覆われ、同台地の形成は最終間氷期（約12 万年前）以前に遡るとされている。台地の南西端の低地を望む位置には多賀城跡が位置している。また、山王遺跡の北西2.5ｋｍ以西に広がる海抜60～100mの富谷丘陵は、砂岩や軽石凝灰岩からなり、とくに砂押川が流下する入菅谷方面には番ヶ森層と呼ばれる軽石質砂岩が広く分布し、砂質堆積物の供給源となっている。山王遺跡は低い丘陵地や台地に隣接した沖積低地上に位置する遺跡として特徴づけることができる。

仙台平野と七北田川

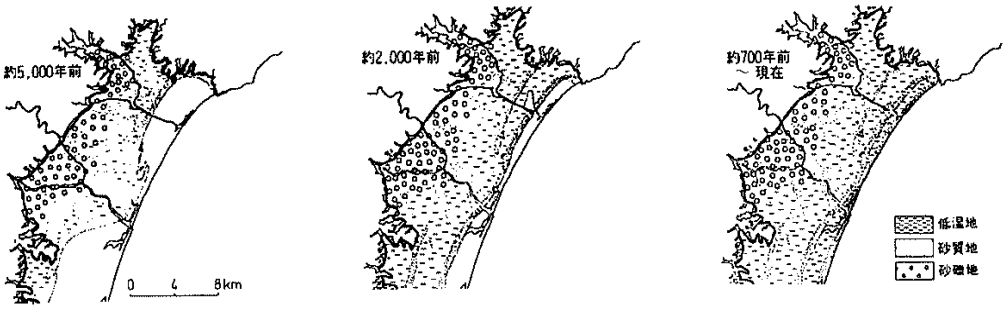
仙台平野は宮城県利府町から県南の山元町にかけて南北 50ｋｍ、東西 10～20ｋｍの広がりをもち、我が国でも比較的面積の広い臨海沖積平野である。地表面下には層厚20～60mの沖積層が堆積しており、地表には自然堤防、後背湿地、旧流路、浜堤列などの地形が明瞭に分布している。地盤高は大部分が海抜5m以下であるが内陸部では10～15mに達する部分も少なくない。流入する主な河川は、北から七北田川、名取川および阿武隈川である。各河川の流域面積はそれぞれ208ｋｍ^2、939ｋｍ^2、5,400ｋｍ^2、流路長はそれぞれ45ｋｍ、100ｋｍ（＊1）、239ｋｍである。七北田川は仙台平野を流下する3河川の中で最も規模の小さな河川であり、平野部の河床勾配は0.2/1,000を示し、名取川の1.5/1,000や阿武隈川の 0.4/1,000 に対して極めて緩かである。また、洪水堆積物の平均粒径は七北田川に沿う地帯で0.25～0.125ｍｍであり、名取川および阿武隈川の1.0～0.25ｍｍと比較しても細粒である。七北田川沿いの沖積低地は、仙台平野のなかでは比較的土砂供給が小なく地表面も低平であり、河川起源の堆積物の粒径も細かい地域として特徴づけられる。過去2万年間の海面の上昇過程における、海岸線の最内陸到達地点（約7,500年前、海水準は-10m）も南に隣接する広瀬川･名取川に沿う地域と比較してかなり内陸部にまでおよんでいる（第１図参照）。海域と陸域の境界線の形態からは、当時の海域は外洋に面した砂浜の背後に広がる極めて内湾的な要素の強い環境であったと考えられる。この内湾部は七北田川および砂押川の供給する土砂によりしだいに埋積され現在に至る。

山王遺跡周辺の地形環境

上記に示した内湾部の埋積の過程において、七北田川が沖積低地に入る岩切付近から、極めて明瞭な自然堤防がほぼ河道に沿って形成されているのが現在の地表面で追跡される。一方海側では3列の浜堤列が順次形成され、七北田川沿いの自然堤防としての高まりと、浜堤列群としての高まりとに取



第２図　仙台平野北部の地形と山王遺跡



第３図　過去5,000年間の海岸線の変化

り囲まれた形で、山王遺跡を含む洞ノ口北方から沼向にいたる後背湿地部分には広大な谷地(湿地帯)が広がっていたと考えられる。この谷地は河川の増水のたびに七北田川からの洪水流が侵入し水位が上がり、また同時に砂押川の河水も多量の砂質堆積物を伴いながら冠水した水域へ侵入していたものと考えられる。現在は七北田川および砂押川は人口堤防で流路が固定された状況にあるが、自然状態においては、両河川の河道は一定ではなく、洪水時には冠水した広大な水域の中で常に流路を変えながら流下していたことが容易に想像できる。

この埋積は現在まで継続し、その期間を通して海水準の上下微変動が繰り返されてきた。海面の上昇期には谷地の水位が上昇することにより水面（沼沢地）が広がり、また、海面の低下期には水面は縮小し、比較的乾燥した土地が広がっていたと考えられる。海面の変動と密接な対応を示す地形である浜堤列の位置と海岸線の前進過程は第 2 図に示した通りである。山王遺跡およびその周辺の沖積低地は、過去数千年間の海面の上下微変動と連動して地表の環境が微細に変化してきた地域であり、当時の人々の生活形態の変遷との対応を考える上で興味深い貴重な地域である。

（＊1)幹線流路延長であり、名取川については支流の広瀬川の流路長も加算した。

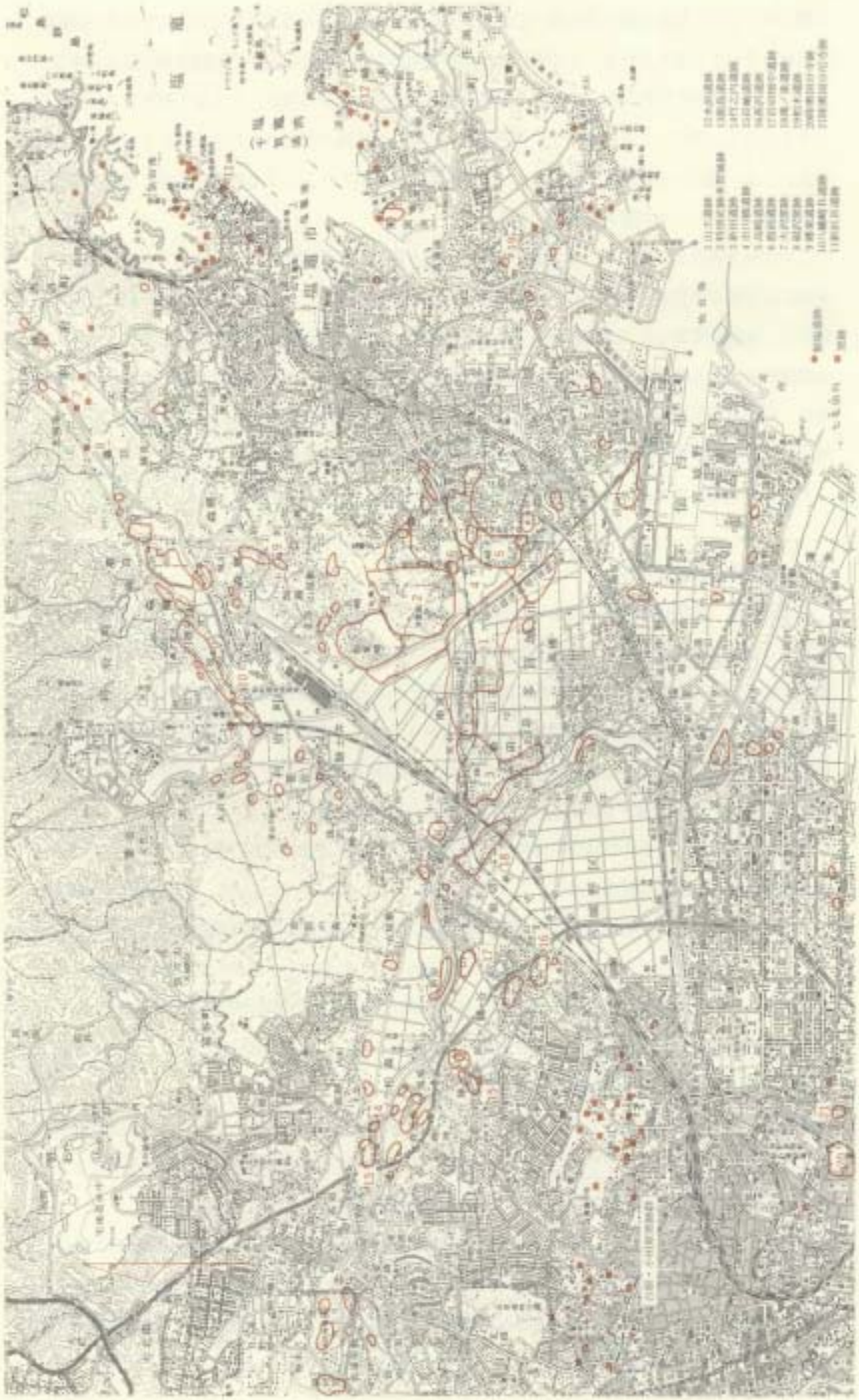
2．山王遺跡と周辺の遺跡

山王遺跡は、弥生時代から近世までの長期間にわたって断続的に営まれた遺跡で、多賀城市山王・南宮・市川にかけて所在する。特別史跡多賀城跡の南西部に隣接し、多賀城の南面を走る県道泉－塩竈線およびＪＲ東北本線に沿って東西に延びる標高 3～4m程の自然堤防（微高地）上に立地する。現在の南宮・山王の集落とほぼ重複するように広がっており、遺跡は周辺の水田域を取り込んで、東西約 2ｋｍ､南北約 1ｋｍの広大な範囲におよんでいる｡同じ微高地上に立地し､砂押川を挟んで対岸の市川橋遺跡や西に隣接する新田遺跡は、本遺跡と一連の遺跡として捉えられる。

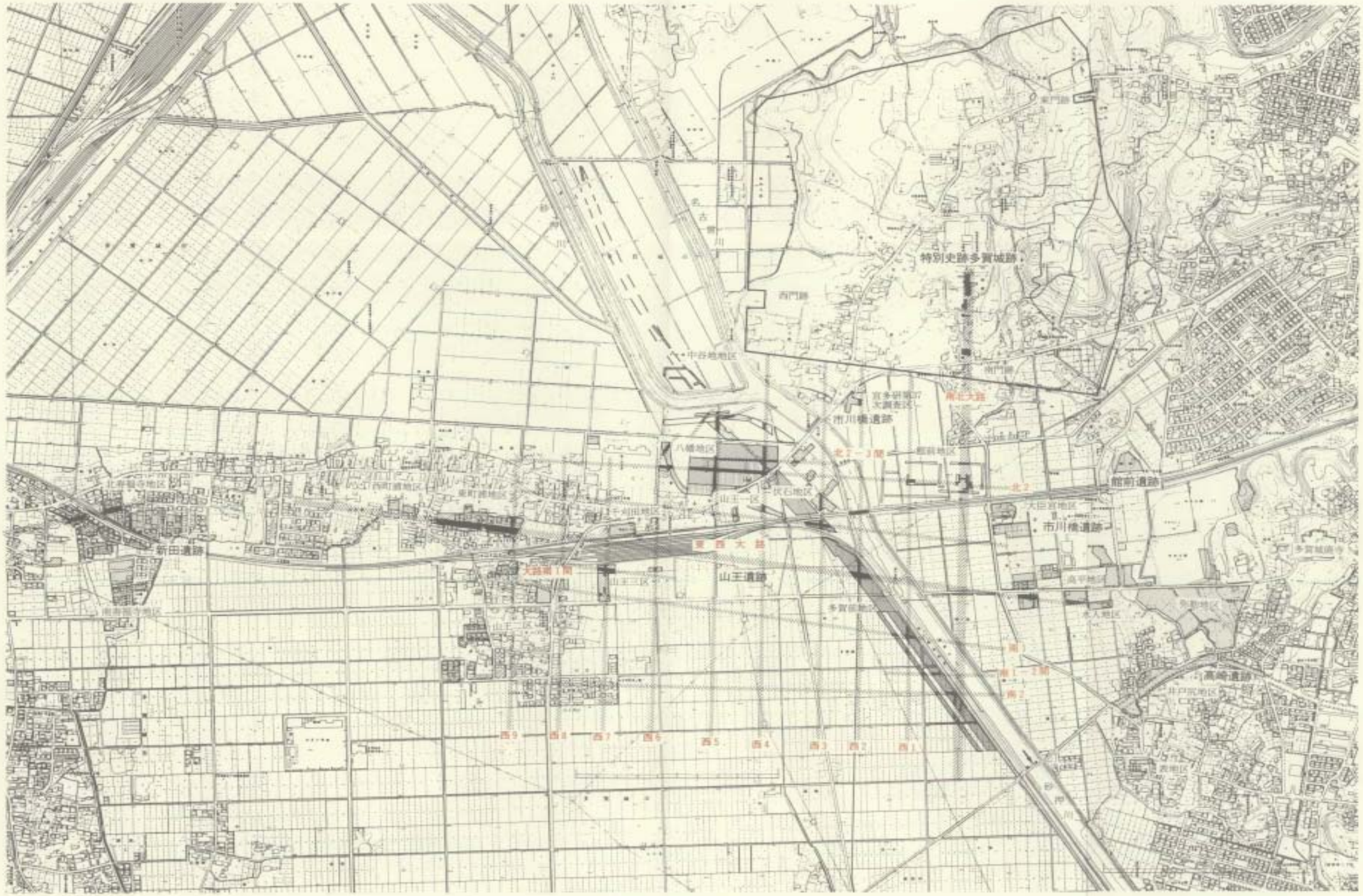
本遺跡をはじめとする多賀城の南面地域の調査は、昭和 54 年以降多賀城市教育委員会､宮城県多賀城跡調査研究所、宮城県教育委員会によって継続的に行われている。その結果、弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代、中世、近世の遺構や遺物が多数検出され、各時代の遺跡の様相や土地利用のあり方などについても次第に明らかになってきている。遺跡周辺の現況は、水田が一面に広がった地形的な変化に乏しい景観を呈しているが､弥生時代から古墳時代後期頃までは微地形が複雑に変化しており、奈良・平安時代頃にほぼ現在に近い地形になったことが判明している。ここでは、これまでの調査成果を踏まえ、各時代ごとに本遺跡周辺を概観してみたい。

弥生時代：今のところ竪穴住居跡や墓地などの集落跡を示す遺構は発見されていない。調査例が少なく、当時の自然堤防の広がりも明らかではないが、本遺跡八幡地区では桝形囲式の遺物を含む堆積層(註 1)および水田跡(註 2)が検出されており、周辺に集落の存在が想定される。

古墳時代：古墳時代になると、多賀城廃寺の中門跡南側で竪穴住居跡(註 3)､また多賀城の西門近くの五万崎地区で方形周溝墓(註 4)が検出されるなど、標高 10m前後の丘陵上に集落や墓地が営まれるようになる。一方、自然堤防上でも本遺跡八幡地区で水田跡(註 5)や遺物包含層(註 6)、新田遺跡南寿福寺地区で土壙や溝跡が検出されており、周辺に集落の存在が想定される。ただし、いずれも散在的な



第４図　山王遺跡の位置と奈良・平安時代遺跡の分布



第５図　山王遺跡周辺の遺跡

状況にあり、集落の様相を明らかにするには至っていない。

中期には、本遺跡八幡地区や西町浦地区、新田遺跡後地区などで多数の竪穴住居跡や祭祀遺構が検出されるようになり、自然堤防上に大集落が存在したことが明らかになっている。とくに、八幡地区では鍛冶工房跡を含む多数の竪穴住居跡や土壙、河川跡などが検出され(註 7)、河川の落ちに沿って形成された遺物包含層からは土器や骨角製品、木・竹製品、石製品、動植物遺体などの多種多量の遺物が出土している(註 8)。農耕･狩猟集団でありながら、鍛冶生産技術を有し、刀装具や儀杖を備え、卜骨や石製模造品を用いた祭祀を行っていたことが明らかになっている。また、朝鮮半島系の土器が出土していることや、東町浦･西町浦地区では須恵器、西町浦地区では北海道系の続縄文土器（後北Ｃ2式)や黒曜石製の石器が発見される(註 9)など、自然堤防上に営まれた集落は、該期の一般的な集落とは異なった様相を示しており、地方豪族クラスとの直接・間接的な関わりも想定される。なお、多賀城廃寺の南西約 500ｍの独立した低丘陵上には丸山囲古墳がある。未調査のため構造等の詳細は不明であるが、5～6 世紀頃のものと考えられている(註 10)。

後期には、八幡地区、新田遺跡後地区で集落跡が検出されている。八幡地区では、中期以降の沖積作用によって埋没し拡大した自然堤防上で、多数の竪穴住居跡や河川跡などが確認された。竪穴住居跡はかなり重複するものもみられ、長期間にわたって集落が営まれたことが知られた。河川跡からは土器や木・竹製品、骨角製品、動植物遺体などの遺物が多量に出土している(註 11)。とくに、柄香炉や多量の卜骨・斎串、また多量に出土した骨鏃や獣骨は、仏教との関わりや祭祀のあり方、稲作農耕の受容後の生業形態のあり方などを知る上で興味深い。一方、新田遺跡後地区では、竪穴住居跡のほかに大量の土器や臼玉・琥珀玉などを出土した古墳時代中期と同様の祭祀遺構が検出されている(註 12)。この時期の古墳としては横穴式石室をもつ稲荷殿古墳や多賀城跡南門西側の築地基礎地業下で発見された田屋場横穴古墳群(註 13)がある。今のところ、耕作域や墓域などを含めた集落としての具体的な様相については明らかではないが、多賀城周辺における創建以前のこうした在地的な集落や古墳の存在は、律令国家権力の浸透に伴う、地方豪族による支配体制の崩壊と律令体制の成立およびその変遷を知る上で意義深い。

奈良時代：8 世紀前半の養老～神亀（717～729）頃に、本遺跡の北東の丘陵上に多賀城が築かれる。多賀城は 8 世紀前半から 10 世紀中頃にかけて陸奥国府として東北経営の中心的な役割を果たすとともに、陸奥・出羽両国を統轄し、奈良時代には鎮守府も併置されるなど、陸奥国全体の支配にかかわる根拠地である。調査は昭和 38 年以降実施され、多賀城跡は築地で囲まれた政庁がほぼ中央に位置し、東辺約1,000ｍ、南辺約860ｍ、西辺約670ｍ、北辺約770ｍの歪んだ四角形の範囲を築地で囲っていることが判明した。政庁には大きく 4 時期の変遷が捉えられ、その周囲の丘陵平坦面上の大畑・六月坂・作貫・金堀・五万崎の各地区には実務官衙が配置されている。また、外郭線上の南辺・東辺・西辺には門が開かれ、南門から政庁に向かって延びる道路や東門と西門を結ぶ城内の道路の存在も明らかになっている(註 14)。さらに、多賀城跡の南東約 1.2ｋｍの低丘陵上には、多賀城の創建と同時に付属寺院として建立された多賀城廃寺が立地している。九州大宰府の付属寺院である観世音寺と同様な伽藍配置をとり、多賀城が廃れる 10 世紀半ば頃まで営まれ続けたことが判明している。寺名については、

本遺跡東町浦地区出土の墨書土器から「観音寺」と推定されている(註 15)。このほか、多賀城跡に関連するものとして、外郭南門の傍らに日本三古碑の一つ「多賀城碑」がある。多賀城の位置や多賀城が神亀元年（724）に大野東人によって置かれたこと、天平宝字 6 年（762）に藤原恵美朝臣朝獦によって修造されたことなどが記され、最近の研究ではこの碑は第Ⅱ期政庁を修造した朝獦の顕彰碑と考えられている(註 16)。

一方、本遺跡をはじめとする多賀城周辺の様相については、全体的に遺構・遺物が少なく、自然堤防上の本遺跡八幡地区・千刈田地区、新田遺跡後地区･北寿福寺地区や丘陵上の高崎遺跡井戸尻地区･弥勒地区で竪穴住居跡や掘立柱建物跡などが散在的に検出されているにすぎない。住居も竪穴住居跡が主体をなしており、奈良時代には多賀城や寺院が築かれるものの、城外には都市計画的な諸施設の配置はみられなかったものと考えられている(註 17)。ただし、多賀城の南西部に隣接した八幡地区や千刈田地区では、竪穴住居跡や掘立柱建物跡などの方向がいずれも多賀城の政庁中軸線とほぼ一致しており､多賀城の規制を受けた空間が城外にも存在したことが明らかになっている。中でも、八幡地区では漆紙文書や多量の漆付着土器、漆作業に関わる木簡（記録簡）なども出土するなど、少なくとも 8 世紀後半代には多賀城の漆作業と密接な関わりもった工房が存在した可能性が考えられている(註 18)。このほか、多賀城からやや離れるが､南東約 4ｋｍの丘陵上には多賀城直営の製鉄工場とみられる柏木遺跡がある。多賀城や寺院の造営および武器・工具の製作など大量の鉄の需要に伴って生産されたもので、8 世紀前半代に操業したと考えられている(註 19)。

平安時代：多賀城および寺院は奈良時代以降も相変わらず営まれ続けるが、平安時代になると、本遺跡をはじめ市川橋遺跡、高崎遺跡、新田遺跡などの多賀城の南面一帯の地域で多数の遺構や遺物が見られるようになる。とくに、市川橋遺跡館地区、本遺跡八幡・山王一区・山王三区・東町浦の各地区では、幅約 23ｍの南北大路や幅約 12ｍの東西大路をはじめ、政庁中軸線や外郭南辺築地を基準とした東西・南北の道路跡が多数検出され、多賀城の南西部の自然堤防上に方格地割が存在したことが明らかになってきている(註 20)。道路で画された地割の内部は、道路と方向を揃えた掘立柱建物跡や竪穴住居跡、塀跡、区画溝跡、井戸跡など遺構の密度が高く、しかも掘立柱建物跡が住居の主体をなしている。また、中国陶磁器や灰釉・緑釉陶器、硯、墨書土器、石帯などの多賀城と密接な関わりをもつ遺物も多くみられるなど、一般集落とは異なった様相を示している。このうち、東西大路の北に面した本遺跡千刈田地区では、四面廂付建物跡や中国陶磁器、多量の灰釉・緑釉陶器、題箋木簡の内容（｢右大臣殿　餞馬収文｣）などから｢国守の館｣の存在が推定されている(註 21)。また、大路から北に離れた八幡・伏石地区では、小規模な掘立柱建物跡が地割に沿って多数検出されている。八幡地区では奈良時代と同様に漆作業などの多賀城に関わる作業やこれらを支えた階層の低い人々の生活の場であったことが明らかになっている(註 22)。伏石地区では鍛冶工房の存在が明らかになるとともに、出土した題箋木簡の内容（｢會津郡主政・・・｣｢解文　案｣）から、区画内に會津郡に関わる施設が存在した可能性も指摘されている(註 23)。

一方、方格地割の西外側地域にあたる本遺跡東町浦・西町浦地区、新田遺跡寿福寺地区や南北大路の東側の微高地上の市川橋遺跡高平・水入地区、丘陵部の高崎遺跡弥勒・井戸尻地区、低平な独立丘

陵上の館前遺跡、市川橋遺跡大臣宮地区などでも該期の遺構・遺物が多数検出されている。館前遺跡では四面廂付建物跡を中心として計画的に配置された規模の大きな建物跡群が検出され、国司クラスの上級官人の館と推定されており(註 24)、大臣宮地区でも同様に規模の大きな建物跡が検出されている(註 25)。また、多賀城廃寺の南西約 200ｍに位置する弥勒地区では、寺院に関わる作業やそれを支えた人々の生活の場と推定される建物跡や鍛冶工房跡、井戸跡などが検出されている(註 26)。このほか、本遺跡や新田遺跡、市川橋遺跡の各地区の微高地上では小規模な掘立柱建物跡および竪穴住居跡で構成される集落跡、低湿地部分では水田跡が検出されており、多賀城周辺における該期の土地利用のあり方についても部分的にではあるが明らかになってきている。これらの集落からは方格地割内と同様に中国陶磁器や灰釉・緑釉陶器、硯などが出土し、墨書土器や木簡、漆紙文書、祭祀遺物も比較的多くみられることから、一般庶民とはいえ多賀城と何らかの関わりをもった人々の生活の場であったと考えられている(註 27)。なお、方格地割の外側にあたる本遺跡東町浦地区と高崎遺跡井戸尻地区では、「万燈会」などの仏教行事に関わったとみられる土器集積遺構が検出され、多賀城外で国府主催の儀式が執り行われた可能性も考えられている(註 28)。

このように、多賀城周辺では 9 世紀前後を境にして、方格地割の施行や諸施設の配置、周辺集落の増加・拡大などといった都市計画的な整備が実施されている。城内でも、平安時代以降に新たに官衙が営まれ、建物や竪穴住居が大幅に増加するなど、この時期に国府としての整備が進み、実務面においても活況を呈したものと考えられている。また、多賀城の北約 2ｋｍの丘陵上には、奈良時代から平安時代にかけて計画的に配置された大小の掘立柱建物跡と竪穴住居跡で構成される郷楽遺跡がある。硯や灰釉陶器がみられることや馬具・刀子などの鉄製品が比較的多く出土していることなど、多賀城との関わりが推定されているが、ここでも多賀城周辺と同様に 9 世紀を境にして集落が拡大する傾向があり、住居も竪穴住居から掘立柱建物へと推移している(註 29)。こうした変革は、多賀城およびその周辺のみならず、七北田川を挟んだ右岸の自然堤防上や海岸線に沿った仙台市東部の浜堤上、名取・広瀬川流域の自然堤防上など仙台平野一帯でも認められ、集落や水田域が新たに出現したり、拡大する傾向にある。このうち、仙台市南部の富沢遺跡では水田跡が広範囲で検出され、真北方向を基準とした 107～110ｍ間隔の条里型地割が確認されている(註 30)。また、仙台市東郊の神柵遺跡でも真北方向を基準とした一町単位の条里型地割が存在した可能性が指摘されており(註 31)、多賀城から離れた平野部一帯にも班田制の浸透が窺える。

このほか多賀城に関わる平安時代の遺跡としては、多賀城の北約 6ｋｍの利府町春日に大沢瓦窯跡群、多賀城の南西約 10ｋｍの丘陵上に官窯としての性格が明らかな台原・小田原窯跡群があり、後者では瓦陶兼焼窯も認められている。また、東方の松島湾沿岸では新浜Ｂ遺跡や水浜遺跡をはじめ 140 カ所以上の製塩遺跡が確認されている。これらのほとんどが平安時代に営まれており(註 32)、その規模や多賀城跡出土木簡に「塩竈木運人廾」とあることなどから、この時期塩の生産が多賀城直轄のもとで行われた可能性が考えられている(註 33)。なお、多賀城との直接的な関わりは不明であるが、本遺跡の約 4.5ｋｍ西の河岸段丘上に立地する燕沢遺跡では、僧房とみられる長大な掘立柱建物跡や「讀院□」の墨書土器などから、寺院が存在した可能性が考えられている(註 34)。

中世：前述のとおり、平安時代の本遺跡周辺は、陸奥国府多賀城に関わる諸施設が計画的に配され、その周辺には多賀城を支えたとみられる一般庶民層の集落が営まれるなど、最も活況を呈していた。ところが、10 世紀中頃に多賀城が廃れると、本遺跡をはじめ多賀城周辺に営まれた集落は一様に衰退し、道路も 10 世紀後半には維持されなくなっている。中世の遺構はこれらの荒廃後に営まれたもので、本遺跡八幡地区や新田遺跡寿福寺地区で検出され、12 世紀から 16 世紀後半頃の溝で画された屋敷跡の存在が明らかになっている。とくに、寿福寺地区では東西約 200m、南北約 300mの大規模な屋敷跡が発見され、廂付建物跡をはじめ計画的に配された大小の建物跡の存在や中国陶磁器、瀬戸・美濃産施釉陶器などの奢侈品が多く出土することから、きわめて階層の高い武士の居住の場であった可能性が考えられている(註 35)。このほか寿福寺地区や八幡地区でも小規模な屋敷跡が検出され(註 36)、また内館跡や洞ノ口遺跡でも周囲に溝を巡らせた遺構の存在が知られるなど、本遺跡から七北田川下流域にかけての自然堤防上には数多くの屋敷が隣接して営まれていたものと考えられている(註 37)。なお、これらの屋敷跡の居住者については、中世のこの付近一帯が留守氏の支配するところであった「高用名」および「南宮庄」に含まれる地域であることから、留守氏に関わりのある武士層が想定されている(註 38)。

（註 1）後藤・村田他 1994 「山王遺跡八幡地区の調査」『宮城県文化財調査報告書』第162集
（註 2）多賀城市埋蔵文化財調査センターの相沢清利氏の御教示による。
（註 3）多賀城市史編纂委貴会 1991 『多賀城市史』第4巻考古資料
（註 4）宮城県多賀城跡研究所 1978 「第30次調査」『多賀城跡－昭和52年度発掘調査概報』
（註 5）註2と同じ。
（註 6）註1と同じ。
（註 7）千葉孝弥 1992 「山王遺跡－第12次調査概報」『多賀城市文化財調査報告書』第30集
（註 8）佐藤・萱原・吾妻 1994 「山王遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第161集
（註 9）相沢清利 1990 「山王遺跡－第8次調査報告書」『多賀城市文化財調査報告書』第22集
多賀城市史編纂委貴会 1991 『多賀城市史』第4巻考古資料
（註10）註3と同じ。
（註11）註1と同じ。
（註12）註3と同じ。
（註13）高野芳宏 1986 「第48次調査」『多賀城跡－宮城県多賀城跡調査研究所年報』1985
（註14）今泉隆雄 1988 「多賀城の時代」『図説宮城県の歴史』河出書房新書
多賀城市史編纂委員会 1991 『多賀城市史』第4巻考古資料
後藤・柳沢 1991 「古代東北の官衙多賀城」『月刊文化財』第335号
（註15）註3と同じ。
（註16）安倍・平川 1989 『多賀城碑－その謎を解く』雄山閣出版
（註17）註3と同じ。
（註18）註7と同じ。
（註19）石川・相沢 1989 「柏木遺跡Ⅰ・Ⅱ」『多賀城市文化財調査報告書』第17集
（註20）千葉孝弥 1994 「多賀城周辺の道路遺構－特集古代の道と考古学」『季刊考古学』第46号
（註21）石川・相沢 1991 「山王遺跡－第9次調査報告書」『多賀城市文化財調査報告書』第26集
石川・相沢 1992 「山王遺跡ほか」『多賀城市文化財調査報告書』第29集
（註22）千葉孝弥 1992 「山王遺跡－第12次調査概報」『多賀城市文化財調査報告書』第30集
宮城県教育委員会 1993 「山王遺跡－多賀前地区第1次調査」『宮城県文化財調査報告書』第153集
（註23）佐藤憲幸 1993 「多賀城市山王遺跡」『平成5年度宮城県発掘調査成果発表会発表要旨』

吉野武 1994 「宮城・山王遺跡」『木簡研究』第16号　木簡学会

(註24) 高倉敏明 1980 「館前遺跡－昭和54年度発掘調査報告」『多賀城市文化財調査報告書』第1集

(註25) 高倉敏明他 1984 「市川橋遺跡－昭和58年度発掘調査報告」『多賀城市文化財調査報告書』第5集

(註26) 石川俊英 1993 「多賀城市高崎遺跡」『平成5年度宮城県発掘調査成果発表会発表要旨』

(註27) 註3と同じ。

(註28) 註3と同じ。

(註29) 菊地・庄子他 1990 「利府町郷楽遺跡Ⅱ」『宮城県文化財調査報告書』第134集・『利府町文化財報告書』第5集

(註30) 太田・平間 1991 「富沢遺跡－第30次調査報告書第Ⅰ分冊－縄文～近世編」『仙台市文化財調査報告書』第149集

(註31) 平間亮輔 1989 「富沢遺跡とその周辺における条里型土地割について」『条里制研究』第5号
太田・平間 1991 「富沢遺跡－第30次調査報告書第Ⅰ分冊－縄文～近世編」『仙台市文化財調査報告書』第149集
平間亮輔 1991 「富沢遺跡－第35次調査報告書」『仙台市文化財調査報告書』第150集

(註32) 新浜Ｂ遺跡では奈良時代の製塩炉跡および多量の製塩土器が検出されているが、今のところこれ以外に松島湾沿岸で奈良時代まで遡る製塩遺跡は確認されていない。
宮城県教育委員会 1986 「塩釜市新浜遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第113集
加藤道男他 1989 「仙台湾周辺の貝塚群」『東北歴史資料館研究紀要』第15巻 東北歴史資料館
川村正 1992 「水浜遺跡」『七ヶ浜町文化財調査報告書』第8集

(註33) 平川南 1979 「東北出土の木簡について」『木簡研究』創刊号 木簡学会
今泉隆雄 1988 「多賀城の時代」『図説宮城県の歴史』河出書房新書
小井川・村田 1994 『北日本の考古学－北と南の地域性』日本考古学協会編

(註34) 長鳥・熊谷 1995 「仙台平野の遺跡群14」『仙台市文化財調査報告書』第195集

(註35) 千葉孝弥 1990 「新田遺跡－第4・11次調査報告」『多賀城市文化財調査報告書』第23集

(註36) 赤澤靖章 1990 「山王遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第138集
千葉孝弥 1990 「新田遺跡－第4・11次調査報告」『多賀城市文化財調査報告書』第23集
千葉孝弥 1991 「山王遺跡－第10次調査概報」『多賀城市文化財調査報告書』第27集

(註37) 千葉孝弥他 1992 「留守氏の館と市のにぎわい」『よみがえる中世』7 平凡社

(註38) 註36・37と同じ。

第Ⅲ章　調査の方法と経過

1．試掘調査

多賀城ＩＣ以南の道路本線に関わる調査は、路線幅が 30ｍで、北から山王遺跡多賀前地区、六貫田遺跡にかかる総長約 1.5ｋｍ、面積にして約 45,000 ㎡の長大な範囲が対象となる。このため、平成 4 年度以降の本調査に先立って、平成 3 年 10、11 月に遺構の広がりと密集度を把握することを目的とした試掘調査を実施した。調査は、路線敷に沿って南北方向に幅約 3ｍのトレンチを東西各 2 本ずつ、計 38 本（Ａ～Ｔトレンチ）設定して行った（第 6 図）。

第 6 図　試掘調査トレンチ配置図

その結果、北半部のＫ～Ｔトレンチでは道路跡をはじめ、掘立柱建物跡や竪穴住居跡などきわめて濃密な遺構の存在が確認され、各遺構には奈良・平安時代の遺物が多量に包含されていることが明らかになった。一方、南半部のＡ～Ｊトレンチは、北半部に比べ現水田下の標高が概して低く、Ｈトレンチではほぼ全域が低湿地となっている。Ｂ～Ｇトレンチからは土壙や溝跡、柱穴などを僅かに検出しているが、遺物はほとんどなく、時期の特定のできる遺構は存在しなかった。また、Ｊトレンチでは耕作土中に 10 世紀前葉に降下したと考えられている灰白色火山灰の小ブロックを含む水田跡を確認したが、古代以降の水田跡ではあるものの、その下限については明らかではなく、時期の特定には至らなかった。これにより、Ｊトレンチ以南については、この調査をもって終了し、平成 4 年度以降の本調査は山王遺跡多賀前地区にかかるＫトレンチ以北の路線敷全体を対象として実施することとした。

検出した遺構の実測は、遺構が密集して存在するＭトレンチ以北についてのみ行い、1/100 の縮尺で平面図を作成した。この際、実測は各トレンチごとに任意の南北基準線を設定して行い、調査終了後に 1/1,000 の縮尺の地形図（仙台工事事務所作成の工事図面）にトレンチ全体を記載する方法を採った。また、Ｍ西トレンチで検出した土器埋設遺構（ＳＸ1964）については平面図･断面図を、Ｒ東トレンチで検出した道路跡（ＳＸ10）については断面図をそれぞれ 1/20 の縮尺で作成した。

2．本調査

平成 3 年度の試掘調査の成果を踏まえて、平成 4 年度から 3 ヶ年にわたって山王遺跡多賀前地区の調査を実施した。

(1)調査の方法

今回の調査は、おもに道路本線の上り線を中心とした路線幅約 15～30m、総長約 750m、面積にして約 17,500 ㎡というの長大な範囲が対象となっている。このうち、高架橋の橋脚 31 基（ＰA47～75)、側道部分、農業用水路の付け替え工事に係る約 5,300 ㎡については事前調査を必要とした。調査にあたっては、まず調査区全域の確認調査を実施し、平面図の作成および航空写真の撮影を行い、その後事前調査を行うといった工程で進めることとした。グリッドは山王遺跡八幡地区内に設定した測量原点(第Ｘ系国家座標）をもとに東西･南北の基準線を延長し、調査区全域に 3m方眼を設定した。方向は真北を基準とし、グリッドの呼称は原点からの東西･南北方向の距離で表した。例えば、“Ｓ290･Ｅ370”は原点から南に 290m、東に 370mの位置を示している。検出した遺構の実測図は、グリッドを基準に、平面図・断面図とも原則として 1/20 の縮尺で作成したが、細部の表現が必要なものについては 1/10、水田跡は 1/40 もしくは 1/100 の縮尺で行った。遺構の記録写真は 35 ミリフィルムのリバーサルと 6×7 モノクロおよびネガカラーを使用して撮影した。

(2)調査の経過

①第 1 次調査（平成 4 年）

第 1 次調査は、路線敷のうち道路本線の上り線（路幅約 15m）を中心とした約 12,400 ㎡（うち事前調査約 2,300 ㎡）を対象とし、5 月 11 日より調査を開始した。

調査は、調査区全域の表土を除去した後、北半部から遺構確認作業に取り掛かった。北半部では、Ⅰ・Ⅱ層の下に遺物を含む奈良・平安時代の黒褐色土層（Ⅲ層）の堆積が認められ、当初はこの上面での遺構確認に努めたが、層の識別がきわめて困難で最終的には一部の遺構を除き、その下の黄褐色土層（Ⅳ層）上面で検出する結果となった。検出した主な遺構としては、東西大路･南 1 東西道路跡、西 1・西 2 南北道路跡、掘立柱建物跡、井戸跡、土器埋設遺構、竪穴遺構、材木塀跡があり、この他多数の土壙・溝跡・ピットも検出している。とりわけ、東西大路の南に面した「南 1 西 2 区」では多くの遺構・遺物が検出され、区画のほぼ中央部には鉤手状に流れる遣水状の溝跡（ＳＤ1020）とこれに沿って建ち並ぶ廂付をはじめとする多数の掘立柱建物跡群の存在が明らかになった。周辺からは中国陶磁器や多量の施釉陶器などが出土しており、「国守の館」と推定されている山王遺跡千刈田地区と同様の性格をもつ区画である可能性が考えられた。そこで、仙台工事事務所に対して、ＳＤ1020 を検出した区域についての協議を申し入れ、道路供用開始の時期や経費、工法上の諸問題などの検討を経て、工事に係る部分を最少限にとどめるよう、橋脚位置の変更が行われることとなった。

一方、南半部の調査では、南 1-2 間･南 2 東西道路跡、西 0 南北道路跡、掘立柱建物跡、竪穴住居跡、井戸跡、土器埋設遺構、竪穴遺構、材木塀跡、水田跡、小溝状遺構群、河川跡などを検出した。北半部に比べ遺構の密度が全体的に少なく、南端部は広い範囲が水田跡となっている。北半部では掘立柱建物跡が密集して存在したのに対して、南半部では竪穴住居跡の分布が目立っており、両区画の性格の違いを考える上で興味がもたれた。

調査区全域の遺構確認および遺構の実測（縮尺 1/20）は 10 月中旬頃までに終了し、調査の成果がある程度まとまった 10 月 17 日に一般の人々を対象とした現地説明会を開催した。その後、橋脚および農

業用水路の付け替え工事に係る部分の事前調査に取り掛かり、12 月 25 日までに約 1.000 ㎡の精査を終了した。

②第 2 次調査（平成 5 年）

第 2 次調査は、前年度未了に終わった事前調査約 1,300 ㎡とＪＲ東北本線と仙台臨海鉄道に挟まれた約 600 ㎡（うち事前調査約 200 ㎡）を対象とし、3 月 3 日より調査を開始した。

前年度からの継続部分では、事前調査に伴う遺構の精査により、前年度に確認した遺構の詳細が明らかになるとともに、各遺構からは土器をはじめとする遺物が多量に出土した。とくに、東西大路からは道路の具体的な存続年代を示す「弘仁 11 年」（820 年）銘の荷札木簡、遣水状の遺跡からは『孝経』の漆紙文書が出土し、これらが出土した区画の性格を考える上でも貴重な資料となった。

一方、ＪＲ－臨鉄間の調査区では、狭い範囲であるにも拘らず北 1 東西道路跡と西 3 南北道路跡の交差点をはじめ、掘立柱建物跡、土器埋設遺構、溝跡などを検出した。また、道路跡の下で検出した河川跡からは、古墳時代前期の塩釜式期の土器や木製品が出土し、調査区周辺に集落などの遺構の存在が想定された。

③第 3 次調査（平成 6 年）

第 3 次調査は、新たに買収された路線敷の約 1,000 ㎡（うち事前調査約 300 ㎡）と道路本線の西側に付設される側道部分約 3,500 ㎡（うち事前調査約 3,500 ㎡）を対象とし、4 月 7 日より調査を開始した。

追加買収された調査区は、前年度までの調査区の北側に隣接し、東西大路の北に面した「北 1 西 3 区」の北西部にあたる。検出した主な遺構としては、西 3 南北道路跡、掘立柱建物跡、井戸跡、土器埋設遺構、材木塀跡、小溝状遺構群などがある。とりわけ、掘立柱建物跡が密集して分布しており、周辺からは施釉陶器や漆紙文書なども出土した。

一方、側道部分の調査は、路線敷の中央部から南半部にかけての総長約 430ｍを、約 8ｍ幅で行った。南 1・南 1－2 間・南 2 東西道路跡、西 1・西 0 南北道路跡、掘立柱建物跡、竪穴住居跡、井戸跡・土器埋設遺構・竪穴遺構、土壙、材木塀跡、溝跡、水田跡、小溝状遺構群、河川跡などの多数の遺構を検出した。前年度までの調査区と同様に、路線敷の南ほど遺構の密度が希薄となっている。また、調査区南半部の河川跡（ＳＤ2000）からは、膨大な量の土器をはじめ、木製品や金属製品、骨角製品、動植物遺体などの多種多様な遺物が出土した。この中には人面墨書土器や呪句を墨書した土器をはじめとする多量の墨書土器や人形・馬形・鳥形、卜骨といった祭祀遺物もみられた。

ところで、側道部分の調査では、奈良・平安時代の遺構精査の段階で、Ⅳ層の下に古墳時代前期の塩釜式期の水田跡が存在することが明らかになった。このため、奈良･平安時代の遺構の精査終了後、重機によりⅣ層を除去し、塩釜式期の水田跡などの遺構検出作業に取り掛かった。その結果、側道部分のほぼ全域で水田跡、水路跡などの該期の遺構を検出し、10 月 25 日までに精査および実測を終了した。これにより、現農業用水路の付け替えに係る約 150 ㎡を除き、多賀城ＩＣ以南の路線敷のうち、道路本線の上り線および側道部分に係る本地区の調査のすべてを終了した。なお、今回の調査では、現農業用水路部分やＪＲ送水管の付け替え工事に係る部分についても併せて事前調査を行った。

第Ⅳ章　基本層序

調査区は標高 3～3.5ｍほどの自然堤防上にあたり、調査前は全域水田として利用されていた。調査区内においては弥生時代中期から現代にいたる多くの堆積層が認められ、奈良・平安時代を中心に数多くの遺構、遺物が検出されている。ここでは、これらの遺構、遺物と堆積層との関係を把握するため、基本層序について説明する。なお、今回の調査区は南北に約 750ｍとかなり長いため、層厚は各地点の層序柱状図を模式的に示すことで表すことにした（第７図）。

Ⅰ層　表土、現在の水田耕作土と床土。層序は 20～50㎝。調査区全体に分布している。

Ⅱ層　Ⅰ層直下で認められた自然堆積層で、奈良･平安時代の遺構を覆っている。黒色（10ＹＲ1.7/1）～黒褐色（10ＹＲ3/1）シルト～粘土からなる。調査区の南半部や道路跡、河川跡埋没後の上面などの標高の低い部分にのみに認められる。層厚は残りの良いＳＸ10 道路跡上面で約 45㎝を測るが、それ以外の場所では概して残りが悪く、5～15㎝程である。

Ⅲ層　**奈良･平安時代の堆積層**である。ａ層はＳＸ1300･1400 道路跡以北の調査区北半部に、またｂ～ｅ層は、標高が低くなるＳＸ3461 道路跡以南の調査区南半部に分布している。

ａ層：炭化物や焼土を含む黒褐色（10ＹＲ3/1）シルトの自然堆積層である。調査区北半部でも旧河川（ＳＤ1111 溝跡の堆積土上面）や自然の窪地などの低い場所にのみ残存する。層序はＳＤ1111 の整地層（ＳＸ2121）上面で、25～30㎝程である。ａ層からは該期の遺物が多く出土している。ただし、遺構の検出は、一部を除きａ層掘り下げ後に行っているため、ａ層との関係が不明のものが多い。また、調査区南半部に分布する灰白色火山灰層（Ⅲｃ層）とａ層との関係についても不明である。

ｂ層：白色凝灰岩粒を多く含む褐灰色（10ＹＲ4/1）シルト。灰白色火山灰降下後の自然堆積層で、ＳＸ3461 道路跡からＳＤ2000 河川跡にかけてのほぼ全面に分布する。10～20㎝ 程で厚さで、一様に下層を覆っている。洪水等の短期間に大量の土砂が供給されるような自然災害によって堆積したものと推測される。遺構はⅢｂ層上面および下層のⅣ層上面で検出されている。

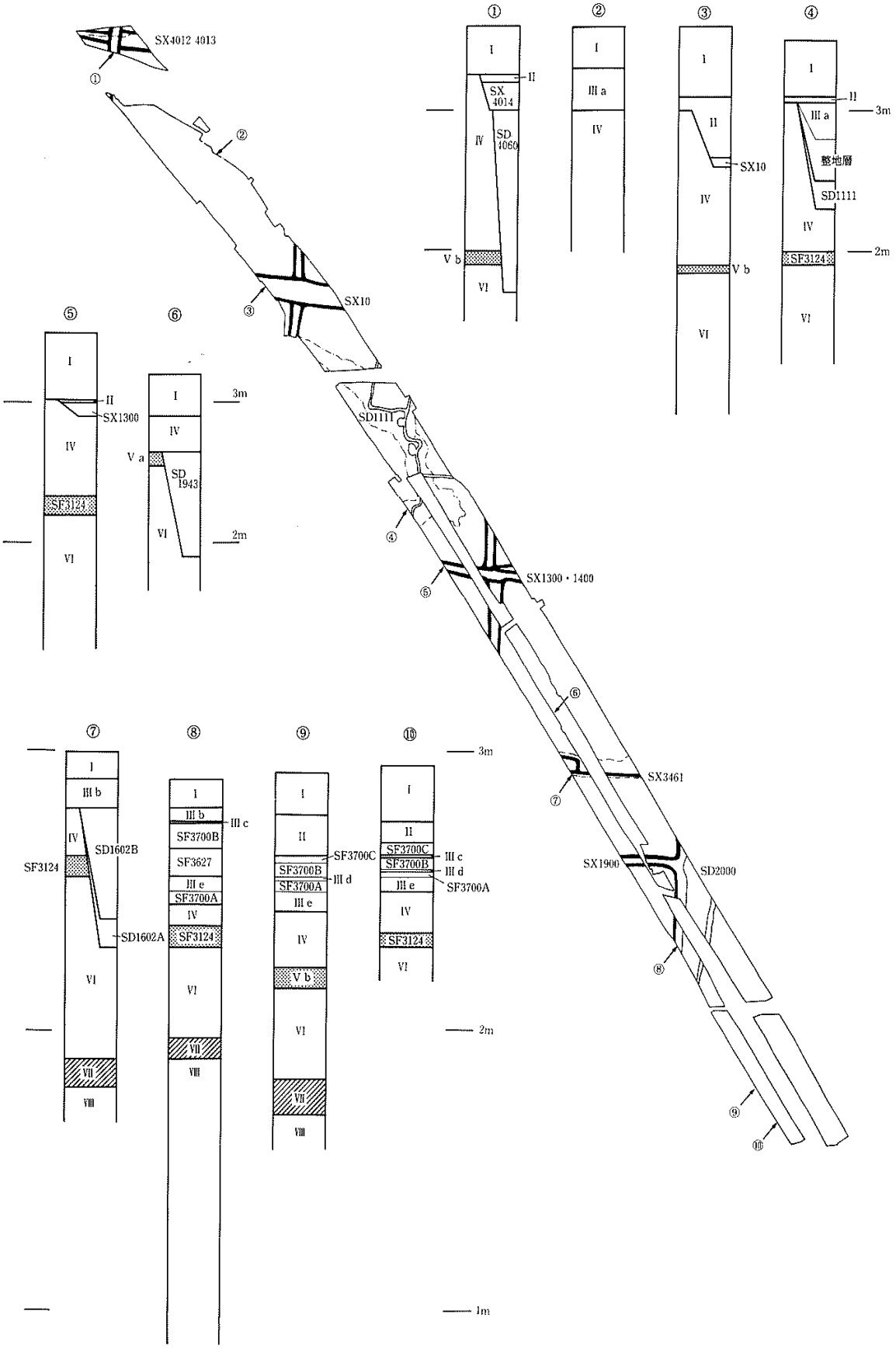
ｃ層：10 世紀前葉に降下したとみられる**灰白色火山灰層**で、層厚は 5㎝前後である。

ｄ層：オリーブ褐色（2.5Y4/3）細砂。ＳＦ3700Ｂ水田跡を覆うしまりのない水成堆積層で、ＳＸ3461 道路跡以南に分布する。層厚は最大で 10㎝ほどである。

ｅ層：未分解の植物遺体を多く含む黒色（10ＹＲ2/1）粘質シルト。ＳＤ2000 河川跡以南の湿地に堆積したスクモ層で、層厚は 10㎝程である。

Ⅳ層　**奈良・平安時代の地山土**で、古墳時代前期の土器を含むＶ層直上までの層を一括した。均質な自然堆積層からなり、調査区全体に分布する。黄褐色（2.5Y5/3）砂質シルト、黄灰色（2.5Y4/1）粘質シルト、オリーブ褐色（2.5Y4/3）砂などが互層をなしている。層厚は、調査区北半部では厚く 1ｍ前後、南半部では 20～50㎝程である。遺物は出土していない。

Ｖ層　**古墳時代前期の塩釜式期の土器を含む層**で、調査区のほぼ全体に分布する。ａ・ｂ2 層の自然堆積層と水田耕作土（ＳＦ3624）からなる。



第７図　調査区と基本層序柱状図

a層:褐灰色（10ＹR4/1）シルト～黒褐色（10ＹR2/3）粘質シルト。ＳX1300･1400道路跡からＳX3461道路跡にかけての調査区中央部の微高地上に分布する自然堆積層で、層厚は約10cmである。

b層:未分解の植物遺体を多く含む黒色（10ＹR2/1）～オリーブ黒色（5Y3/1）シルト質粘土。ＳX10道路跡以北およびＳD2000河川跡以南の湿地に堆積したスクモ層で､層序は10～15cm程である。

Ⅵ層　均質な自然堆積層からなり、調査区全体に分布する。地点によって層の堆積状況は異なるが、灰オリーブ色（5Y5/3）砂質シルト、暗緑灰色（7.5ＧＹ4/1）～オリーブ黒色（7.5Y3/1）粗砂、暗オリーブ灰色（5ＧＹ4/1）粘土～灰オリーブ色（7.5Y4/2）シルト質粘土などが互層をなしている。層厚は、南半部で60～120cm程である。遺物は出土していない。

Ⅶ層　調査区の南半部で検出したスクモ層で、黒色（10ＹR2/1～N2/0）シルト質粘土からなる。層厚いは15～25cm程である｡北半部については､図示していないが､部分的な断ち割り調査では確認できず、Ⅶ層が調査区全体には分布していなかった可能性が高い。なお、同様の堆積状況にある八幡地区の調査（後藤・村田他：1994、相沢：1993）では、**弥生時代中期の枡形囲式期**の遺物が比較的まとまって出土している。

Ⅷ層　均質な自然堆積層で、暗オリーブ灰色（2.5ＧＹ4/1）細砂～中砂からなる。遺物は出土していない。

第Ⅴ章　発見された遺構

Ａ．古墳時代

山王遺跡多賀前地区の調査では古墳時代前期の遺構としてＳＦ3124 水田跡およびＳＸ4060 河川跡が発見された。

ＳＦ3124 水田跡は側道調査区の奈良・平安時代の遺構検出面下層で発見された。水田域は総延長約250ｍの側道調査区内全域に及び、さらに東西南北の調査区外に及んでいる。調査区の制約でその東西南北限の状況は明確にできないが、これと同一面とみられる水田跡が北西約 500ｍの八幡地区（多賀城市教育委員会第 24 次調査区）においても確認されている。この水田跡は厚さ 50㎝前後の砂・シルト・粘土からなる水性堆積層に覆われており、水田跡の残存状態も良い。ＳＦ3124 水田跡の時期については、いくつかの地点の畦周辺から出土した土器の特徴から古墳時代前期と考えられる。

なお、検出された水田域は微地形によって三つの地域に分かれている。これら三地域を北からⅠ、Ⅱ、Ⅲ地区と呼ぶことにして以下水田跡の状況を記述する。

1．旧地形と水田域

調査区内の古墳時代前期の地形をみると、全体的には北西から南東方向に緩やかに傾斜している。ただし、Ⅰ地区とⅡ地区との間には微高地が、Ⅱ地区とⅢ地区との間には低湿地があってその間はいずれも水田区画が造られていない。これら二つの地域を挟んで、各水田域の畦の方向は微妙に異なっているが、いずれも北西から南東方向に帯状に広がっているとみられる。このような水田域のひろがりは水田の給排水をより効率的におこなうため自然地形を最大限に利用した結果と考えられる。

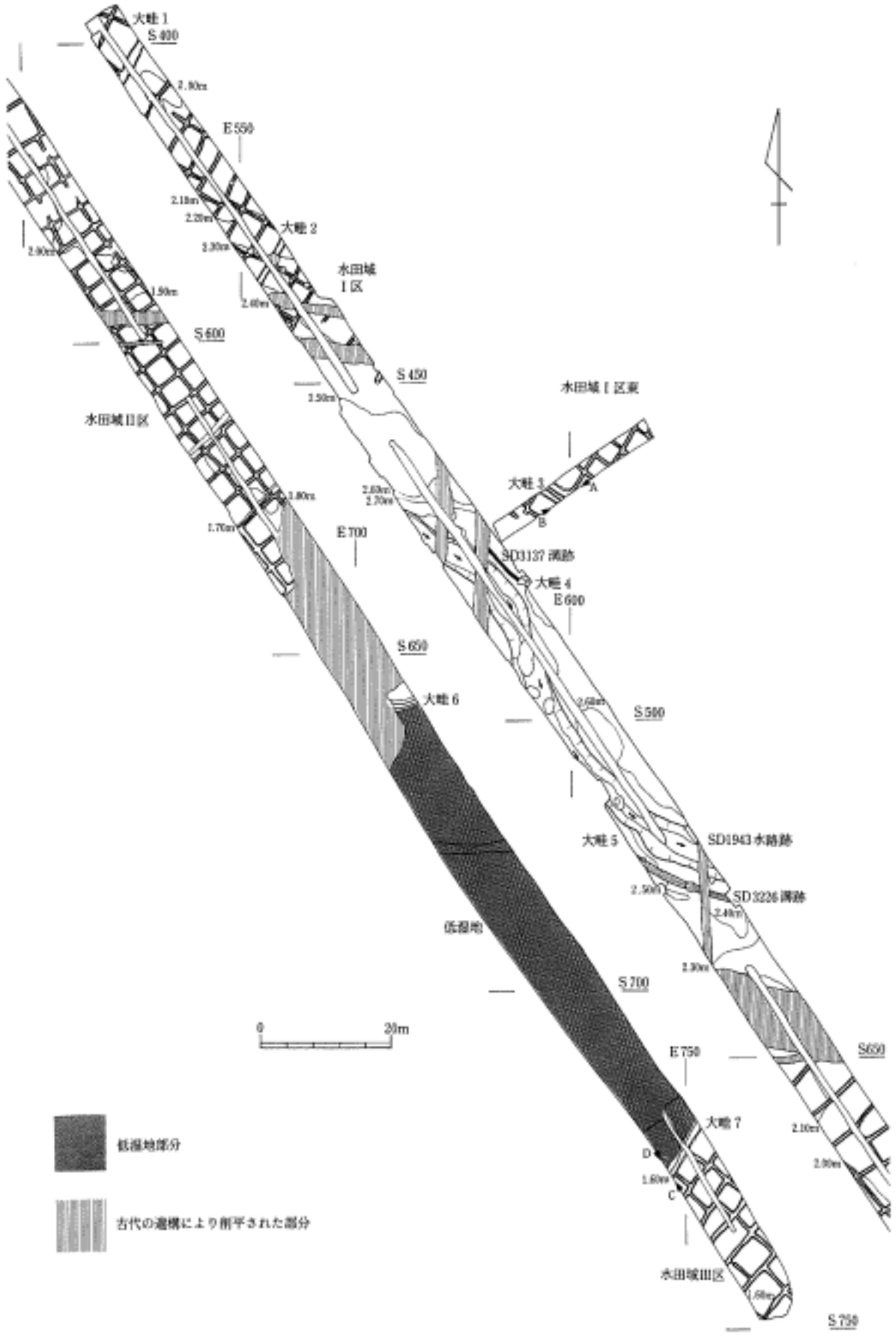
Ⅰ地区とⅡ地区との間の微高地中央部にはＳＤ1943 水路跡がわずかに蛇行しながら北北西から南南東へと流れている。ＳＤ1943 水路跡のほぼ中央にＳＡ3136 打ち込み杭列が発見されたことと、水路跡の両岸にほぼ平行してＳＤ3137、ＳＤ3226 溝跡が確認されたことなどからこれらが微高地を利用して造成された一連の水利施設であるとみられる。

一方、Ⅱ地区とⅢ地区の間の低湿地部はＳＦ3124 水田跡の耕作土の母材となった有機質に富む黒色土が耕作の撹乱を受けずそのまま残されている地域である。Ⅱ地区とⅢ地区の境は上幅約 1ｍの大畦によって限られている。低湿地中央部付近とⅡ・Ⅲ地区の水田面との比高差はわずかマイナス 30㎝前後であるがこの微地形が水田耕作域選定の条件からはずれたものとみられる。

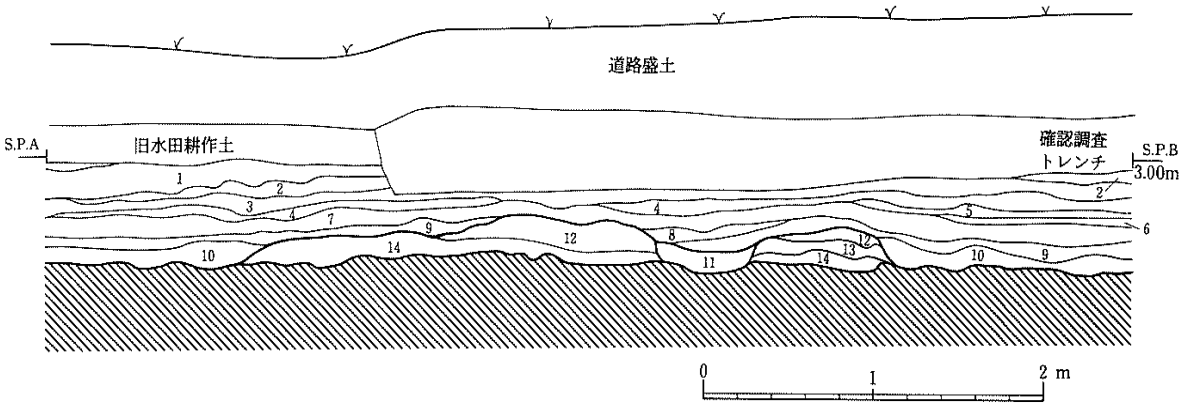
以下、水田跡、水路・溝跡、杭列の順で記述する。ＳＦ3124 水田跡については三地区に分けて内容を記す。

2．Ⅰ地区の水田域

ＳＦ3124 水田跡Ⅰ地区は側道調査区北部とＪＲ送水管調査区で確認された水田域である。検出した面積は約 400 ㎡である。水田域の東・西・北の状況は調査区外まで広がっているため不明であるが、南側はⅠ地区とⅡ地区とを分かつ微高地中央部のＳＤ3137 溝跡北側まで水田耕作土の広がりが確認され

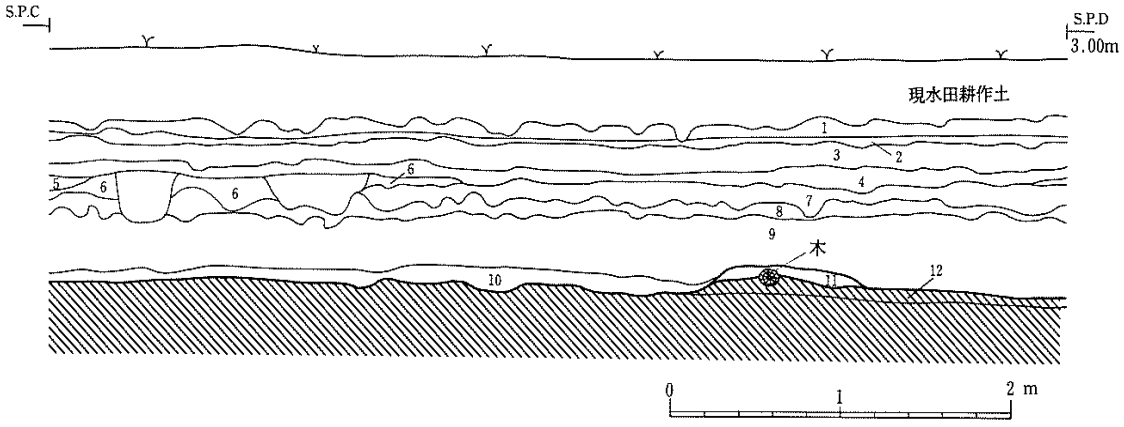


第8図　古墳前期の水田跡平面図



No	土色	土性	備考	
1	暗オリーブ褐 2.5Y3/3	砂質シルト	基本層位Ⅳ層	水成堆積層
2	黄褐 2.5Y5/4	シルト		水成堆積層
3	暗灰黄 2.5Y4/2	粘質シルト		水成堆積層
4	黄褐 2.5Y5/3	シルト		水成堆積層
5	暗灰黄 2.5Y4/2	シルト		水成堆積層
6	黄褐 2.5Y5/3	シルト		水成堆積層
7	灰黄褐 10YR4/2	粘質シルト		水成堆積層
8	オリーブ褐 2.5YR4/3	砂質シルト		水成堆積層
9	暗灰黄 2.5YR4/2	シルト		水成堆積層
10	褐灰 10YR4/1	粘質シルト	SF3124	[水路跡堆積土]上面より土師器壺出土。
11	黒褐 2.5Y3/2	粘質シルト		[水田耕作土]
12	灰黄褐 10YR4/2	シルト		[大畦畔盛土]
13	黒褐 2.5Y3/2	シルト		[大畦畔盛土]
14	黒褐 10YR3/1	シルト	基本層位Ⅴb層	旧表土。有機質を多く含む。

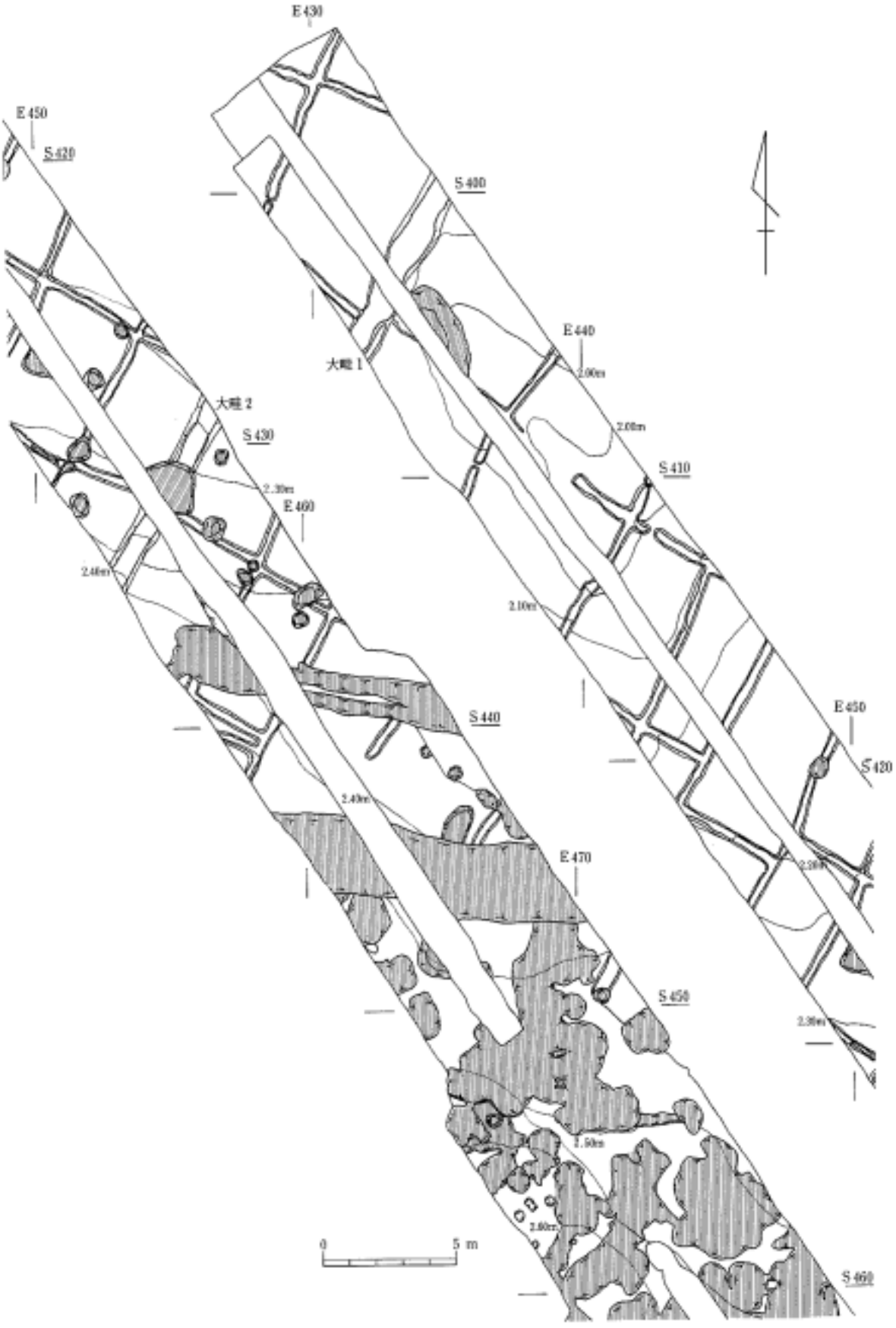
水田域Ⅰ区東断面図



No	土色	土性	備考	
1	黄褐 2.5Y5/4	砂質シルト	基本層位Ⅱ層	砂を多く含む。
2	灰黄褐 10YR4/2	シルト		
3	暗灰黄 2.5Y4/2	砂質シルト		
4	暗灰黄 2.5Y5/2	砂質シルト	SF3700C	[水田耕作土]灰白色火山灰ブロックを含む。
5	オリーブ褐 2.5Y4/3	細砂	基本層位Ⅲd層	水成堆積層
6	暗オリーブ褐 2.5Y3/3	シルト	SF3700B	[水田耕作土]
7	黒褐 2.5Y3/2	砂質シルト	SF3700A	[水田耕作土]
8	黒 10YR2/1	粘質シルト	基本層位Ⅲe層	有機質を多く含む。
9	灰オリーブ 7.5Y4/2	粗砂	基本層位Ⅳ層	水成堆積層
10	黒褐 10YR3/1	粘質シルト	SF3124	[水田耕作土]
11	黒褐 10YR3/2	シルト		[大畦畔盛土]
12	黒 10YR2/1	シルト質粘土	基本層位Ⅴb層	低湿地堆積層。有機質を多く含む。

水田域Ⅲ区・低湿地部分断面図

第９図　古墳時代前期の水田跡断面図


E430
E450
S420
S400
E440
大畦1
2.00m
大畦2
S430
2.08m
S410
2.30m
E460
2.46m
2.10m
S440
E450
S420
2.40m
E470
2.20m
S450
2.30m
1.50m
2.60m
0
5 m
S460

第10図　Ⅰ区の水田域

た。ただしこの微高地部分の水田区画の状況は上層から掘り込まれた古代の溝・土壙による撹乱が著しく、水田域南辺の状況は明確にできなかった。

[水田面の標高と傾斜] 水田面の標高は 2.6～2.0ｍで、南西から北東方向に傾斜している。

[耕作土] 耕作土は暗灰色の粘質シルトである。下層の黒色粘土･灰色シルトを母材とし、ややグライ化している。耕作土の厚さは平均 10㎝前後で、下面には凹凸が見られる。

[畦跡]畦跡は規模の違いから上幅 1m前後、高さ 30㎝前後の大きなものと上幅 50㎝以下高さ 10㎝前後の小さなものの 2 種に分けられる。前者を大畦、後者を小畦とする。ここでは大畦を中心に記す。畦の方向は各所で若干の振れがあるが基本的にＮ-40-Ｅ前後である。

大畦は 1～4 の四つがあり、これらによってⅠ地区の水田域は大きく 5 分割されている。大畦 1・2 は南西～北東方向、大畦 3 はこれらに直交する南東～北西方向、大畦 4 はＳＤ1943 水路跡北辺に沿った畦跡である。このうち 1 と 2 の間隔は約 33ｍある。大畦 3 は畦の中央部が溝状にくぼむ特異な形態のものである。大畦 4 はＳＤ1943 水路跡北岸に沿って屈曲しており、その北辺にＳＤ3137 溝跡を伴う道路状の遺構である。

小畦はこれら大陸によって分割された区域をさらに 3～5ｍ間隔で細分している。水田面の傾斜に直交する南西～北東方向の小畦は直線的に筋が通るが、南東～北西方向のものは筋が通らない。畦作りの順番としてまず傾斜に直交する南西～北東方向の畦を作り、後に南東～北西方向のものを作ったものであろう。

[水田区画]調査区内では大畦畔によって大きく 5 区画に分けられる。さらに大区画の中を小畦畔によって区画しており、確認された小区画の水田跡は 48 区画である。このうち平面形、面積が確認できたものは 7 区画である。平面形は概ね長方形を基調としている。水田区画の面積は最小 9 ㎡、最大 30 ㎡で、区画ごとにばらつきが見られるが、15～25 ㎡にほぼ集中している。

[水口]畦畔が途中で途切れている部分で、水口と認定できたものは 7 ヶ所でこれらはいずれも小畦の一部が 20㎝前後途切れたものである。水路から水田に取り付くように作られた水口は確認されていない。

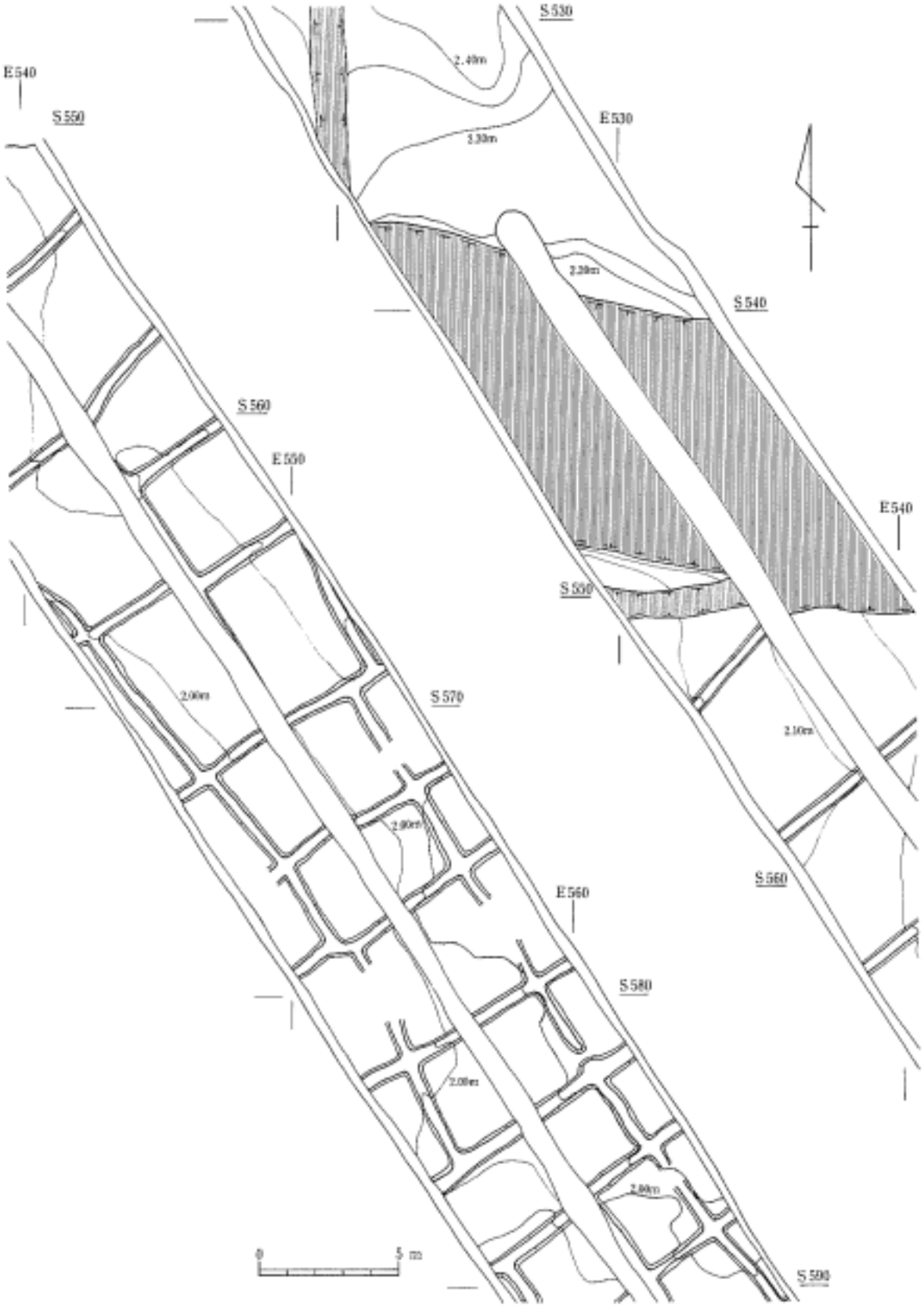
3．Ⅱ地区の水田域

ＳＦ3124 水田跡Ⅱ地区は側道調査区中央で確認された水田域である。検出した面積は約 800 ㎡である。水田域の東・西の状況は調査区外まで広がっているため不明であるが、北限はⅠ地区とⅡ地区とを分かつ微高地中央部のＳＤ3226 溝跡南側まで、南側はⅡ地区とⅢ地区とを分かつ低湿地まで水田耕作土の広がりが確認された。

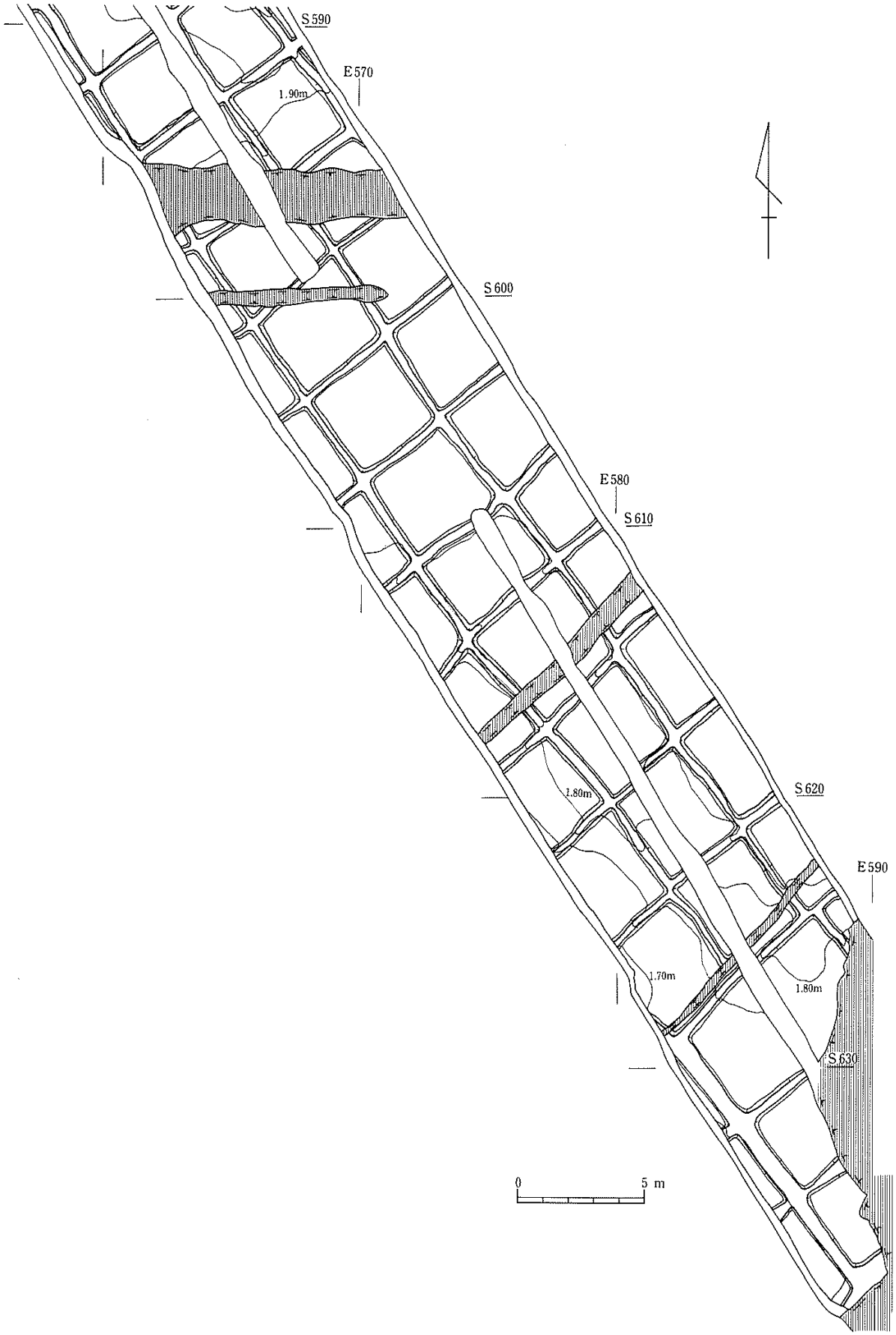
[水田面の標高と傾斜]水田面の標高は 2.5～1.7ｍで、北部では北西から南東方向に傾斜しているが南部ではほぼ平坦である。

[耕作土] 耕作土は暗灰色の粘質シルトである。下層の黒色粘土･灰色シルトを母材とし、ややグライ化している。耕作土の厚さは平均 10㎝前後で、下面には凹凸が見られる。

[畦跡] Ⅰ地区と同様に大畦と小畦とがある。畦の方向は各所で若干の振れがあるが基本的にＮ－55－



第11図　II区北半の水田域



第12図　II区南半の水田域

Ｅ前後である。

大畦は 5･6 の 2 つがある。大畦 5 はＳＤ1943 水路跡南辺に沿った畦跡、大畦 6 は低湿地北辺に沿う畦跡である。

小畦は 3～5ｍ間隔で作られている。北部では北西～南東方向の小畦が直線的に筋が通るが、中央部では北東～南西方向の畦の筋が通り、南部ではいずれの方向の畦も筋が通らず交点がわずかづつずれている。これは畦作りの方法として水田面に傾斜のある北部ではまず傾斜に直交する南西～北東方向の畦を作り、後に南東～北西方向のものを作ったものである。傾斜の変換する中央部ではこれを逆転し、南部では交互にしていったものと考えられる。

[水田区画]確認された小区画の水田跡は 79 区画である。このうち平面形、面積が確認できたものは 28 区画である。平面形は北半部では長方形を基調とするが、南半部では正方形に近いものが多いという特徴がみられる。水田区画の面積は最小 9 ㎡、最大 20 ㎡で、Ｉ地区に比べ小さなものが主体を占め区画ごとのばらつきは少ない。

[水口]畦畔が途中で途切れている部分で、水口と認定できたものは 2 ヶ所でこれらはいずれも小畦の一部が 20cm 前後途切れたものである。水路から水田に取り付くように作られた水口は確認されていない。

4．III地区の水田域

ＳＦ3124 水田跡Ⅲ地区は側道調査区南部で確認された水田域である。検出した面積は約 300 ㎡である。水田域の東・西・南の状況は調査区外まで広がっているため不明であるが、北限はⅡ地区とⅢ地区とを分かつ低湿地まで水田耕作土の広がりが確認された。

[水田面の標高と傾斜]水田面の標高は 1.7～1.6ｍでほぼ平坦である。

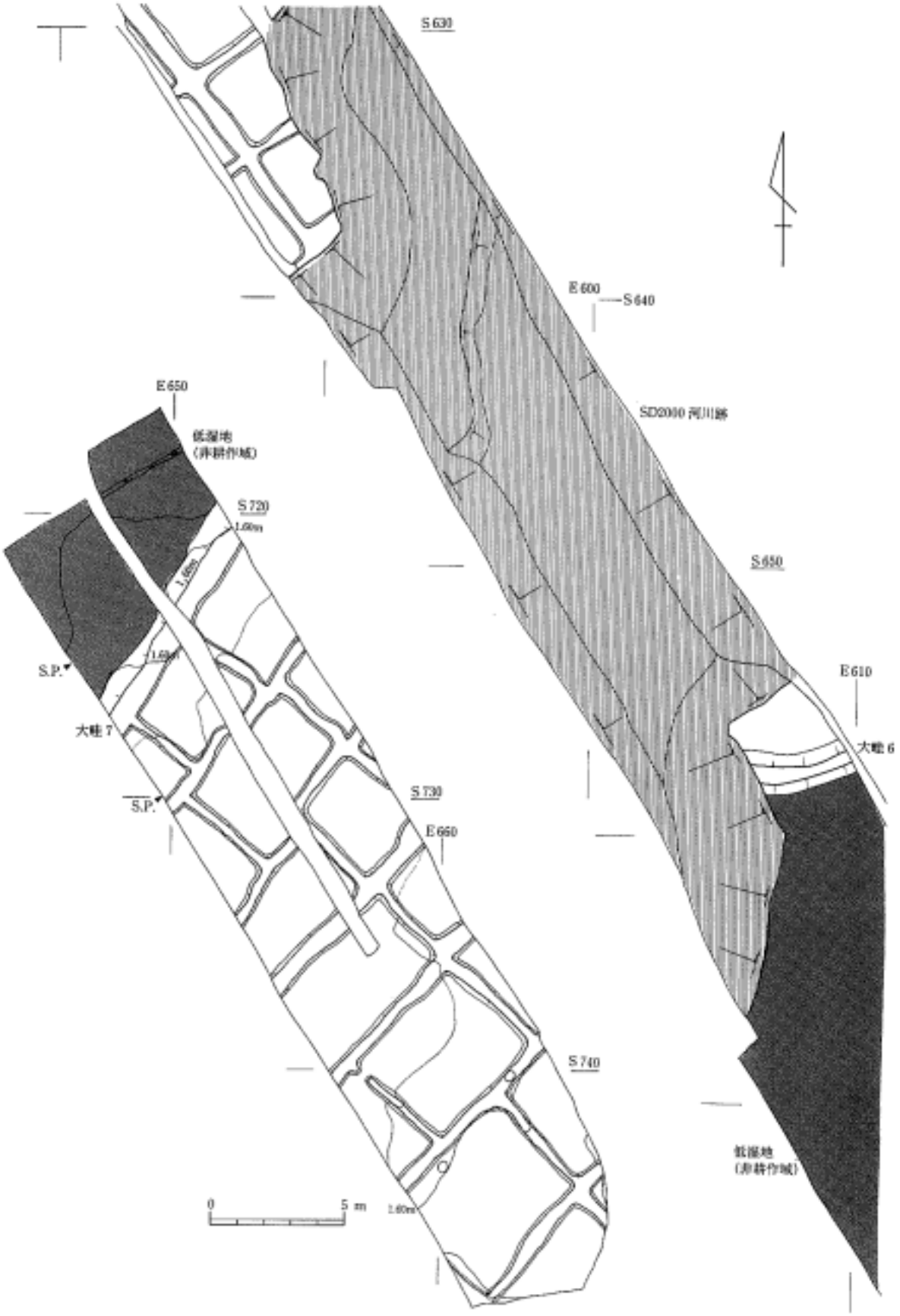
[耕作土] 耕作土は暗灰色の粘質シルトである。下層の黒色粘土･灰色シルトを母材とし、ややグライ化している。耕作土の厚さは平均 10cm 前後で、下面には凹凸が見られる。

[畦跡] Ⅰ･Ⅲ地区と同様に大畦と小畦とがある。畦の方向は各所で若干の振れがあるが基本的にＮ－40－Ｅ前後である。

大畦は低湿地との境にある 7 のみである。小畦は 3～5ｍ間隔で作られている。いずれの方向の畦も筋が通らず交点がわずかずつずれている。

[水田区画]確認された小区画の水田跡は 19 区画である。このうち平面形、面積が確認できたものは 5 区画である。平面形は北半部では正方形に近いものが多いという特徴がみられる。水田区画の面積は最小 9 ㎡、最大 25 ㎡である。

[水口]畦畔が途中で途切れている部分で、水口と認定できたものは 2 ヶ所でこれらはいずれも小畦の一部が 20cm 前後途切れたものである。水路から水田に取り付くように作られた水口は確認されていない。



第13図　III区の水田域

5．微高地の遺構

【ＳＤ1943 水路跡】（第15･16 図）

Ⅰ・Ⅱ区を分ける微高地上に延びる取水のための水路と考えられる。上端幅 3ｍ前後、底面幅 2ｍ、深さ 40～60cm である。水路跡は蛇行しながら北西から南東方向に延びる。断面形は壁が緩やかに立ち上がる「Ｕ」字形を呈し、堆積土は 2 層に分かれる。底面のレベル差から南東に流れる水路であったと考えられる。堆積土から土師器壷破片が出土している。

【ＳＤ3137 溝跡】（第16 図）

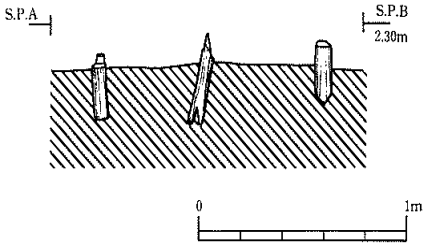
ＳＤ1943 水路跡北辺に沿う畦道の側溝である。上端福 80cm、底面幅 60cm、深さ 30cm である。断面形は「Ｕ」字形である。堆積上は 2 層に分かれる。

【ＳＤ3226 溝跡】（第16 図）

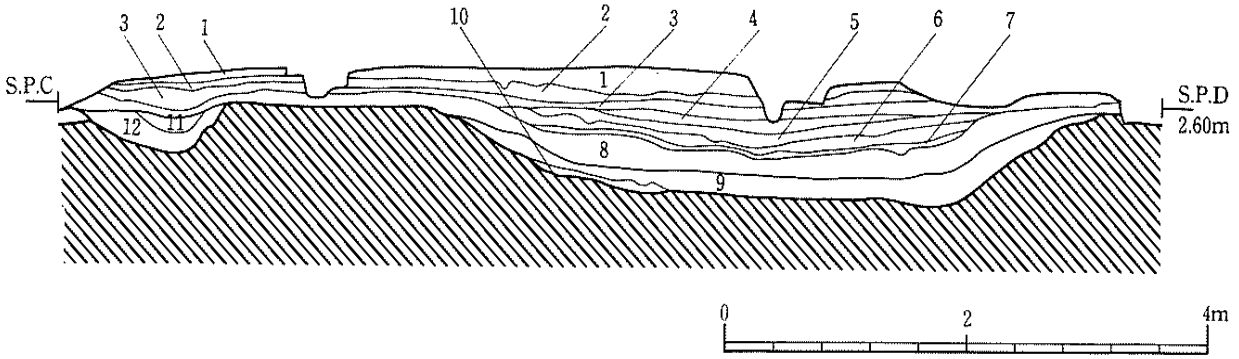
ＳＤ1943 水路跡南辺に沿う畦道の側溝である。上端幅 1ｍ、底面幅 80cm、深さ 50cm である。断面形は「Ｕ」字形である。堆積土は 2 層に分かれる。

【ＳＡ3136 打ち込み杭列】（第14･16 図）

ＳＤ1943 水路跡中央部で発見された。杭 3 本は約 50cm 間隔で直線的に並んでいる。杭はいずれも先端を尖らせた径約 5cm の芯持ち材で垂直に打ち込まれている。水利に関係するなんらかの施設の一部とみられるが上部構造が失われており性格は不明。

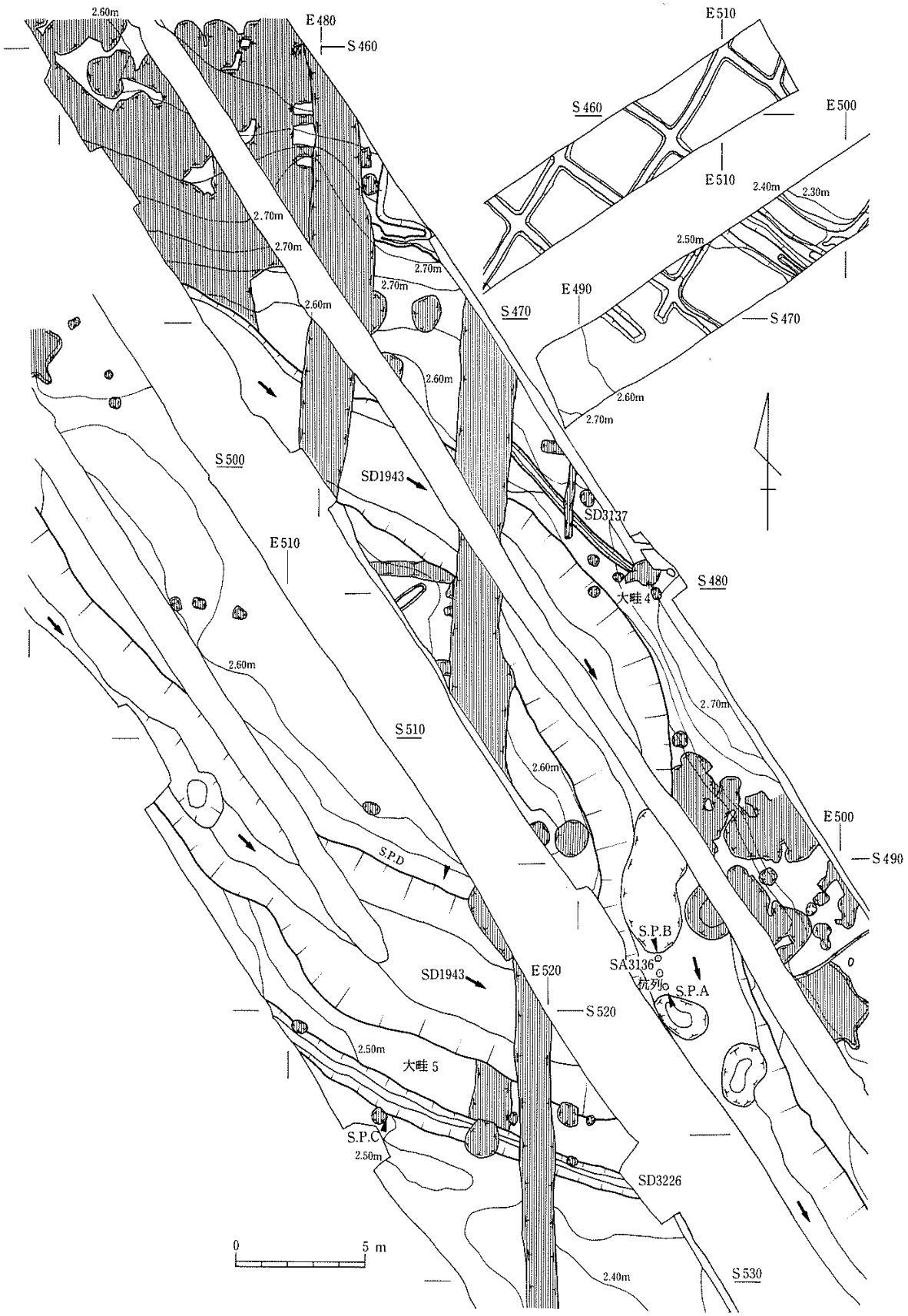


第14図　SA3136打ち込み杭列



No	土色	土性	備考	
1	にぶい黄褐 10YR4/3	粗砂	基本層位IIIb層	水成堆積層
2	黄褐 2.5Y5/3	シルト	基本層位IV層	水成堆積層
3	黒褐 10YR3/1	シルト		水成堆積層
4	褐灰 10YR4/1	シルト		水成堆積層
5	黒 10YR2/1	シルト		水成堆積層
6	にぶい黄 2.5Y6/4	シルト		水成堆積層
7	黄灰 2.5Y4/1	シルト		水成堆積層
8	緑灰 10GY5/1	シルト		水成堆積層
9	黒 10Y2/1	粘質シルト	SD1943水路跡	地山ブロックを含む。
10	緑灰 10GY5/1	砂質シルト		地山砂を多く含む。
11	にぶい黄 2.5Y6/4	シルト	SD3226 溝跡	
12	黒褐 10YR3/1	シルト		地山ブロックを含む。

第15図　SD1943・3226溝跡断面図

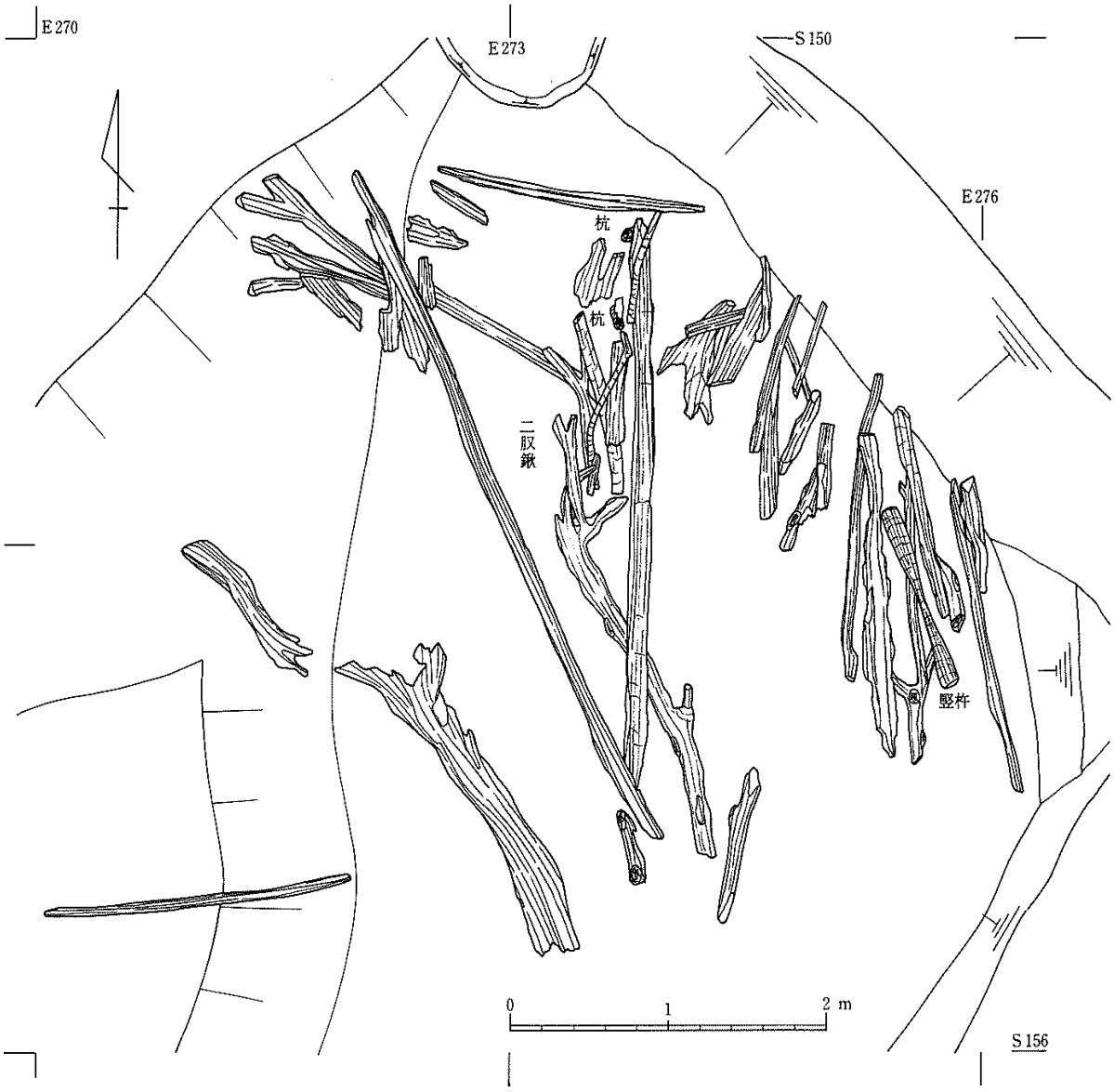

E480
S460
E510
S460
E500
E510
2.40m
2.30m
2.50m
2.70m
2.70m
2.70m
2.70m
2.60m
E490
S470
S470
2.60m
2.70m
S500
SD1943
SD3137
E510
S480
大畦4
2.60m
2.70m
S510
2.60m
E500
S490
S.P.D
S.P.B
SA3136
杭列
S.P.A
SD1943
E520
S520
2.50m
大畦5
S.P.C
2.50m
SD3226
0
5 m
2.40m
S530

第16図　微高地の遺構

6．河川跡

多賀前地区調査区北端の調査区の古代のＳＸ4012･4013･4014 道路跡の下層で発見された（第 20･21 図）。調査区がＪＲ東北本線とＪＲ貨物線の分岐点内にあたる部分である。発見されたＳＸ4060 河川跡は西から東へと流れる流路の北岸部分で、中央部から南岸部分にかけてはＪＲ貨物線の路線敷下にあるため未調査である。したがって川幅、深さとも不明である。

調査区内での流路跡でもっとも深い部分は標高 1.9m前後、北岸からの深さ 30cm 前後である。流路内の堆積土は荒砂で、調査区西側の河床もしくはその直上から完形に近い土師器が出土している。また調査区東部の北岸近くに二本の打ち込み杭があり、これに絡むように多数の流木や加工材が出土している（第 17 図）。この中には竪杵、二股鍬先各一点も含まれている。

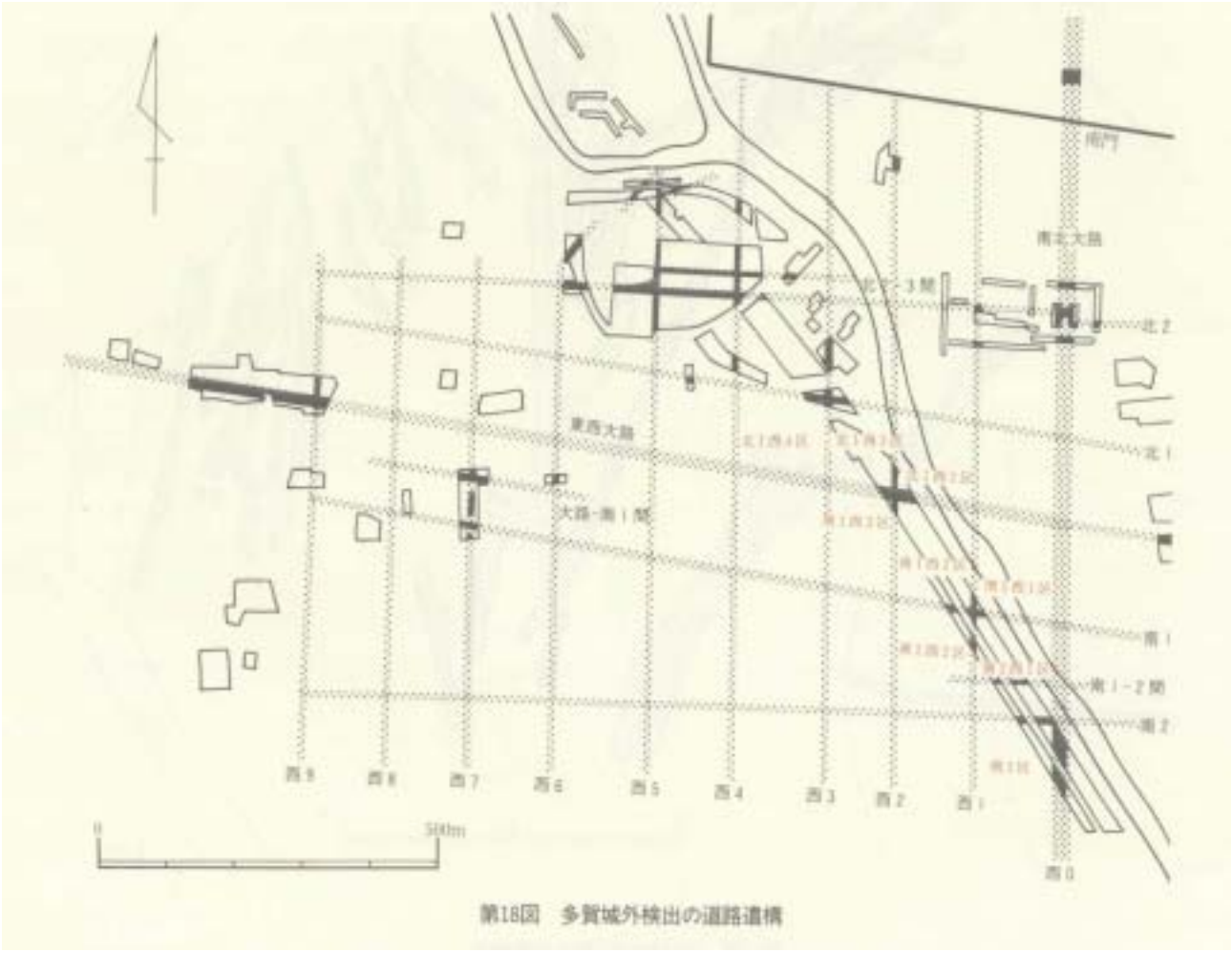


第17図　SD4060河川跡木材集積部

B．奈良・平安時代

今回検出した奈良･平安時代の遺構は、道路跡 9 条、掘立柱建物跡 211 棟以上、竪穴住居跡 26 軒、塀跡 20 条、井戸跡 19 基、竪穴遺構 6 基、土器埋設遺構 16 基、土壙 400 基以上、溝跡 110 条以上、河川跡 4 条、水田跡 3 面、小溝状遺構群 19 面、多数の柱穴など膨大な数におよんでいる。しかも、これらは南北に長く、広大な調査区のほぼ全域に分布している。

ここで、個々の遺構の記述に入る前に、先ず遺構の位置の表示について触れておきたい。本遺跡をはじめとする陸奥国府多賀城の南前面一帯では、これまでの調査により東西・南北の道路跡が多数発見されている。これらは多賀城政庁南門と外郭南門の南延長上に位置する幅約 23ｍの南北道路跡（南北大路）や、多賀城の外郭南辺と平行して東西に走る幅約 12ｍの東西道路跡（東西大路）をはじめ、多賀城の政庁中軸線の方向（Ｎ−1° 04′ 00″−Ｅ）および外郭南辺の方向（Ｅ−7〜8° −Ｓ）とほぼ一致している。各道路間の距離はおおよそ 110〜140ｍで、南北道路についてみれば、南北大路を起点に約 1.1ｋｍ西まで配されている。これにより、多賀城外に、多賀城を中心に一定の計画にもとづいて施工された東西・南北道路による地割りが存在したことが明らかになっている。今回の調査対象地は、この想定される方格地割の内部に位置し、しかも道路で画された複数の区画にわたっている。そこで本報告書では、調査区全体を方格地割内部の各区画ごとに細分し、これらをひとつの調査区として捉えて、各区ごとに遺構を記述していく。各区の名称については、想定される方格地割全体の中で位置



第18図　多賀城外検出の道路遺構

付けることにし、大路を基準にしてそれぞれ近い区画から東西・南北に番号を付して呼ぶことにする。すなわち、今回の調査区は北から「北 1 西 4 区（東西大路から北に 1 区画目、南北大路から西に 4 区画目）」、「北 1 西 3 区」、「北 1 西 2 区」、「南 1 西 3 区」、「南 1 西 2 区」、「南 1 西 1 区」、「南 2 西 2 区」、「南 2 西 1 区」の 8 つの区画と方格地割の南外側（本報告書では「南 3 区」と呼称する）にあたる（第 18 図）。

以下、遺構の記述にあたっては、先ず道路跡とこれに関連する遺構について述べ、その後に各区ごとに北から順に説明を加えていく。なお、これらの遺構の中には道路建設以前の遺構や現時点で時期の特定できない遺構も存在しているが、ここでは各区の調査区内に位置する遺構として一括して記述する。

1．道路跡

今回の調査では、東西道路跡 5 条、南北道路跡 4 条を、4 ヶ所でこれらの道路跡の交差点を検出した。これらの道路跡は東西大路と南北大路を基準にして割り付けていくと、東西道路跡が北から北 1 道路、東西大路、南 1 道路、南 1-2 間道路(註 1)、南 2 道路、南北道路跡が東から西 0 道路(註 2)、西 1 道路、西 2 道路、西 3 道路にあたる(第 18 図)。以下、交差点ごとに、北から各道路跡の説明を加えていくが、各道路の変遷は交差点ごとに示したもので、交差点相互で対応するものではない。

(1)北 1・西 3 道路

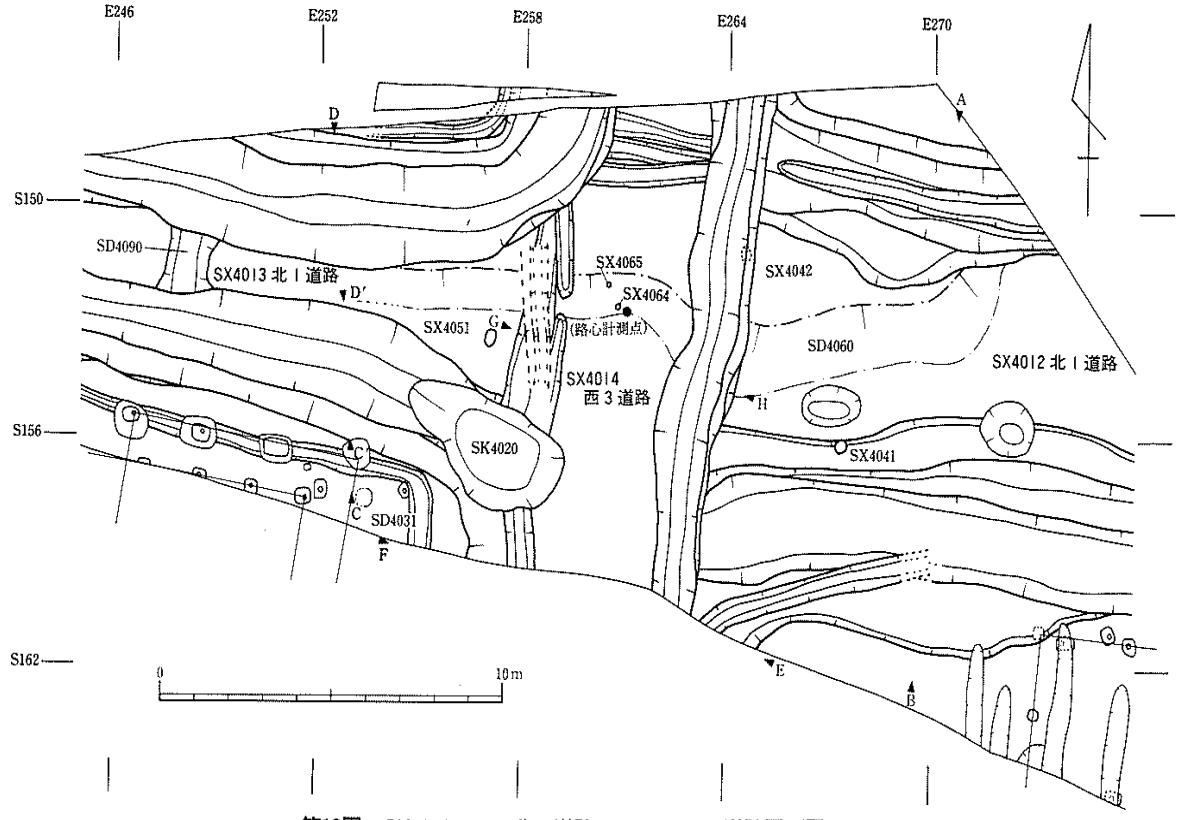
【ＳＸ4012・4013 東西道路跡、ＳＸ4014 南北道路跡】

ＪＲ東北本線と仙台臨海鉄道に挟まれた北端部の調査区で、水田耕作土・床土（Ⅰ層）の直下、Ⅳ層上面およびＳＤ4060 河川跡の堆積土上面で検出した。廃絶後Ⅱ層に覆われる。両道路は、調査区のほぼ中央で交差している（第 19 図）。

ＳＸ4012・4013 東西道路跡は多賀城外における方格道路の北 1 道路にあたり、ＳＸ4014 南北道路跡との交差点を挟んで約 40ｍ検出した。両道路の最も新しいＦ側溝の心々（路心）を結んだ道路の方向は東で約 7° 南に偏している。

ＳＸ4014 南北道路跡は西 3 道路にあたり、交差点を挟んで約 12ｍ検出し、また南に約 40ｍ隔てた調査区では東側溝のみ約 2ｍ検出した。道路の方向は、調査区を隔てたＳＸ4014Ｆ東側溝の心々を結んだ方向で、北で約 9° 東に偏している。

両道路とも路面の両端には素掘りの側溝を伴っており、一貫して東西・南北の十字路交差点を形成している。側溝にはそれぞれ同位置でＡ→Ｆの 6 時期の重複があり、交差の形状（側溝の交差と接続のあり方）にもａ②→ｂ③→ｂ①の 3 時期の変遷が認められた。また、路面上には 3 枚の盛土整地層が確認され、少なくとも路面Ⅰ→路面Ⅱ→路面Ⅲの 3 時期の変遷が知られた(第 1 表)。すなわち、交差点全体では“路面Ⅰ（側溝Ａ・交差ａ②→側溝Ｂ・交差ｂ③）→路面Ⅱ（Ｃ・ｂ①）→路面Ⅲ（Ｄ～Ｆ・ｂ①)”という変遷として捉えることができる（第 21・22 図)。以下、側溝の変遷をもとに述べていく。



第19図　SX4012・4013北1道路、SX4014西3道路平面図

Aは、Ⅳ層およびSD4060の堆積土を低く削り出し、その上面に整地(路面3層)を施した路面上(路面Ⅰ)で検出した。整地はしまりのある黒褐色・暗灰黄色砂質土などを用いて行っており、10～15cmの厚さが残存する。路幅は残存する側溝の心々でSX4012Aが10.2m、SX4013Aが約5m、SX4014Aが約5mを測る。

Bは、Aと同様に路面Ⅰ上面で検出された道路跡であるが、交差の形状はSX4014の東西側溝がいずれもSX4012・4013の路面を貫く交差となっている。交差点付近の西側溝には、下場両側に沿って、径5cm前後の杭による打ち込み護岸が0.4～0.6m間隔で認められた（図版6中)。路幅は側溝心々でSX4012Bが7.6m、SX4013Bが約6m、SX4014Bが5.2mを測る。

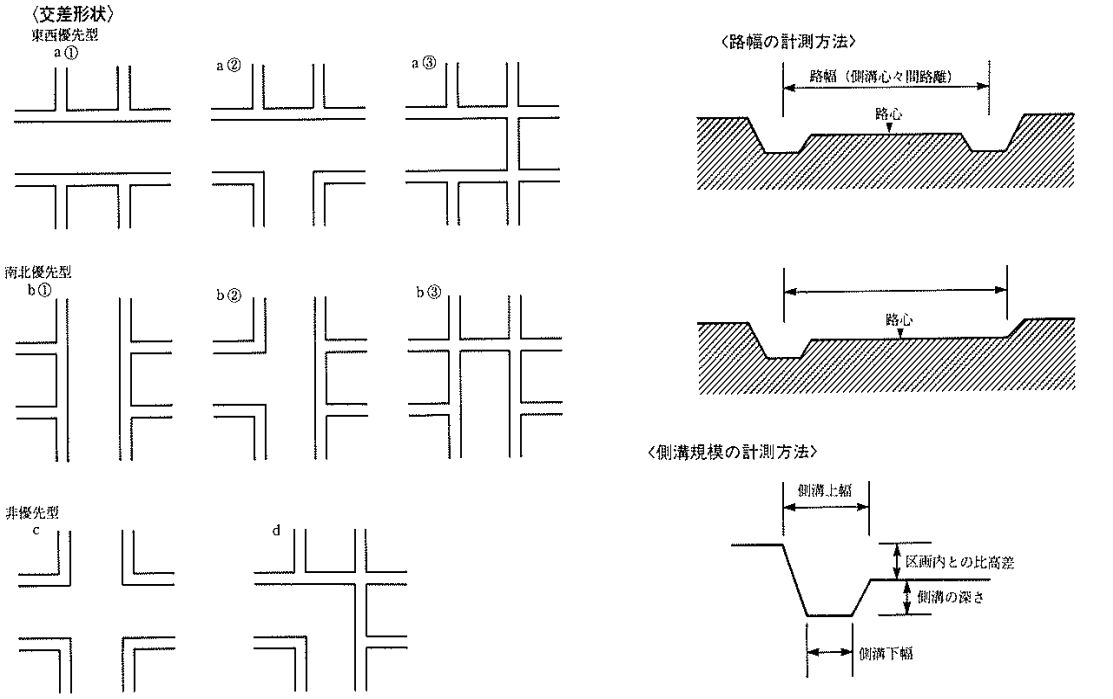
Cは、Bの側溝および路面Ⅰ上面に盛土整地（路面2層）を施した路面上（路面Ⅱ）で検出した。盛土はしまりのある暗灰黄～褐色砂質土が30cm程の厚さで残存している。側溝にはいずれも灰白色火山灰ブロックの堆積が認められ、SX4013Cでは路面上に灰白色火山灰の一次堆積層が認められた。路幅は側溝心々でSX4012Cが9.0m、SX4013Cが4.8m、SX4014Cが5.4mを測る。なお、路面2層中において、土器埋設遺構を5基（SX4041・4042・4051・4064・4065）検出している。

D～Fは、Cの側溝および路面Ⅱ上面に盛土整地（路面1層）を施し、構築した灰白色火山灰降下以降の道路跡である（路面Ⅲ)。盛土は灰白色火山灰粒を含む褐灰～褐色砂質土を用いて行っており、10～15cm程の厚さが残存する。路幅は側溝心々でSX4012がD9.8m→E9.0m→F7.5m、SX4013が4.2m→6.8m→3.8m、SX4014が4.5m→5.1m→4.8mを測る。なお、Fの段階には区画（宅地）内

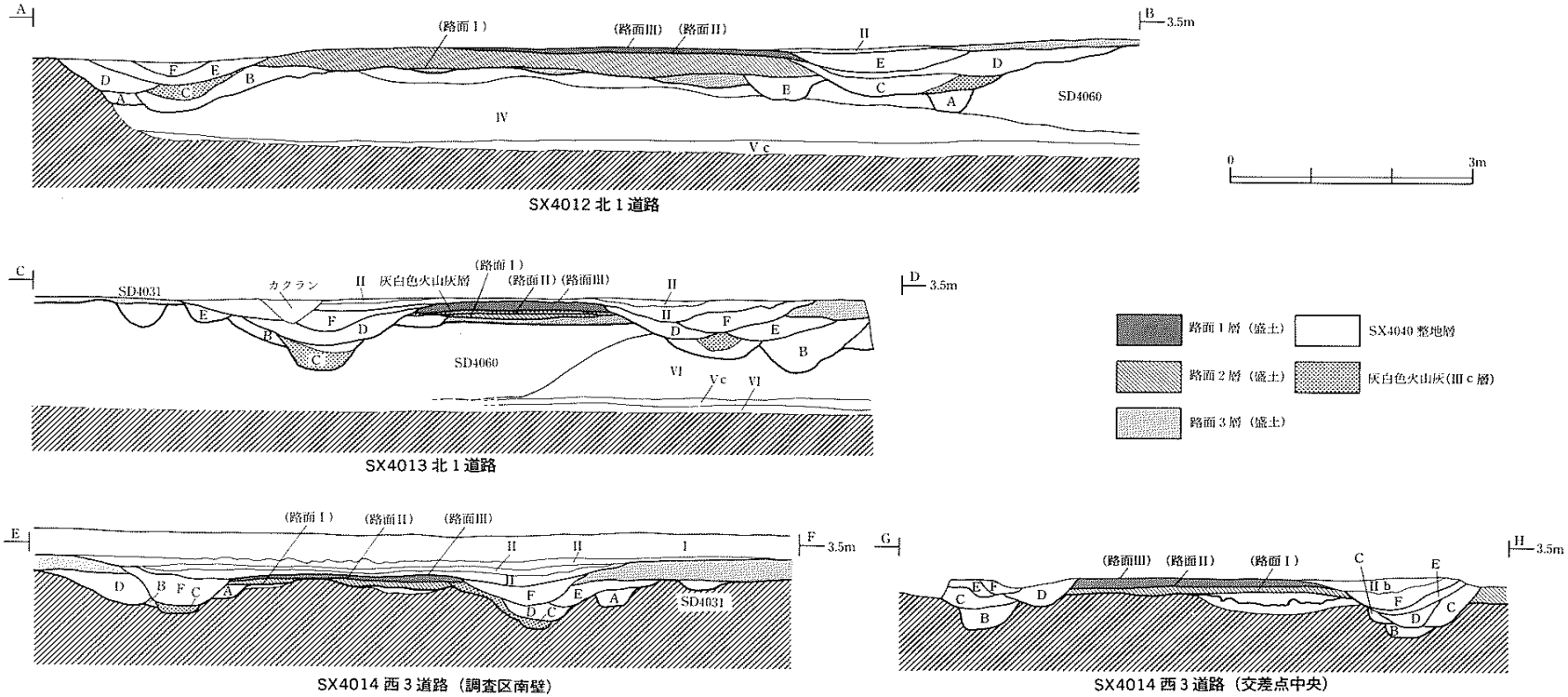
道路名		時期	交差形状	路幅	路面と路面堆積土	宅地との比高差	側溝の規模 上幅	底幅	深さ	側溝底面の傾斜	備考
北1道路	SX4012	A	a②	10.2	(削平→＊路3層) 0.15 路面I	-0.2 ～0.4	北 (0.7)	(0.4)	0.5	?	
							南 (0.6)	0.3	0.6	?	
		B	b③	7.6			北 (2.5)	0.5	0.6	?	
							南 1.0	0.5	0.4	W→E	
		C	b①	9.0	＊(路2層) 0.3 路面II	-0.1	北 (1.5)	0.4	0.7	?	側溝に灰白色火山灰ブロックを含む。土器埋設 (SX4041・4042) を伴う。
							南 2.7	1.5	0.5	W→E?	
		D	b①	9.8	＊(路1層) 0.1 路面III	0	北 (1.4)	0.4	0.6	?	
							南 (3)	1.6	0.4	W→E	
		E		9.0			北 2.2	0.6	0.5	E→W	
							南 2.2	1.0	0.3	W→E	
		F		7.5		-0.1 ～0.2	北 0.9	0.3	0.4	E→W	宅地内整地 (SX4020,最大厚0.3m)
							南 2.0	0.9	0.2	?	
	SX4013	A	a②	(5)	(削平→＊路3層) 0.15 路面I	-0.2 ～0.4	北 ?	?	0.4	W→E	
							南 ?	0.6?	0.2	W→E	
		B	b③	(6)			北 (1.5)	0.4	0.7	W→E	
							南 ?	?	0.5	W→E	
		C	b①	4.8	＊(路2層) 0.3 路面II	-0.1	北 (1.6)	0.9	0.6	W→E	側溝・路面上に灰白色火山灰の一次堆積層土器埋設 (SX4051) を伴う。
							南 (1.5)	0.6	0.8	W→E	
		D	b①	4.2	(灰 白) 0.05 ＊(路1層) 0.1 路面III	0	北 1.5	0.7	0.5	W→E	
							南 2.1	0.6	0.6	W→E	
		E		6.8			北 1.5	0.4	0.5	W→E	
							南 (0.7)	0.2	0.3	W→E	
		F		3.8		-0.1 ～0.2	北 2.5	0.6	0.4	W→E	宅地内整地 (SX4020,最大厚0.3m)。路面排水溝 (SD4090)・枡 (SK4020) を伴う。
							南 2.5	0.7	0.4	W→E	
西3道路	SX4014	A	a②	(5)	(削平→＊路3層) 0.1 路面	-0.2	東 ?	(0.3)	0.2	S→N	
							西 (0.7)	0.3	0.3	S→N	
		B	b③	5.2			東 1.4	0.6	0.6	S→N	西側溝を護岸 (打ち込み)
							西 (1.2)	0.4	0.4	S→N?	
		C	b①	5.4	＊(路2層) 0.1 路面II	-0.2	東 (1.6)	0.4～0.8	0.5	N→S?	側溝に灰白色火山灰層。土器埋設 (SX4064・4065) を伴う。
							西 (1.5)	0.3～0.5	0.6	N→S	
		D	b①	4.5	＊(路1層) 0.15 路面III	0	東 (1.5)	0.6	0.6	N→S	
							西 1.0	0.5	0.5	N→S	
		E		5.1			東 (1.4)	0.4～0.6	0.5	N→S	
							西 (1.6)	0.3～0.6	0.4	N→S	
		F		4.8		-0.3	東 1.3	0.5	0.4	N→S	
							西 1.4～1.6	0.4～0.6	0.4	N→S	

※単位：m、( )：推定値
※路面堆積土の＊印は整地によるもので、数字は層厚を示している。

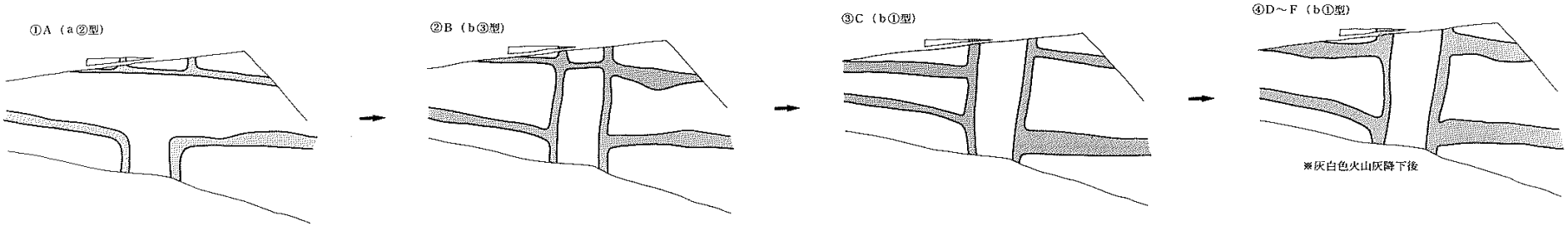
第1表　SX4012・4013北1道路、SX4014西3道路一覧表



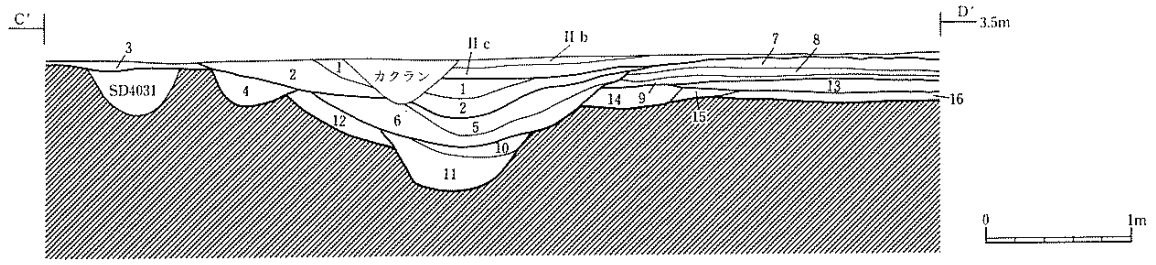
第20図　道路交差点の形状分類と路幅・側溝規模の形測方法



第21図　SX4012・4013北１道路、SX4014西３道路断面模式図



第22図　SX4012・4013北１道路、SX4014西３道路変遷図



No	土色	土性	備考	No	土色	土性	備考	No	土色	土性	備考
1	灰黄褐 10YR5/2	砂	F側溝	7	灰黄褐 10YR5/2	砂質シルト	路1層	13	暗灰黄 2.5Y5/2	砂質シルト	路2層
2	暗褐 10YR3/3	シルト		8	褐灰 10YR5/1	砂質シルト		14	暗灰黄 2.5Y5/2	砂質シルト	A側溝
3	褐灰 10YR4/1	砂	SK4020	9	灰白色火山灰		路面	灰白の一次堆積層	15	暗灰黄 2.5Y5/2	砂質シルト	路3層
4	にぶい黄褐 10YR4/3	砂質シルト	E側溝	10	黒褐 10YR3/2	シルト	C側溝		16	にぶい黄褐 10YR4/3	砂質シルト	
5	黒褐 10YR3/1	シルト	D側溝	11	黒褐 10YR2/2	シルト		灰白ブロック含。				
6	暗灰黄 2.5Y5/2	砂質シルト		12	にぶい黄褐 10YR4/3	砂質シルト	B側溝				

第23図　SX4013北1道路南側側溝断面図

部に褐灰色砂質土を用いた盛土整地（ＳＸ4020）が施されており、30㎝程の厚さが残存している。また、ＳＸ4013Ｆには側溝水の浄化および路面排水のためとみられる枡（ＳＫ4020）および溝（ＳＤ4090）を伴っている。

【ＳＫ4020 枡跡】（第 20 図）

ＳＸ4013Ｆ南側溝とＳＸ4014Ｆ西側溝とのコーナー部分に掘り込まれた枡跡である。長径 5.0m、短径 2.5mの長楕円形をなし、側溝底面からの深さは 0.5～0.7mで南に向かって緩やかに傾斜している。西から南へ向かって排水される水が路面に溢れることを防ぐ機能を果たしたものと思われる。

【ＳＤ4090 路面排水溝跡】（第 20 図）

ＳＸ4013Ｆの路面を南北に貫く溝跡で、路面排水溝とみられる。規模は上幅 1.5m、下幅 0.5m、深さ 0.1m程である。

〈北 1・西 3 道路出土遺物〉

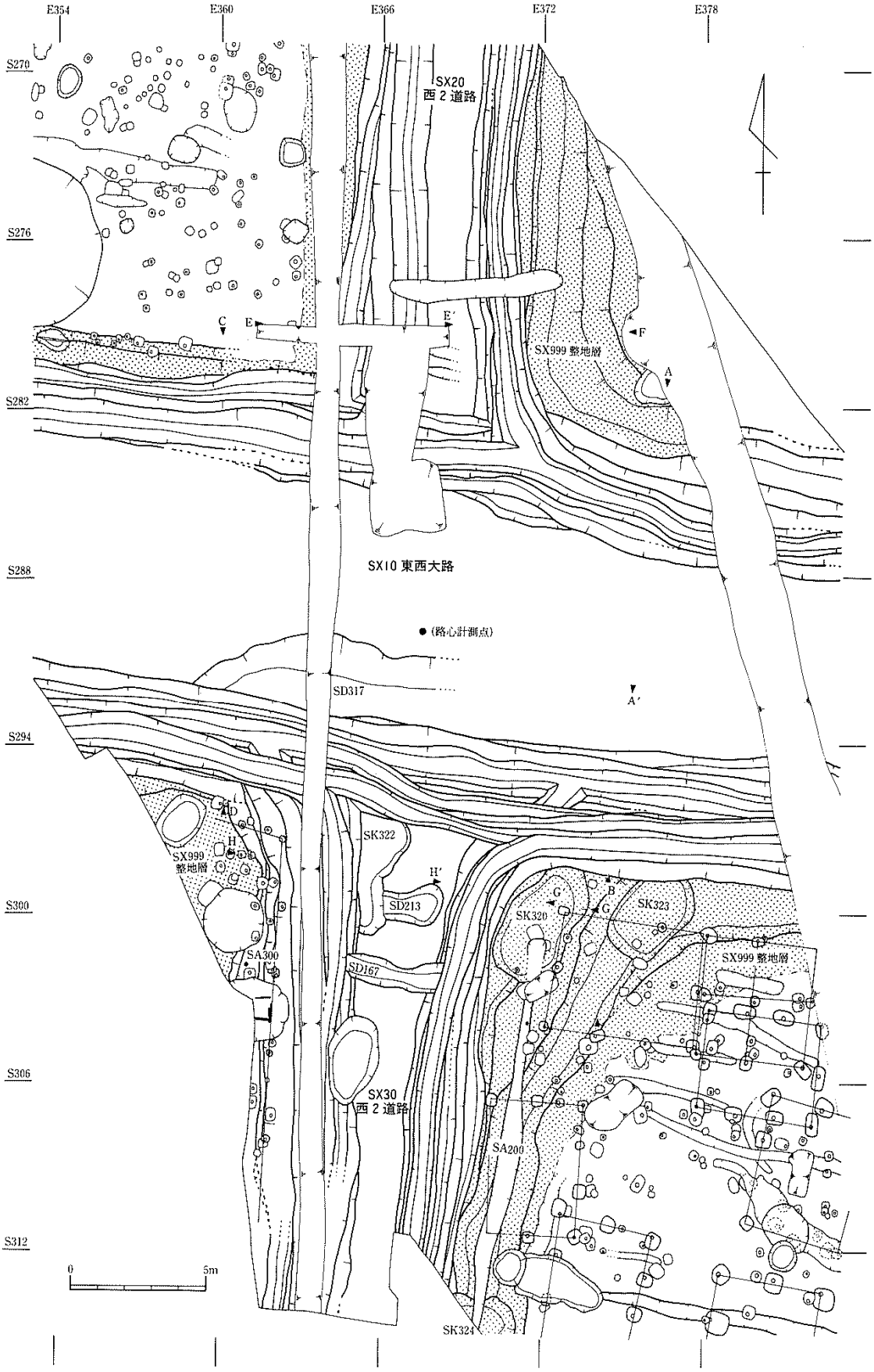
ＳＸ4012･4013 およびＳＸ4014 の各期の側溝と路面の盛土から、土器類や瓦などが出土している。時期によって遺物の出土状況は異なるが、全体的に遺物量は少なく、小破片が多い。

側溝出土の遺物は概して少なく、小破片が多い。比較的まとまって出土したＥ側溝からは、土師器、須恵器、赤焼土器、瓦などが出土している。坏底部の調整は土師器が回転糸切り無調整のもの、須恵器がヘラ切り無調整のものが主体をなしている。路面出土の遺物は、路面 3 層から非ロクロ調整を含む土師器、須恵器、瓦などが比較的まとまって出土している。坏底部の調整は土師器が手持ちヘラ削り調整と回転ヘラ削り調整のもの、須恵器がヘラ切り無調整のものが主体を占める。路面 1・2 層はいずれも遺物量が少ないが、土師器坏は回転糸切り無調整のもの、須恵器坏はヘラ切り無調整のものが主体をなしている。なお、Ｂ・Ｃ側溝や路面 3 層などの古い時期の堆積土からは、人面墨書土器を含む墨書土器や刻印瓦などが出土している。

(2)東西大路・西 2 道路

【ＳＸ10 東西道路跡、ＳＸ20・30 南北道路跡】

調査区北半部のⅣ層およびＳＸ999 整地層上面で検出した（第 24 図）。ＳＤ317 溝跡、ＳＫ410 土壙より



第24図　SX10東西大路、SX20・30西２道路平面図

も新しく、Ⅱ層に覆われる。

ＳX10 東西道路跡は方格道路の基幹をなす東西大路にあたり、ＳX20･30 南北道路跡との交差点を挟んで約 40ｍ検出した。調査区内で最も新しいＩ側溝の心々を結んだ道路の方向は、東で約 8° 南に偏している。

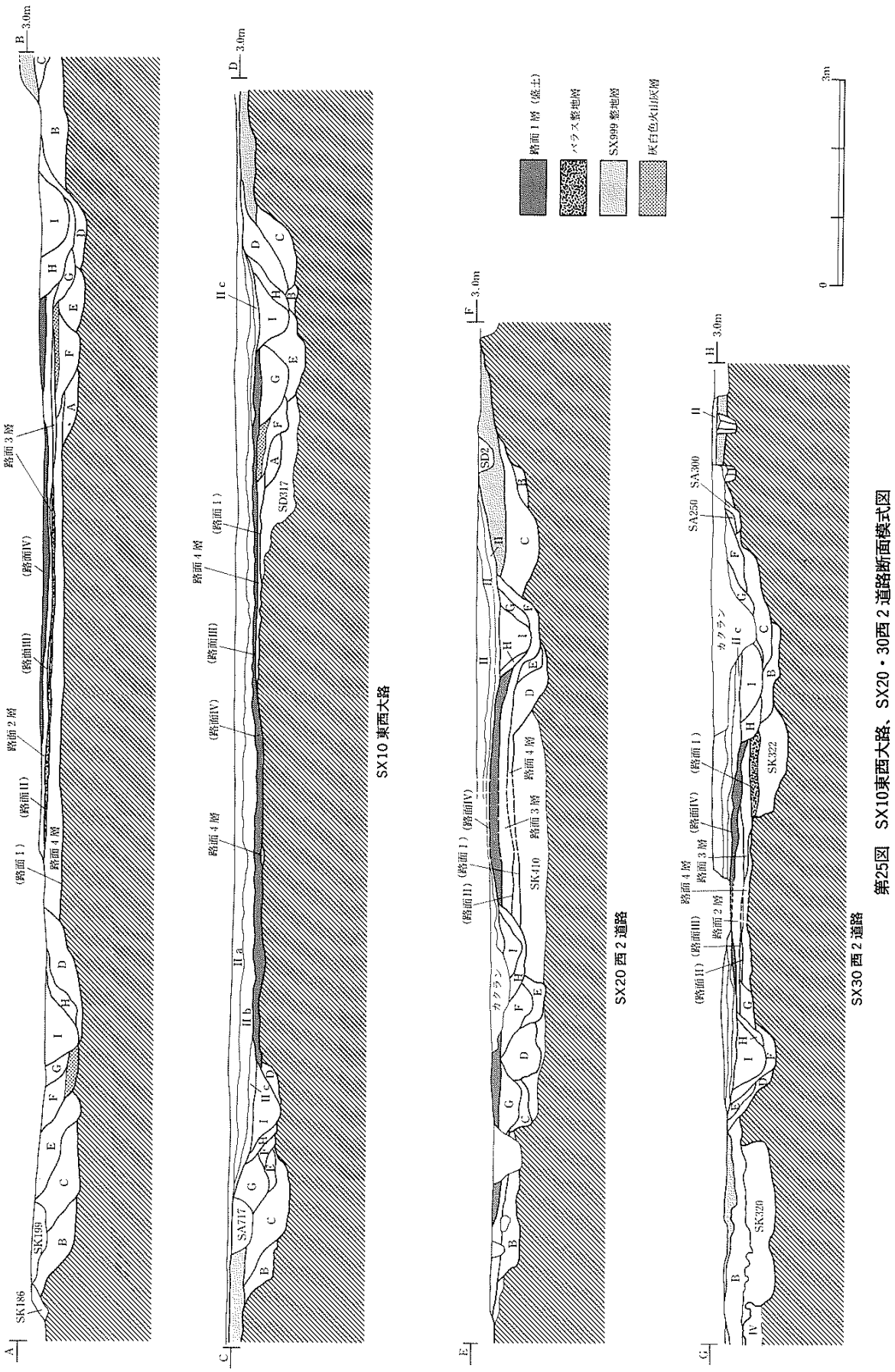
ＳX20･30 南北道路跡は西 2 道路にあたり、交差点を挟んで約 35ｍ検出した。ＳX20･30 とも検出長が短く、しかもＳX10 に対してやや膨らみながら交差しているため、必ずしも正確な値ではないが、Ｉ側溝の心々を結んだ道路の方向はそれぞれ北で約 4° 東に偏している。

両道路とも路面の両端ないし片端に素掘りの側溝を伴っており、ＳX10 でＡ→Ｉの 9 時期、ＳX20･30 でそれぞれＢ→Ｉの 8 時期の重複が認められた。最も古いＡの段階は東西道路のみでこれと交差する南北道路は存在せず、Ｂ以降の段階に東西・南北の十字路交差点を形成している。Ｂ以降の交差にはｃ→ａ①の変遷があり、路面には削り出しと 3 枚の路面堆積層によって、少なくとも路面 0（削平により不明）→路面Ｉ（削り出し）→路面Ⅱ→路面Ⅲ→路面Ⅳの 5 時期の変遷が知られた（第 2 表）。

道路名		時期	交差形状	路幅	路面と路面堆積土	宅地との比高差	側溝の規模 上幅	底幅	深さ	側溝底面の傾斜	備考
東西大路	SX10	A	―	(9)	路面0	?	北 ?	?	0.3	W→E	
							南 (1.4)	0.6	0.3	W→E	
		B	c	(13)			北 ?	?	0.4~0.6	E→W,W→E	北側溝を護岸（打ち込み）
							南 (1)	(0.6)	0.4~0.6	E→W,W→E	
		C		13.3			北 1.6~2.0	0.6~1.0	0.6	E→W,W→E	遺物多い（弘仁11年銘木簡）
					(削 平)		南 1.5	0.7	0.5	E→W,W→E	
		D	a①	11.2	路面Ⅰ	-0.8	北 1.2	0.8	0.3	W→E	宅地内整地（SX999,最大厚0.25m）
					(路4層) 0.2		南 2.2	0.8~1.1	0.5	W→E	南側溝を護岸（打ち込み）
		E	a①	11.8	*(バラス)		北 1.0	0.4	0.5	W→E	北側溝を護岸（打ち込み）
					路面Ⅱ	-0.6	南 1.0	0.5	0.5	W→E	
		F		10.3			北 1.0~1.5	0.5~0.8	0.4	W→E	側溝に灰白色火山灰（ブロック）を含む。
					(路3層) 0.05		南 1.5	0.5	0.4	W→E	南側溝を護岸（打ち込み＋しがらみ）
		G	a①	11.8	路面Ⅲ	-0.5	北 0.8~1.2	0.4	0.3~0.5	W→E	
					(路2層) 0.2		南 0.8~1.1	0.4~0.6	0.4	W→E	
		H	a①	(11)	*(路1層) 0.1		北 (1.2)	(0.4)	0.5	W→E	
					路面Ⅳ	-0.25	南 1.0	0.5	0.5	W→E	
		I		11.5		~0.35	北 1.0~1.5	0.3~0.5	0.5	W→E	
							南 0.8~1.3	0.3~0.5	0.5	W→E	
西2道路	SX20	B	c	(10)	路面0	?	東 ?	?	?	N→S?	
							西 2.4	1.2	0.4	N→S?	
		C		8.2			東 (2.5)	0.6	0.6	N→S	
					(削平→*バラス)		西 1.0	0.5	0.3	N→S	
		D	a①	5.5	路面Ⅰ	-0.7	東 ?	0.5	0.5	N→S	宅地内整地（SX999,最大厚0.25m）
					(路4層) 0.15		西 1.0~1.4	0.6	0.3	N→S	南側溝を護岸（打ち込み）
		E	a①	5.0	路面Ⅱ	-0.5	東 (1)	0.5	0.5	N→S	
							西 0.8	0.5	0.4	N→S	
		F		5.0			東 1.0~1.5	0.6	0.4	N→S	側溝に灰白色火山灰ブロックを含む。
					(路3層) 0.15		西 1.0	0.3	0.3	N→S	
		G	a①	4.5	路面Ⅲ	-0.25	東 (1)	0.4	0.4	N→S	
							西 1.0	0.5	0.3	N→S	
		H	a①	(4.5)	*(路1層) 0.15		東 ?	?	0.6	N→S	
					路面Ⅳ	-0.25	西 1.2	0.4	0.6	N→S	
		I		3.5		~0.35	東 0.9	0.5	0.6	N→S	
							西 1.5	0.3	0.5	N→S	
	SX30	B	c	5.5	路面0	?	東 1.1	0.5	0.4	S→N	東西側溝に枡（SK320・321・322）を伴う
							西 1.2	0.6	0.7	S→N	
		C		8.0			東 2.0	1.0	0.3~0.7	N→S?	東西側溝に枡（SK323・324・325）を伴う
					(削平→*バラス)		西 (2)	0.5	0.3~0.7	S→N	
		D	a①	*6.8≧	路面Ⅰ	-0.7	東 (1.5)	0.6	0.4	S→N	宅地内整地（SX999,最大厚0.25m）
				〈6.0〉	(路4層) 0.15						南側溝を護岸（打ち込み）
		E	a①	*6.9≧	路面Ⅱ	-0.5	東 ?	?	0.2	S→N	
				〈6.3〉							
		F		*7.2			東 (1.2)	0.4	0.5	S→N	
					(路3層) 0.2						
		G	a①	(6)	路面Ⅲ	-0.5	東 ?	?	0.3	S→N	
					(路2層) 0.15		西 ?	?	0.2	S→N	
		H	a①	4.8	*(路1層) 0.15		東 ?	?	0.5	S→N	
					路面Ⅳ	-0.25	西 1.0	0.5	0.4	S→N	
		I		4.5		~0.35	東 1.0	0.5	0.5	S→N	路面排水溝（SD167）と伴う
							西 1.0	0.5	0.5	S→N	

※単位：m、( )：推定値
※路面堆積土の＊印は整地によるもので、数字は層厚を示している。

第 2 表　SX10東西大路、SX20・30西 2 道路一覧表

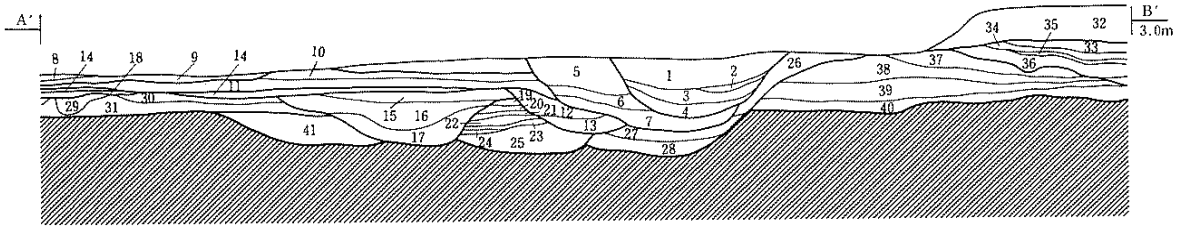


第25図　SX10東西大路、SX20・30西２道路断面模式図

すなわち、交差点全体では“路面 0（側溝Ａ→側溝Ｂ～Ｃ・交差ｃ）→路面Ⅰ（Ｄ・ａ①）→路面Ⅱ（Ｅ～Ｆ・ａ①）→路面Ⅲ（Ｇ・ａ①）→路面Ⅳ（Ｈ～Ｉ・ａ①）”という変遷として捉えることができる（第 25･27 図）。

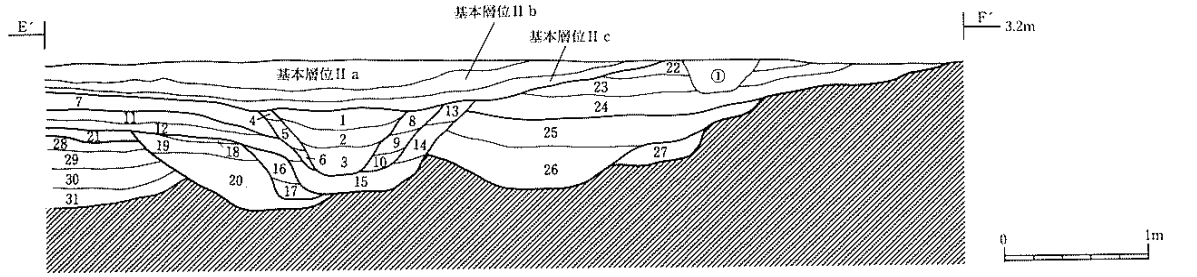
Ａは、ＳＸ10 のみで、これと交差する南北道路は存在しない。路面はＤの削り出し造成によって削平され、また側溝もＢ以降に大きく壊されているため不明な点が多いが、路幅は残存する南北側溝の心々で約 9ｍを測る。

Ｂ～Ｃは、ＳＸ10 とＳＸ20･30 が交差する最も古い段階の道路跡である。路面はＡと同様にＤの路面造成によって削平されているため明らかではないが、両道路の交差は東西･南北の側溝がいずれも「Ｌ」形に接続するｃ型交差をなしており、ＳＸ30 の側溝上には側溝水の浄化のためとみられる枡が構築されている（第 30 図）。また、交差点西側のＳＸ10Ｃ北側溝には径 5㎝前後の杭による打ち込み護岸が認



No	土色	土性	備考		No	土色	土性	備考		No	土色	土性	備考	
1	黒褐 10YR3/1	粘質シルト	Ⅰ側溝		15	黄灰 2.5Y4/1	シルト	Ｆ側溝	灰白ブロック・炭化物多。	29	黄灰 2.5Y4/1	砂質シルト	路４層	地山ブロック多。
2	黄灰 2.5Y5/1	砂			16	黒褐 2.5Y3/1	シルト		地山ブロック多。	30	暗灰黄 2.5Y5/2	砂質シルト		粗砂・スクモの互層
3	黒褐 10YR3/1	粘質シルト			17	黒褐 10YR3/1	粘質シルト		炭化物多。	31	暗灰黄 2.5Y5/2	砂		粗砂･スクモの互層(ラミナ)
4	黒褐 10YR3/1	粘質シルト			18	黄灰 2.5Y4/1	シルト	Ｅ側溝		32	灰黄褐 10YR4/2	砂質シルト	SX999	
5	黒褐 10YR3/1	シルト	Ｈ側溝		19	暗灰黄 2.5Y5/2	砂		粗砂層	33	暗灰黄 2.5Y4/2	砂質シルト	Ｃ側溝	地山砂多。
6	黒褐 10YR3/1	粘質シルト			20	黄灰 2.5Y4/1	シルト			34	暗灰黄 2.5Y5/2	シルト質砂		砂層
7	黒褐 2.5Y3/1	シルト			21	暗灰黄 2.5Y5/2	砂		粗砂層	35	黒褐 2.5Y3/1	シルト		
8	黒褐 10YR3/1	シルト	路１層	炭化物・焼土多。	22	黄灰 2.5Y4/1	シルト			36	黄灰 2.5Y4/1	シルト		
9	黒褐 2.5Y3/1	砂質シルト		細砂・土器細片多。	23	黄灰 2.5Y4/1	シルト			37	にぶい黄 2.5Y6/3	シルト質砂	Ｂ側溝	地山砂ブロック多。
10	暗灰黄 2.5Y5/2	砂質シルト	路２層	細砂・土器細片多。	24	黒褐 10YR3/1	粘質シルト			38	暗灰黄 2.5Y4/2	砂質シルト		
11	黄灰 2.5Y4/1	シルト		炭化物・焼土多。	25	黒褐 2.5Y3/1	シルト	パラス	炭化物・焼土多。	39	オリーブ褐 2.5Y4/3	砂質シルト	SK323	地山砂ブロック多。
12	黒褐 2.5Y3/1	シルト	Ｇ側溝		26	黄灰 2.5Y4/1	シルト	Ｄ側溝	地山ブロック多。	40	暗灰黄 2.5Y4/2	砂質シルト		粗砂ブロック多。
13	黒褐 2.5Y3/1	シルト			27	黒褐 2.5Y3/1	シルト		炭化物多。	41	黄褐 2.5Y5/3	砂	Ａ側溝	
14	暗灰黄 2.5Y5/2	砂質シルト	路３層	細砂・土器細片多。	28	黒褐 2.5Y3/1	シルト		地山ブロック多。					

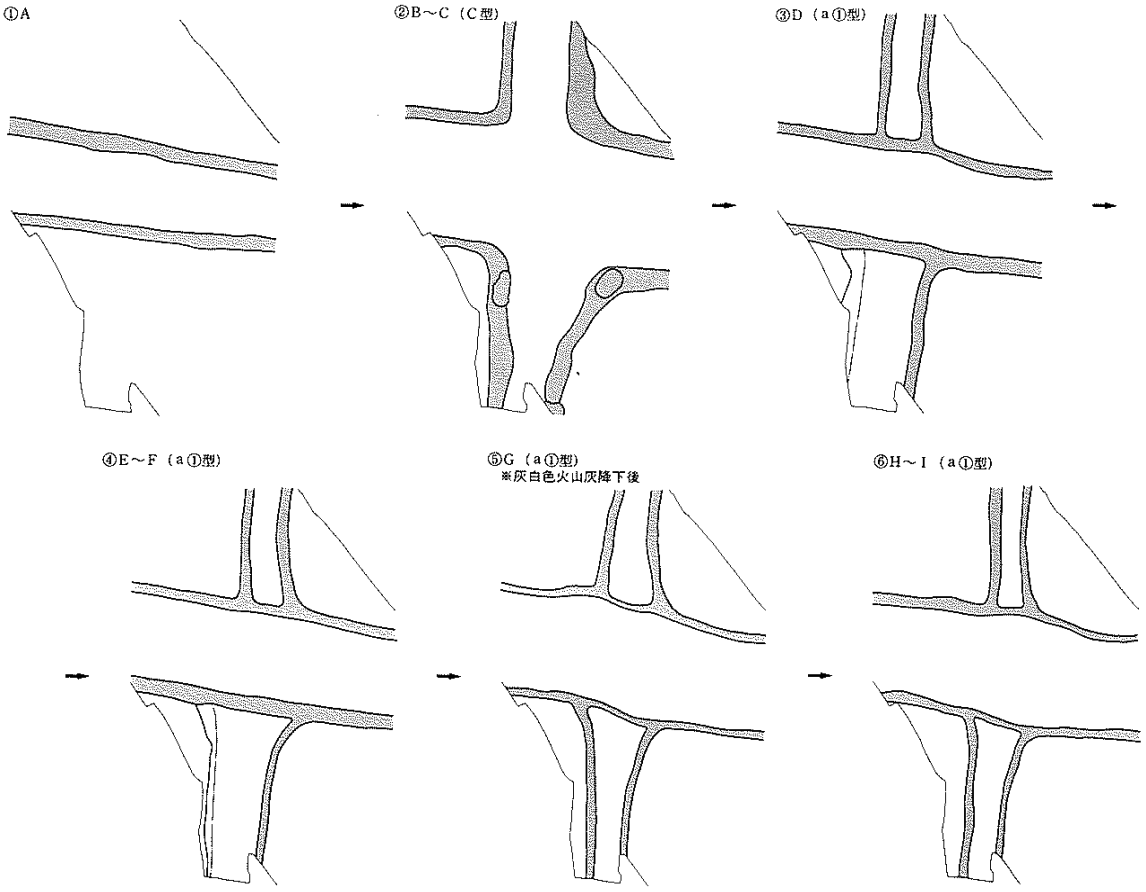
SX10 東西大路南側溝



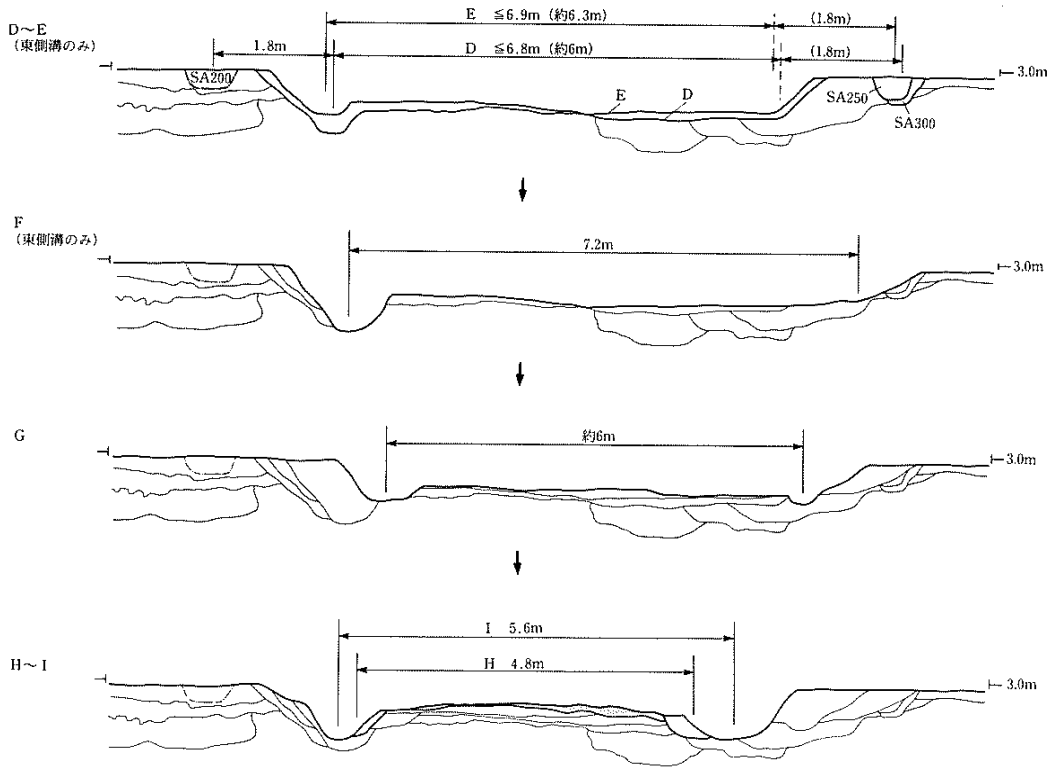
No	土色	土性	備考		No	土色	土性	備考		No	土色	土性	備考	
1	黒褐 10YR3/1	シルト	Ⅰ側溝		12	黄灰 2.5Y4/1	シルト	路３層	細砂・炭化物多。	23	褐灰 10YR4/1	シルト	SX999	地山砂・炭化物多。
2	黒褐 10YR3/1	シルト			13	黒褐 10YR3/1	シルト	Ｆ側溝		24	黄灰 2.5Y4/1	シルト		
3	黒 10YR2/1	粘質シルト			14	黒褐 10YR3/1	シルト		細砂多。	25	褐灰 10YR4/1	シルト	Ｃ側溝	
4	黒褐 10YR3/1	シルト	Ｈ側溝		15	黒 10YR2/1	シルト		地山ブロック多。	26	褐灰 10YR4/1	シルト		地山砂多。
5	黒褐 10YR3/1	シルト			16	黒褐 10YR3/1	シルト	Ｅ側溝		27	黒褐 2.5Y3/1	砂質シルト	Ｂ側溝	地山ブロック多。
6	黒 10YR2/1	粘質シルト			17	黄灰 2.5Y4/1	シルト			28	黒褐 2.5Y3/1	シルト	SK410	灰白粒極少含。
7	黒褐 10YR3/1	シルト	路１層	炭化物・土器細片多。	18	褐灰 10YR4/1	シルト	Ｄ側溝		29	黒褐 10YR3/1	シルト		
8	黒褐 10YR3/1	シルト	Ｇ側溝		19	黒褐 2.5Y3/1	シルト			30	黒 10YR2/1	粘質シルト		
9	黒褐 10YR3/1	シルト		細砂ブロック含。	20	黒褐 10YR3/1	粘質シルト		地山ブロック含。	31	黒 10YR2/1	粘質シルト		地山ブロック含。
10	黒 10YR2/1	シルト		細砂多。	21	黄灰 2.5Y4/1	シルト	路４層	細砂ブロック含。	①	黒褐 10YR3/1	シルト	SD2	
11	黒褐 2.5Y3/1	シルト	路３層	炭化物・土器細片多。	22	褐灰 10YR4/1	シルト	SX999	地山砂ブロック多。					

SX20 西２道路東側溝

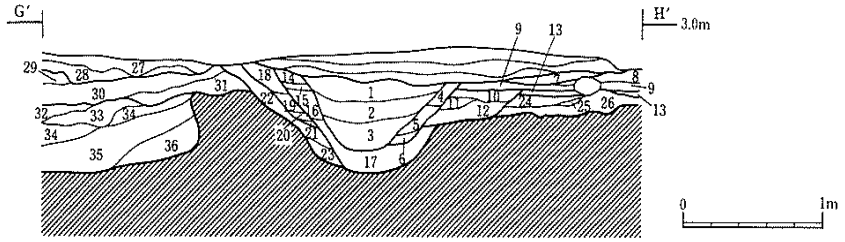
第26図　SX10東西大路、SX20西２道路断面図



第27図　SX10東西大路、SX20・30西２道路変遷図



第28図　SX30西２道路変遷図



No	土色	土性	備考		No	土色	土性	備考		No	土色	土性	備考	
1	黒褐 10YR3/1	シルト	Ⅰ側溝	細砂ブロック多。	13	黒褐 10YR3/1	シルト	路２層		25	黄灰 2.5Y4/1	シルト	路３層	
2	黒褐 10YR3/1	シルト			14	黒褐 10YR3/1	シルト	F側溝	細砂ブロック多。	26	黄灰 2.5Y4/1	シルト		地山ブロック多。
3	黒褐 2.5Y3/1	粘質シルト			15	黒褐 2.5Y3/1	シルト			27	灰黄褐 10YR4/2	シルト質砂	C側溝	地山砂ブロック多。
4	黒褐 10YR3/1	シルト	H側溝	細砂ブロック多。	16	黒褐 10YR3/1	シルト			28	黄灰 2.5Y4/1	シルト		
5	黒褐 10YR3/1	シルト			17	黒褐 2.5Y3/1	粘質シルト			29	にぶい黄 2.5Y6/3	シルト質砂	B側溝	地山砂ブロック多。
6	黒褐 10YR3/1	シルト			18	黒褐 10YR3/1	シルト	E側溝	細砂多。	30	暗灰黄 2.5Y4/2	砂質シルト		
7	黒褐 10YR3/1	シルト	路１層	細砂・土器細片多。	19	黒褐 10YR3/1	シルト			31	オリーブ褐 2.5Y4/3	砂質シルト		地山砂ブロック＋細砂。
8	黄灰 2.5Y4/1	砂質シルト		粗砂層	20	黄灰 2.5Y4/1	砂質シルト		細砂多。	32	灰 5Y4/1	砂質シルト	SK320	細砂のブロック多。
9	褐灰 10YR4/1	砂質シルト		炭化物・焼土多。	21	黒褐 10YR3/1	シルト			33	暗灰黄 2.5Y5/2	砂質シルト		粗砂層（ラミナ）
10	黒褐 10YR3/1	シルト	G側溝	細砂ブロック多。	22	黄灰 2.5Y4/1	シルト	D側溝		34	黄灰 2.4Y4/1	砂質シルト		砂・スクモ多。
11	黒褐 10YR3/1	シルト			23	黒褐 2.5Y3/1	シルト			35	灰 7.5Y4/1	砂		細砂＋粗砂層（ラミナ）
12	黒褐 2.5Y3/1	シルト		炭化物多。	24	黒褐 2.5Y3/1	シルト	路３層		36	灰 5Y4/1	砂		スクモ＋細砂層（ラミナ）

第29図　SX30西２道路東側溝断面図

められた。路幅は側溝心々でＳX10が約13m、ＳX20がＢ約10m→Ｃ8.2m、ＳX30が5.5m→8.0mを測る。なお、Ｃ側溝には粗砂を多く含む自然堆積層が厚く堆積し、層中からはきわめて多量の遺物が出土している。

Ｄは、Ｃ以前の路面を低く削り出し、造成した道路跡である。両道路の交差は、ＳX10の南北側溝がＳX20･30の路面を貫いて「Ｔ」形に接続するａ①型交差をなしている。ＳK410土壙やＳK323枡跡などの古い遺構と重複する地盤の軟弱な部分には須恵器甕や瓦などの比較的大きな破片を用いた部分的な舗装（バラス整地）が認められ、またＳX10D南側溝には内肩の下場に沿って、径5cm前後の杭による打ち込み護岸が認められた。路面上には、自然堆積土（路面４層）が15～20cm程の厚さで残存し、とくにＳX20･30には細砂および粗砂の堆積が顕著に認められる。路幅は側溝心々でＳX10が11.2m、ＳX20が5.5mを測る。ＳX30の路幅については東側溝のみ構築され、道路西端がＦ以降の造成および側溝等に壊されているため明らかではないが、路面のレベルからみて少なくともＳX30G西側溝より西には広がらないと考えられる。したがって、路幅は最大でも東側溝心とＧ期西側溝心間の6.8mであり、ＳX30D東側溝心および道路西端と後述するＳA200・300材木塀跡との間隔がそれぞれ1.8mで等距離にあったとみれば、約6mの路幅が想定される（第28図）。なお、Ｄの路面造成にあたっては、Ｃ側溝埋没後の上面を中心に、区画（宅地）内部に黄灰～灰黄褐色砂質土を用いた盛土整地（ＳX999）を施している。この区画内整地と路面造成とによって、路面（路面Ⅰ）と区画内部との間には構築時で70～80cm程の比高差が認められる。

Ｅ～Ｆは、路面４層上面（路面Ⅱ）で検出した道路跡である。ＳX10の路面上には須恵器甕や瓦などの破片を用いた部分的な舗装（バラス整地）が認められ、またＳX10Ｅ北側溝～ＳX20Ｅ西側溝およびＳX10Ｆ南側溝の内肩部分には径5cm前後の杭による打ち込み護岸が認められた。とくに後者は、0.3～0.5m間隔で打ち込まれた杭の間を、径2cm程の細い多数の樹枝でサンドイッチ状に挟み込んだしがらみ（ＳA309、図版８下）を伴っており、ＳX30との交差点を中心に約8.5mにわたって検出した。

路幅は側溝心々でＳX10がＥ11.8m→Ｆ10.3m、ＳX20がＥ・Ｆとも 5.0mを測り、ＳX30Ｆが東側溝心と路面西端間の距離で7.2m程である。ＳX30Ｅについては、道路西端がＦ以降の造成および側溝等に壊されているため明らかではないが、路面のレベルからみて少なくともＳX30G西側溝より西には広がらないと考えられる。したがって、路幅は最大で東側溝心とＧ西側溝心間の 6.9mであり、Ｄと同様に路面西端と同時期の材木塀（ＳA250）との間隔が 1.8mと仮定すれば約6.3mの路幅が想定される（第28図）。なお、Ｆ側溝にはいずれも灰白色火山灰ブロックが堆積し、側溝および路面上にはこれらを覆って土器細片を多く含む細砂および黒褐色土からなる自然堆積土（路面３層）が 5～20cm 程の厚さで認められた。

Ｇは、路面３層上面（路面Ⅲ）に構築した道路跡で、路幅は側溝心々でＳX10Gが 11.8m、ＳX20Gが 4.5m、ＳX30Gが約 6mを測る。側溝および路面上には、これらを覆って土器細片を多く含む細砂（路面２層）の堆積が 15～20cm 程の厚さで認められた。

Ｈ～Ｉは、路面Ⅲおよび路面２層上面に盛土整地（路面１層）を施し、構築した道路跡である（路面Ⅳ）。盛土は焼土および炭化物を含むしまりのある黒褐色土を用いて行っており、10～20cm 程の厚さが残存する。路幅は側溝心々でＳX10がＨ約11m→Ｉ11.5m、ＳX20が約4.5m→3.5m、ＳX30が4.8→4.5mを測る。

【ＳK320 枡跡】（第24･30 図）

ＳX10Ｂ南側溝とＳX30Ｂ東側溝とのコーナー部分に掘り込まれた枡跡である。長径 4.5m、短径 2.5mの長楕円形をなし、側溝底面からの深さは 0.45mである。部分的にではあるが、下場に沿って径 5cm 前後の杭による打ち込み護岸が認められる。堆積土は粗砂、細砂、スクモが互層をなす水成堆積層で、部分的にスクモをブロック状に含んでいる。全体的に巻き上げたような堆積状況にあり、比較的短期間に埋没したものとみられる。ただし、これに取り付く側溝はＳK320 の埋没後もしばらくの間機能している。

【ＳK321 枡跡】

ＳX30Ｂ東側溝上に掘り込まれた枡跡である。長径 3.7m、短径 2.6mの長楕円形をなし、側溝底面からの深さは 0.3mである。南から北へ向かって排水される水が路面および区画内に溢れることを防ぐ機能を果たしたものと思われる。ＳK320 と同様の堆積状況を示している。

【ＳK322 枡跡】（第24･30 図）

ＳX10Ｂ南側溝とＳX30Ｂ西側溝とのコーナー部分に掘り込まれた枡跡である。長径 4.5m、短径 2.5mの南北に長い不整形をなし、側溝底面からの深さは 0.3mである。堆積土はスクモおよび黒褐色粘質土からなっており、埋没後はＳX30D路面堆積土（路面３層）に覆われる。

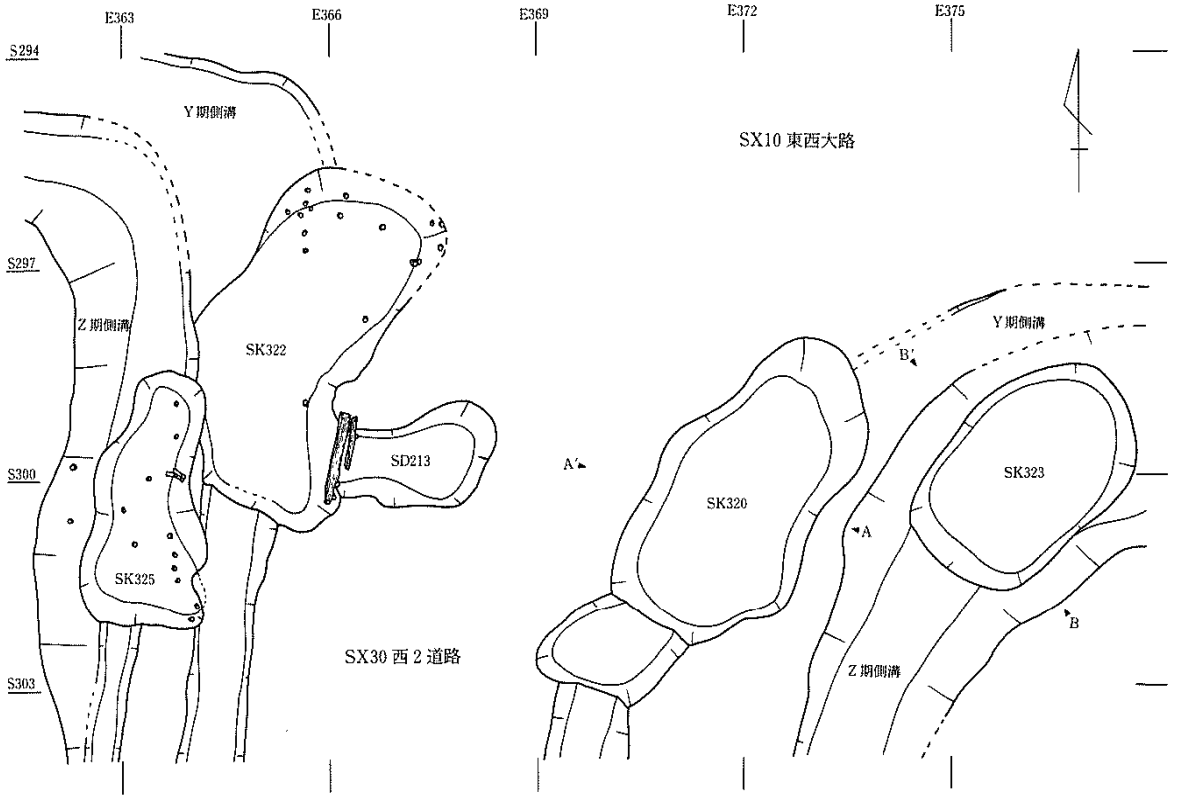
【ＳD213 溝跡】（第24･30 図）

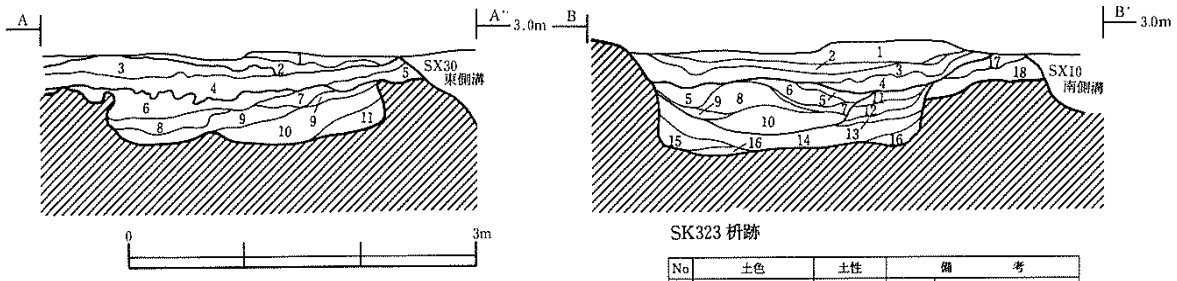
ＳX30Ｂの路面上に掘り込まれた溝跡で、ＳK322 にほぼ直交して接続している。上幅 1.0m、下幅 0.6m、路面からの深さは 0.4m程で、底面はＳK322 に向かって傾斜している。ＳK322 との境界付近には長さ 1.3m、幅 0.15m、厚さ 0.15m程の角材を横に重ねて渡し、径 5cm 前後の杭数本でＳD213 側から保持した仕切りを設けている。ＳK322 との水位調節の機能を果たしていたものとみられる。堆積土お

よび堆積状況はＳK322と同様であるが、ＳD213はＳK322よりも先に埋没している。

【ＳK323枡跡】（第24･30図）

ＳX10C南側溝とＳX30C東側溝とのコーナー部分に掘り込まれた枡跡である。長径3.5m、短径2.5mの長楕円形をなし、側溝底面からの深さは0.6mである。堆積土は灰黄色粗砂、灰色細砂、スクモが互





SK320 枡跡

No	土色	土性	備考	
1	灰黄褐 10YR4/2	シルト質砂	C側溝	粗砂ブロック多。
2	黄灰 2.5Y4/1	シルト		
3	にぶい黄 2.5Y6/3	シルト質砂	B側溝	地山砂ブロック多。
4	暗灰黄 2.5Y4/2	砂質シルト		
5	オリーブ褐 2.5Y4/3	砂質シルト		地山砂ブロック＋細砂。
6	灰 5Y4/1	砂質シルト	SK320	地山砂・細砂ブロック多。
7	暗灰黄 2.5Y5/2	砂質シルト		粗砂層（ラミナ顕著）
8	暗オリーブ灰 2.5GY4/1	砂質シルト		粗砂・スクモのブロック多。
9	黄灰 2.4Y4/1	砂質シルト		砂・スクモ多。
10	灰 7.5Y4/1	砂		細砂・粗砂の互層（ラミナ）
11	灰 5Y4/1	砂		スクモ混じりの細砂層（ラミナ）

SK323 枡跡

No	土色	土性	備考	
1	暗灰黄 2.5Y4/2	砂質シルト	C側溝	地山砂多。
2	黒褐 2.5Y3/1	シルト		
3	暗灰黄 2.5Y5/2	シルト質砂		砂層
4	黄灰 2.5Y4/1	シルト		
5	黒褐 2.5Y3/2	シルト	SK323	地山砂ブロック含。
6	暗灰黄 2.5Y5/2	砂質シルト		砂・スクモの互層（ラミナ）
7	灰 5Y4/1	砂質シルト		細砂・スクモの互層（ラミナ）
8	暗黄灰 2.5Y4/2	砂質シルト		砂・スクモの互層（ラミナ）
9	黒褐 2.5Y3/1	粘質シルト		スクモ多。
10	黄灰 2.5Y4/1	砂		粗砂層（ラミナ）
11	黒褐 2.5Y3/2	シルト		
12	黄灰 2.5Y4/1	砂質シルト		砂・スクモの互層
13	黒褐 2.5Y3/1	粘質シルト		スクモ。植物遺体多。
14	黒褐 2.5Y3/1	粘質シルト		スクモ・粗砂の互層（ラミナ）
15	オリーブ灰 5GY5/1	砂		細砂層（ラミナ）
16	黒褐 2.5Y3/1	砂質シルト		スクモ混じりの細砂層
17	にぶい黄 2.5Y6/3	シルト質砂	B側溝	地山砂ブロック多。
18	暗灰黄 2.5Y4/2	砂質シルト		

第30図　SX10・30B・C側溝と枡跡、SK320・323枡跡断面図

層をなす水成堆積層で、とくに上部は細砂と粗砂が厚く、ラミナが顕著に認められる。洪水等により、大量の土砂が短期間に流入したものと推測される。ただし、これに取り付く側溝はＳＫ323 の埋没後もしばらくの間機能している。

【ＳＫ324 枡跡】（第24図）

ＳＸ30Ｃ東側溝上に掘り込まれた枡跡である。調査区の南端で一部を検出したに留まるため規模等は不明であるが、側溝底面からの深さは 0.3ｍである。南から北へ向かって排水される水が路面および区画内に溢れることを防ぐ機能を果たしたものと思われる。堆積土は粗砂、細砂、スクモが互層をなす水成堆積層で、部分的にスクモをブロック状に含んでいる。

【ＳＫ325 枡跡】（第30図）

ＳＸ10Ｃ南側溝とＳＸ30Ｃ西側溝とのコーナー部分に掘り込まれた枡跡である。長径 3.6ｍ、短径 1.8ｍの不整形をなし、側溝底面からの深さは 0.5ｍである。長軸の下場に沿って径 5㎝ 前後の杭による打ち込み護岸が認められる。堆積土はスクモおよび黒褐色粘質土と粗砂の水成堆積層からなる。

【ＳＸ999 整地層】（第24図）

ＳＸ10･20･30Ｃ側溝埋没後の上面を中心に区画（宅地）内に施した整地である。整地層は地山土に近似した黄灰～灰黄褐色砂質土からなり、層厚は側溝上面で最も厚く約 40㎝ 程残存する。

なお、ＳＸ999 はＳＸ10・20・30Ｄの路面造成がＣ以前の路面を低く削り出したものであることや、ＳＸ10･20･30Ｄ側溝がＳＸ999 上面で検出されていることからみて、路面の土を利用して行われたものと考えられる。

【ＳＤ167 路面排水溝跡】（第24図）

ＳＸ30I の路面を東西に貫く溝跡で、路面排水溝とみられる。規模は上幅 1.0ｍ、下幅 0.5ｍ、深さ 0.15ｍである。

〈東西大路・西 2 道路出土遺物〉

ＳＸ10 およびＳＸ20･30 の各期の側溝と路面堆積土から、土器類、瓦、木製品、鉄製品、土製品、石製品、骨角製品、動物遺体などの遺物が多量に出土している。

Ａは遺物量がきわめて少なく、しかも小破片である。特徴のわかるものとしては、非ロクロ調整の土師器坏、手持ちヘラ削り調整の須恵器坏の破片がそれぞれ 1 点出土している。

Ｂも同様の出土状況にあるが、土師器、須恵器、製塩土器、瓦などが出土している。坏底部の調整は土師器が回転糸切り無調整のもの、須恵器がヘラ切り無調整と手持ちヘラ削り調整のものが目立つ。

ＣはおもにＳＸ10Ｚ北側溝およびＳＸ20Ｚ東西側溝から、土師器、須恵器、灰釉陶器をはじめ、瓦、木製品、鉄製品、土製品、石製品、動物遺体などの多量の遺物が出土している。土器類は概して残存状況が良好で、土師器には坏、高台坏、甕、鉢、須恵器には坏、高台坏、壷、甕、蓋、灰釉陶器には椀、皿、瓶などがある。坏では須恵器の占める割合が圧倒的に高い。坏底部の調整は土師器が手持ちヘラ削り調整と回転糸切り無調整のもの、須恵器がヘラ切り無調整のものが主体を占める。また、これらの中には文字や人面が墨書されたものが多くみられる。文字資料としては「弘仁 11 年」（820 年）銘の荷札木簡が出土している。

Ｄの遺物は側溝および路面４層から出土している。土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、瓦などがある。坏底部の調整は土師器が回転糸切り無調整と手持ちヘラ削り調整のもの、須恵器がヘラ切り無調整のものが主体を占める。墨書土器も目立つ。

Ｅの遺物はおもに側溝から出土しており、土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、瓦などがある。土師器坏底部の調整は回転糸切り無調整と手持ちヘラ削り調整のもの主体をなすものの、回転ヘラ削り調整のものも目立つ。須恵器はヘラ切り無調整のものが大半を占める。これらの中には文字や人面が墨書されたものも多くみられる。また、路面整地にバラスとして用いられた須恵器甕、瓦などの比較的大形の破片も出土している。

Ｆの遺物は側溝および路面３層から出土している。土師器、須恵器、赤焼土器、灰釉陶器、緑釉陶器、製塩土器、瓦などの遺物が多量に出土している。坏では土師器の占める割合が高くなっている。坏底部の調整は土師器が回転糸切り無調整のもの、須恵器がヘラ切り無調整と回転糸切り無調整のものが主体を占める。文字や人面などの墨書土器も比較的多くみられる。また、ほとんどが破片資料であるが、製塩土器が多く出土している。

Ｇの遺物は側溝および路面２層から出土している。土師器、須恵器、赤焼土器、灰釉陶器、緑釉陶器、製塩土器、瓦などがある。坏底部の調整は土師器が回転糸切り無調整のもの、須恵器がヘラ切り無調整と回転糸切り無調整のものが主体を占める。これらのなかには文字や習書などの墨書土器もみられる。

Ｈ・Ｉの遺物は各側溝および路面１層から出土している。土師器、須恵器、赤焼土器、灰釉陶器、緑釉陶器、製塩土器、瓦などがあり、とくにＦ期のＳＸ10 北側溝およびＳＸ20 東西側溝から多量に出土している。坏では土師器が大半を占めているが、赤焼土器も定量出土している。坏底部の調整は土師器が回転糸切り無調整のもの、須恵器がヘラ切り無調整と回転糸切り無調整のものが主体を占める。ほとんどが破片資料であるが、製塩土器も目立つ。

(3)南１・西１道路

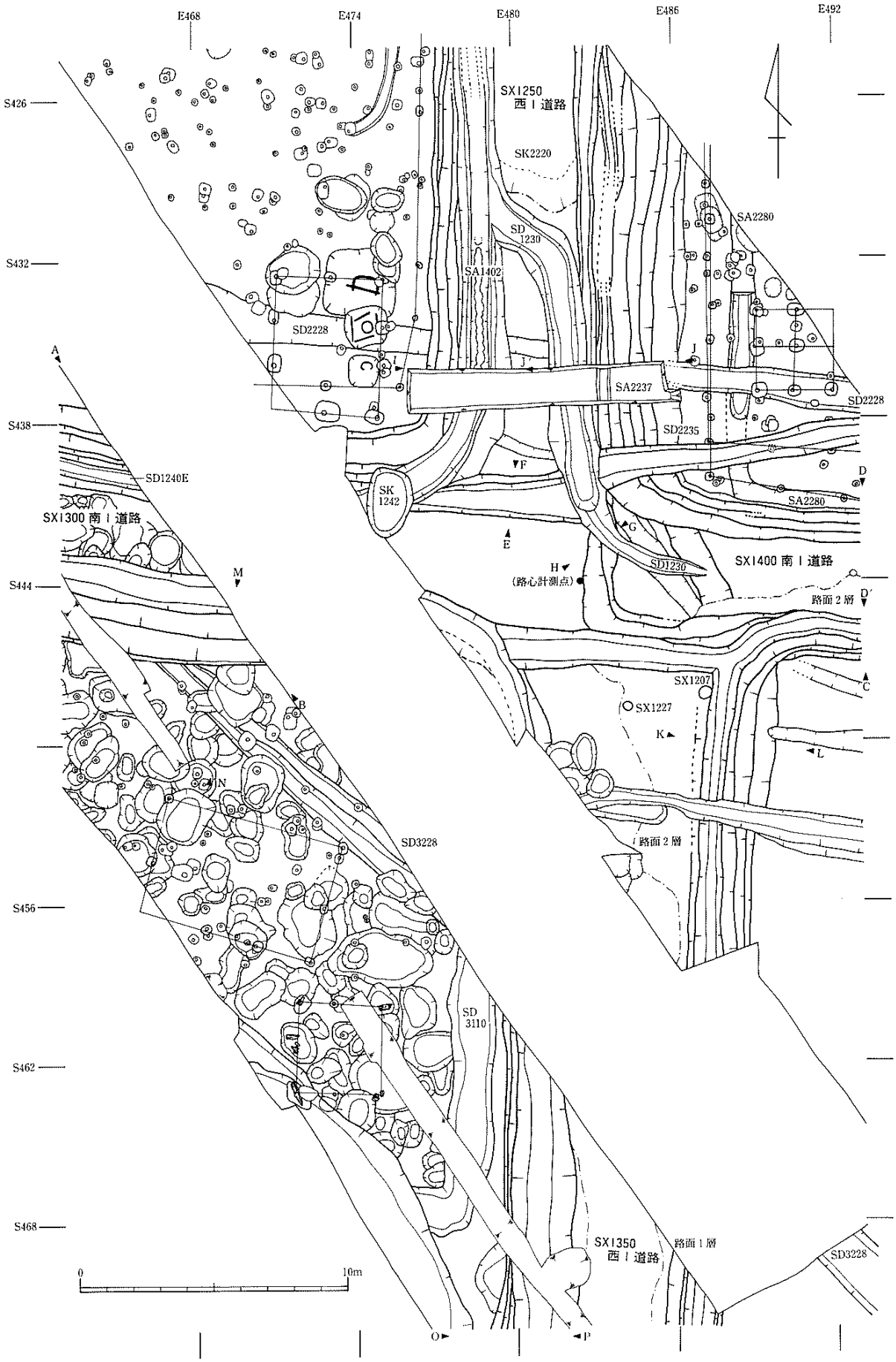
【ＳＸ1400・1300 東西道路跡、ＳＸ1250・1350 南北道路跡】

調査区中央部のⅣ層上面で検出した。ＳＡ2237・2280 材木塀跡、ＳＤ2236・2235・2228 溝跡よりも新しく、ＳＡ1402 材木塀跡、ＳＤ1240・1230・2208 溝跡などよりも古い(第31図)。

ＳＸ1400･1300 東西道路跡は、多賀城外の方格道路の南１道路にあたり、ＳＸ1250・1350 南北道路跡との交差点の東側(ＳＸ1400)で約 15ｍ、西側(ＳＸ1300)で未精査部分を挟み約 27ｍ検出した。調査区内でＳＸ1300 の最も新しいＦ期の側溝心々を結んだ道路の方向は、東で約８°南に偏している。

ＳＸ1250･1350 南北道路跡は西１道路にあたり、交差点の北側(ＳＸ1250)で約 24ｍ、南側(ＳＸ1350)で未精査部分を挟み約 34ｍ検出した。調査区内で側溝心および側溝心々を結んだ道路の方向は、ＳＸ1250 が北で１～２°東に偏し、ＳＸ1350 が北で約２°東に偏している。

両道路とも路面の両端には素掘りの側溝を伴い、それぞれＡ→Ｆの６時期の重複が認められたが、ＳＸ1250 に対してＳＸ1350 が道路半分程東にずれた、筋違いの変則的な十字路交差点を形成している。



第31図　SX1300・1400南1道路、SX1250・1350西1道路平面図

交差の形状にはｃ→ｂ②→ｄ→ａ①の４時期の変遷があり、路面には３枚の路面堆積層によって、少なくとも路面Ⅰ→路面Ⅱ→路面Ⅲ→路面Ⅳの４時期の変遷が知られた(第３表)。すなわち、交差点全体では“路面Ⅰ（側溝Ａ～Ｂ・交差ｃ）→路面Ⅱ（Ｃ・ｂ②）→路面Ⅲ（Ｄ・ｂ③）→路面Ⅳ（Ｅ～Ｆ・ａ①）”という変遷として捉えることができる(第32･33図)。

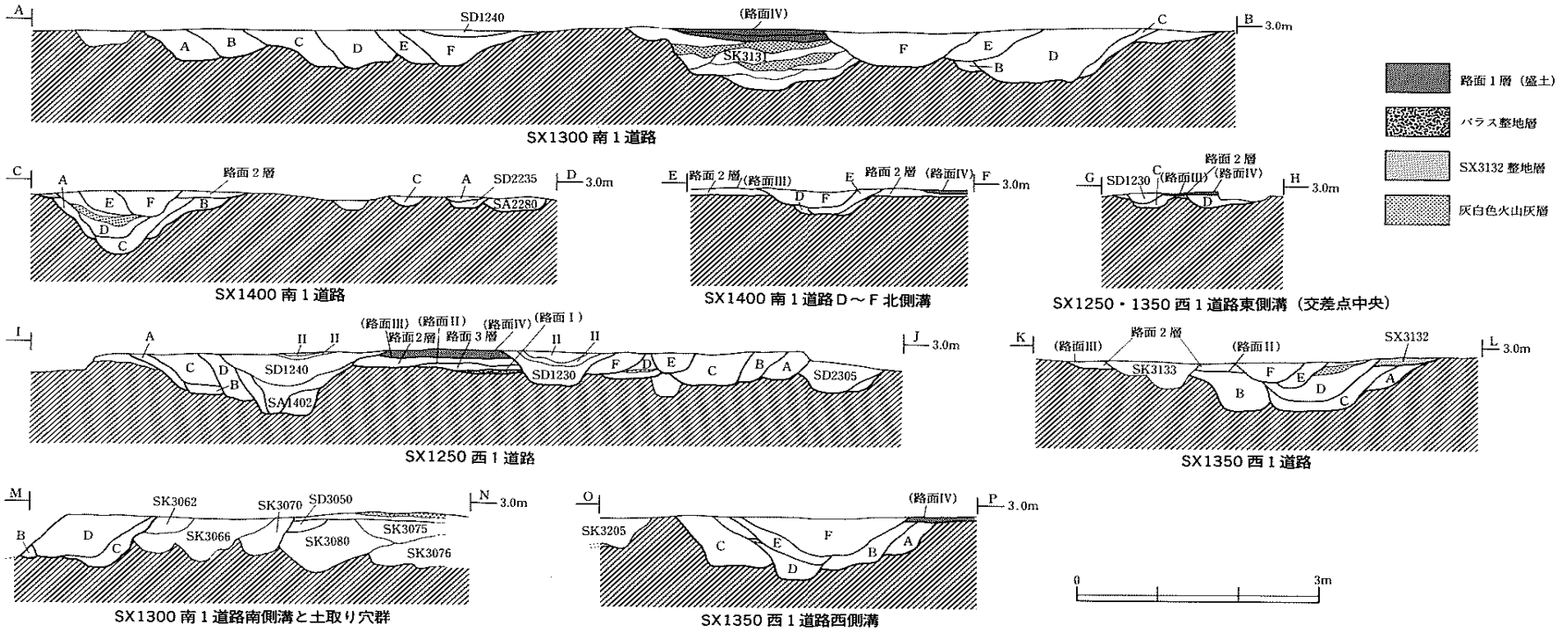
Ａ～Ｂは、Ⅳ層上面(路面Ⅰ)で検出した道路跡である。ＳK2220 土壙などの古い遺構と重複する交差点付近の地盤の軟弱な部分では、須恵器甕や瓦などを含む黒褐色砂質土による部分的な舗装（バラス整地）が認められた。路幅は側溝心々でＳX1300がＢ約6.5m、ＳX1400がＡ4.5m→Ｂ約4m、ＳX1250が約7m→約6.5m、ＳX1350がいずれも約6mを測る。交差点付近を中心にして路面上には、暗灰黄色砂質土および黄灰色細砂からなる自然堆積土(路面３層)が5～10cm程の厚さで認められた。

Ｃは､路面 3 層上面(路面Ⅱ)で検出した道路跡で､路幅は側溝心々でＳX1300Ｃが約 6.5m､ＳX1400Ｃが3.3m､ＳX1250Ｃが約6.5m､ＳX1350Ｃが約7mを測る｡側溝および交差点付近の路面上には､これらを覆って炭化物を含むしまりのある黒褐色土および灰黄褐色砂質土(路面２層)が 10cm 程の厚さで認められた。

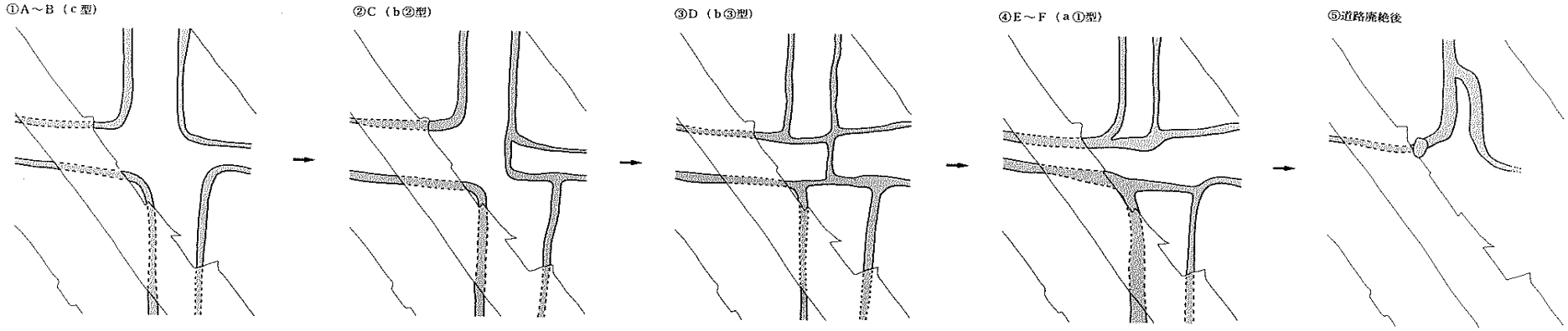
道路名		時期	交差形状	路幅	路面と路面堆積土	宅地との比高差	側溝の規模	上幅	底幅	深さ	側溝底面の傾斜	備考
南1道路	SX1300	A	c	?	路面Ⅰ～Ⅲ	?	北	(1.2)	0.6	0.6	E→W	
							南	?	?	?	?	
		B		(6.5)			北	(1)	(0.5)	0.4	?	
							南	?	?	0.6	E→W	
		C	b②	(6.5)			北	(1.4)	0.7	0.7	E→W	
							南	?	?	0.8	E→W	
		D	b③	(4.5)			北	1.4	0.6	0.7	E→W	側溝に灰白色火山灰粒を含む。
							南	1.8	0.7	0.7	E→W	
		E	a①	(5)	＊（路1層） 0.15		北	(1)	0.3	0.5	E→W	土取り穴（SK3131）→バラス整地
					路面Ⅳ	0	南	(1)	(0.3)	0.5	E→W	
		F		4.0			北	1.2	0.6	0.5	E→W	
							南	1.5	0.8	0.5	E→W	
	SX1400	A	c	4.5	（バラス） 0.05		北	0.5	0.3	0.2	?	
					路面Ⅰ	?	南	?	?	0.6	?	
		B		(4)			北	?	?	?	?	
					（路3層） 0.1		南	?	?	0.6	?	
		C	b②	3.3	路面Ⅱ	-0.1	北	0.4	0.2	0.2	?	宅地内整地（SX3132,最大厚0.1m）
					（路2層） 0.1		南	(1.5)	0.4	0.7	?	
		D	b③	5.5	路面Ⅲ	0	北	1.0	0.7	0.3	?	側溝に灰白色火山灰（ブロック）を含む。
				～8.5			南	1.2	0.4	0.7	E→W？	D～F北側溝のみ、北に反れる
		E	a①	5.5	＊（路1層） 0.15		北	1.0	0.4	0.3	?	
				～8.5	路面Ⅳ	0	南	(1)	(0.6)	0.4	E→W？	
		F		5.5			北	1.2	0.8	0.3	?	
				～7.5			南	0.8	0.4	0.4	E→W？	
西1道路	SX1250	A	c	(7)	＊（バラス） 0.05		東	(0.8)	0.3	0.2	N→S？	土取り穴（SK2020）→バラス整地
					路面Ⅰ	-0.2	西	(0.6)	0.3	0.3	N→S	
		B		(6.5)		～0.3	東	(0.8)	(0.4)	0.3	N→S？	
					（路3層） 0.1		西	?	0.4	0.4	N→S？	
		C	b②	(6.5)	路面Ⅱ	-0.2	東	1.2	0.7	0.3	N→S	
					（路2層） 0.1		西	(0.8)	0.4	0.4	N→S？	
		D	b③	(5)	路面Ⅲ	0	東	1.4	0.7	0.3	N→S	側溝に灰白色火山灰ブロックを含む。
							西	(1.2)	(0.4)	0.5	N→S	
		E	a①	(5)	＊（路1層） 0.15		東	0.5	0.3	0.3	N→S	
					路面Ⅳ	-0.05	西	?	?	?	?	
		F		(4.5)			東	1.0	0.5	0.2	N→S	
							西	?	?	?	?	
	SX1350	A	c	(6)	路面Ⅰ	-0.2	東	1.0<	0.3<	0.4	N→S？	
						～0.3	西	1.0<	0.4<	0.5	N→S？	
		B		(6)			東	(1.2)	0.4	0.6	N→S	
					（路3層） 0.1		西	(1.6)	(0.8)	0.7	N→S？	
		C	b②	(7)	路面Ⅱ	-0.2	東	1.6	0.9	0.6	N→S	宅地内整地（SX3132,最大厚0.1m）
					（路2層） 0.1		西	(1.8)	0.7	0.7	N→S？	
		D	b③	(6.5)	路面Ⅲ～Ⅳ	0	東	1.6	0.6	0.6	N→S	側溝に灰白色火山灰(ブロック)を含む。土器埋設（路2層上，SX1227･SK1207）を伴う。
							西	(1.4)	0.5	0.9	N→S？	
		E	a①	(6.5)			東	0.8	0.3	0.4	N→S	
							西	(1.4)	0.8	0.6	N→S？	
		F		6.0			東	0.8～1.3	0.4	0.3～0.7	N→S	
							西	2.0	0.7	0.5	N→S？	

※単位：m、（ ）：推定値
※路面堆積土の＊印は整地によるもので、数字は層厚を示している。

第３表　SX1300・1400南１道路、SX1250・1350西１道路一覧表



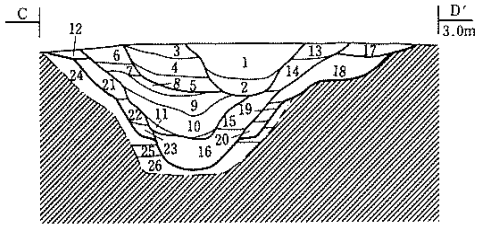
第32図　SX1300・1400南 1 道路、SX1250・1350西 1 道路断面模式図



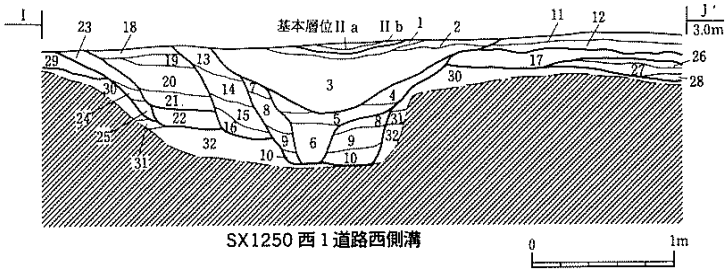
第33図　SX1300・1400南 1 道路、SX1250・1350西 1 道路変遷図

Dは、路面2層上面(路面Ⅲ)で検出した道路跡で、路幅は側溝心々でSX1300が約4.5m、SX1250が約5m、SX1350が約6.5mを測るが、SX1400については北側溝が東に向かって北に大きく振れているために路幅は一定せず、5.5～8.5m程である。側溝および交差点付近の路面上には灰白色火山灰ブロックの堆積が認められた。なお、Dの路面造成にあたっては、C側溝埋没後の上面を中心に、南2西1区内にオリーブ褐～暗灰黄色砂質土を用いた盛土整地(SX3132)を施している。なお、SX1350の路面2層上面で、土器埋設遺構を2基（SX1227、SK1207）検出している。

E～Fは、路面Ⅲの上面に盛土整地(路面1層)を施し、構築した道路跡である（路面Ⅳ)。盛土は焼土および炭化物を含むしまりのある黒褐色土を用いて行っており、10～15cm程の厚さが残存する。



SX1400南1道路南側溝



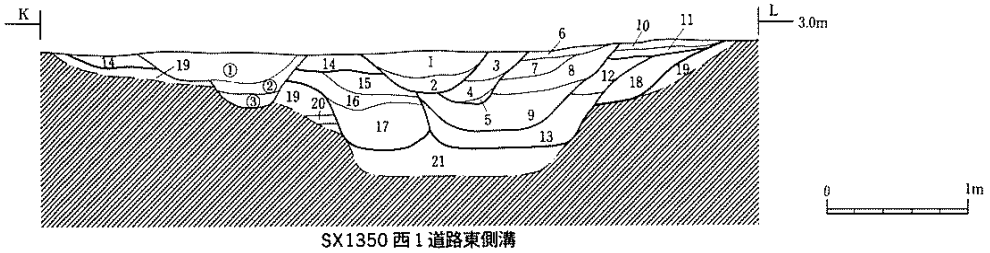
SX1250西1道路西側溝

SX1400南側溝

No	土色	土性	備考	No	土色	土性	備考	No	土色	土性	備考
1	黒褐 10YR2/2	シルト	F側溝	9	灰白色火山灰		D側溝 灰白の一次堆積層	17	灰黄褐 10YR4/2	シルト	路2層 地山砂含。
2	黒褐 2.5Y3/2	粘質シルト		10	黒褐 2.5Y3/2	粘質シルト	細砂ブロック含。	18	暗灰黄 2.5Y4/2	粘質シルト	B側溝
3	黄灰 2.5Y4/1	シルト	E側溝	11	灰 5Y4/1	砂	細砂層	19	オリーブ黒 5Y3/1	粘質シルト	
4	黒褐 10YR3/1	シルト	灰白粒含。	12	オリーブ褐 2.5Y4/3	砂質シルト	SX3132 細砂ブロック含。	20	オリーブ黒 5Y3/1	粘質シルト	地山ブロック含。
5	褐灰 10YR4/1	シルト	灰白粒・細砂含。	13	黒褐 10YR3/2	シルト	C側溝 地山砂ブロック含。	21	黒褐 2.5Y3/2	粘質シルト	A側溝 地山砂多。
6	褐灰 10YR4/1	砂質シルト	細砂多。	14	暗褐 10YR3/3	粘質シルト		22	黒褐 10YR3/2	粘質シルト	
7	褐灰 10YR5/1	シルト	D側溝	15	黒褐 2.5Y3/2	粘土		23	黒褐 2.5Y3/1	粘土	地山ブロック含。
8	褐灰 10YR5/1	シルト	灰白ブロック多。	16	オリーブ黒 5Y2/2	粘土	地山ブロック含。				

SX1250西側溝

No	土色	土性	備考	No	土色	土性	備考	No	土色	土性	備考
1	黒褐 10YR3/2	シルト	SD1240	11	黒褐 10YR2/2	シルト	路1層 地山砂・炭化物含。	21	黒褐 10YR3/1	粘質シルト	C側溝 地山ブロック多。
2	黒褐 10YR3/1	シルト	地山ブロック多。	12	黒褐 2.5Y3/2	シルト	地山粒・ブロック多。	22	黒褐 2.5Y3/1	粘土	B側溝 地山ブロック多。
3	黒 10YR2/1	粘質シルト	炭化物・遺物多。	13	暗褐 10YR3/3	シルト	D側溝	23	暗オリーブ褐 2.5Y3/3	シルト	A側溝 地山粒多。
4	黒 5Y2/1	シルト	SA1402 遺物多。	14	黒褐 10YR3/2	粘質シルト	地山粘土の小ブロック	24	黒褐 2.5Y3/2	粘質シルト	
5	黒 2.5Y2/1	粘土	抜取り 遺物多。	15	黒褐 10YR3/1	粘質シルト		25	黒褐 2.5Y3/1	粘質シルト	地山粘土ブロック多。
6	オリーブ黒 5Y3/1	粘土	溝 地山粒・ブロック多。	16	黒褐 2.5Y3/1	粘土	地山粘土ブロック多。	26	黄灰 2.5Y5/1	砂	路3層 細砂層
7	黄灰 2.5Y4/1	シルト	SA1402	17	黒褐 10YR3/1	シルト	路2層 炭化物多。	27	暗灰黄 2.5Y5/1	砂質シルト	細砂多。
8	黒褐 10YR2/2	粘土	掘り方	18	暗灰黄 2.5Y4/2	シルト	C側溝 炭化物粒多。	28	黒褐 2.5Y3/2	砂質シルト	バラス 細砂・土器細片多。
9	黒褐 2.5Y3/1	粘土	植物遺体含。	19	黒褐 10YR3/2	シルト		29	暗灰黄 2.5Y4/2	シルト	溝？
10	オリーブ黒 5Y2/2	粘土	地山ブロック多。	20	黒褐 2.5Y3/2	粘質シルト					



SX1350西1道路東側溝

No	土色	土性	備考	No	土色	土性	備考	No	土色	土性	備考
1	黒褐 10YR2/2	シルト	F側溝	8	黒褐 2.5Y3/2	シルト	D側溝	15	黄灰 2.5Y4/1	シルト	B側溝
2	黒褐 2.5Y3/1	粘質シルト		9	黒褐 2.5Y3/2	砂質シルト	細砂ブロック含。	16	暗黄灰 2.5Y4/2	シルト	
3	黄灰 2.5Y4/1	シルト	E側溝	10	暗灰黄 2.5Y4/2	シルト	SX3132	17	黄褐 2.5Y5/3	シルト	地山砂ブロック多。
4	黒褐 10YR3/1	シルト	灰白粒含。	11	オリーブ褐 2.5Y4/3	砂質シルト	細砂ブロック含。	18	暗灰黄 2.5Y5/2	シルト	A側溝 地山砂ブロック多。
5	褐灰 10YR4/1	シルト	灰白粒・細砂含。	12	黄灰 2.5Y4/1	シルト	C側溝	①	黒褐 10YR3/2	シルト	SK3133
6	褐灰 10YR4/1	砂質シルト	細砂多。	13	暗灰黄 2.5Y4/2	シルト	地山砂ブロック多。	②	暗灰黄 2.5Y4/2	シルト	地山砂ブロック多。
7	褐灰 10YR5/1	シルト	D側溝 灰白ブロック多。	14	灰黄褐 10YR4/2	砂質シルト	路2層 地山砂・炭化物含。	③	黒褐 10YR3/2	粘質シルト	

第34図　SX1400南1道路、SX1250・1350西1道路断面図

また、交差点付近やＳＸ1300路面上の土取り穴（ＳＫ3131）上面などの地盤の軟弱な部分には、土器細片および細砂を多く含む黒褐色砂質土による部分的なバラス整地が認められた。路幅は側溝心々でＳＸ1300がＥ約5m→Ｆ4.0m、ＳＸ1250が約5m→約4.5m、ＳＸ1350が約6.5m→6.0mを測る。ＳＸ1400については、Ｄと同様で路幅が一定せず、Ｅが5.5～8.5m、Ｆが5.5～7.5m程である。なお、Ｅの路面造成は、ＳＸ1300の路面上や南2西2区内に多数の土取り穴が掘られるなど、側溝の掘削や交差の形状変更のみならず、路面の嵩上げ等、大規模な改修であったとみられる。

〈南1道路・西1道路出土遺物〉

ＳＸ1300・1400およびＳＸ1250・1350の各側溝と路面堆積土から、土器類や瓦などが出土している。

Ａ・Ｂの遺物は側溝および路面3層から出土している。量は少なく、小破片が多い。土師器はロクロ調整のものが主体をなすが、Ａからは非ロクロ調整の坏が出土している。

Ｃも同様の出土状況にあるが、側溝および路面2層から土師器、須恵器、瓦などが出土している。坏底部の調整は土師器が回転糸切り無調整のもの、須恵器がヘラ切り無調整のものが多い。

Ｄの遺物は側溝から土師器、須恵器、赤焼土器、瓦などが比較的まとまって出土している。坏底部の調整は土師器が回転糸切り無調整のもの、須恵器がヘラ切り無調整と回転糸切り無調整のものが多い。

Ｅ・Ｆの遺物は側溝および路面1層から土師器、須恵器、赤焼土器、灰釉陶器、縁釉陶器、製塩土器などの多量の遺物が出土している。坏は土師器と赤焼土器が大半を占めており、Ｆ側溝からは赤焼土器小型坏や小皿も定量出土している。坏底部の調整は土師器、須恵器とも回転糸切り無調整のものが大半を占めている。

(4)南1-2間道路

【ＳＸ3461東西道路跡】

ＳＸ3461東西道路跡は、南1道路（ＳＸ1300･1400）と南2道路（ＳＸ1900）の間で検出した道路跡で、約30mにわたって確認した。ＳＤ3458･1602河川跡埋没後の上面に路面を構築しており、同様に埋没後に構築されたＳＤ1538溝跡より新しく、ＳＦ1625小溝状遺構群よりも古い（第35図）。

路面の両端ないし片端に素掘りの側溝を伴っており、南側溝でＡ→Ｄの4時期、北側溝でＡ→Ｂの2時期の重複が認められた。ただし、南北に側溝を伴うＡ・Ｂについても、両側溝は調査区の西半部で接続し、これより東では南側溝のみとなっている。路面には整地層や基本層位Ⅲｂ層を含む3枚の路面堆積層が確認されており、“路面Ⅰ（側溝Ａ～Ｂ）→路面Ⅱ（Ｃ～Ｄ）”という変遷が知られた（第

道路名		時期	交差形状	路幅	路面と路面堆積土	宅地との比高差	側溝の規模			側溝底面の傾斜	備考
							上幅	底幅	深さ		
南1・2間道路	SX3461	A	－	(7.5)	*（路3層） 0.1 路面Ⅰ	-0.2	北 (1.2)	0.5	0.5	?	
							南 ?	?	(0.5)	W→E	
		B		6.6	（路2層） 0.2 （路1＝Ⅲb） 0.2		北 1.3	0.5	0.5	W→E	側溝に灰白色火山灰（ブロック）
							南 1.2	0.3	0.5～0.7	W→E	
		C	－	(7±α)	路面Ⅱ	0	南 1.8	(0.5)	0.6	W→E？	基本層位Ⅲb層堆積後
		D		(7±α)			南 1.5	0.5～0.7	0.6	W→E？	

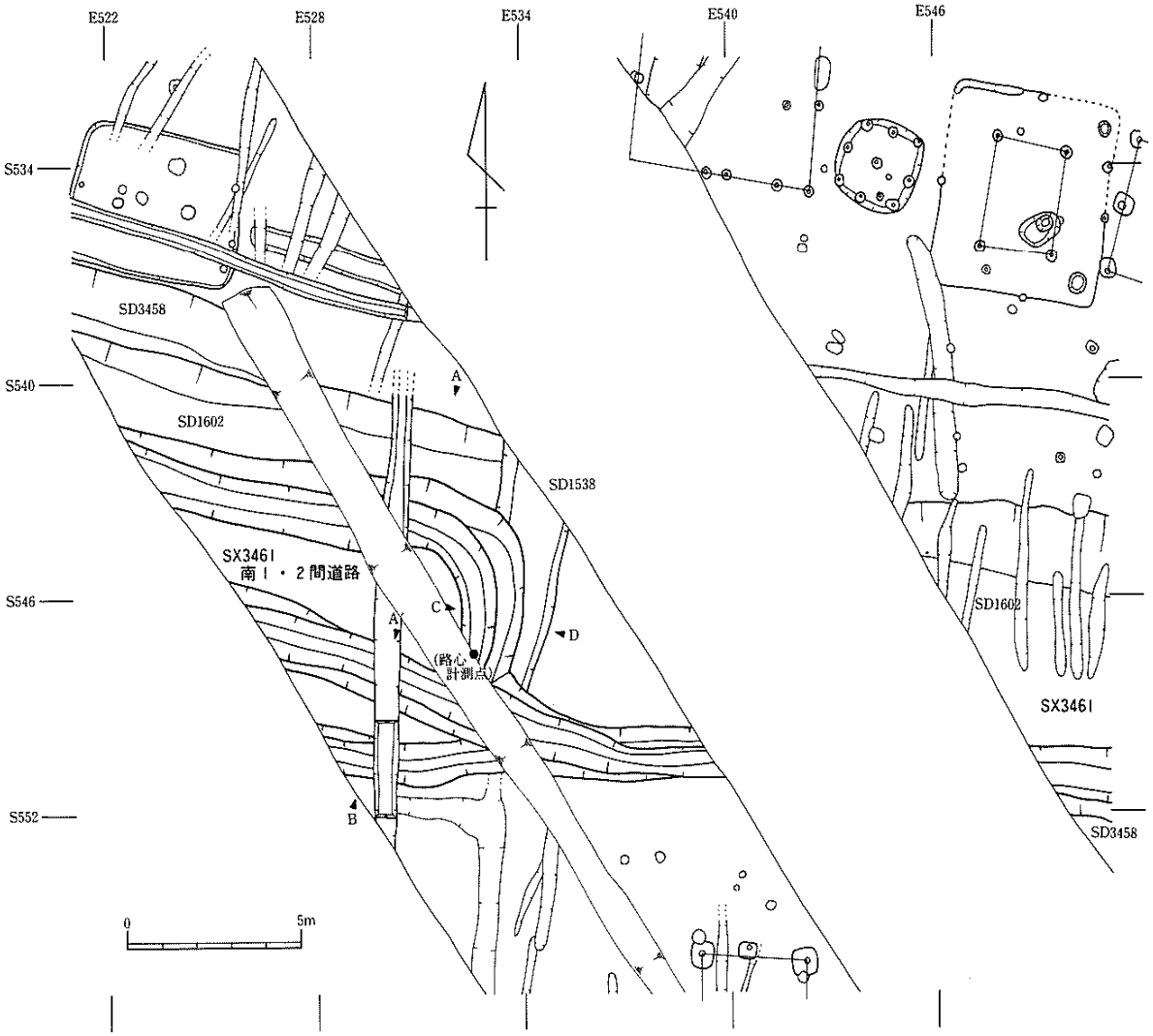
※単位：m、（ ）：推定値
※路面堆積土の＊印は整地によるもので、数字は層厚を示している。

第4表　SX3461南1－2間道路一覧表

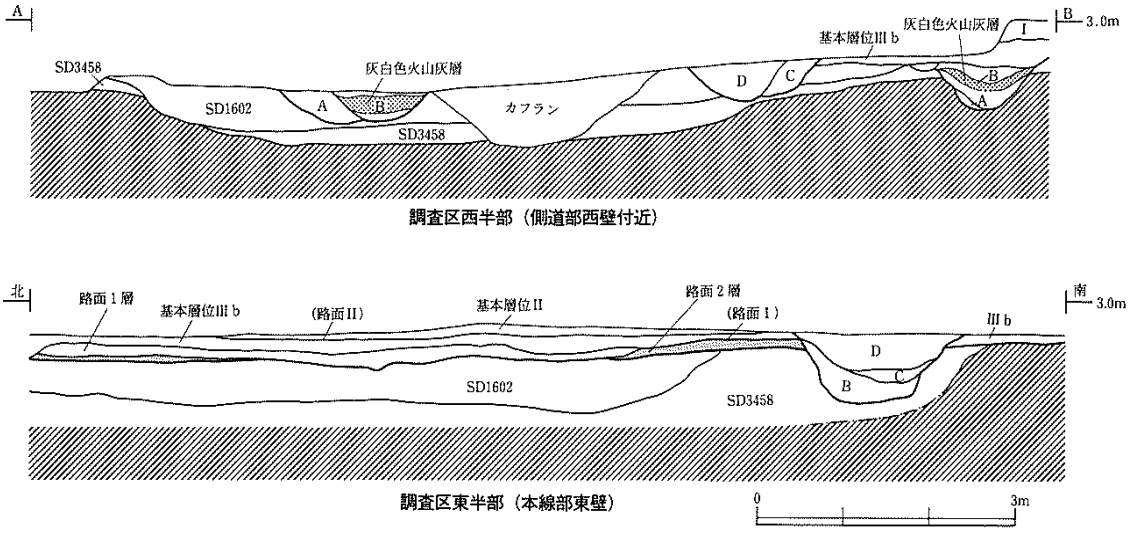
36図･37図、第4表)。

Ａ～Ｂは、ＳＤ3458・1602埋没後の上面に、白色凝灰岩粒を多く含む黒褐色土（路面3層）を用いて整地を施し、路面を構築している（路面Ⅰ)。整地土は路面の低い東端部にのみ、10cm程の厚さで残存している。路幅は北側溝を伴わない東半部では不明であるが、西半部では側溝心々でＡが約7.5m、Ｂが6.6mを測る。方向はＢ南側溝心で、東で2～3°南に偏している。なお、路面上には灰黄褐色土や黒褐色土からなる自然堆積土(路面2層)が5～10cmの厚さで残存し、層中およびＢ側溝には灰白色火山灰の堆積が認められた。

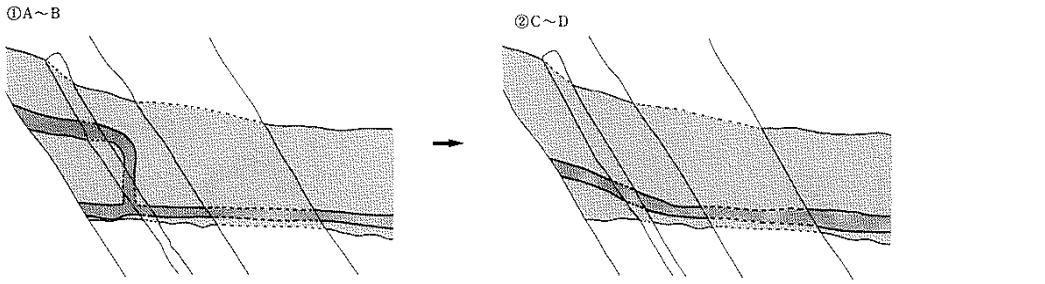
Ｃ～Ｄは、Ｂの路面を覆うⅢｂ層（路面1層）堆積後の上面（路面Ⅱ）で検出した道路跡である。側溝は南側溝のみで、路面の北端については明らかではないが、ＳＤ3458･1602の上面で同時期の遺構は検出されていないことから、河川埋没後の上面全体が道路として意識された空間であった可能性が考えられる。方向は、東半部ではＡ・Ｂと同様であるが、Ａ・Ｂの南北側溝が接続する付近を境にして西に向かって北に大きく触れており、西半部では東で約19°南に偏している。



第35図　SX3461南１－２間道路平面図

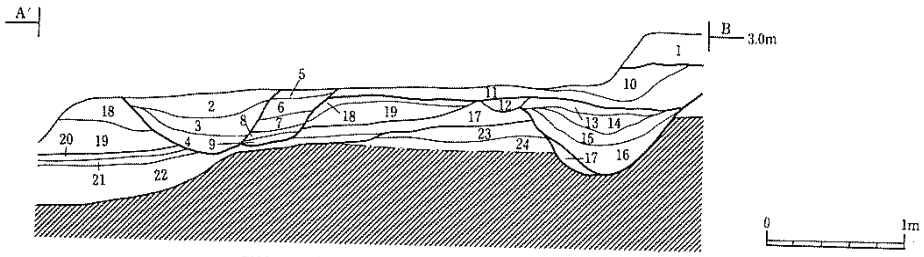


第36図　SX3461南1－2間道路断面模式図



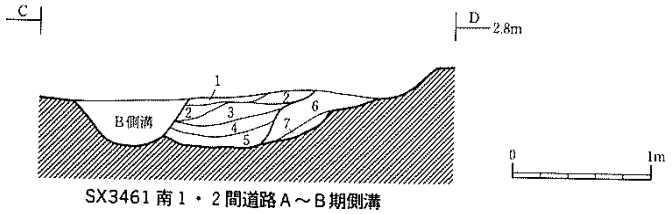
※薄いスクリーントーン部分はSD1602河川跡

第37図　SX3461南1－2間道路変遷図



SX3461南1・2間道路南側溝

No	土色	土性	備考		No	土色	土性	備考		No	土色	土性	備考	
1	オリーブ黒 5Y3/1	シルト	基本層位Ⅰ層		9	灰黄褐 10YR4/2	粘質シルト	C側溝		17	黒褐 10YR3/1	粘質シルト	A側溝	
2	黒褐 10YR2/2	シルト	D側溝	白色凝灰岩粒多。	10	黒褐 7.5Y3/2	シルト質砂	基本層位Ⅲd層		18	灰黄褐 10YR4/2	砂	SD1602B	粗砂層（ラミナ）
3	黒 10YR2/1	粘質シルト			11	褐灰 7.5YR4/1	粘質シルト			19	褐 10YR4/4	砂		細砂層（ラミナ）
4	灰黄褐 10YR4/2	粘質シルト			12	黄灰 2.5Y5/1	砂質シルト	溝？	地山ブロック多。	20	暗灰黄 2.5Y4/2	砂質シルト	SD1602A	
5	黒褐 10YR3/1	シルト	C側溝	白色凝灰岩粒多。	13	黄灰 2.5Y4/1	シルト	B側溝		21	暗褐 10YR3/3	粘質シルト		細砂・植物遺体多。
6	灰 5Y4/1	シルト			14	褐灰 10YR5/1	シルト		灰白多。	22	オリーブ褐2.5Y4/3	砂		粗砂層（ラミナ）
7	暗灰黄 2.5Y4/2	シルト			15	灰白色火山灰			灰白の一次堆積層	23	にぶい黄褐 10YR4/3	砂	基本層位Ⅳ層	
8	黒褐 10YR3/1	シルト			16	黄灰 2.5Y4/1	粘質シルト			24	浅黄 2.5Y7/4	シルト		



SX3461南1・2間道路A～B期側溝

No	土色	土性	備考	
1	黄橙 10YR7/8	砂	A側溝	地山砂多。
2	黒褐 2.5Y3/1	粘質シルト		粗砂含。
3	黒褐 10YR3/1	粘土		
4	黒 5Y2/1	粘土		
5	黒 5Y2/1	粘土		
6	黒 5Y2/1	砂	SD1538	
7	黒 5Y2/1	粘土		

第38図　SX3461南1－2間道路断面図

〈南１-２間道路出土遺物〉

各側溝から、土師器、須恵器、赤焼土器、灰釉陶器、瓦などが出土している。坏では土師器の占める割合が高く、底部の調整は回転糸切無調整のものが圧倒的に多い。赤焼土器はＢ以降に定量的に含まれるようになる。また、Ａ・Ｂでは墨書土器も目立つ。

(5)南２・西０道路

【ＳＸ1900東西道路跡、ＳＸ1850・1950南北道路跡】

いずれも調査区南半部のⅣ層上面およびＳＤ2000河川跡の堆積土上面で検出した。ＳＦ3627小溝状遺構群、ＳＦ3700Ｃ水田跡と重複し、これらよりも新しい。また、両道路の交差点付近をＳＤ2000が河道を西から東へと移動しながら南北に貫いており、調査区東端にまでおよんでいる（第40図）。

ＳＸ1900東西道路跡は南２道路にあたり、調査区西端からＳＤ2000の西岸までの30～40ｍ程を検出した。路面の両端には素掘りの側溝を伴っており、Ａ→Ｆの６時期の重複が認められた。道路の方向はＳＸ1900の最も新しいＦ北側溝の心々で、東で僅かに南に偏している。なお、ＳＤ2000の東岸およびＳＸ1850･1950以東への延びについては、ＳＤ2000の河道の移動に伴い侵食された可能性もあり、今回の調査では明らかではない。

ＳＸ1850･1950南北道路跡は西０道路にあたり、ＳＸ1900との交差点の北側（ＳＸ1850）で約10m、南側（ＳＸ1950）で約45ｍ検出した。路面の東端については明らかではないが、西端には側溝を伴っており、Ｂ→Ｄの３時期の重複が認められた。道路の方向はＳＸ1950のＢ西側溝の内肩（路肩）で、北で１～2°西に偏している。

両道路の交差は、少なくともＢ～Ｄの段階にはＳＸ1900の南北側溝とＳＸ1850･1950の西側溝がそれぞれ「Ｌ」形に接続して、Ｔ字路交差点を形成している。路面は盛土整地層（路面４層）およびＳＤ2000河川の埋没に伴う路面堆積層（路面1～3層）により、ＳＸ1900で“路面Ⅰ（側溝Ａ）→路面Ⅱ（Ｂ

道路名		時期	交差形状	路幅	路面と路面堆積土	宅地との比高差	側溝の規模 上幅	底幅	深さ	側溝底面の傾斜	備考
南2道路	SX1900	A	?	1.6	路面Ⅰ	0	北 0.6	0.3	0.3	W→E	
					*（路4層） 0.1		南 0.7	0.4	0.4	W→E?	
		B	?	(4)	路面Ⅱ	0	北 (1.8)	0.6	0.8	W→E	側溝に灰白色火山灰粒
					（路3層） 0.05		南 ?	?	0.3	W→E	*土器埋設（路4層上，SX1893・1964）
		C	?	(2)	路面Ⅲ～Ⅳ	0	北 ?	?	?	?	
							南 (0.8)	0.3	0.3～0.5	W→E	
		D		3.5			北 1.2～1.6	(0.4)	0.8	W→E	
							南 0.5～1.0	0.25～0.4	0.4	W→E	
		E		? (5.5≦)			北 1.2～1.5	0.3	1.0	W→E?	交差点を境に南側溝が「へ」の字に曲がるため、路幅は不明
							南 1.5	0.5	0.8	E→W	
		F		? (5.5≦)			北 1.8	0.2～0.4	0.4～0.6	W→E?	
							南 1.3	0.4	0.6	E→W	
西0道路	SX1850・1950	A	?	?	路面Ⅰ?	?	東 ?	?	?	?	={SD2000B 7層，川幅約15.5m}
							西 ?	?	?	?	
		B	?	(4→6)	（削 平）		東 ?	?	?	?	側溝・路面上に灰白色火山灰の一次堆積層
				*(21)	路面Ⅱ	-0.3（北）	西 1.6	0.6	0.8	N→S	
					（路3層） 0.1	-1.1（南）	東 ?	?	?	?	={SD2000B 5・6層， 川幅約16m}
					（灰 白） 0.1		西 1.0	0.5	0.3	N→S	
		C	?	6.0	路面Ⅲ	-0.1（北）	東			?	側溝に灰白色火山灰ブロック
				*(22)	（路2層） 0.4	-0.9（南）	西 ?, 1.0	?, 0.5	0.5, 0.3	N→S	={SD2000B 4層， 川幅約13.5m}
		D	?	7.0	路面Ⅳ	-0.4	東 ?	?	?	?	={SD2000C 3層， 川幅約9m}
					（路1層） 0.25		西 2.0	0.3	0.7	N→S	
		E	−	−	路面Ⅴ?	0	東 ?	?	?	?	={SD2000C 1・2層， 川幅約10m}
		F		−			東 ?	?	?	?	

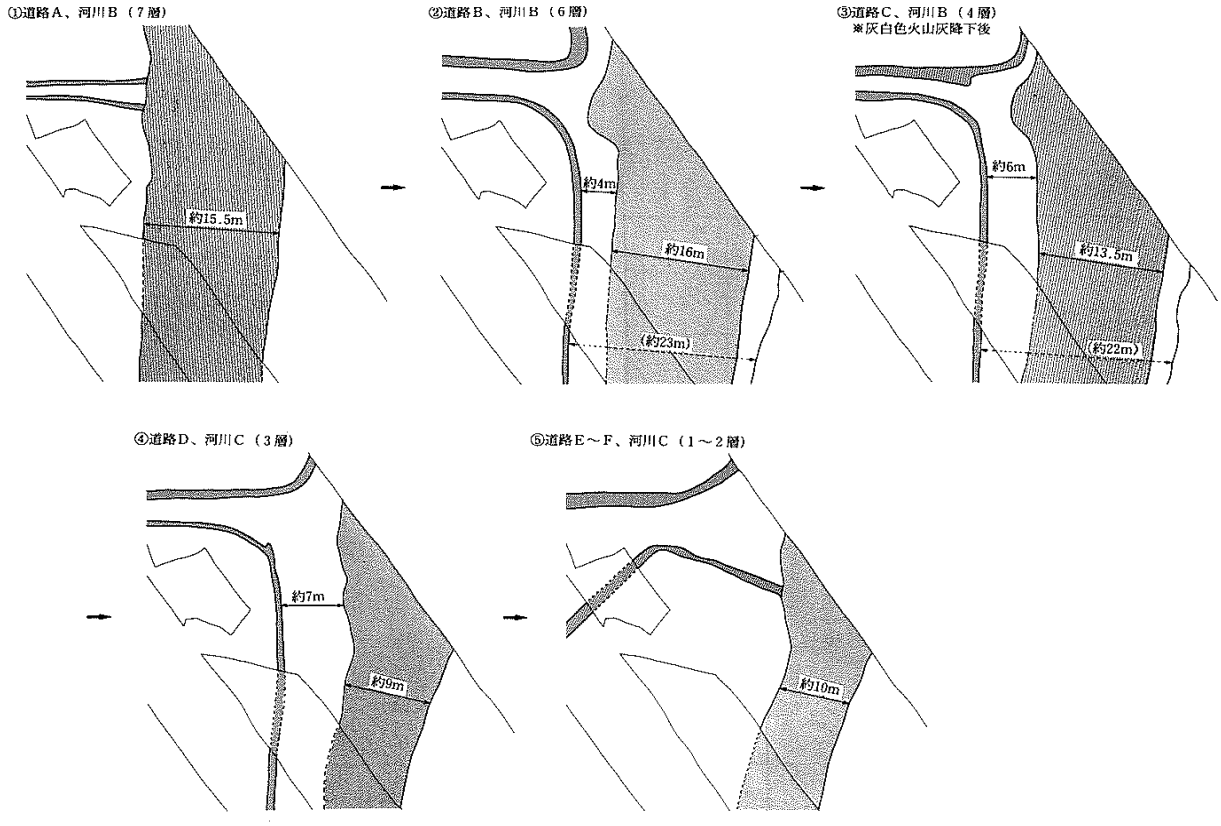
※単位：m、( )：推定値
※路面堆積土の*印は整地によるもので、数字は層厚を示している。

第５表　SX1900南２道路、SX1850・1950西０道路一覧表

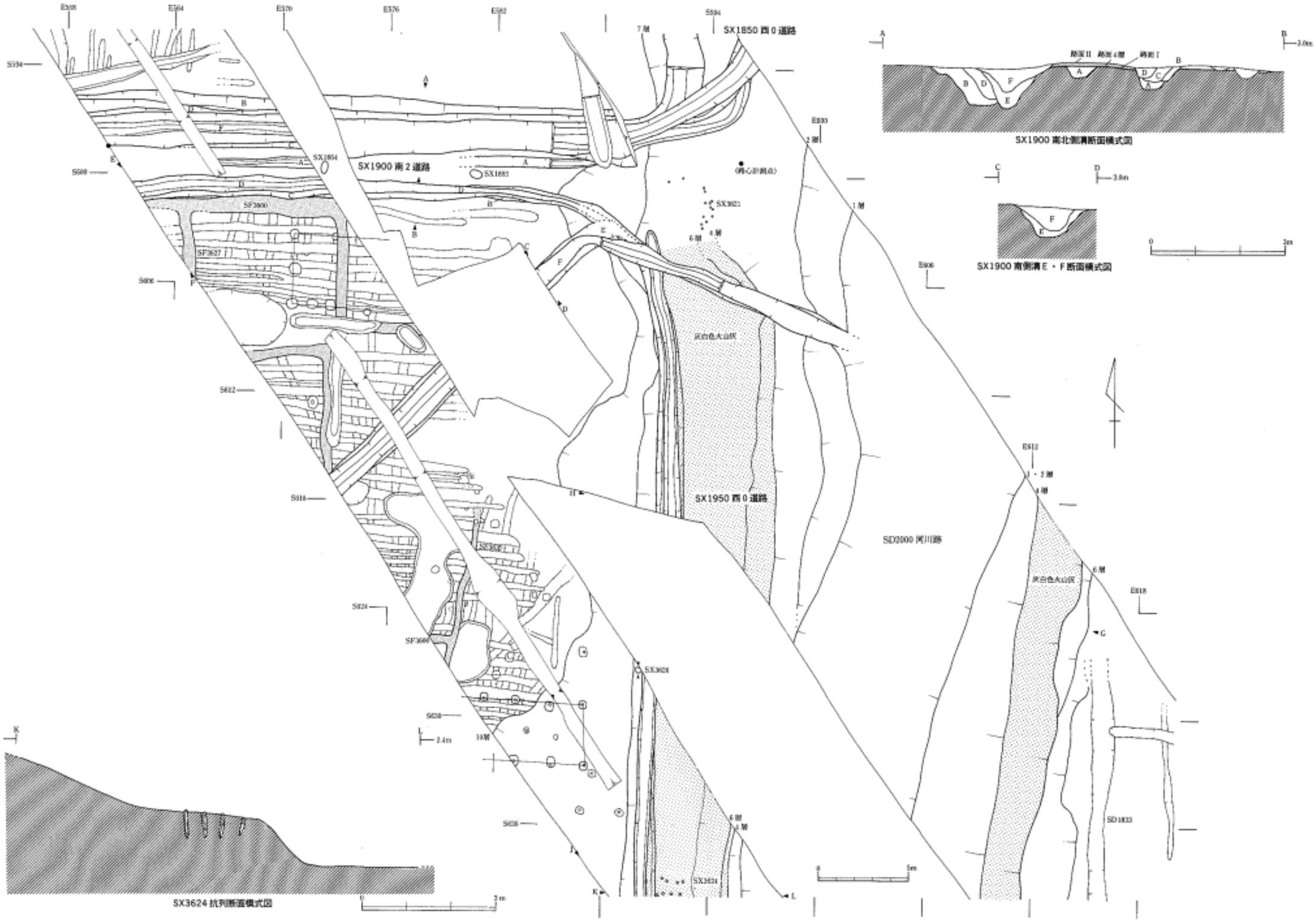
～F)”の 2 時期、ＳX1850･1950 で“路面Ⅱ（側溝Ｂ）→路面Ⅲ（Ｃ）→路面Ⅳ（Ｄ）→路面Ⅴ（Ｅ～Ｆ)”の 4 時期の変遷が認められた（第 39 図､第 5 表)。

Ａは、ＳX1900 のみで､ＳＦ3600Ｃ水田跡およびＳＤ2000Ａ河川跡埋没後の上面(路面Ⅰ)で検出した。東端はＳＤ2000Ｂ西岸(7 層の落ち際)までの延びを確認しているが、これと交差するＳX1850･1950Ａについては確認できなかった｡路幅は側溝心々で 1.6ｍを測る｡ＳX1900Ａの路面延長上の河川西岸には、斜面にそって径10㎝前後の杭による打ち込み護岸（ＳX3621）が認められた。

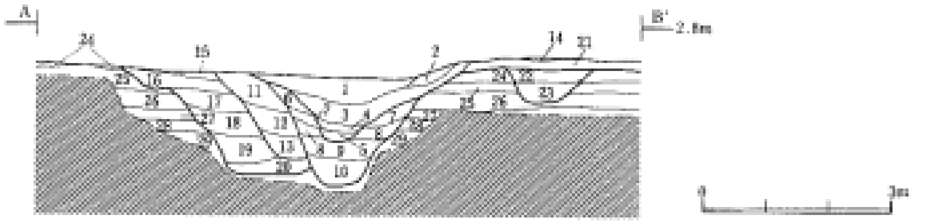
Ｂは、ＳＸ1900 が盛土整地（路面 4 層）上面で、これと交差するＳX1850･1950 がＳＤ2000Ｂの 7 層埋没後の上面で検出された(路面Ⅱ)。盛土は炭化物を少量含む黒褐色土を用いて行っており、交差点付近では 10㎝程の厚さが残存する。また、路面上には灰白色火山灰を含む自然堆積土(路面 3 層)が認められ、ＳX1850･1950 では黒褐色砂質土とこれを覆う灰白色火山灰の一次堆積層が約20㎝の厚さで認められた。路幅はＳX1900Ｂが側溝心々で約 4ｍを測る。一方､ＳX1950Ｂについては、西側溝心からＳＤ2000Ｂの西岸までの距離が構築時には約 4ｍであるが､ＳＤ2000Ｂの河道の移動と河川の堆積によって､灰白色火山灰降下時には約 6ｍと広くなっている｡ところで､ＳＤ2000Ｂ東岸の 7 層上面についても、区画内よりも一段低い平坦な面が約 3ｍの幅で存在する。側溝は持たないが、東端を削り出しによって造成した路面とみれば、ＳＤ2000Ｂを挟んでＳX1850･1950Ｂの西側溝心と東端間の距離は構築時で約 23ｍを測る(第43図)。なお､ＳX1900 の路面 4 層上面で、土器埋設遺構を 2 基(ＳX1893･1964) 検出している。



第39図　SX1900南 2 道路、SX1850・1950西 0 道路および SD2000河川跡変遷図

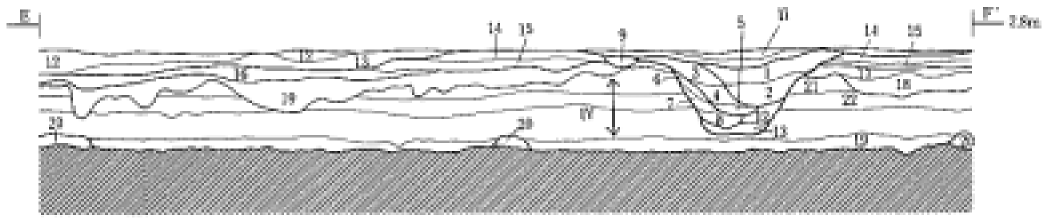


第40図　SX1900南2道路、SX1850・1950西0道路、SD2000河川跡平面図



No	土色	土性	備考		No	土色	土性	備考	
1	黒 10YR2/1	粘土	F側溝		13	黒褐 2.5Y3/1	粘土	D側溝	
2	黒褐 2.5Y3/2	シルト		粗砂の小ブロック含。	14	灰白色火山灰		路面	灰白の一次堆積層
3	黒褐 10YR3/1	粘土		地山ブロック多。	15	暗灰黄 2.5Y4/2	シルト	B側溝	
4	オリーブ 黒5Y2/2	粘土			16	暗オリーブ褐 2.5Y3/3	シルト		
5	黒褐 2.5Y3/1	粘土			17	黒褐 2.5Y3/2	粘質シルト		
6	黒褐 10YR3/2	粘質シルト	E側溝		18	オリーブ 黒 5Y3/2	粘質シルト		
7	黒褐 10YR3/1	粘質シルト		細砂の小ブロック含。	19	オリーブ黒 5Y2/2	粘土		
8	黒褐 2.5Y3/2	粘質シルト		細砂ブロック多。	20	オリーブ黒 5Y2/2	粘土		地山ブロック多。
9	オリーブ黒 5Y2/2	粘土			21	黒褐 10YR3/2	シルト		炭化物含。
10	オリーブ黒 5Y2/1	粘土		地山ブロック含。	22	オリーブ褐 2.5Y4/3	シルト	A側溝	
11	黒褐 2.5Y3/2	粘質シルト	D側溝		23	暗灰黄 2.5Y4/2	粘質シルト		地山粒多。
12	黒褐 10YR3/2	粘質シルト		地山粒多。					

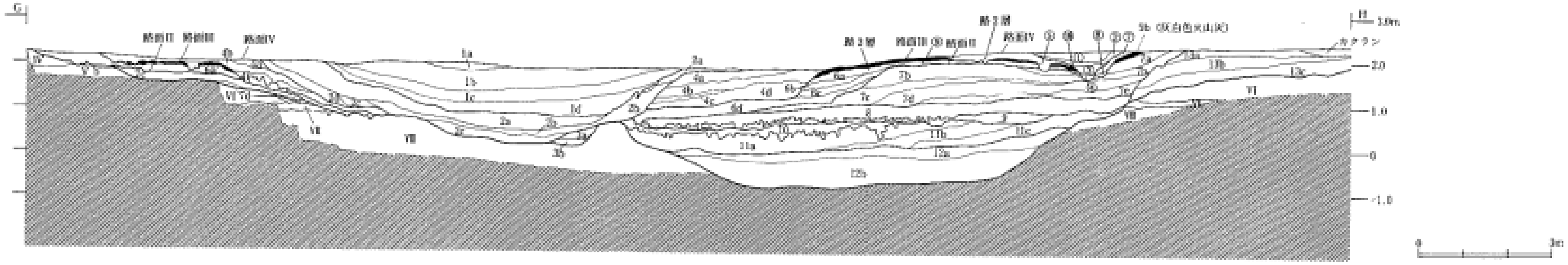
SX1900 南２道路北側溝

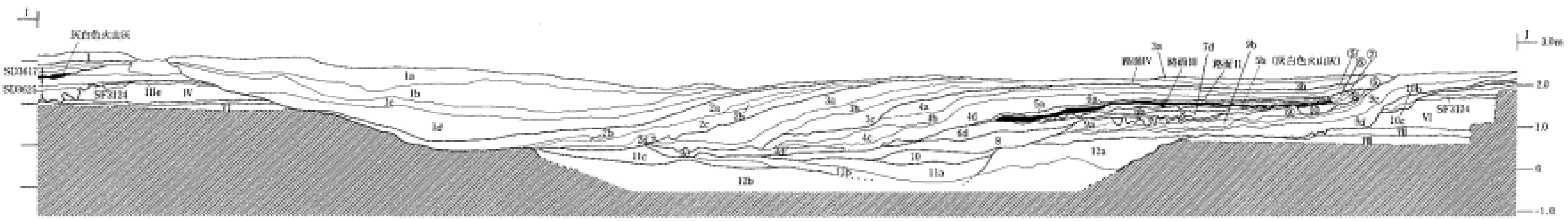


No	土色	土性	備考		No	土色	土性	備考	
1	黒褐 2.5Y3/1	粘質シルト	D側溝		11	黒褐 2.5Y3/1	粘質シルト	A側溝	地山粘土ブロック多。
2	黒褐 2.5Y3/2	シルト			12	褐灰 10YR6/1	シルト		
3	黒褐 2.5Y3/1	粘質シルト	C側溝		13	灰黄褐 10YR6/2	シルト	SD3000	[耕作土]
4	暗オリーブ褐 2.5Y3/3	シルト			14	オリーブ黒 5Y3/2	シルト		[畦畔]
5	黒褐 2.5Y3/1	粘質シルト		灰白粒含。	15	灰オリーブ 5Y4/2	砂質シルト		[畦畔]
6	暗オリーブ褐 2.5Y3/3	シルト	B側溝	灰白粒含。	16	褐灰 10YR4/1	粘質シルト	SF3106C	[耕作土]
7	黒褐 2.5Y3/2	粘質シルト		地山粒多。	17	黒褐 2.5Y3/2	粘質シルト	SF3627	
8	黒褐 2.5Y3/1	粘質シルト		地山粘土ブロック多。	18	黒褐 2.5Y3/2	粘質シルト		
9	暗灰黄 2.5Y4/2	シルト		灰白粒多。	19	オリーブ黒 5Y3/1	シルト質粘土	SF3624	[耕作土]
10	オリーブ褐 2.5Y4/3	粘土	A側溝		20	黒褐 2.5Y3/1	シルト質粘土		[畦畔]

SX1900 南２道路南側溝

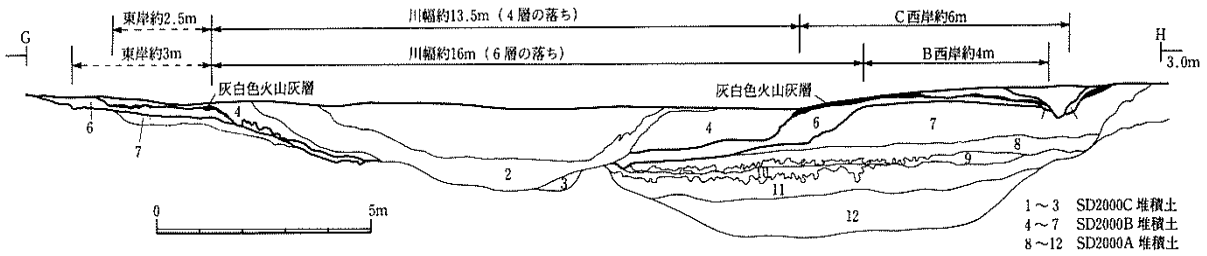
第41図　SX1900南２道路断面図





No	土色	土性	備考		No	土色	土性	備考		No	土色	土性	備考	
①	黒 5Y2/1	粘質シルト	SX1990D	炭化物含。	3a	黒褐 2.5Y3/2	シルト	SD2000C	粗砂ブロック含。	7c	黒褐 2.5Y3/2	粘質シルト	SD2000B	スクモ・粗砂の互層
②	オリーブ黒 5Y3/1	粘土			3b	オリーブ黒 5Y3/2	砂質シルト		シルト・細砂の互層	7d	オリーブ黒 5Y3/2	砂質シルト		スクモ・細砂・粗砂の互層、植物遺体・炭を含む。
③	黒 5Y2/1	シルト			3c	オリーブ黒 5Y2/2	粘質シルト		スクモ・細砂の互層	7e	黒褐 2.5Y3/1	粘質シルト		シルト・粗砂の互層。
④	オリーブ黒 5Y3/1	粘質シルト		炭化物多。	4a	黒褐 2.5Y3/2	シルト	SD2000B		8	灰 5Y5/1	砂	SD2000A	スクモ混じりの細砂〜粗砂層(ラミナ)、遺物多。
⑤	オリーブ黒 5Y3/1	シルト	路２層	灰白粒多。	4b	黒褐 2.5Y3/2	砂質シルト		シルト・細砂の互層、植物遺体多、鉄分やや多。	9a	オリーブ黒 5Y2/2	粘土		スクモ層(細砂・粗砂・炭化物含む)、遺物やや多。
⑥	暗灰黄 2.5Y5/2	シルト	SX1990C	灰白粒・炭化物含。	4c	黄褐 2.5Y5/4	砂		細砂・粗砂の互層（ラミナ）	9b	暗オリーブ 5Y4/3	砂		しまりのない粗砂ブロック多。
⑦	灰黄 2.5Y6/2	シルト		灰白の二次堆積層(シルト・スクモのブロック含)	4d	黒褐 2.5Y3/1	粘質シルト		粗砂ブロック多。	9c	黒褐 2.5Y3/2	砂質シルト		シルト・細砂の互層
⑧	黒褐 10YR3/2	砂質シルト		炭化物含。	4e	黄褐 2.5Y5/4	砂		粗砂層	10a	灰オリーブ 5Y5/2	砂		スクモ混じりの細砂〜粗砂層(ラミナ)、遺物多。
⑨	暗灰黄 2.5Y5/2	シルト	路３層	灰白の小ブロック含。	4f	暗灰黄 2.5Y4/2	シルト		灰白ブロック含。	10b	灰オリーブ 5Y4/2	砂質シルト		細砂多。
⑩	オリーブ黒 5Y3/1	粘質シルト	SX1990B	炭化物含。	5a	暗灰黄 2.5Y5/2	シルト		灰白の二次堆積層	10c	灰 7.5Y4/1	砂質シルト		砂・スクモの互層
1a	褐 10YR4/6	砂	SD2000C	細砂・未分解の互層	5b	黄灰 2.5Y6/2	シルト		灰白の一次堆積層	10d	灰 5Y5/1	砂質シルト		粗砂・地山ブロック多。
1b	黒褐 10YR3/1	シルト		シルト・植物遺体の互層	6a	黒褐 2.5Y3/2	砂質シルト			11a	オリーブ黒 5Y3/2	粘土		粗砂混じりのスクモ層
1c	黒褐 2.5Y3/2	粘質シルト			6a'	黒褐 2.5Y3/2	粘質シルト		スクモ・細砂の互層	11b	灰 5Y4/1	砂		しまりのない粗砂層（ラミナ）、遺物多。
1d	オリーブ黒 5Y2/2	粘土		植物遺体含。	6b	黒褐 10YR3/3	砂質シルト		シルト・細砂の互層	11c	オリーブ黒 5Y3/2	粘土		粗砂混じりのスクモ層
2a	オリーブ黒 5Y3/2	粘質シルト		シルト・細砂の互層	6c	黒褐 10YR3/2	粘質シルト			12a	灰 7.5Y4/1	砂		砂礫混じりの粗砂・細砂の互層
2b	黒褐 2.5Y3/1	シルト		粗砂ブロック含。	6d	灰オリーブ 5Y4/2	砂		しまりのない粗砂層、遺物多。	12b	灰 5Y4/1	砂		しまりのない細砂〜粗砂層
2c	黒褐 2.5Y3/2	粘質シルト			7a	オリーブ黒 5Y3/2	粘質シルト		スクモ・細砂が薄く互層をなす。					
2d	暗オリーブ褐 2.5Y3/3	砂		細砂・粗砂の互層（ラミナ）	7b	暗オリーブ褐 2.5Y3/3	砂質シルト		細砂が薄く互層をなす。					

第42図　SD2000河川跡断面図



第43図　SX1950B・C西0道路とSD2000河川跡変遷図

Cは、ＳX1900 が路面Ⅱで、これと交差するＳX1850･1950 が路面 3 層上面(路面Ⅲ)で検出された。灰白色火山灰降下直後に構築されており、ＳX1950Cの西側溝および路面上には灰白色火山灰ブロックの堆積が多く認められた。路幅はＳX1900Cが側溝心々で約 2m、ＳX1950Cが西側溝心からＳD2000の西岸(4 層の落ち)までの距離で 6.0mを測る。また、Bと同様にＳD2000B東岸の一段低い幅約 2.5mの平坦面を路面とみれば、ＳD2000Bを挟んでＳX1850・1950Cの西側溝と東端間の距離は構築時で約 22mとなる(第43図)。ＳX1950Cの路面上には黒褐色スクモと黄褐色砂（粗砂･細砂の自然堆積層）が互層をなして約 40cm の厚さで認められた（路面 2 層)。

Dは、ＳX1900 が路面Ⅱで、これと交差するＳX1850･1950Dが路面 2 層およびＳD2000 の 4 層埋没後の上面（路面Ⅳ）で検出された。路幅はＳX1900Dが側溝心々で 3.5m、ＳX1950Dが西側溝心からＳD2000Cの西岸（3 層の落ち）までの距離で約 7mを測る。ＳX1950Dの路面上には黒褐色スクモと黄褐色粗砂が互層をなして約 25cm の厚さで認められた（路面 1 層)。

Ｅ～Ｆは､道路西半部では路面Ⅱで､東半部では路面 1 層およびＳD2000 の 3 層埋没後の上面(路面Ⅴ）で検出した(第42図)。調査区内で両道路の交差を確認することはできなかったが、ＳX1900 の北側溝はＢ～Ｄと同様にほぼ真東方向に延び、ＳD2000Cの西岸(2 層の落ち)付近で緩やかに北に折れており、ＳX1850 の西側溝と「Ｌ」形に接続していた可能性が高い。一方､ＳX1900 の南側溝は北側溝とは平行せず、交差点付近で大きく屈曲してＳD2000Cの西岸にまっすぐ延びる変則的な側溝をなしている。また､南側溝と接続するＳX1950 の西側溝は存在しないことから､Ｅ～Ｆの段階にはＳX1900 以南に延びる南北道路は存在しなかった可能性が高い。路幅は南側溝が屈曲する最も狭い部分の側溝心々で5.5mを測り、この両側では東西に向かってそれぞれ広くなっている。

〈南 2 道路・西 0 道路出土遺物〉

ＳX1900 およびＳX1850･1950 の各側溝と路面の盛土から、土器類や瓦などが出土している。遺物量は概して少なく、しかも小破片が多い。とくにＡ～Ｃは遺物がきわめて少なく、特徴の分かるものはほとんどないが､ＳX1900Cの北側溝および路面上からは緑釉陶器が出土している。Ｄは土師器、須恵器、赤焼土器、瓦などが出土しており、坏底部の調整は土師器が回転糸切り無調整のもの、須恵器がヘラ切り無調整のものが目立っている。ＥはＳX1900Eの北側溝から比較的まとまって､土師器､須恵器、赤焼土器、灰釉陶器、縁釉陶器、瓦などが出土している。坏底部の調整は土師器、須恵器とも回転糸切り無調整のものが主体をなしている。

(6)道路検出の土器埋設遺構

道路の路面上に土器を埋設したとみられる遺構は、北1・西3道路の交差点付近で5基、南1・西1道路の交差点付近で2基、南2・西0道路の交差点および路面上で2基検出された。以下、道路・交差点ごとに述べていく。

①北1・西3道路検出の土器埋設遺構

【ＳＸ4041土器埋設遺構】

道路交差点付近、ＳＸ4012東西道路跡の路面2層中で検出した土器の埋設遺構である。A南側溝埋没後の上面に位置しており、これを覆うＳＸ4012Cの盛土整地に伴うものとみられる。据え方は径約40cm、深さ15cm以上の断面形が浅い皿状をなすほぼ円形の小土壙で、非ロクロ調整の土師器長胴甕1個を横位に埋設している。土器の長軸方向は東で40°北に偏し、口縁部は北東方向を向いている。埋土は路面整地土にきわめて近似した黄灰色砂質土である。

【ＳＸ4042土器埋設遺構】

道路交差点付近、ＳＸ4012東西道路跡の路面2層中で検出した土器の埋設遺構である。ＳＸ4012Cの盛土整地に伴うものとみられ、ＳＸ4014C以降の東側溝と重複しこれに壊される。据え方は長径約40cm、短径約20cm、深さ10cm以上の断面形が浅い皿状をなす長楕円形の小土壙で、非ロクロ調整の土師器長胴甕2個を合口にして、横位に埋設している。法量の小さい甕を上とみた土器の長軸方向は南で5°東に偏し、ほぼ真南方向を向いている。埋土は少量の炭化物を含む暗黄灰色砂質土である。なお、ＳＸ4014E東側溝に接合する土器片が多く含まれており、ＳＸ4042はＳＸ4014Eの道路存続期に大きく壊された可能性が高い。

【ＳＸ4051土器埋設遺構】

道路交差点付近、ＳＸ4013東西道路跡の路面2層中で検出した土器の埋設遺構である。Cの盛土整地に伴うものとみられる。据え方は長径約50cm、短径約30cm、深さ15cm以上の断面形が浅い皿状をな

No.	遺構名	位　置	路面との関係	据え方の形態	据え方規模（cm）			土器の種類と数	出土状況	土器の方向	内容物	灰白との関係
					長径	短径	深さ					
1	SX4041	北1・西3道路交差点	SX4012路2層中（SX4012C整地）	円形	40	40	15	土師器甕1	単体横位	E-40°-N（東向き）	無	降下前
2	SX4042			長楕円形	40	20	10	土師器甕2	合口横位	S-5°-E（南向き）	無	降下前
3	SX4051		SX4013路2層中（SX4013C整地）	長楕円形	50	30	15	土師器坏1 土師器甕1	合口横位	N-20°-E（北向き）	無	降下前
4	SX4064		SX4014路2層中（SX4014C整地）	据え方なし				土師器坏2	入子正位		無	降下前
5	SX4065			据え方なし				須恵器坏1	単体正位		無	降下前
6	SX1227	南1・西1道路交差点	SX1350路2層上（SX1350D以降）	楕円形	35	30	10	土師器甕1	単体横位	N-10°-W（北向き）	無	降下後
7	SK1207			楕円形	＊（50）	＊（40）	20	土師器甕1	単体横位	不明	無	降下後
8	SX1893	南2・西0道路路面上	SX1900路4層上（SX1900B以降）	長楕円形	70	50	15	土師器甕2	合口横位	E-5°-S（東向き）	無	降下後
9	SX1964			長楕円形	70	40	（20）	土師器甕2	合口横位	S-約7°-W（南向き）	無	不明

※ SK1207の規模は土器埋設後の土壙の規模を示したもので、（ ）はその推定値である。
※ "内容物"は土器内の残存物の有無を示したものだが、1㎜の試験フルイを用いた肉眼観察によるものであり、残存脂肪等の分析は行っていない。

第6表　道路検出の土器埋設遺構一覧表

す長楕円形の小土壙で、非ロクロ調整の土師器長胴甕と回転糸切り無調整の土師器大形坏を合口にして、横位に埋設している。坏を上とみた土器の長軸方向は北で 20°東に偏し、北方向を向いている。埋土は黄褐色地山砂粒を多く含む暗黄灰色砂質土である。

【ＳＸ4064 土器埋設遺構】

道路交差点付近、ＳＸ4014南北道路跡の路面2層中で、土師器大形坏の中に土師器小形坏を重ね、口縁部を上にした正位の状態で検出した。明確な据え方をもたないが、ＳＸ4014Ｃの盛土整地に伴って埋設された可能性が高い。土器はいずれも完形で、大形坏が回転糸切りで手持ちヘラ削り調整、入子の小形坏が回転糸切り無調整のものである。小形坏の底部には土器焼成後に外面から穿孔が施されている。

【ＳＸ4065 土器埋設遺構】

ＳＸ4064 と近接してＳＸ4014 南北道路跡の路面 2 層中で検出した。ＳＸ4064 と同様に明確な据え方をもたないが、ヘラ切り無調整の須恵器大形坏 1 個を口縁部を上にした正位の状態で埋設したものとみられる。Ｃの盛土整地に伴って、ＳＸ4064 と一連に埋設されたものと思われる。

②南 1・西 1 道路検出の土器埋設遺構および土壙

【ＳＸ1227 土器埋設遺構】

道路交差点付近、ＳＸ1350 南北道路跡の路面 2 層上面で検出した土器の埋設遺構である。ＳＸ1350Ｄ以降の路面に伴うものとみられる。据え方は長径約 35cm、短径約 30cm、深さ 15cm 以上の断面形が浅い皿状をなす楕円形の小土壙で、ロクロ調整の土師器長胴甕 1 個を横位に埋設している。土器の長軸方向は北で 10°西に偏し、口縁部は北方向を向いている。埋土は路面堆積土にきわめて近似した黒褐色土である。

【ＳＸ1207 土壙】

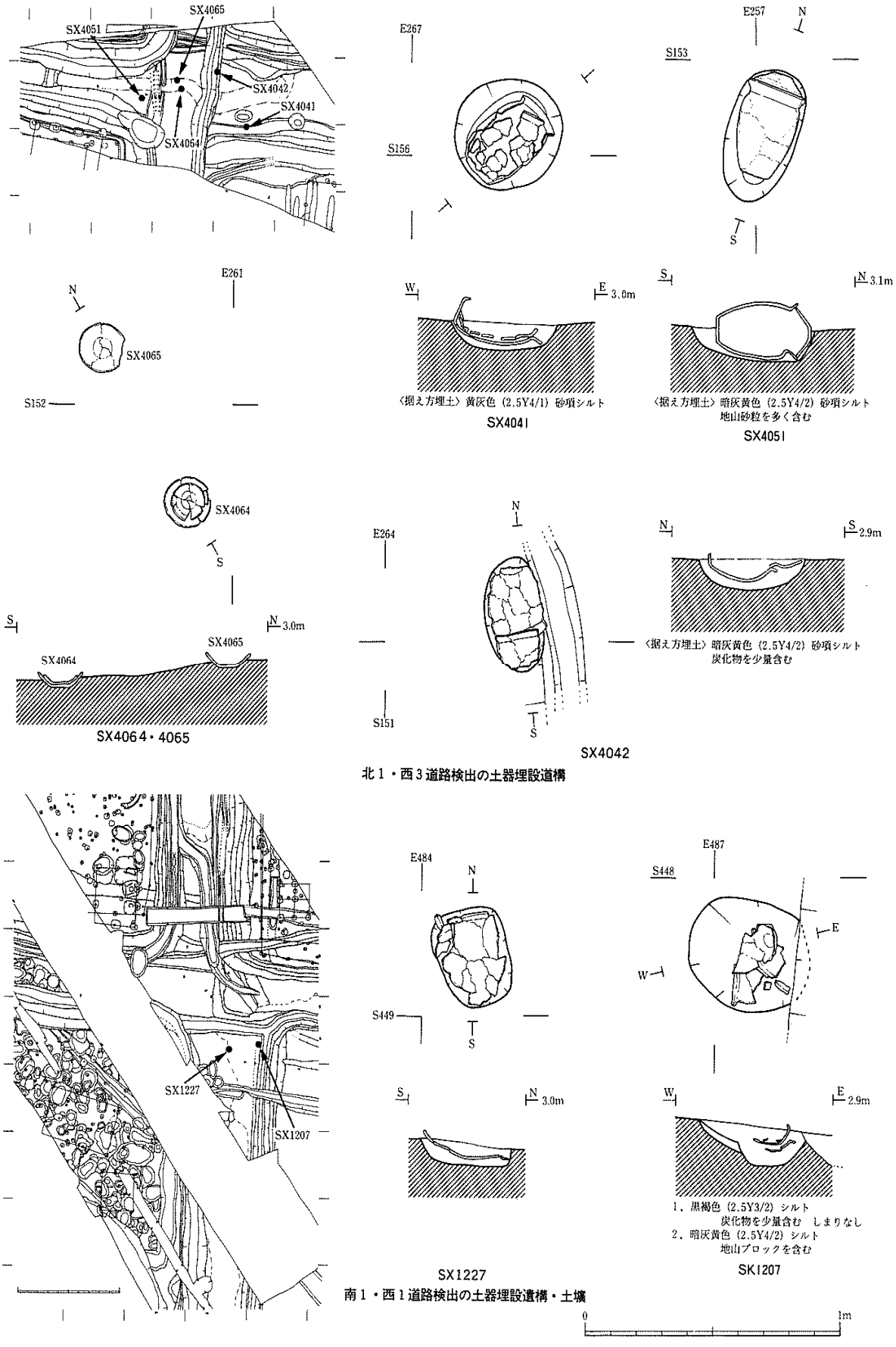
道路交差点付近、ＳＸ1350 南北道路跡の路面 2 層上面で検出した土器を伴う小土壙である。東辺をＦ東側溝によって壊されている。推定で長径約 50cm、短径約 40cm の楕円形をなしており、深さが 20cm 程残存する。堆積土は路面堆積土に近似したしまりのある暗灰黄色土（2 層）と、これを掘り込んで堆積した炭化物を少量含むしまりのない黒褐色土（1 層）からなる。土器はロクロ調整の土師器長胴甕で、1 個体分のみが壊れた状態で 1 層中から出土している。

こうした層の堆積状況や土器の出土状況からみて、ＳＸ1207 は一度埋設された土器が掘り返されたものと推測される。道路存続時の他の遺構がいずれも道路と重複しない位置関係にあるのとは異なっており、また土壙の規模や土器の種類など道路検出の土器埋設遺構と共通した特徴が認められる。据え方や土器の埋設状況等についての詳細は不明であるが、土壙の規模から推測して、甕を単独に横位に埋設した南 1・西 1 道路に伴う土器埋設遺構の可能性が高い。

③南 2・西 0 道路検出の土器埋設遺構

【ＳＸ1893 土器埋設遺構】

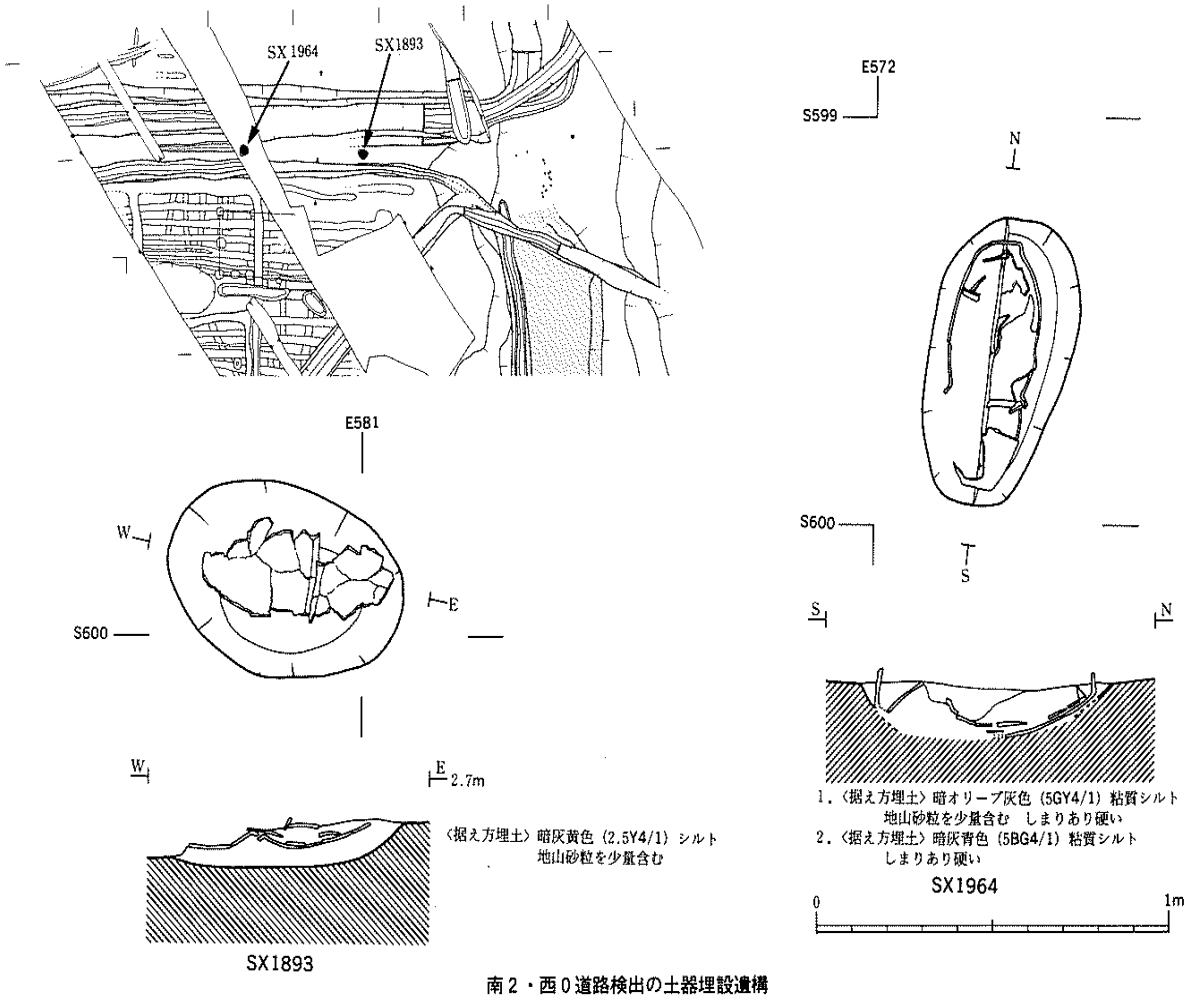
道路交差点、ＳＸ1900 東西道路跡の路面 4 層上面で検出した土器の埋設遺構である。ＳＸ1900Ｂ期以降の路面に伴うものとみられる。据え方は長径約 70cm、短径約 50cm、深さ 10cm 以上の断面形が浅い皿状をなす長楕円形の小土壙で、ロクロ調整の土師器長胴甕 2 個を合口にして、横位に埋設している。



北1・西3道路検出の土器埋設遺構

南1・西1道路検出の土器埋設遺構・土壙

第44図　道路検出の土器埋設遺構(1)



南2・西0道路検出の土器埋設遺構

第45図　道路検出の土器埋設遺構(2)

法量の小さい甕を上とみた土器の長軸方向は東で 5° 南に偏し、ほぼ真東方向を向いている。埋土は路面堆積土にきわめて近似した黄灰色土である。

【ＳＸ1964 土器埋設遺構】

道路交差点近くの、ＳＸ1900 東西道路跡の路面 4 層上面で検出した土器の埋設遺構である。Ａ北側溝埋没後の上面に位置しており、ＳＸ1900Ｂ以降の路面に伴うものとみられる。据え方は長径約 70cm、短径約 40cm、深さ 20cm 以上の断面形が浅い皿状をなす長楕円形の小土壙で、ロクロ調整の土師器長胴甕 2 個を合口にして、横位に埋設している。法量の小さい甕を上とみた土器の長軸方向は南で約 7° 西に偏し、ほぼ真南方向を向いている。埋土は地山砂粒を含む暗オリーブ灰色粘質土および暗青灰色粘質土である。

（註1）南1道路と南2道路の間で検出した東西道路跡であるが、道路の間隔をはじめ他の方格道路とは異なる基準で建設されたものとみられる。ここでは南1-2間道路と位置付けておく。こうした方格道路間の道路は八幡地区（北2-3間道路、佐藤・菅原：1991）や山王三区（大路南1間道路、千葉：1994ｂ）でも検出されているが、これらの施行基準や性格等については今のところ明らかではない。

（註2）東西大路以南で検出される南北大路の南延長と考えられるが、直接南北大路との関係が明らかではない現段階において西0道路と位置付けておく。

2．北１西４区

北をＳＸ4013 北 1 道路、東をＳＸ4014 西 3 道路に面した区画で、今回の調査区はその北東隅の部分にあたる。掘立柱建物跡 2 棟、溝跡 1 条を検出しているが、調査面積が狭く区画内の具体的な状況については不明である。

(1)掘立柱建物跡

【ＳＸ4087 掘立柱建物跡】（第46図）

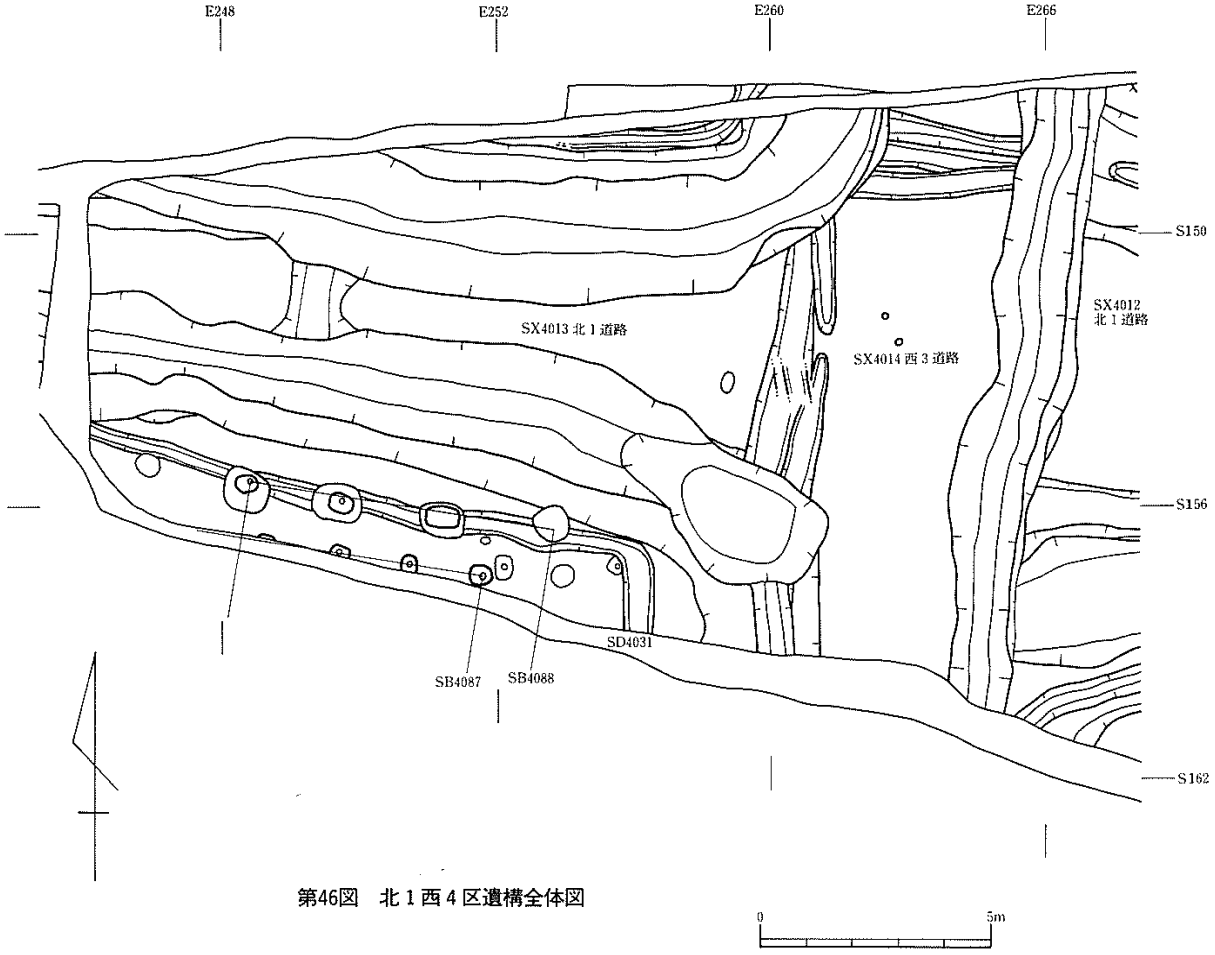
東西 3 間以上、南北 1 間以上の建物跡で、北側柱列のみ検出している。柱穴は地山面で 4 カ所検出し、すべての柱穴で柱痕跡を確認している。ＳＸ4088 掘立柱建物跡と重複しているが、新旧関係は不明である。

柱間寸法は、北側柱列で東より 1.62m・1.54m・1.65ｍである。方向は北側柱列でみると東で約 10 度南に偏している。柱穴は一辺 30～50Ａの隅丸方形で、柱痕跡は径 13～15cm の円形である。

遺物は掘り方埋土からロクロ調整の土師器の小破片が数片出土している。

【ＳＸ4088 掘立柱建物跡】（第46図）

東西 3 間、南北 1 間以上の建物跡で、北側柱列のみ検出している。柱穴は地山面で 4 カ所検出し、この中の 2 カ所で柱痕跡を確認している。ＳＢ4087 掘立柱建物跡、ＳＸ4013Ｅ南側溝、ＳＤ4031 溝跡と重



第46図　北１西４区遺構全体図

複し、ＳＸ4013Ｅ、ＳＤ4031より新しいが、ＳＢ4087については不明である。

柱間寸法は、北側柱列で東より約2.3m・約2.2m・2.08mである。方向は北側柱列でみると東で約10度南に偏している。柱穴は一辺 40～70cm の隅丸方形で、深さは 22～25cm 残存している。柱痕跡は径14cm前後の円形で、すべての柱穴で切り取りがみられる。

遺物は出土していない。

(2)溝跡

【ＳＸ4031溝跡】（第46図）

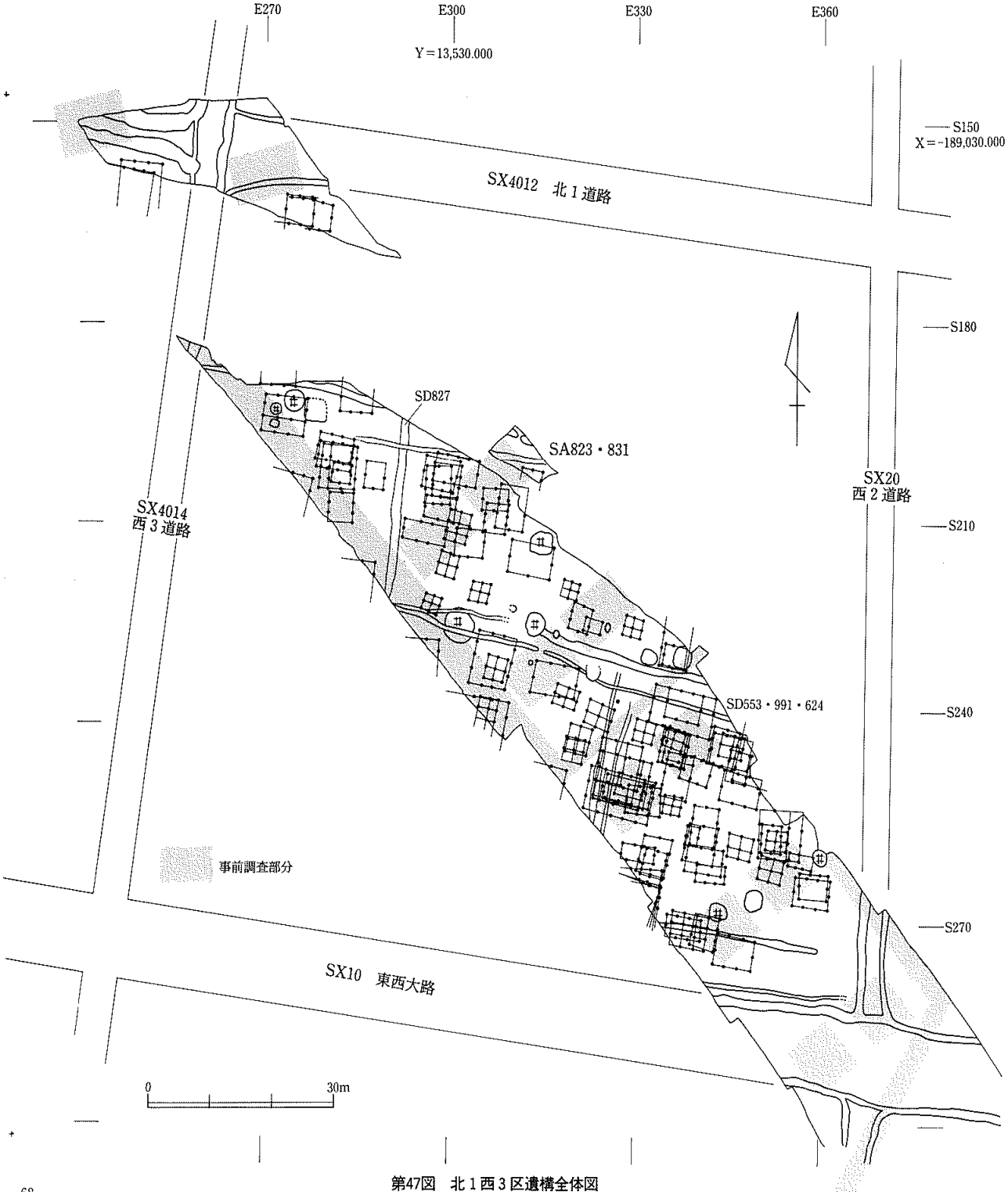
ＳＸ4013北1道路南側溝およびＳＸ4014西3道路西側溝に平行してＬ字状に巡る溝跡である。ＳＸ4040 整地層に覆われ、ＳＸ4013Ｅ南側溝よりも古いことから、ＳＸ4013・4014Ｄ以前に伴うものとみられる。また、ＳＢ4088掘立柱建物跡と重複し、これより古い。

検出長はコーナー部分から東西12m、南北1.5mで、上端幅0.4～0.7m、底面幅0.2～0.4mである。深さは10～16cmで、断面形は逆台形状を呈する。方向は検出長の長い東西方向で、東で約13度南に偏している。道路側溝との距離は堆積土は1層で、自然堆積土である。

遺物は堆積土からロクロ調整の土師器、須恵器、赤焼土器が数片出土している。

3．北1西3区

南をＳX10 東西大路、北をＳX4012 北 1 道路、東をＳX20 西 2 道路、西をＳX4014 西 3 道路に面した台形状の区画である。区画の規模は南北が約 124ｍで、東西が北辺で 105ｍ、南辺で約 120ｍ程と推定される。本区画は｛ＳA823 区画施設・ＳA831 材木塀跡｝および｛ＳD553・991・624 溝跡｝によって南北に三分され、ＳD827 溝跡によって東西に二分される。



第47図　北1西3区遺構全体図

今回の調査はおもにＳA823･831 以南の北西部から南東隅にわたっており、掘立柱建物跡、竪穴住居跡、井戸跡、土器埋設遺構、竪穴遺構、土壙、区画施設、材木塀跡、溝跡、小溝状遺構群などを多数検出した。これらの遺構は調査区全体にわたって分布しており、相互にかなりの重複が認められた。とくに、ＳD553・991・624 以南では遺構の密度が高く、三面廂付建物跡や総柱建物跡をはじめ、多数の掘立柱建物跡が重複して存在する。建物の方向はもとより、廂付建物跡にほぼ同位置での建て替えが認められることや総柱建物跡が棟を揃えて並んでいることなど、建物の配置には計画性が窺える。一方、ＳD553・991・624 以北はやや掘立柱建物跡の密度が低く、井戸跡や土壙、小溝状遺構などが目立つ。掘立柱建物跡は小規模なものが多く、また小溝状遺構群と前後して認められるなど、ＳD553・991・624 以南とは遺構の構成や土地利用のあり方に違いが認められる。

遺物は井戸跡や竪穴遺構、土壙を中心に、土師器、須恵器、赤焼土器をはじめ多様な遺物が数多く出土している。特筆すべきものとしては、輸入陶磁器や多量の灰釉・緑釉陶器、漆紙文書や木簡（題籤軸）などが出土している。

(1)掘立柱建物跡

94 棟検出した。このうち規模や構造が明らかなものは 79 棟で、廂付建物跡 9 棟、総柱建物跡 21 棟、桁行 3 間・梁行 2 間程の小規模な掘立柱建物跡 34 棟（東西棟19、南北棟15）などがある。建物の方向はいずれも北でやや東に偏しており、その触れは 10 度前後のものが多い。

【ＳB4084 掘立柱建物跡】（第104図）

調査区北端部に位置する東西 3 間以上、南北 2 間の建物跡である。柱穴は地山面で 7 ヶ所検出し、この中の 5 ヶ所で柱痕跡を確認している。ＳB4085 掘立柱建物跡、ＳＦ4032 小溝状遺構群と重複し、これらより古い。

北側柱列で柱間寸法が東より約 1.8ｍ･1.96ｍ、東側柱列で総長約 4.2ｍ、柱間寸法が北より約 2.1ｍ･1.99ｍである。方向は東側柱列でみると北で約 4 度南に偏している。柱穴は一辺 30～50㎝の隅丸方形で、深さは 5～14㎝残存している。柱痕跡は径 10～12㎝の円形である。

遺物は柱穴埋土から非ロクロ調整の土師器坏、調整不明の土師器甕が数片出土している。

【ＳB4085 掘立柱建物跡】（第104図）

調査区北端部に位置する東西 3 間以上、南北 2 間以上の建物跡である。柱穴は地山面で 4 ヶ所検出し、この中の 1 ヶ所で柱痕跡を確認している。ＳB4084 掘立柱建物跡、ＳX4012D南側溝、ＳＦ4032 小溝状遺構群と重複し、ＳB4084 より新しく、ＳX4012D、ＳＦ4032 より古い。

柱間寸法は、北側柱列で西より約 2.1ｍ、約 2.0ｍ、西側柱列で北より約 2.2ｍである。方向は北側柱列でみると東で約 5 度南に偏している。柱穴は一辺 30～55㎝の隅丸方形で、深さは 6㎝前後残存している。柱痕跡は確認できたもので径12㎝の円形である。

遺物は出土していない。

【ＳB4086 掘立柱建物跡】（第104図）

調査区北端部に位置する東西 3 間以上、南北 2 間の建物跡である。柱穴は地山面で 6 ヶ所検出し、この中の 3 ヶ所で柱痕跡を確認している。ＳB4084･4085 掘立柱建物跡と重複し、これらより新しい。

南側柱列で柱間寸法が東より約1.8m・約1.8m、東側柱列で総長3.86m、柱間寸法が北より1.84m・2.03mである。方向は東側柱列でみると北で約8度東に偏している。柱穴は一辺35～55cmの隅丸方形で、深さは6～11cm残存している。柱痕跡は径12～15cmの円形である。

遺物は柱穴埋土から調整不明の土師器甕が数片出土している。

【ＳＢ934掘立柱建物跡】（第48･106図）

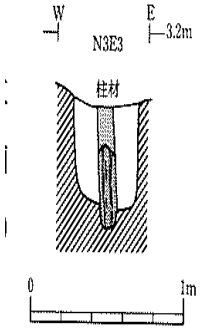
調査区北西部に位置する東西3間、南北2間以上の建物跡で、北半部は調査区外になる。柱穴は地山面で5ヶ所検出し、この中の1ヶ所で柱痕跡を確認している。ＳＡ823Ｆ区画施設、ＳＤ907溝跡、ＳＦ824小溝状遺構群と重複し、これらよりも古い。

平面規模は南側柱列で総長約5.1m、柱間寸法が西より約1.7m・約1.8m・約1.7m、西側柱列で南より約2.3mである。方向は南側柱列でみると東で約4度南に偏している。柱穴は一辺50～65cmの隅丸方形で、柱痕跡は確認できたもので径15cmの円形である。

遺物は出土していない。

【ＳＢ859掘立柱建物跡】（第48･49･105図）

調査区北西部に位置する東西3間、南北3間の南廂付の東西棟で、ＳＢ925掘立柱建物跡と柱筋をほぼ揃える。柱穴は地山面で検出し、この中の身舎7ヶ所、廂3ヶ所で柱痕跡を確認している。ＳＩ822竪穴住居跡、ＳＥ821･892井戸跡、ＳＫ820土壙、ＳＤ907溝跡と重複し、ＳＩ822、ＳＥ892より新しく、ＳＤ907より古いが、ＳＥ821、ＳＫ820との新旧関係は不明である。



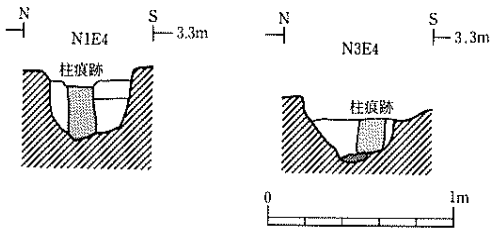
第49図　SB859柱穴断面図

平面規模は桁行が北側柱列で総長6.83m、柱間寸法が西より2.04m・4.80m（2間分）、南入側柱列で総長約6.9m、柱間寸法が西より2.37m・2.20m・約2.4m、梁行が西側柱列で総長5.55m、柱間寸法が北より1.42m・1.79m、廂の出は2.34mである。方向は北側柱列でみると東で約6度南に偏している。柱穴は一辺35～70cmの隅丸方形で、長方形のものもある。深さは24～54cm残存している。柱痕跡は径10～15cmの円形で、身舎3カ所で柱材が遺存している。1カ所で柱の抜き取りがみられる。

遺物は柱穴埋土から土師器、須恵器、瓦が出土している。土師器坏はロクロ調整のものが多く、底部は回転糸切り無調整が主体となる。須恵器坏は底部が回転糸切り無調整や手持ちヘラケズリが施されるものがみられる。

【ＳＢ895掘立柱建物跡】（第48･50･106図）

調査区北西部に位置する東西3間、南北2間の東西棟である。柱穴は地山面で検出し、すべての柱穴で柱痕跡を確認している。ＳＢ925･927･928掘立柱建物跡、ＳＤ906溝跡、ＳＦ824小溝状遺構群と重複し、ＳＢ906、ＳＦ824より古いが、ＳＢ925･927･928との新旧関係は不明である。



第50図　SB895柱穴断面図

平面規模は桁行が南側柱列で総長5.65m、柱間寸法が西より2.02m・1.78m・1.85m、梁行が西妻で総長4.03m、柱間寸法が北より1.96m・2.07mである。

第48図　北1西3区建物跡平面図(1)

方向は南側柱列でみると東で約10度南に偏している。柱穴は一辺 36～51cm の隅丸方形で、深さは 24～48cm 残存しており、1 カ所の柱穴に礎板が据えられている。柱痕跡は径 12～18cm の円形である。

遺物は柱穴埋土からロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏・甕が少量出土している。

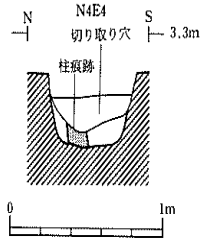
【ＳＢ927 掘立柱建物跡】（第48･105図）

調査区北西部に位置する東西 3 間、南北 2 間の東西棟である。柱穴は地山面で検出した。ＳＢ895・925･928 掘立柱建物跡、ＳＤ906 溝跡、ＳＦ824 小溝状遺構群と重複し、ＳＢ895･925、ＳＤ906、ＳＦ824 より新しいが、ＳＢ928 との新旧関係は不明である。

平面規模および柱間寸法は、柱がすべて抜き取られているため正確には測り得ないが、抜き取り穴の中心で推定すると、桁行が南側柱列で総長約 5.6m、柱間寸法が西より約 1.9m・約 1.7m・約 2.0m、梁行が西側柱列で総長約 3.9m、柱間寸法が北より約 2.0m･約 1.9mである。方向は南側柱列でみると東で約 8 度南に偏している。柱穴の規模等は不明であるが、抜き取り穴は径 30～70cm の楕円形か不整形で、深さは 30～48cm である。

遺物は出土していない。

【ＳＢ925 掘立柱建物跡】（第48･51･105図）



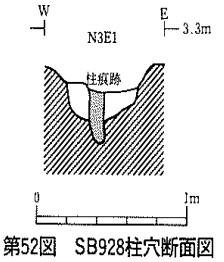
第51図　SB925柱穴断面図

調査区北西部に位置する南北 4 間、東西 3 間の西廂付の南北棟で、北妻より 1 間に間仕切りをもつ。ＳＢ859 掘立柱建物と柱筋をほぼ揃える。柱穴は地山面で検出し、この中の身舎 9 ヶ所、廂 4 ヶ所で柱痕跡を確認している。ＳＢ895・927・928･936 掘立柱建物跡、ＳＢ906 溝跡、ＳＦ824 小溝状遺群と重複し、ＳＢ928･936、ＳＤ906、ＳＦ824 より古いが、ＳＢ895・928 との新旧関係は不明である。

平面規模は桁行が西入側柱列で総長 6.75m、柱間寸法が北より 1.79m･3.49m (2 間分)･1.48m、梁行が南妻で総長が約 5.7m、柱間寸法が西より 2.22m･約 2.0m、廂のでは 1.45m である。方向は西入側柱列でみると北で約 5 度東に偏している。柱穴は身舎、廂とも一辺 45～70cm の隅丸方形で、深さは 25～51cm 残存している。柱痕跡は径 12～20cm の円形で、身舎 2 カ所で柱材が遺存している。また廂 1 カ所で抜き取りがみられる。間仕切りの柱穴は一辺 40cm の隅丸方形で、深さ 30cm 残存しており、径 10cm の柱材が遺存している。

遺物は柱穴埋土から底部に回転ヘラケズリが施される須恵器坏が出土している。

【ＳＢ928 掘立柱建物跡】（第48･52･105図）



第52図　SB928柱穴断面図

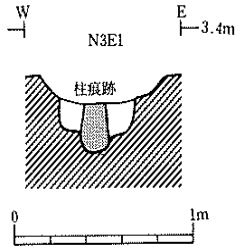
調査区北西部に位置する東西 2 間、南北 2 間の建物跡である。柱穴は地山面で検出し、この中の 6 ヶ所で柱痕跡を確認している。ＳＢ895・925・927 掘立柱建物跡、ＳＤ906 溝跡と重複しているが、これらとは直接の切り合いがないため新旧関係は不明である。

平面規模は北側柱列で総長 2.91m、柱間寸法が西より 1.43m･1.49m、東側柱列で総長 2.81m、柱間寸法が北より 1.62m･1.20mである。方向は南側柱列でみると東で約 6 度南に偏している。柱穴は一辺 30～60cm の隅丸方形で、深さは 14～40cm 残存している。柱痕跡は径 12～16cm の円形で、1 カ所で柱材が残存している。

遺物は柱穴埋土から調整不明の土師器甕、須恵器甕が数片出土している。

【ＳＢ909 掘立柱建物跡】（第53･106図）

調査区北西部に位置する南北 2 間、東西 2 間の南北棟で、北東部は撹乱に壊されている。柱穴は地山面で 6 ヶ所検出し、この中の 3 ヶ所で柱痕跡を確認している。ＳＫ836 土壙と重複し、これよりも古い。



第53図　SB909柱穴断面図

平面規模は桁行が西側柱列で総長 4.0m、柱間寸法が北より約 2.2m･約 1.8m、梁行が南妻で総長 3.13m、柱間寸法が西より 1.45m･1.68m である。方向は南側柱列でみると東で約 5 度南に偏している。柱穴は一辺 45～55cm の隅丸方形で、深さは 16～28cm 残存している。柱痕跡は径 15cm 前後の円形である。

遺物は出土していない。

【ＳＢ936 掘立柱建物跡】（第48･54･105･106図）

調査区北西部に位置する南北 3 間、東西 2 間の南北棟で、南西隅は調査区外になる。柱穴は地山面で 8 ヶ所で検出し、この中の 3 ヶ所で柱痕跡を確認している。ＳＢ925 掘立柱建物跡、ＳＤ905・906・938 溝跡と重複し、ＳＢ925、ＳＤ906 より新しく、ＳＤ938 より古いが、ＳＤ905 との新旧関係は不明である。

第54図　SB936柱穴断面図

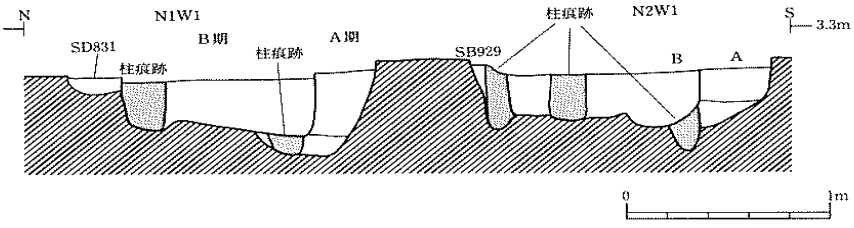
平面規模は桁行が東側柱列で総長約 4.3m、柱間寸法が北より約 1.5m･約 1.3m･約 1.5m、梁行が北妻で総長約 3.8m、柱間寸法が西より約 2.1m･約 1.7m である。方向は東側柱列でみると北で約 4 度東に偏している。柱穴は一辺 35～50cm の隅丸方形で、深さは 14～34cm 残存している。柱痕跡は径 14～20cm の円形である。

遺物は出土していない。

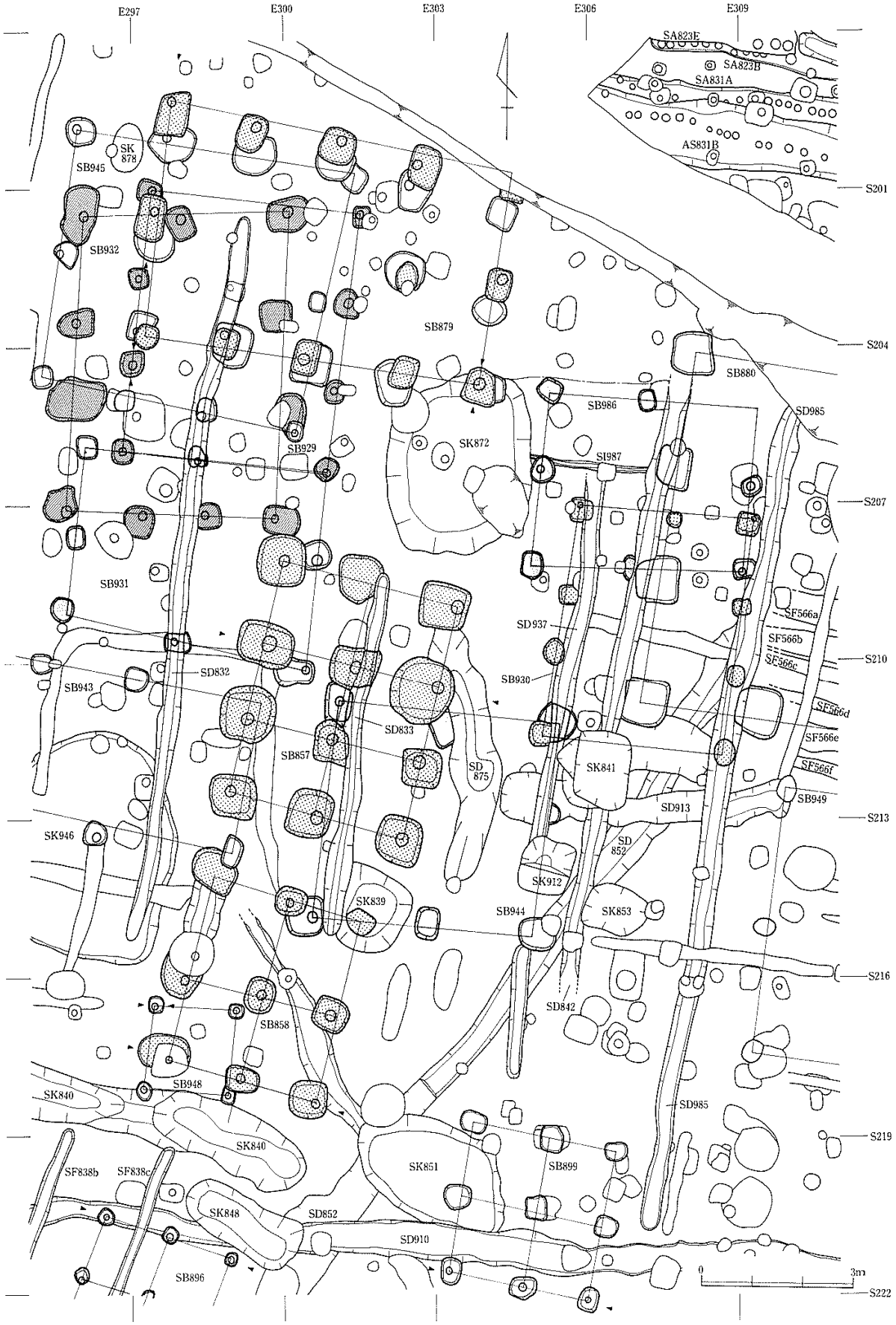
【ＳＢ879 掘立柱建物跡】（第55･56･106図）

調査区中央北寄りに位置する東西 4 間、南北 2 間の東妻より 1 間に間仕切りをもつ東西棟で、ほぼ同位置での建て替えが認められる（ＳＢ879Ａ→Ｂ）。柱穴は地山面で検出した。ＳＢ929･932･945 掘立柱建物跡、ＳＫ872 土壙、ＳＡ831 Ｂ材木塀跡跡、ＳＤ832 溝跡と重複し、ＳＢ929･932･945、ＳＫ872、ＳＡ831 より新しく、ＳＤ832 より古い。

ＳＢ879Ａはすべて柱穴を検出し、この中の 4 ヶ所で柱痕跡を確認している。平面規模は後続するＳＢ879Ｂとほぼ同規模であるが、梁行がやや短く、西妻で総長 3.71m、柱間寸法が北より 1.89m･1.82m である。柱穴は一辺 55～85cm の隅丸方形で、深さは 30～60cm 残存している。柱痕跡は確認できたものでは径 15～18cm の円形である。



第55図　SB879柱穴断面図



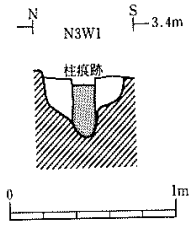
第56図　北１西３区建物跡平面図(2)

ＳＢ879Ｂはすべて柱穴を検出し、この中の９ヶ所で柱痕跡を確認している。平面規模は桁行が北側柱列で総長約 7.0m、柱間寸法が西より 1.75m・1.66m・1.59m・約 2.0m、南側柱列で総長約 6.8m、柱間寸法が西より約 1.7m・1.62m・3.53m（2 間分）である。また梁行が西妻で総長約 4.4m、柱間寸法が北より 2.11m・約 2.3mで、北側柱列がＳＢ879Ａよりやや北に大きくなる。方向は南側柱列でみると東で約９度南に偏している。柱穴は一辺 50～80cm の隅丸方形で、深さは 18～46cm 残存している。柱痕跡は径 16～18cm の円形である。間仕切りの柱穴は径 45～60cm の楕円形で、深さは 30cm である。

遺物は柱穴埋土から土師器坏・甕、須恵器坏・甕、瓦などが少量出土している。須恵器坏は底部がヘラ切り無調整のものと回転糸切り無調整のものが出土している。

【ＳＢ929 掘立柱建物跡】（第56･57･106 図）

調査区中央北寄りに位置する南北３間、東西１間の南北棟である。柱穴は地山面で検出し、すべての柱穴で柱痕跡を確認している。ＳＢ879・931・932・945 掘立柱建物跡、ＳＤ832 溝跡と重複し、ＳＢ879、ＳＤ832 より古く、ＳＢ931 より新しいが、ＳＢ932・945 との新旧関係は不明である。



第57図　SB929柱穴断面図

平面規模は桁行が西側柱列で総長 5.00m、柱間寸法が北より 1.70m・1.65m・1.65m、梁行が北側柱列で 4.13mである。方向は西側柱列でみると北で約 7 度東に偏している。柱穴は一辺 40～50cm の隅丸方形で、深さは 24～36cm 残存している。柱痕跡は径 13～16cm の円形である。

遺物は出土していない。

【ＳＢ945 掘立柱建物跡】（第56･106 図）

調査区中央北寄りに位置する東西３間、南北２間の東西棟である。柱穴は地山面で８ヶ所検出し、この中の４ヶ所で柱痕跡を確認している。ＳＢ879･929･932 掘立柱建物跡、ＳＫ826・878 土壙、ＳＤ832 溝跡と重複し、ＳＢ932、ＳＫ826 より新しく、ＳＢ879、ＳＤ832 より古いが、ＳＢ929、ＳＫ878 との新旧関係は不明である。

平面規模は桁行が南側柱列で総長約 5.0m、柱間寸法が西より約 1.6m・約 1.6m・1.81m、梁行が西妻で総長約 4.8m、柱間寸法が北より 2.38m・約 2.4mである。方向は北側柱列でみると東で約８度南に、南側柱列でみると東で約 12 度南に偏しており、やや歪んだ建物跡である。柱穴は一辺 40～60cm の隅丸方形である。柱痕跡は径 14～16cm の円形である。

遺物は出土していない。

【ＳＢ932 掘立柱建物跡】（第56･106 図）

調査区中央北寄りに位置する南北３間、東西が北妻で２間、南妻で３間の南北棟である。柱穴は地山面で検出し、この中の８ヶ所で柱痕跡を確認している。ＳＢ857･879･931･945 掘立柱建物跡、ＳＤ832 溝跡と重複し、ＳＢ857・879・945、ＳＤ832 より古いが、ＳＢ931 との新旧関係は不明である。

平面規模は桁行が西側柱列で総長 5.63m、柱間寸法が北より 2.03m・3.61m（2 間分）である。また梁行が北妻で総長 4.02m、柱間寸法が西より 1.94m・2.08m、南妻で総長 4.16m、柱間寸法が西より 1.52m・1.24m・1.40mである。方向は西側柱列でみると北で約４度東に偏している。柱穴は 50～80cm の

隅丸方形で、柱痕跡は15～20cmの円形である。

遺物は出土していない。

【ＳＢ931掘立柱建物跡】（第56･106図）

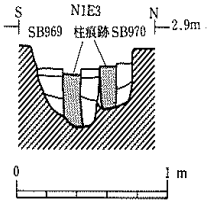
調査区中央北寄りに位置する東西2間、南北2間の東西棟である。柱穴は地山面で検出し、この中の4ヶ所で柱痕跡を確認している。ＳＢ857・929・932掘立柱建物跡、ＳＤ832溝跡と重複し、ＳＢ857・929、ＳＤ832より古いが、ＳＢ932との新旧関係は不明である。

平面規模は桁行が南側柱列で総長約4.9m、柱間寸法が西より約2.3m･2.60m、梁行が西妻で総長約3.2m、柱間寸法が北より約1.6m･約1.6mである。方向は南側柱列でみると東で約11度南に偏している。柱穴は一辺35～70cmの隅丸方形で、柱痕跡は径14～19cmの円形である。

遺物は出土していない。

【ＳＢ969掘立柱建物跡】（第58･107図）

調査区中央北寄りに位置する東西2間、南北2間以上の建物跡で、南半部は調査区外または撹乱によって壊されている。柱穴は地山面で4ヶ所検出し、柱痕跡も確認している。ＳＢ970掘立柱建物跡、ＳＤ852溝跡と重複し、これらよりも新しい。



第58図　SB969・970柱穴断面図

平面規模は北側柱列で総長3.38m、柱間寸法が西より1.69m･1.70m、東側柱列で1.44mである。方向は北側柱列でみると東で約11度南に偏している。柱穴は一辺40～45cmの隅丸方形で、深さは36～46cm残存している。北側柱列の3ヶ所の柱穴に礎板が据えられている。柱痕跡は径12～15cmの円形である。なお、ＳＢ970とは北側柱列がほぼ同位置で重複しており、建て替え（ＳＢ969→ＳＢ970）の可能性も考えられる。

遺物は柱穴埋土からロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏・甕、瓦片が数片出土している。

【ＳＢ970掘立柱建物跡】（第58･107図）

調査区中央北寄りに位置する東西2間で南に延びる建物跡と考えられ、南半部は調査区外または撹乱によって壊されている。柱穴は地山面で3ヶ所検出し、この中の2ヶ所で柱痕跡を確認している。ＳＢ969掘立柱建物跡、ＳＤ501・852溝跡と重複し、ＳＤ852より新しく、ＳＢ969、ＳＤ501より古い。

平面規模は北側柱列で総長約3.3m、柱間寸法が西より1.61m･約1.8mである。方向は北側柱列でみると東で約12度南に偏している。柱穴は一辺50cm前後の隅丸方形で、深さは32～42cm残存している。柱痕跡は径13～15cmの円形である。なお、ＳＢ969とは北側柱列がほぼ同位置で重複しており、建て替え（ＳＢ969→ＳＢ970）の可能性も考えられる。

遺物は柱穴埋土からロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏・甕・壷が数片出土している。

【ＳＢ880掘立柱建物跡】（第56･107図）

調査区中央北寄りに位置する南北3間、東西2間の南北棟で、北東部は調査区外及び撹乱によって壊されている。柱穴は地山面で7ヶ所検出したが、柱痕跡は確認していない。ＳＢ930･986掘立柱建物跡、ＳＤ842・985溝跡、ＳＦ566小溝状遺構群と重複し、ＳＢ930･986より新しく、ＳＤ842・985、ＳＦ566より古い。

平面規模は桁行が総長約 6.7m、柱間寸法が約 2.2～2.3m、梁行が総長約 4.2m、柱間寸法が約 2.0～2.2mである。方向は西側柱列でみると北で約 7 度東に偏している。柱穴は一辺 70～95cm の隅丸方形である。

遺物は柱穴埋土からロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏・甕・壺が数片出土している。

【ＳＢ986 掘立柱建物跡】（第56･107図）

調査区中央北寄りに位置する東西 2 間、南北 2 間の東西棟である。柱穴は地山面で 7 ヶ所検出し、この中の 3 ヶ所で柱痕跡を確認している。ＳＢ880･930 掘立柱建物跡、ＳＩ987 竪穴住居跡、ＳＫ872 土壙、ＳＤ837・842・852・985 溝跡と重複し、ＳＩ987、ＳＫ872、ＳＤ852 より新しく、ＳＢ880、ＳＤ842・985 より古いが、ＳＢ930、ＳＤ837 との新旧関係は不明である。

平面規模は桁行が南側柱列で総長約 4.2m、柱間寸法が西より約 2.1m･約 2.1m、梁行が西妻で総長約 3.2m、柱間寸法が北より約 1.5m･約 1.7mである。方向は南側柱列でみると東で約 3 度南に偏している。柱穴は一辺 35～50cm の隅丸方形で、柱痕跡は径 14～16cm の円形である。

遺物は出土していない。

【ＳＢ930 掘立柱建物跡】（第56･107図）

調査区中央北寄りに位置する南北 3 間、東西 2 間の南北棟である。柱穴は地山面で 9 ヶ所検出し、この中の 3 ヶ所で柱痕跡を確認している。ＳＢ880･944･986 掘立柱建物跡、ＳＫ841 土壙、ＳＤ837･842･852･985 溝跡と重複し、ＳＢ944、ＳＤ852 より新しく、ＳＢ880、ＳＤ837・842・985 より古いが、ＳＢ986、ＳＫ841 との新旧関係は不明である。

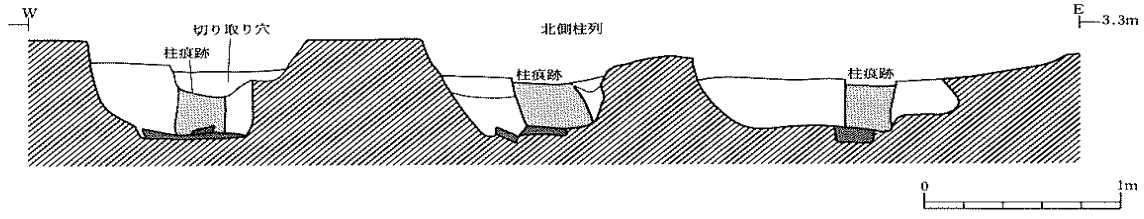
平面規模は桁行が西側柱列で総長 4.53m、柱間寸法が北より約 1.7m･約 1.2m･約 1.7m、梁行が北妻で総長 3.51m、柱間寸法が西より約 1.9m･約 1.6mである。方向は西側柱列でみると北で約 10 度東に偏している。柱穴は一辺 40～50cm の隅丸方形で、深さは 22～42cm 残存している。柱痕跡は径 10cm 前後の円形で、1 カ所で柱の抜き取りがみられる。

遺物は柱穴埋土からロクロ調整の土師器甕、須恵器坏が数片出土している。

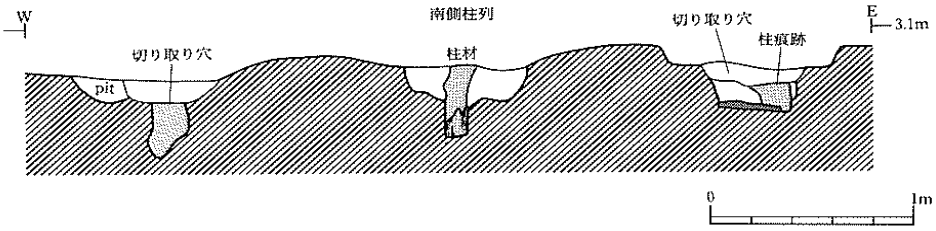
【ＳＢ857 掘立柱建物跡】（第56･59･106図）

調査区中央北寄りに位置する南北 3 間、東西 2 間の総柱建物跡である。ＳＢ858･896 掘立柱建物跡と柱筋を揃えて南北に並んでいる。柱穴は地山面で検出し、この中の 11 ヶ所で柱痕跡を確認している。ＳＢ931・932・943・944 掘立柱建物跡、ＳＤ833・875 溝跡と重複し、ＳＢ931・932・944、ＳＤ875 より新しく、ＳＢ943、ＳＤ833 より古い。

平面規模は桁行が西側柱列で総長 4.52m、柱間寸法が北より 1.61m･1.52m･1.40m、梁行が南側柱



第59図　SB857柱穴断面図



第60図　SB858柱穴断面図

列で総長 3.48m、柱間寸法が西より 1.73m・1.75mである。方向は西側柱列でみると北で約 14 度東に偏している。柱穴は一辺 70～110cm の隅丸方形で、深さは 36～80cm 残存しており、8 ヶ所の柱穴に礎板が据えられている。柱痕跡は径 20～30cm の円形で、1 カ所で柱材が遺存している。また 4 ヶ所で柱の切り取りがみられる。

遺物は柱穴埋土から土師器、須恵器、製塩土器、瓦が出土している。坏類は土師器坏が多く、土師器坏はロクロ調整で、底部は回転糸切り無調整のものと手持ちヘラケズリが施されるものが多い。須恵器坏は底部がヘラ切り無調整のものが多い。また切り取り穴からは赤焼土器坏が出土している。

【ＳＢ858 掘立柱建物跡】（第56･60･106 図）

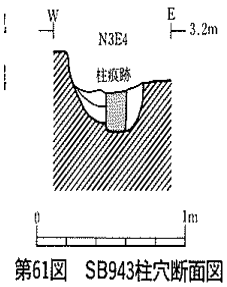
調査区中央北寄りに位置する南北 2 間、東西 2 間の総柱建物跡である。ＳＢ857･896 掘立柱建物跡と柱筋を揃えて南北に並んでいる。柱穴は地山面で検出し、この中の 9 ヶ所で柱痕跡を確認している。ＳＢ943・944・948 掘立柱建物跡、ＳＫ839 土壙と重複し、ＳＢ944・948 より新しく、ＳＢ943、ＳＫ839 より古い。

平面規模は西側柱列で総長約 3.5m、柱間寸法が北より約 1.9m・1.54m、南側柱列で総長 3.00m、西より 1.46m・1.54mである。方向は南側柱列でみると東で約 16 度南に偏している。柱穴は一辺 60～100cm の隅丸方形であるが、西側柱列の北から 1 間分は布掘り状を呈している。深さは 24～38cm 残存しており、3 ヶ所の柱穴に礎板が据えられている。柱痕跡は径 15～20cm の円形で、2 カ所で柱材が遺存している。また 6 ヶ所で柱の切り取りがみられる。

遺物は柱穴埋土から土師器、須恵器、製塩土器、平瓦が出土している。土師器坏はすべてロクロ調整で、底部に再調整（手持ちヘラケズリ・回転ヘラケズリ）が施されるものが主体となる。須恵器坏は底部がヘラ切り無調整のものが多く見られる。なお、ＳＢ863 掘立柱建物跡と接合する土師器坏が出土している。

【ＳＢ943 掘立柱建物跡】（第56･106 図）

調査区中央北寄りに位置する東西 3 間、南北 2 間の東西棟である。柱穴は地山面で 8 ヶ所検出し、この中の 5 ヶ所で柱痕跡を確認している。ＳＢ857･858 掘立柱建物跡、ＳＫ946 土壙、ＳＤ832・882 溝跡と重複し、ＳＢ857・858、ＳＫ946 より新しいが、ＳＤ832・882 との新旧関係は不明である。



第61図　SB943柱穴断面図

平面規模は桁行が南側柱列で総長約 6.8m、柱間寸法が西より 2.32m・1.78m・約 2.7m、梁行が西妻で総長 2.96m、柱間寸法が北より 1.60m・1.36mである。方向は南側柱列でみると東で約12度南に偏している。柱穴は一辺 35～50cm の隅丸方形で、不整形を呈

するものもある。深さは 15～34cm 残存している。柱痕跡は径 10～20cm の円形で、1 カ所で柱の抜き取りがみられる。

遺物は柱穴埋土からロクロ調整の土師器坏、調整不明の土師器甕が数片出土している。

【ＳＢ944 掘立柱建物跡】（第56･106･109図）

調査区中央北寄りに位置する東西 2 間、南北 2 間の建物跡である。柱穴は地山面で 7 ヶ所検出し、この中の 2 ヶ所で柱痕跡を確認している。ＳＢ857･858･930 掘立柱建物跡、ＳＫ839･912 土壙、ＳＤ833･837･852･875･913 溝跡と重複し、ＳＤ852・913 より新しく、ＳＢ857･858･930、ＳＫ912、ＳＤ833･837･875 より古いが、ＳＫ839 との新旧関係は不明である。

平面規模は南側柱列で総長約 4.5m、柱間寸法が西より約 2.2m・約 2.3m、東側柱列で総長約 4.2m、柱間寸法が北より約 1.9m･約 2.3mである。方向は西側柱列でみると北で約 8 度東に偏している。柱穴は一辺 50～80cmの隅丸方形で、深さは24～42cm残存しており、1カ所の柱穴に礎板が据えられている。柱痕跡は確認できたもので径 20cm の円形である。また 1 カ所で柱の抜き取りがみられる。

遺物は柱穴埋土から内外両面にヘラミガキ・黒色処理を施した土師器坏が出土している。

【ＳＢ949 建物跡】（第56･107図）

調査区中央北寄りに位置する東西 2 間、南北 2 間の東西棟である。柱穴は基本層位Ⅲａ層上面および地山面で 7 ヶ所検出しているが、いずれも柱痕跡は認められなかった。ＳＥ950 井戸跡、ＳＫ511･518･519 土壙、ＳＤ501･913 溝跡、ＳＦ566 小溝状遺構群と重複し、ＳＤ913 より新しく、ＳＫ511、ＳＤ501 より古いが、ＳＥ950、ＳＫ518・519、ＳＦ566 との新旧関係は不要である。

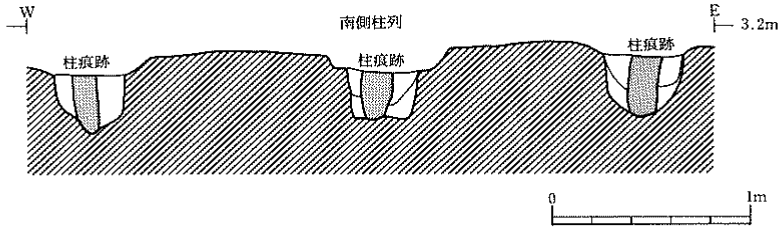
平面規模は柱穴の中心で推定すると、桁行が南側柱列で総長約 6.9m、柱間寸法が西より約 3.4m･約 3.5m、梁行が東妻で総長約 4.9m、柱間寸法が北より約 2.5m･約 2.4mである。方向は南側柱列でみると東で約 7 度南に偏している。柱穴は径 30～80cm の楕円形で、底面が皿状を呈しており、柱の抜き取り穴の可能性も否定できないが、建物規模や柱間寸法からみて、礎石建物の据え穴の可能性も考えられる。深さは 20～32cm 残存し、埋土には灰白色火山灰ブロックが混入している。

遺物は柱穴埋土からロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏が数片出土している。

【ＳＢ899 掘立柱建物跡】（第 56･62･106･108 図）

調査区中央北寄りに位置する東西 2 間、南北 2 間の総柱建物跡である。柱穴は地山面で検出し、この中の 3 ヶ所で柱痕跡を確認している。ＳＫ851 土壙、ＳＤ910 溝跡と重複し、これらよりも新しい。

平面規模は南側柱列で総長 2.81m、柱間寸法が面より 1.48m・1.34m、西側柱列で総長約 2.8m、柱間寸法が北より約 1.4m・約 1.4mである。方向は南側柱列でみると東で約11度南に偏している。柱穴



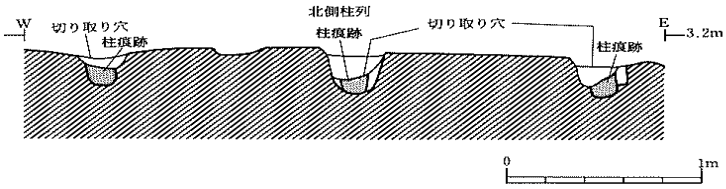
第62図　SB899柱穴断面図

は一辺 40～50cm の隅丸方形で、深さは 36～38cm 残存している。柱痕跡は径 12～16cm の円形である。

遺物は柱穴埋土から調整不明の土師器坏、ロクロ調整の土師器甕が数片出土している。

【ＳＢ896 掘立柱建物跡】（第 56･63･108 図）

調査区中央北寄りに位置する東西 2 間、南北 2 間の総柱建物跡である。ＳＢ857･858 掘立柱建物跡と柱筋を揃えて南北に並んでいる。柱穴は地山面で検出し、すべての柱穴で柱痕跡を確認している。ＳＤ852･870･910 溝跡、ＳＦ838 小溝状遺構群と重複し、ＳＤ852・870・910 より新しいが、ＳＦ838 との新旧関係は不明である。



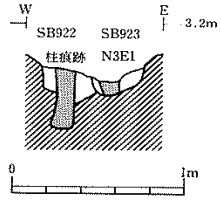
第63図　SB896柱穴断面図

平面規模は北側柱列で総長 2.63m、柱間寸法が西より 1.32m･1.31m、東側柱列で総長 2.63m、柱間寸法が北より 1.20m・1.43mである。方向は北側柱列でみると東で約18度南に、南側柱列でみると東で約 24 度南に偏しており、やや歪んだ建物跡である。柱穴は一辺 25～35cm の隅丸方形で、深さは 24～30cm 残存している。柱痕跡は径 12～15cm の円形で、4 ヶ所で柱の抜き取りがみられる。

遺物は柱穴埋土から調整不明の土師器坏、非ロクロ調整の土師器甕、須恵器坏・高台盤・甕が少量出土している。

【ＳＢ923 掘立柱建物跡】（第64･107･109図）

調査区中央北寄りに位置する東西 2 間、南北 2 間の総柱建物跡である。柱穴は基本層位Ⅲａ層上面で 7 ヶ所検出し、この中の 6 ヶ所で柱痕跡を確認している。ＳＢ922 掘立柱建物跡、ＳＫ512 土壙、ＳＤ802 溝跡と重複し、ＳＢ922、ＳＤ802 より新しく、ＳＫ512 より古い。



第64図　SB923柱穴断面図

平面規模は東側柱列で総長 2.53m、柱間寸法が北より 1.02m･1.51m、北側柱列で総長約 2.5m、柱間寸法が西より約 1.4m･1.23mである。方向は東側柱列でみると北で約 8 度東に偏している。柱穴は一辺 35～65cm のややゆがんだ隅丸方形で、深さは 22～36cm 残存している。柱痕跡は径 10～15cm の円形で、2 カ所で柱材が遺存している。

遺物は柱穴埋土から調整不明の土師器甕、底部がヘラ切り無調整の須恵器坏、須恵器壺が数片出土している。

【ＳＢ922 掘立柱建物跡】（第109図）

調査区中央北寄りに位置する南北 3 間、東西 2 間の南北棟である。柱穴は基本層位Ⅲａ層上面で 9 ヶ所検出し、この中の 5 ヶ所で柱痕跡を確認している。ＳＢ923 掘立柱建物跡、ＳＫ793 土壙、ＳＤ578 溝跡、ＳＦ580 小溝状遺構群と重複し、ＳＢ923、ＳＤ578、ＳＦ580 より古いが、ＳＫ793 との新旧関係は不明である。

平面規模は桁行が西側柱列で総長約 4.0m、柱間寸法が北より 1.45m･1.25m･約 1.3m、梁行が南妻で総長約3.3m、柱間寸法が西より約1.7m･1.56mである。方向は西側柱列でみると北で約15度東に偏している。柱穴は一辺 35～60cm の隅丸方形で、深さは 25～32cm 残存している。柱痕跡は径 12～15cm

の円形である。

遺物は出土していない。

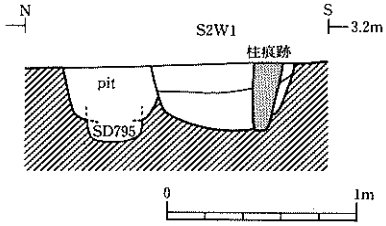
【ＳＢ924 掘立柱建物跡】（第109図）

調査区中央北寄りに位置する東西 3 間、南北 2 間の東西棟である。柱穴は基本層位Ⅲａ層上面で 6 ヶ所検出し、この中の 2 ヶ所で柱痕跡を確認している。ＳＢ922 掘立柱建物跡、ＳＫ793 土壙、ＳＦ580 小溝状遺構群と重複し、ＳＫ793 より新しく、ＳＦ580 より古いが、ＳＢ922 との新旧関係は不明である。

平面規模は桁行が北側柱列で総長約 2.9m、柱間寸法が西より約 1.9m（2 間分）・約 1m、梁行が西側柱列で総長約 2m、柱間寸法が北より約 1.1m・約 0.9mである。方向は東側柱列でみると北で約14度東に偏している。柱穴は一辺 35～45cm の隅丸方形で、深さは 24～49cm 残存している。柱痕跡は径 14～20cm の円形である。

遺物は出土していない。

【ＳＢ765 掘立柱建物跡】（第65･110図）



第65図　SB765柱穴断面図

調査区中央北寄りに位置する南北 3 間以上、東西 2 間の南北棟で、北半部は調査区外になる。柱穴は地山面で 5 ヶ所検出し、この中の 4 ヶ所で柱痕跡を確認している。ＳＢ490 掘立柱建物跡、ＳＫ560･606･796 土壙、ＳＤ605･795 溝跡と重複し、ＳＢ490 より新しく、ＳＫ560･796、ＳＤ605 より古いが、ＳＫ606、ＳＤ795 との新旧関係は不明である。

平面規模は梁行が南側柱列で総長 4.5m、柱間寸法が西より 2.22m・約 2.3m、桁行の柱間寸法が西側柱列で南より 2.51m・2.50mである。方向は西側柱列でみると北で約 9 度東に偏している。柱穴は一辺 40～90cm の隅丸方形で、深さは 30～48cm 残存している。柱痕跡は径 14～16cm の円形である。

遺物は柱痕跡から土師器甕、須恵器甕が数片出土している。

【ＳＢ490 掘立柱建物跡】（第110図）

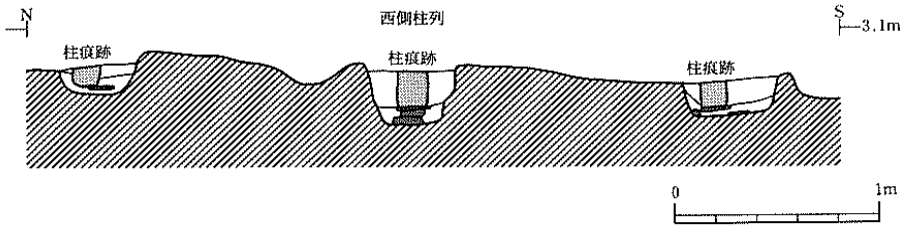
調査区中央北寄りに位置する東西 3 間、南北 2 間の東西棟で、北東部はＳＫ560 土壙に壊されている。柱穴は地山面で 7 ヶ所検出し、この中の 3 ヶ所で柱痕跡を確認している。ＳＢ765 掘立柱建物跡、ＳＫ560･606 土壙、ＳＤ795 溝跡と重複し、ＳＢ765、ＳＫ560･606 より古いが、ＳＤ795 との新旧関係は不明である。

平面規模は桁行が南側柱列で総長約 3.7m、柱間寸法が西より約 1.1m･1.35m･約 1.2m、梁行が西妻で総長約 3.3m、柱間寸法が北より約 1.7m･約 1.6mである。方向は南側柱列でみると東で約11度南に偏している。柱穴は一辺 45～62cm の隅丸方形や、60×100cm の隅丸長方形で、深さは 26～50cm 残存している。柱痕跡は径 12～15cm の円形である。

遺物は柱穴埋土から調整不明の土師器甕、底部が回転糸切り無調整の須恵器坏、瓦などが数片出土している。

【ＳＢ758 掘立柱建物跡】（第66･109図）

調査区中央北寄り北側東よりに位置する南北 2 間、東西 2 間の総柱建物跡である。柱穴は地山面で



第66図　SB758柱穴断面図

検出し、すべての柱穴で柱痕跡を確認している。ＳK547・548・550 土壙、ＳD605・795 溝跡と重複し、ＳD795 より新しく、ＳK547・548・550、ＳD605 より古い。

平面規模は西側柱列で総長 3.12m、柱間寸法が北より 1.62m・1.50m、北側柱列で総長 2.92m、柱間寸法が西より 1.44m・1.49mである。方向は西側柱列でみると北で約14度東に偏している。柱穴は一辺 33～53cm のやや歪んだ隅丸方形で、深さは 15～38cm 残存しており、すべての柱穴に礎板が据えられている。柱痕跡は径 9～15cm の円形で、灰白色火山灰ブロックの堆積が認められる。

遺物は柱穴埋土から土師器坏・甕、須恵器坏・甕・壺、赤焼土器坏、瓦が少量出土している。土師器坏はすべてロクロ調整で、底部は回転糸切り無調整のものと手持ちヘラケズリが施されるものが見られる。

【ＳB861 掘立柱建物跡】（第67･108 図）

調査区中央南寄りに位置する床束をもつ南北 4 間、東西 3 間の南北棟である。柱穴は地山面で13ヶ所検出し、この中の 3 ヶ所で柱痕跡を確認している。また床束を棟方向に 3 カ所で確認している。ＳB862 掘立柱建物跡、ＳK951 土壙、ＳD553・624・991 溝跡と重複し、ＳB862、ＳD553Ｂ・624・991、ＳK951 より新しいが、ＳD553Ｃとの新旧関係は不明である。

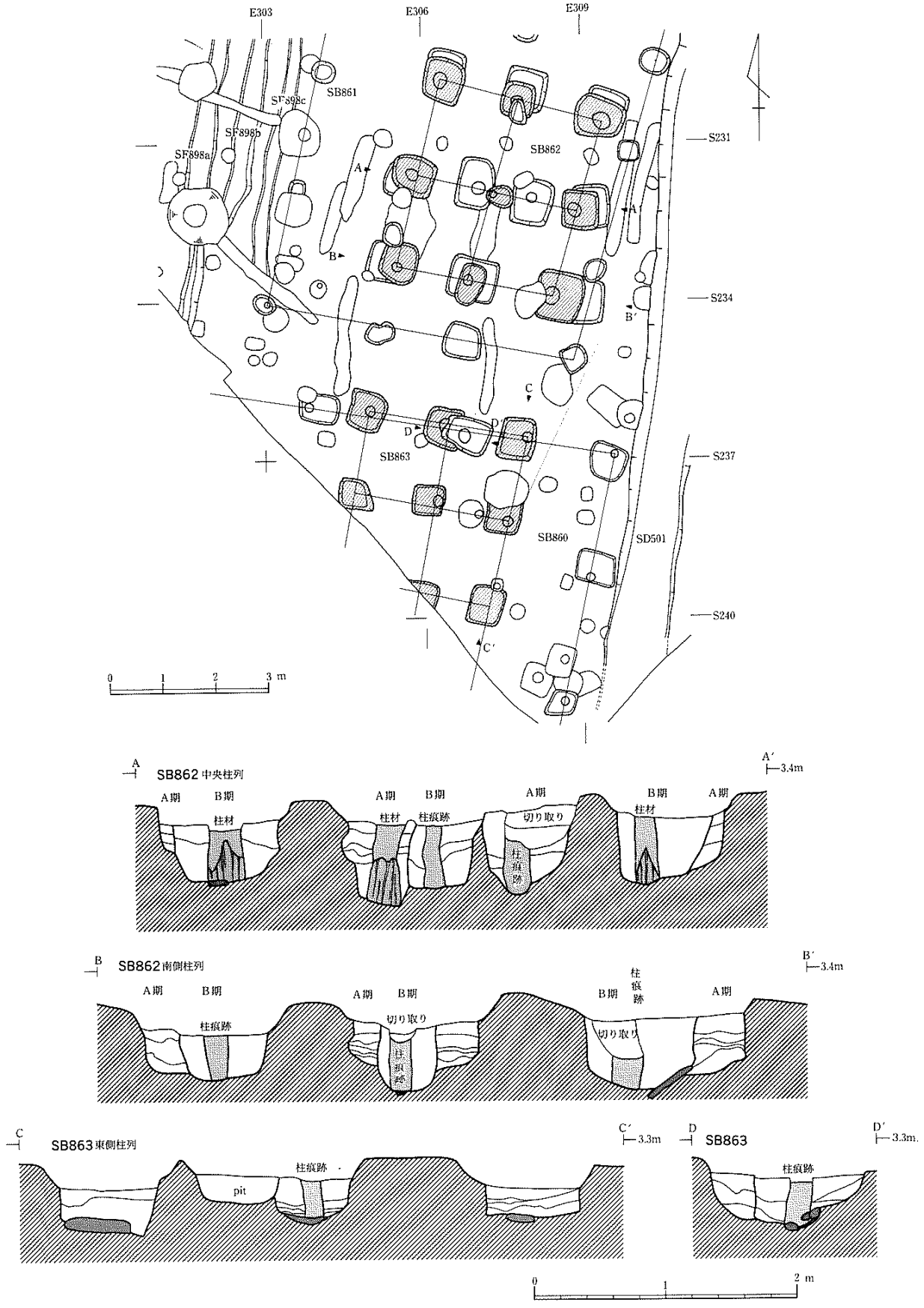
平面規模は桁行が西側柱列で総長約 8.4m、柱間寸法が北より約 1.9m･約 1.7m･約 2.3m･約 2.4m、梁行が南側柱列で総長約 5.7m、柱間寸法が西より約 2.0m･約 1.6m･約 2.1mである。方向は西側柱列でみると北で約 10 度、東側柱列でみると北で約 15 度東に偏しており、やや歪んだ建物跡である。柱穴は柱が抜き取られているが、一辺 30～45cm の隅丸方形と考えられる。深さは 25～48cm 残存し、1 カ所の柱穴に礎板が据えられている。柱痕跡は確認できたもので径10～15cm の円形で、抜き取り後の堆積土に灰白色火山灰ブロックが混入する。

遺物は抜き取り穴堆積土から土師器坏・甕、須恵器坏・蓋・甕、赤焼土器坏、製塩土器、瓦片が少量出土している。土師器坏はすべてロクロ調整で、底部は回転糸切り無調整が多い。

【ＳB862 掘立柱建物跡】（第67･108 図）

調査区中央南寄りに位置する南北２間、南西２間の南北棟総柱建物跡で、一度建て替えられている（ＳB862Ａ→Ｂ）。ＳB863 掘立柱建物跡およびＳB584・585・751・752 掘立柱建物跡と柱筋をほぼ揃えて並ぶ。柱穴は地山面で検出した。ＳB861 掘立柱建物跡と重複し、これよりも古い。

ＳB862Ａはすべての柱穴を検出した。後続するＳB862Ｂと同位置で重複し規模もほぼ同様であるが、東西の中央柱列のみ 3 間割りとなっている。柱穴は一辺 80～90cm の隅丸方形で、深さは 34～58cm 残存しており、1 カ所の柱穴に礎板が据えられている。柱痕跡はＳB862Ｂにより壊されているが、径



第67図　北1西3区建物跡平面図(3)
SB860・862・863柱穴断面図

20～25cmの円形で、1カ所で径25cmの柱材が遺存している。また1カ所で柱の切り取りがみられる。

ＳＢ862Ｂはすべての柱穴を検出し、柱痕跡を確認している。平面規模は桁行が東側柱列で総長3.45ｍ、柱間寸法が北より1.79ｍ・1.66ｍ、梁行が北側柱列で総長3.12ｍ、柱間寸法が西より1.51ｍ・1.61ｍである。方向は東側柱列でみると北で約16度東に偏している。柱穴は一辺50～95cmの隅丸方形で、中央柱穴は径40～50cmの楕円形である。深さは50～58cm残存し、4ヶ所の柱穴に礎板が据えられている。柱痕跡は径20～25cmの円形で、3カ所で柱材が遺存している。また5ヶ所で柱の切り取りがみられる。

遺物は柱穴埋土から土師器坏・高台坏・甕、須恵器坏・甕・壺、製塩土器、平瓦が少量出土している。土師器坏はすべてロクロ調整で、底部が回転糸切り無調整や手持ちヘラケズリが施されるものが見られる。また切り取り穴堆積土から赤焼土器坏が数片出土している。

【ＳＢ863掘立柱建物跡】（第67･108図）

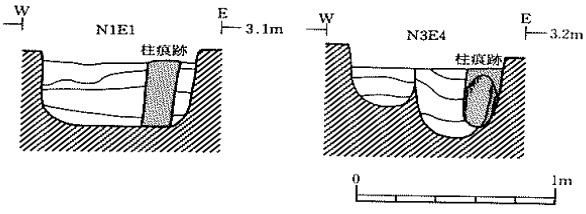
調査区中央南寄りに位置する南北3間以上、東西2間の南北棟総柱建物跡で、南西部は調査区外になる。ＳＢ862掘立柱建物跡と柱筋をほぼ揃えて南北に並ぶ。柱穴は地山面で8ヶ所検出し、この中の5ヶ所で柱痕跡を確認している。ＳＢ860掘立柱建物跡と重複し、これよりも古い。

柱間寸法は、桁行が東側柱列で北より1.64ｍ・約1.6ｍ、梁行が北側柱列で西より1.45ｍ・1.56ｍで、総長3.01ｍを測る。方向は北側柱列でみると東で約10度南に偏している。柱穴は一辺55～80cmの隅丸方形で、深さは36～56cm残存している。6ヶ所の柱穴に礎板が据えられ、これらの中には鼠返しを転用したものもみられる。柱痕跡は径18～20cmの円形で、5ヶ所で柱の切り取りがみられる。

遺物は柱穴埋土から土師器坏・甕、須恵器坏・蓋・甕・壺、瓦片が少量出土している。土師器坏はほとんどがロクロ調整で、底部に手持ちヘラケズリが施されるものが多い。なお、ＳＢ858掘立柱建物跡と接合する土師器坏が出土している。

【ＳＢ510掘立柱建物跡】（第68･69･109図）

調査区中央南寄りに位置する東西3間、南北2間の東西棟である。柱穴は地山面及び基本層位Ⅲａ層上面で検出し、すべての柱穴で柱痕跡を確認している。ＳＢ584掘立柱建物跡、ＳＫ505･506・523・627・636土壙、ＳＤ553・628・629・783溝跡と重複し、ＳＢ584、ＳＫ523・636、ＳＤ553Ｃ・628・629・783より新しいが、ＳＫ505・506・627との新旧関係は不明である。



第68図　SB510柱穴断面図

平面規模は桁行が北側柱列で総長7.04ｍ、柱間寸法が西より2.36ｍ・2.29ｍ・2.39ｍ、梁行が東妻で総長4.62ｍ、柱間寸法が北より2.56ｍ・2.06ｍである。方向は北側柱列でみると東で約10°南に偏している。柱穴は一辺40～78ｍの隅丸方形で、長方形を呈するものも見られる。深さは30～62cm残存している。柱痕跡は径15～20cmの円形で、2カ所で柱材が遺存している。また3カ所で柱の切り取りが確認されており、柱痕跡には灰白色火山灰粒の堆積が認められる。

遺物は柱穴埋土から土師器坏・甕、須恵器坏・甕が少量出土している。土師器坏はすべてロクロ調整で、底部には回転糸切り無調整や手持ちヘラケズリが施されるものがある。

【ＳＢ584 掘立柱建物跡】（第69･109図）

調査区中央南寄りに位置する東西 2 間、南北 2 間の東西棟総柱建物跡である。ＳＢ862･585･751･752 掘立柱建物跡と柱筋をほぼ揃えて東西に並ぶ。柱穴は地山面及び基本層位Ⅲａ層上面で検出し、すべての柱穴で柱痕跡を確認している。ＳＢ510 掘立柱建物跡、ＳＫ505･523･636 土壙、ＳＤ629･783 溝跡と重複し、ＳＤ783 より新しく、ＳＢ510、ＳＫ505・523・636、ＳＤ629 より古い。

平面規模は桁行が北側柱列で総長 3.79ｍ、柱間寸法が西より 2.05ｍ･1.75ｍ、南側柱列で総長 3.74ｍ、柱間寸法が西より 2.02ｍ･1.73ｍである。また梁行が西妻で総長 2.97ｍ、柱間寸法が北より 1.38ｍ･1.60ｍ、東妻で総長 2.96ｍ、柱間寸法が北より 1.47ｍ･1.50ｍである。方向は北側柱列でみると東で約18度南に偏している。柱穴は一辺 65～110㎝の隅丸方形または隅丸長方形で、深さは 32～60㎝残存しており、7 ヶ所の柱穴に礎板が据えられている。柱痕跡は径 14～27㎝の円形で、1 カ所で柱の切り取りがみられる。

遺物は柱穴埋土から土師器坏・甕、須恵器坏・甕、製塩土器が少量出土している。坏類は須恵器坏が多く、底部にはヘラ切り無調整・回転糸切り無調整・再調整（手持ちヘラケズリ・回転ヘラケズリ）が施されるものがあり、ヘラ切り無調整が多い。土師器坏はすべてロクロ調整で、回転糸切り無調整と手持ちヘラケズリが施されるものが同程度ある。

【ＳＢ585 掘立柱建物跡】（第69･109図）

調査区中央南寄りに位置する東西 2 間、南北 2 間の東西棟総柱建物跡で、一度建て替えられている（ＳＢ585Ａ→Ｂ）。ＳＢ862・584・751・752 掘立柱建物跡と柱筋をほぼ揃えて東西に並ぶ。柱穴は基本層位Ⅲａ層および地山面で検出した。ＳＢ757 掘立柱建物跡、ＳＫ532･533･537 土壙、ＳＤ637・763 溝跡と重複し、ＳＢ757、ＳＤ763 より新しく、ＳＫ532・533・537、ＳＤ637 より古い。

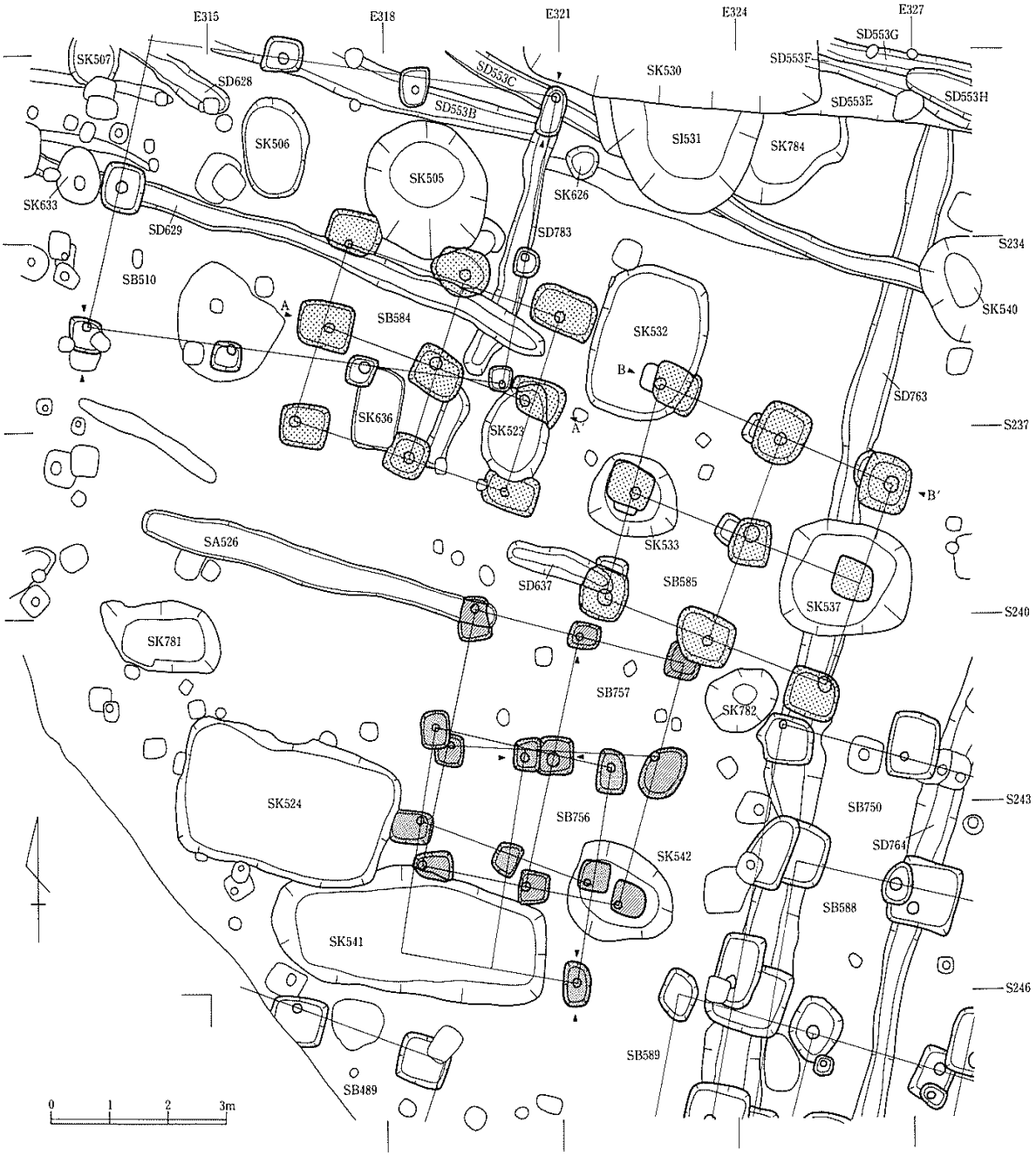
ＳＢ585Ａは 6 ヶ所で柱穴を検出した。後続するＳＢ585Ｂと同位置で重複し規模も同様である。柱穴は一辺 40～65㎝の隅丸方形で、深さは 18～65㎝残存している。

ＳＢ585Ｂはすべての柱穴を検出し、この中の 8 ヶ所の柱穴で柱痕跡を確認している。平面規模は桁行が北側柱列で総長 4.28ｍ、柱間寸法が西より 2.25ｍ･2.03ｍ、南側柱列で総長 4.01ｍ、柱間寸法が西より 1.89ｍ･2.12ｍである。また梁行が西妻で総長 3.53ｍ、柱間寸法が北より 1.79ｍ･1.75ｍ、東妻で総長3.38ｍである。方向は北側柱列でみると東で約22度南に偏している。柱穴は一辺 65～90㎝の隅丸方形で、深さは 50～67㎝残存している。7 ヶ所の柱穴に礎板が据えられ、これらの中には鼠返しを転用したものもみられる。柱痕跡は径 16～30㎝の円形で、1 カ所で柱材が遺存している。

遺物はＳＢ585Ｂ柱穴埋土から土師器坏･甕、須恵器坏・高台坏・甕・壺、平瓦が少量出土している。坏類は須恵器坏が主体となり、底部はヘラ切り無調整が多い。土師器坏はすべてロクロ調整で、底部に手持ちヘラケズリが施されるものが多い。

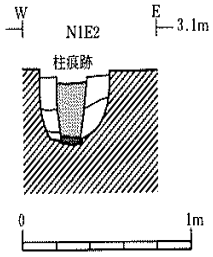
【ＳＢ757 掘立柱建物跡】（第69･109図）

調査区中央南寄りに位置する南北 2 間、東西 2 間の南北棟総柱建物跡である。柱穴は基本層位Ⅲａ



第69図　北1西3区建物跡平面図(4)
SB584・585柱穴断面図

層上面および地山面で検出し、この中の 8 ヶ所で柱痕跡を確認している。ＳＢ585・756 掘立柱建物跡、ＳＫ541･542 土壙、ＳＡ526 材木塀跡と重複し、これらよりも古い。



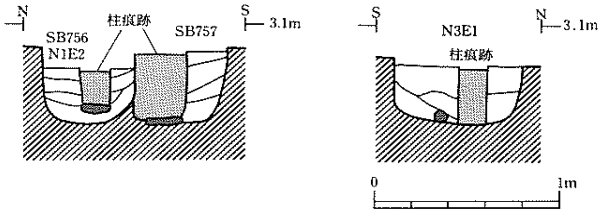
第70図　SB757柱穴断面図

平面規模は西側柱列で総長 4.22m、柱間寸法が北より 2.20m･2.03m、南側柱列で総長 3.42m、柱間寸法が西より 1.82m･1.60mである。方向は西側柱列でみると北で約13度東に偏している。柱穴は一辺 40～90cm の隅丸方形で、長方形を呈するものもある。深さは 28～50cm 残存し、8 ヶ所の柱穴に礎板が据えられている。柱痕跡は径 12～15cm の円形である。

遺物は柱穴埋土からロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏・甕が数片出土している。

【ＳＢ756 掘立柱建物跡】（第69･109 図）

調査区中央南寄りに位置する南北 2 間、東西 2 間の南北棟総柱建物跡で、南西部はＳＫ541 土壙に壊されている。柱穴は地山面で 7 ヶ所検出し、この中の 6 ヶ所で柱痕跡を確認している。ＳＢ757 掘立柱建物跡、ＳＫ524･541･542 土壙と重複し、ＳＢ757 より新しく、ＳＫ524・541・542 より古い。



第71図　SB756柱穴断面図

平面規模は東側柱列で総長 3.55m、柱間寸法が北より 1.91m･1.64m、北側柱列で総長 3.07m、柱間寸法が西より 1.59m、1.49mである。方向は東側柱列でみると北で約12度東に偏している。柱穴は一辺 42～72cm の隅丸方形で、深さは 28～50cm 残存しており、6 ヶ所の柱穴に礎板が据えられている。柱痕跡は径 10～17cm の円形である。

遺物は柱穴埋土から土師器坏・甕、須恵器坏・甕、瓦片が少量出土している。土師器坏はすべてロクロ調整で、底部は回転糸切り無調整のものと再調整（手持ちヘラケズリ・回転ヘラケズリ）が施されるものが見られる。

【ＳＢ586 掘立柱建物跡】（第72･109･110 図）

調査区南東部に位置する東西 5 間、南北 3 間の東・南・西廂付の床束をもつ東西棟で、ＳＢ750 掘立柱建物跡と柱筋を揃える。柱穴は地山面で身舎 10 ヶ所、廂 11 ヶ所検出した。この中の身舎 8 ヶ所、廂 7 ヶ所で柱痕跡を確認している。ＳＢ751・752・753・754・755 掘立柱建物跡、ＳＤ553Ｅ溝跡と重複し、これらよりも新しい。

平面規模は桁行が北側柱列で総長 7.78m、柱間寸法が西より 1.83m･1.89m･1.97m、廂の出が東で 2.11m、西で約 2.4mである。また、梁行が西妻で総長 5.61m、柱間寸法が北より 2.10m･2.11m、廂の出が 1.46m、東妻で 1.70mと東で南に偏している。方向は身舎北側柱列でみると東で約13 度南に偏している。柱穴は身舎が一辺 65～120cm の隅丸方形、廂が 50～86cm の隅丸方形で、深さは 26～46cm 残存している。また床束は径 20～25cm のほぼ円形で、深さは 23cm 前後である。柱痕跡は身舎が径 15～22cm、廂が径 10～20cm の円形で、身舎 1 カ所で柱材が遺存している。1 カ所で柱の切り取りが

みられ、切り取り穴堆積土および柱痕跡には灰白色火山灰ブロックが多く混入する。

遺物は柱穴埋土から土師器坏・高台坏・甕、須恵器坏・高台坏・甕・壺、赤焼土器坏・高台坏、軒丸瓦が出土している。坏類は土師器坏が主体をなし、回転糸切り無調整のものが多い。なお、身舎柱穴の切り取り穴から土師器甕が2個体、須恵器甕の口縁部がまとまって出土している。

【ＳＢ751掘立柱建物跡】（第72･76･109図）

調査区南東部に位置する東西2間、南北2間の総柱建物跡である。ＳＢ862・584・585・752掘立柱建物跡と柱筋をほぼ揃えて東西に並ぶ。柱穴は地山面で検出し、すべての柱穴で柱痕跡を確認している。ＳＢ586掘立柱建物跡、ＳＫ536土壙と重複し、これらよりも古い。

平面規模は北側柱列で総長3.21m、柱間寸法が西より1.68m･1.53m、東側柱列で総長3.06m、柱間寸法が北より1.56m・1.51mである。方向は北側柱列でみると東で約15度南に偏している。柱穴は一辺46～80cmの隅丸方形で、深さは42～58cm残存しており、8ヶ所の柱穴に礎板が据えられている。柱痕跡は径13～20cmの円形である。

遺物は柱穴埋土から土師器坏・甕、須恵器坏・甕・壺が少量出土している。土師器坏はすべてロクロ調整で、底部が回転糸切り無調整のものがみられる。

【ＳＢ752掘立柱建物跡】（第72･110図）

調査区南東部に位置する東西2間、南北2間の東西棟総柱建物跡である。ＳＢ862・584・585・751掘立柱建物跡と柱筋をほぼ揃えて東西に並ぶ。柱穴は地山面で検出し、この中の8ヶ所で柱痕跡を確認している。ＳＢ491・586・753・754・809掘立柱建物跡と重複し、ＳＢ491・753より新しく、ＳＢ586・754より古いが、ＳＢ809との新旧関係は不明である。

平面規模は桁行が北側柱列で総長3.50m、柱間寸法が西より1.83m･1.67m、梁行が東側柱列で総長2.90m、北より1.41m･1.48mである。方向は北側柱列でみると東で約16度南に偏している。柱穴は一辺46～65cmの隅丸方形で、深さは16～50cm残存しており、7ヶ所の柱穴に礎板が据えられている。柱痕跡は径13～20cmの円形で、5ヶ所で柱の抜き取りがみられる。

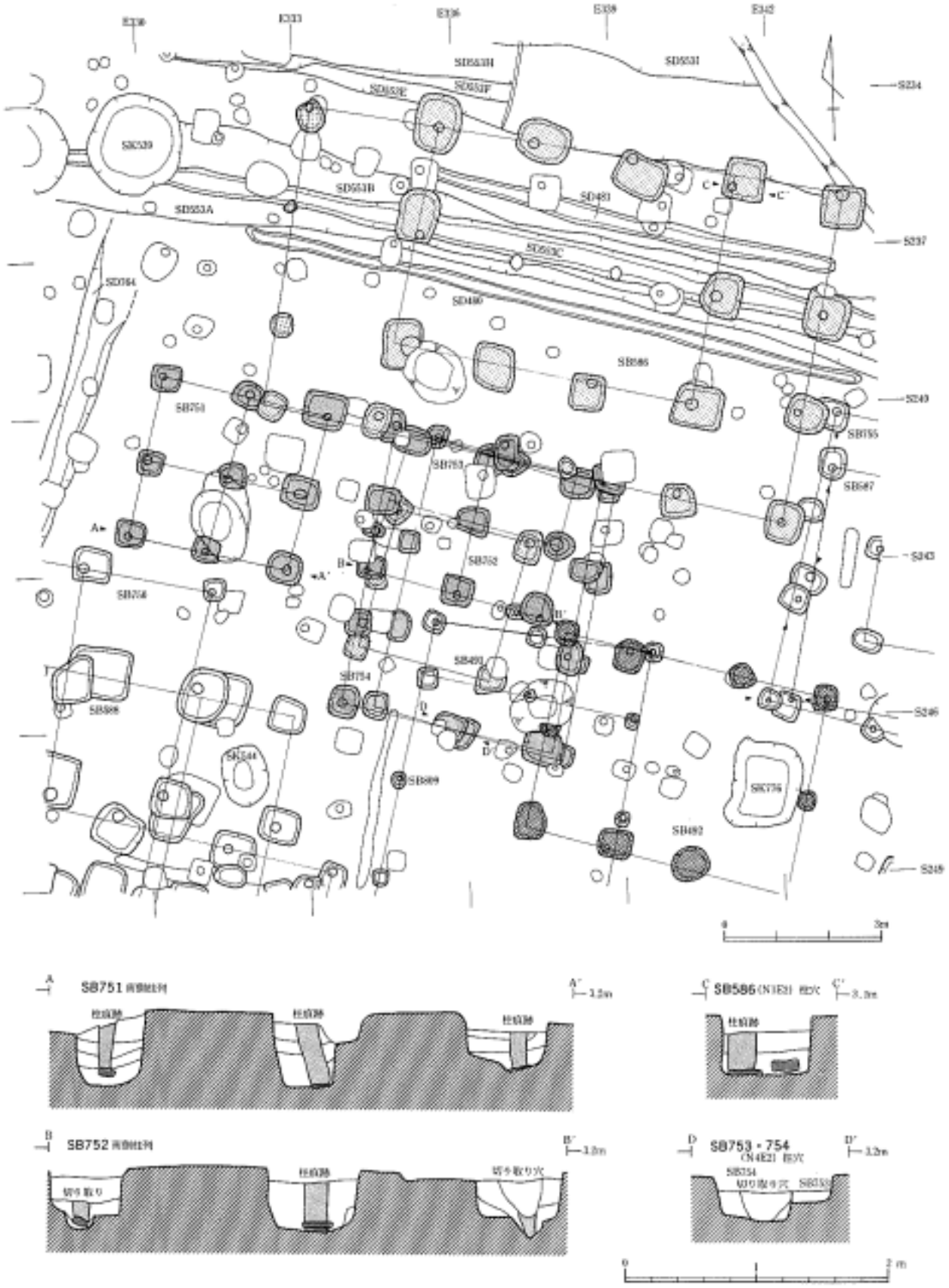
遺物は柱穴埋土から土師器坏・甕、須恵器坏・甕が少量出土している。土師器坏はすべてロクロ調整で、底部は回転糸切り無調整のものがみられる。

【ＳＢ753掘立柱建物跡】（第72･110図）

調査区南東部に位置する南北3間、東西2間の南北棟である。柱穴は基本層位Ⅲａ層上面および地山面で検出し、この中の1ヶ所で柱痕跡を確認している。ＳＢ491・492・586・752・754・809掘立柱建物跡と重複し、ＳＢ492・586・752・754・809より古いが、ＳＢ491との新旧関係は不明である。

平面規模は桁行が西側柱列で総長約5.4m、柱間寸法が北より約1.7m･約1.7m･約1.7m、梁行が北妻で総長約3.5m、柱間寸法が西より約1.6m･約1.9mである。方向は西側柱列でみると北で約15度東に偏している。柱は北西隅の1カ所を除きすべて抜き取られており、本来の柱穴の形状は明らかではないが、一辺40～50cm程の隅丸方形と考えられる。深さは9～13cm残存している。柱痕跡は確認できたもので径14cmの円形である。

遺物は柱穴埋土からロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器甕が数片出土している。



第72図　北1西3区建物跡平面図(5)
SB586・751・752・753・754柱穴断面図

【ＳＢ754 掘立柱建物跡】（第72･110図）

調査区南東部に位置する南北３間、東西２間の南北棟である。柱穴は基本層位Ⅲａ層上面および地山面で検出し、この中の６ヶ所で柱痕跡を確認している。ＳＢ491・492・586・752・753・809 掘主柱建物跡と重複し、ＳＢ491・752・753 より新しく、ＳＢ492・586・809 より古い。

平面規模は桁行が西側柱列で総長約 5.5ｍ、柱間寸法が北より約 2.1ｍ･1.76ｍ･1.58ｍ、梁行が北妻で総長約 4.1ｍ、柱間寸法が西より約 2.1ｍ･2.01ｍである。方向は西側柱列でみると北で約13 度東に偏している。柱穴は一辺 42～73㎝の隅丸方形で、深さは28～47㎝残存している。柱痕跡は径 12～15㎝の円形で、２カ所で柱の抜き取りがみられる。

遺物は柱穴埋土から土師器坏・甕、須恵器坏・高台坏・甕が少量出土している。土師器坏はすべてロクロ調整で、底部に再調整（手持ちヘラケズリ・回転ヘラケズリ）が施されるものが見られる。

【ＳＢ491 掘立柱建物跡】（第72･110図）

調査区南東部に位置する南北２間、東西１間の南北棟である。柱穴は基本層位Ⅲａ層上面および地山面で検出し、この中の４ヶ所で柱痕跡を確認している。ＳＢ752・753・754・809 掘立柱建物跡と重複し、ＳＢ752・754・809 より古いが、ＳＢ753 との新旧関係は不明である。

平面規模は桁行が西側柱列で総長 2.78ｍ、柱間寸法が北より 1.37ｍ･1.42ｍ、梁行が北妻で 2.58ｍである。方向は東側柱列でみると北で約18 度東に偏している。柱穴は一辺 30～62㎝ の隅丸方形で、大きさにばらつきが見られる。深さは 23～39㎝ 残存している。柱痕跡は径 8～18㎝ の円形である。

遺物は柱穴埋土から調整不明の土師器甕、底部に回転ヘラケズリが施される須恵器坏、須恵器甕などが数片出土している。

【ＳＢ809 掘立柱建物跡】（第72･75･110図）

調査区南東部に位置する南北４間、東西２間の北廂付の南北棟である。柱穴は基本層位Ⅲａ層上面および地山面で身舎９ヶ所、廂３ヶ所検出し、この中の身舎５ヶ所、廂２ヶ所で柱痕跡を確認している。ＳＢ491・492・749・753・754・798 掘立柱建物跡、ＳＫ620・775・805 土壙と重複し、ＳＢ491・492・753・754・798、ＳＫ775 より新しいが、ＳＢ749 との新旧関係は不明である。

平面規模は桁行が西側柱列で総長約 5.7ｍ、柱間寸法が北より約 2.0ｍ･約 2.0ｍ･約 1.7ｍ、廂の出約 1.1ｍ、梁行が北入側柱列で総長約 4.2ｍ、柱間寸法が西より約 2.1ｍ･2.04ｍである。また廂の出が西端で約 1.1ｍ、東端で約 1.32ｍと、身舎の柱間の約半間分である。方向は西側柱列でみると北で約13 度東に偏している。柱穴は身舎･廂とも同様の規模で、一辺 26～39㎝ の隅丸方形で、円形に近いものもある。深さは23～42㎝残存している。柱痕跡は径10～15㎝の円形で、身舎１カ所で柱材が遺存している。

遺物は柱穴埋土からロクロ調整の土師器坏、非ロクロ調整の土師器甕、須恵器坏が数片出土している。

【ＳＢ492 掘立柱建物跡】（第72･75･110図）

調査区南東部に位置する東西３間、南北２間の東西棟である。柱穴は基本層位Ⅲａ層上面および地山土で検出した。この中の５ヶ所で柱痕跡を確認している。ＳＢ587・753・754・755・809 掘立柱建物

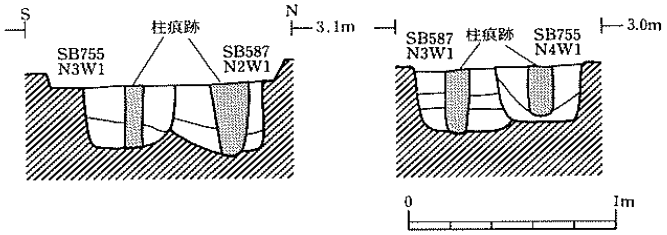
跡、ＳK776 土壙と重複し、ＳＢ753・754 より新しく、ＳＢ809 より古いが、ＳＢ587・755、ＳK776 との新旧関係は不明である。

平面規模は桁行が北側柱列で総長約 5.2m、柱間寸法が西より約 1.3m、3.86m(2 間分)で、西の柱間が狭くなっている。また梁行が東妻で総長約 3.8m、柱間寸法が北より 2.00m、約 1.8mである。方向は北側柱列でみると東で約15 度南に偏している。柱穴は一辺 34～74cm の隅丸方形で、大きさにばらつきが見られる。深さは 20～35cm 残存している。柱痕跡は 12～16cm の円形で、1 カ所で柱材が遺存している。

遺物は柱痕跡からロクロ調整の土師器坏、調整不明の土師器甕などが数片出土している。

【ＳＢ587 掘立柱建物跡】(第75･110 図)

調査区南東部に位置する東西 3 間、南北 2 間の東西棟で、北東隅は調査外になる。柱穴は地山面で 9 ヶ所検出し、この中の 8 ヶ所で柱痕跡を確認している。ＳＢ492・493・494・755・762 掘立柱建物跡、ＳK569 土壙、ＳD570 溝跡と重複し、ＳＢ493 より新しく、ＳＢ494・755・762、ＳK569、ＳD570 より古いが、ＳＢ492 との新旧関係は不明である。



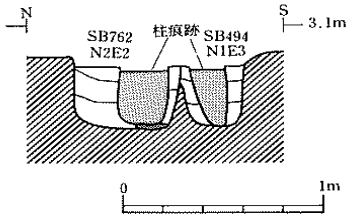
第73図　SB587(755)柱穴断面図

平面規模は桁行が南側柱列で総長 6.21m、柱間寸法が西より 2.02m･2.11m･2.09m、梁行が西側柱列で総長 4.51m、柱間寸法が北より 2.15m･2.36mである。方向は南側柱列でみると東で約11 度南に偏している。柱穴は一辺 45～56cm の隅丸方形で、深さは 29～55cm 残存している。柱痕跡は径 10～20cm の円形で、1 カ所で柱の切り取りがみられる。

遺物は柱穴から土師器坏・甕、須恵器坏・甕、瓦片が少量出土している。土師器坏はすべてロクロ調整で、底部は回転糸切り無調整や再調整が施されるものがある。また柱痕跡から両面黒色処理された土師器蓋や須恵器高台坏が出土している。

【ＳＢ762 掘立柱建物跡】(第75･110 図)

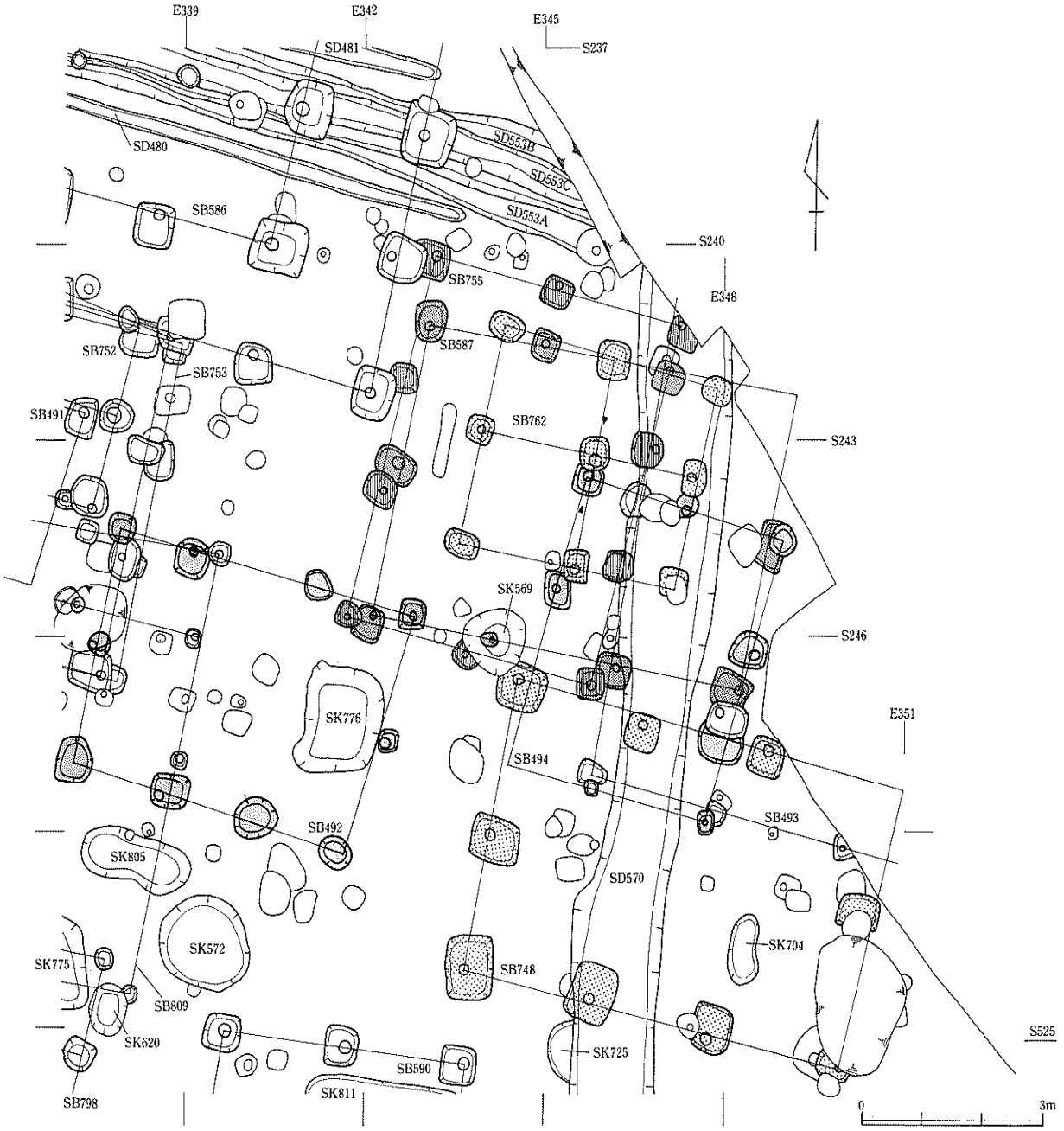
調査区南東部に位置する東西 2 間、南北 2 間の総柱建物跡である。柱穴は基本層位Ⅲａ層上面および地山面で検出し、この中の 4 ヶ所で柱痕跡を確認している。ＳＢ493・494・587・755・762 掘立柱建物跡、ＳD570 溝跡と重複し、ＳＢ493・494・587 より新しく、ＳD570 より古いが、ＳＢ755 との新旧関係は不明である。



第74図　SB762(494)柱穴断面図

平面規模は北側柱列で総長約 3.6m、柱間寸法が西より約 2.0m・約 1.6m、西側柱列で総長約 3.3m、柱間寸法が北より約 1.6m・約 1.7mである。方向は北側柱列でみると約 12 度南に偏している。柱穴は一辺 44～60cm の隅丸方形で、深さは 28～58cm 残存しており、2 カ所の柱穴に礎板が据えられている。柱痕跡は径 13～20cm の円形で、1 カ所で柱材が遺存している。また 3 ヶ所で柱の抜き取りがみられる。

遺物は柱穴埋土からロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏・甕・壺が数片出土している。



第75図　北1西3区建物跡平面図(6)

【ＳＢ755 掘立柱建物跡】（第75･110図）

調査区南東部に位置する南北 3 間、東西 2 間の南北棟である。柱穴は地山面で検出し、この中の 9 ヶ所で柱痕跡を確認している。ＳＢ492・493・494・586・587・762 掘立柱建物跡、ＳＫ569 土壙、ＳＤ570 溝跡と重複し、ＳＢ493・587 より新しく、ＳＢ586、ＳＫ569、ＳＤ570 より古いが、ＳＢ492･494･762 との新旧関係は不明である。

平面規模は桁行が東側柱列で総長 5.69m、柱間寸法が北より 1.94m･1.79m･1.96m、梁行が北妻で総長 4.22m、柱間寸法が西より 2.11m･2.11mである。方向は東側柱列でみると北で約15度東に偏している。柱穴は一辺 39～64cm の隅丸方形で、深さは 24～49cm 残存しており、1 カ所の柱穴に礎板が据

えられている。柱痕跡は径10～15cmの円形で、1カ所で柱材が遺存している。また1カ所で柱の抜き取りがみられる。

遺物は柱穴埋土からロクロ調整の土師器坏・高台坏・甕、須恵器坏・甕が数片出土している。

【ＳＢ494掘立柱建物跡】（第75･110図）

調査区南東部に位置する南北3間、東西2間の南北棟である。柱穴は地山面で8ヶ所検出し、この中の5ヶ所で柱痕跡を確認している。ＳＢ493・587・748・755・762掘立柱建物跡、ＳＤ570溝跡と重複し、ＳＢ493・587より新しく、ＳＢ748・762、ＳＤ570より古いが、ＳＢ755との新旧関係は不明である。

平面規模は桁行が東側柱列で総長約4.6m、柱間寸法が北より約1.8m･1.07m･1.65m、梁行が北妻で総長約3.4m、柱間寸法が西より1.73m･約1.6mである。方向は東側柱列でみると北で約15度東に偏している。柱穴は一辺33～80cmの隅丸方形で、規模にかなりばらつきが見られる。深さは31～42cm残存している。柱痕跡は径10～15cmの円形である。

遺物は柱穴埋土からロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏・甕が数片出土している。

【ＳＢ493掘立柱建物跡】（第75･110図）

調査区南東部に位置する南北4間以上、東西3間以上の建物跡で、北東部は調査区外になる。柱穴は地山面で6ヶ所検出し、この中の2ヶ所で柱痕跡を確認している。ＳＢ494・587・748・755・762掘立柱建物跡、ＳＤ570溝跡と重複し、ＳＢ494・587・755・762、ＳＤ570より古いが、ＳＢ748との新旧関係は不明である。

柱間寸法は、東側柱列で南より約2.2m･約2.1m･約2.2m、南側柱列で西より約2.3m･約2.2mである。方向は西側柱列でみると北で約12度東に偏している。柱穴は一辺25～48cmのやや不整な隅丸方形で、深さは16～18cm残存している。柱痕跡は径10cmの円形である。

遺物は柱穴埋土から調整不明の土師器甕、底部が回転糸切り無調整の須恵器坏、須恵器甕などが数片出土している。

【ＳＢ748掘立柱建物跡】（第75･110図）

調査区南東部に位置する東西3間、南北2間の東西棟で、北東隅は調査区外になる。柱穴は地山面で9ヶ所検出し、この中の8ヶ所で柱痕跡を確認している。ＳＢ493・494・755掘立柱建物跡、ＳＫ569土壙、ＳＤ570溝跡と重複し、ＳＫ569、ＳＤ570より古いが、ＳＢ493・494・755との新旧関係は不明である。

平面規模は桁行が南側柱列で総長6.48m、柱間寸法が西より2.15m･2.06m･2.28m、梁行が西妻で総長4.52m、柱間寸法が北より2.42m･2.10mである。方向は南側柱列でみると東で約14度南に偏している。柱穴は一辺55～100cmの方形で、柱痕跡は径15～19cmの円形である。1カ所で柱の抜き取りがみられる。

遺物は柱穴埋土からロクロ調整の土師器坏、ロクロ調整と非ロクロ調整の土師器甕、須恵器坏・甕が数片出土している。

【ＳＢ750掘立柱建物跡】（第76･109図）

調査区南東部に位置する南北4間、東西3間の東・南廂付の南北棟で、ＳＢ586掘立柱建物跡と柱筋

を揃える。北妻より1間目に間仕切りをもつ。柱穴は基本層位Ⅲa層上面および地山面で検出し、この中の身舎7ヶ所、廂3ヶ所で柱痕跡を確認している。ＳＢ588・589・749・789掘立柱建物跡、ＳＫ766土壙、ＳＤ763・764溝跡と重複し、ＳＢ588・589・749、ＳＫ766、ＳＤ763・764より新しく、ＳＢ789より古い。

平面規模は桁行が西側柱列で総長約8.8m、柱間寸法が北より4.22m(2間分)・2.31m、廂の出が約2.2mである。また梁行が北妻で総長4.17m、柱間寸法が西より2.15m・2.02m、廂の出が2.51mである。方向は身舎西側柱列でみると北で約11度東に偏している。柱穴の多くはＳＢ588の柱の抜き取り穴を利用したもので、身舎が一辺65～118cm、廂が40～120cmの隅丸方形をなし、やや歪んだ柱穴もみられる。深さは18～42cm残存し、身舎で7ヶ所、廂で4ヶ所の柱穴に礎板が据えられている。柱痕跡は身舎で径15～25cm、廂で12～20cmの円形で、灰白色火山灰粒の混入が認められる。身舎2カ所で柱材が遺存している。また間仕切りの柱穴は長径70cm、短径50cmの楕円形で、礎板が据えられている。

遺物は柱穴埋土から土師器坏・高台坏・甕、須恵器坏・高台坏・甕・壺、赤焼土器坏が少量出土している。土師器坏はほとんどがロクロ調整で、底部は回転糸切り無調整が主体をなしている。須恵器坏は底部が回転糸切り無調整のものが多い。

【ＳＢ588掘立柱建物跡】(第76･109図)

調査区南東部に位置する東西4間、南北3間の東・南廂付の東西棟である。柱穴は基本層位Ⅲa層上面および地山面で身舎10ヶ所、廂7ヶ所検出し、この中の身舎1ヶ所、廂5ヶ所で柱痕跡を確認している。ＳＢ589･749･750･789掘立柱建物跡、ＳＫ544･766土壙、ＳＤ763・764溝跡と重複し、ＳＢ589・749、ＳＫ766、ＳＤ763・764より新しく、ＳＢ750・789より古いが、ＳＫ544との新旧関係は不明である。

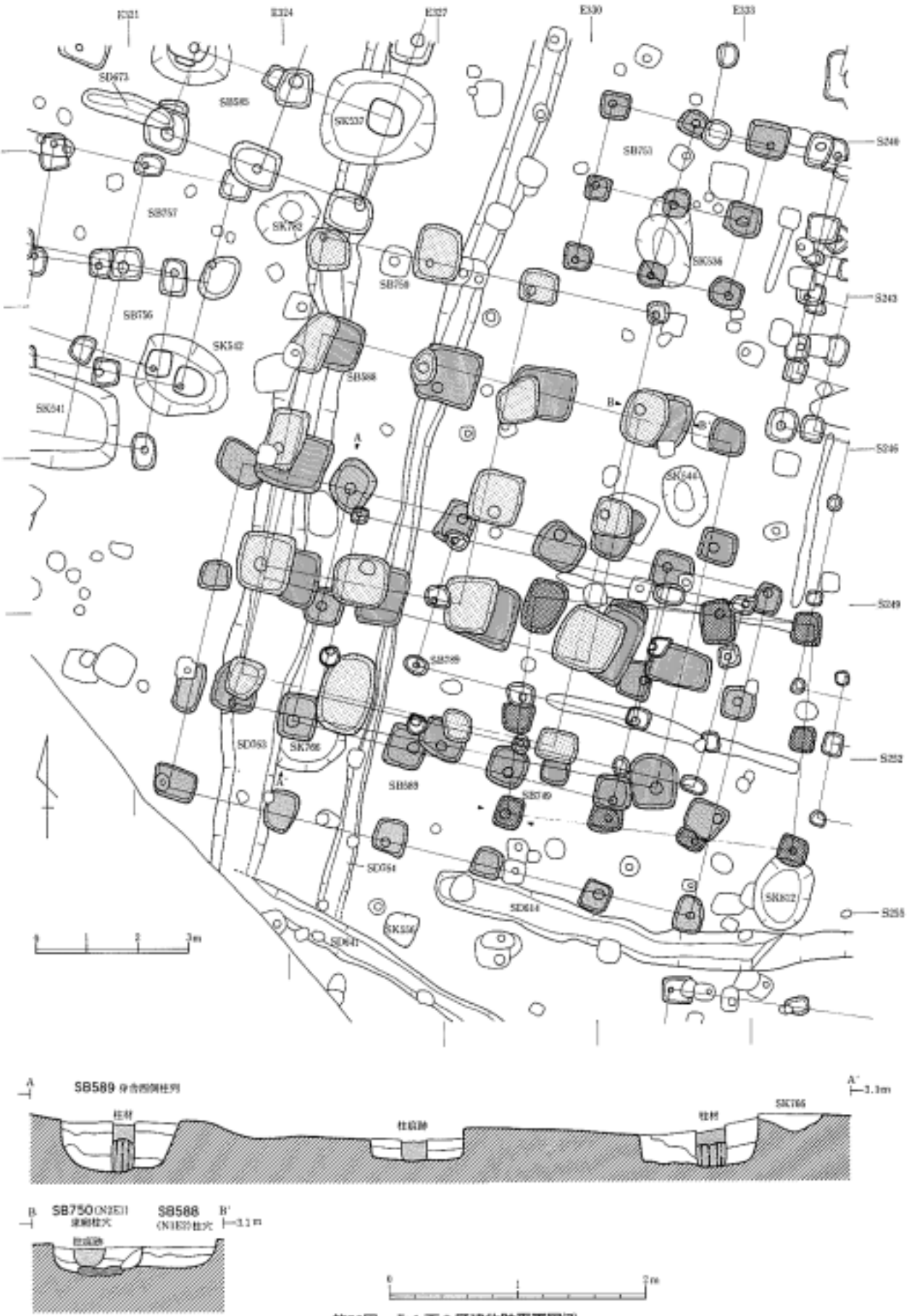
平面規模は桁行が北側柱列で総長約8.5m、柱間寸法が西より約2.4m・約2.1m・約2.0m、廂の出が約1.8mである。梁行が西側柱列で総長約4.5m、柱間寸法が北より約2.3m・約2.3m、廂の出が約2.4mである。方向は北側柱列でみると東で約12度南に偏している。柱穴は身舎が一辺80～132cm、廂が一辺45～123cmの隅丸方形で、深さは15～38cmである。3ヶ所の柱穴に礎板が据えられている。柱痕跡は確認できたもので身舎・廂とも径15～25cmの円形である。

遺物は柱穴埋土から土師器、須恵器、瓦が出土している。坏類は土師器と須恵器がほぼ同程度含まれ、土師器坏はほとんどものがロクロ調整で、底部に手持ちヘラケズリ調整の施されるものが多い。また須恵器坏は底部がヘラ切り無調整のものが多い。

【ＳＢ589掘立柱建物跡】(第76･109図)

調査区南東部に位置する東西5間、南北3間の東・南・西廂付の東西棟である。柱穴は地山面で検出し、この中の身舎10ヶ所、廂6ヶ所で柱痕跡を確認している。ＳＢ588･749･750･789掘立柱建物跡、ＳＫ766土壙、ＳＤ614･763･764溝跡と重複し、ＳＢ749、ＳＫ766、ＳＤ614･763より新しく、ＳＢ588･750･789よりも古いが、ＳＤ764との新旧関係は不明である。

平面規模は桁行が北側柱列で総長約10.7m、身舎の柱間寸法が西より2.24m・1.95m・2.19m、廂の出が西側で約2.1m、東側で2.02mである。梁行が東入側柱列で総長6.48m、柱間寸法が北より2.25m・



第76図　北1西3区建物跡平面図(7)

2.40m、廂の出が 1.84mである。方向は北側柱列でみると東で約15度南に偏している。柱穴は身舎が一辺 63～90cm、廂が 53～80cm の隅丸方形で、深さは 24～69cm 残存している。廂の 1 カ所に礎板が据えられている。柱痕跡は身舎が 16～25cm、廂が 16～17cm の円形で、身舎 4 ヶ所および廂 1 ヶ所で柱材が遺存している。また廂の 1 カ所で柱の抜き取りがみられる。

遺物は柱穴埋土から土師器坏・鉢・甕、須恵器坏・蓋・甕・壺、瓦片が少量出土している。土師器坏はほとんどがロクロ調整で、底部に手持ちヘラケズリが施されるものが多く、須恵器坏はヘラ切り無調整のものが多い。

【ＳＢ789 掘立柱建物跡】（第76･109図）

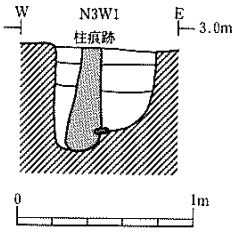
調査区南東部に位置する東西 4 間、南北 3 間の東・南・西廂付の東西棟である。柱穴は地山面で身舎 7 ヶ所、廂 9 ヶ所検出し、この中の身舎 6 ヶ所、廂 6 ヶ所で柱痕跡を確認している。ＳＢ588・589・749・750 掘立柱建物跡、ＳＤ764 溝跡と重複し、これらよりも新しい。

平面規模は桁行が南入側柱列で身舎総長 4.38m、柱間寸法が西より 2.14m･2.24m、北側柱列で総長 7.72m、廂の出が西側で 1.91m、東側で約 1.5mである。また梁行が西妻で総長 3.60m、柱間寸法が北より 1.24m･1.31m、廂の出が 1.08mである。方向は南入側柱列でみると東で約15度南に偏している。柱穴は身舎が径 33～55cm、廂が径 30～45cm の不整形で、隅丸方形に近いものもあり、深さは 21～47cm 残存している。柱痕跡は身舎、廂とも径 10～19cm の円形で、身舎 1 カ所で柱材が遺存している。

遺物は柱穴埋土からロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏・高台坏・甕が少量出土している。

【ＳＢ749 掘立柱建物跡】（第76･109図）

調査区南東部に位置する東西 3 間、南北 2 間の東西棟である。柱穴は基本層位Ⅲａ層上面および地山面で検出し、この中の 5 ヶ所で柱痕跡を確認している。ＳＢ588・589・750・789・809 掘立柱建物跡、ＳＫ812 土壙と重複し、これらよりも古い。



第77図　SB749柱穴断面図

平面規模は桁行が南側柱列で総長 5.65m、柱間寸法が西より 2.00m･1.76m･1.91m、梁行が東妻で総長約 4.3m、柱間寸法が北より約 2.1m･約 2.2mである。方向は南側柱列でみると東で約 8 度南に偏している。柱穴は一辺 48～110cm の隅丸方形で、大きさにばらつきが見られる。深さは 26～62cm 残存し、2 カ所の柱穴に礎板が据えられている。柱痕跡は径 14～19cm の円形である。

遺物は柱穴埋土から土師器坏・甕、須恵器坏・甕が少量出土している。土師器坏はすべてロクロ調整で、底部が回転糸切り無調整のものと手持ちヘラケズリが施されるものがみられる。また須恵器坏は底部がヘラ切り無調整のものが多い。

【ＳＢ798 掘立柱建物跡】（第78･110図）

調査区南東部に位置する東西 2 間、南北 2 間の総柱建物跡である。柱穴は基本層位Ⅲａ層上面および地山面で検出し、この中の 2 ヶ所で柱痕跡を確認している。ＳＢ809 掘立柱建物跡、ＳＫ775 土壙と重複し、これらよりも古い。

平面規模は北側柱列で総長約 2.9m、柱間寸法が西より約 1.5m･約 1.4m、東側柱列で総長約 2.8m、

北より約 1.5m・約 1.3mである。方向は北側柱列でみると東で約11度南に偏している。柱穴は一辺25～52cmの隅丸方形で、大きさにばらつきがみられる。深さは14～30cm残存し、1カ所の柱穴底面に偏平な石(根石)が据えられている。柱痕跡は径20cm前後の円形で、1カ所で柱材が遺存している。

遺物は柱穴埋土からロクロ調整の土師器坏、須恵器坏が数片出土している。

【ＳＢ777掘立柱建物跡】(第78･111図)

調査区南東部に位置する南北3間、東西2間の南北棟である。ＳＢ498・499・807掘立柱建物跡と柱筋を揃えて南北に並ぶ。柱穴は地山面及び基本層位Ⅲａ層上面で検出し、この中の8ヶ所で柱痕跡を確認している。ＳＢ778・779掘立柱建物跡、ＳＫ558・769土壙、ＳＤ641溝跡と重複し、ＳＢ778・779、ＳＫ769、ＳＤ641より新しく、ＳＫ558より古い。

平面規模は桁行が西側柱列で総長6.03m、柱間寸法が北より1.96m･2.27m･1.81m、梁行が南側柱列で総長4.52m、柱間寸法が西より2.33m･2.25mである。方向は西側柱列でみると北で約11度東に偏している。柱穴は一辺30～64cmの隅丸方形で、深さは15～36cm残存している。柱痕跡は径10～15cmの円形で、1ヶ所で柱材が遺存している。なお、本建物跡は、南に棟を揃えて並ぶＳＢ498・499・807掘立柱建物跡群と一連で、南北6間以上の長大な建物跡になる可能性も考えられる。

遺物は柱穴埋土からロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏・甕、瓦片が数片出土している。

【ＳＢ778掘立柱建物跡】(第78･111図)

調査区南東部に位置する南北3間、東西2間の南北棟である。ＳＢ498・499・807掘立柱建物跡と柱筋を揃えて南北に並ぶ。柱穴は基本層位Ⅲａ層上面および地山面で検出し、この中の6ヶ所で柱痕跡を確認している。ＳＢ777・779掘立柱建物跡、ＳＤ641溝跡と重複し、ＳＢ779、ＳＤ641より新しく、ＳＢ777より古い。

平面規模は桁行が西側柱列で総長約4.8m、柱間寸法が北より1.70m･1.44m･約1.7m、梁行が南側柱列で総長約3.9m、柱間寸法が西より約1.8m･2.16mである。方向は西側柱列でみると北で約12度東に偏している。柱穴は一辺41～78cmの隅丸方形で、柱痕跡は径10～20cmの円形である。なお、本建物跡は、ＳＢ777と同様、南に棟を揃えて並ぶＳＢ498・499・807掘立柱建物跡群と一連で、南北7間以上の長大な建物跡になる可能性も考えられる。

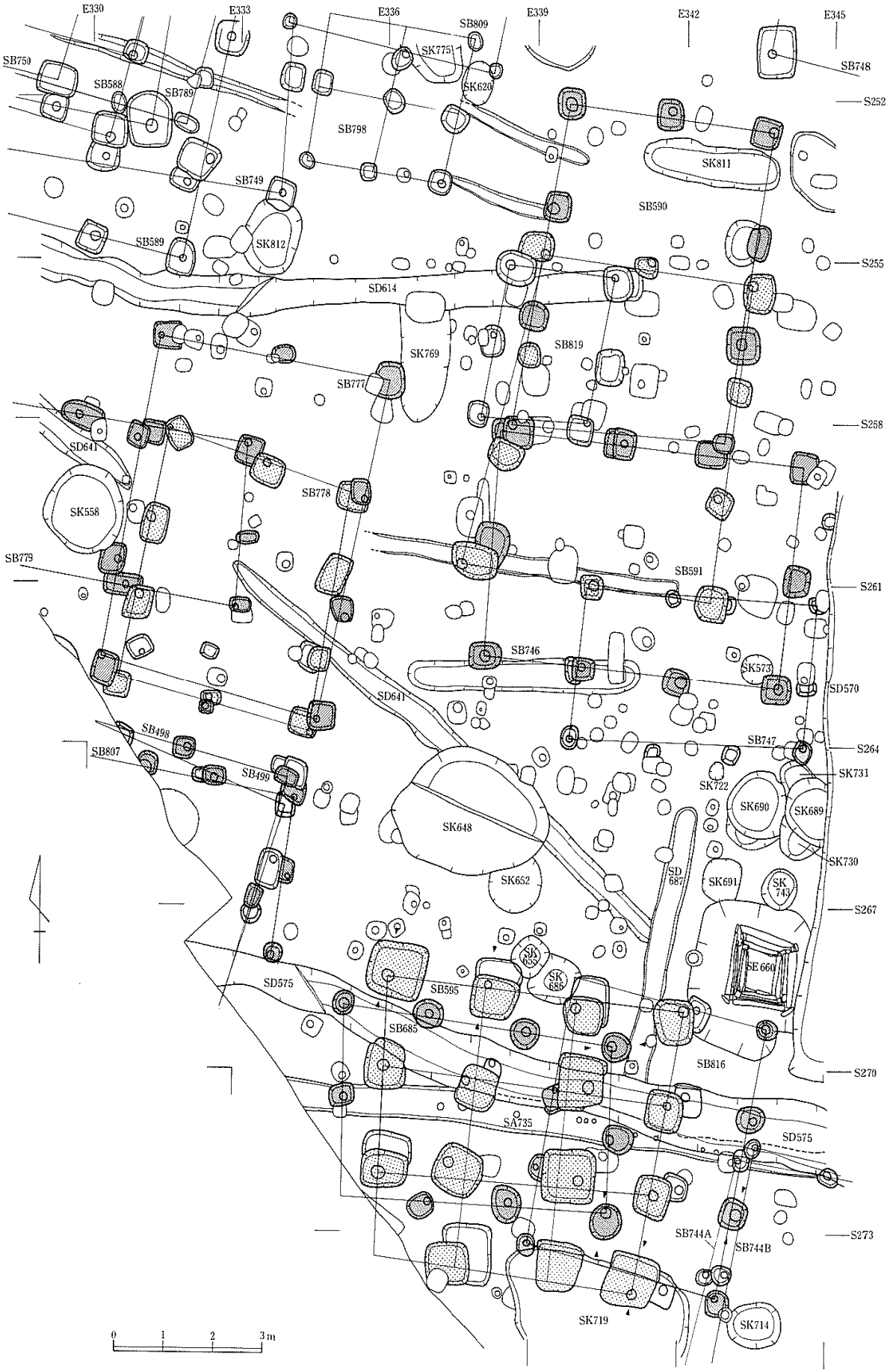
遺物は柱穴埋土からロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏・甕が少量出土している。

【ＳＢ779掘立柱建物跡】(第78･111図)

調査区南東部に位置する東西3間、南北2間の東西棟で、南西隅は調査区外になる。柱穴は基本層位Ⅲａ層上面および地山面で9ヶ所検出し、この中の5ヶ所で柱痕跡を確認している。ＳＢ777･778掘立柱建物跡、ＳＫ558土壙、ＳＤ641溝跡と重複し、ＳＤ641より新しく、ＳＢ777･778･ＳＫ558より古い。

平面規模は桁行が北側柱列で総長約5.4m、柱間寸法が西より約2.0m・3.45m(2間分)、梁行が東側柱列で総長3.05m、柱間寸法が北より約1.3m･約1.7mである。方向は北側柱列でみると東で約8度南に偏している。柱穴は一辺25～85cmの隅丸方形で、規模にばらつきが見られる。柱痕跡は径11～16cmの円形で、1ヶ所で柱材が遺存している。

遺物は柱穴埋土からロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏・甕、刻印瓦片が少量出土している。



第78図　北１西３区建物跡平面図(8)

【ＳＢ807 掘立柱建物跡】（第78･111 図）

調査区南東部に位置する東西 3 間以上、南北 3 間以上の建物跡で、西半部は調査区外になる。ＳＢ777･778 掘立柱建物跡と柱筋を揃えて南北に並ぶ。柱穴は基本層位Ⅲａ層上面および地山面で 5 ヶ所検出し、柱痕跡も確認している。ＳＢ498・499・807 掘立柱建物跡、ＳＤ575 溝跡と重複し、ＳＢ498 より新しく、ＳＢ499、ＳＤ575 より古い。

柱間寸法は、北側柱列で東より 1.68ｍ･1.39ｍ、東側柱列で北より 1.46ｍ･1.50ｍである。方向は北側柱列でみると東で約 9 度南に、東側柱列でみると北で約 11 度東に偏している。柱穴は一辺 35～50cm の隅丸方形で、柱痕跡は径11～14cm の円形である。なお、本建物跡は北に棟を揃えて並ぶＳＢ777･778 と一連で、南北に長い建物跡になる可能性も考えられる。

遺物は柱穴埋土からロクロ調整の土師器坏、調整不明の土師器甕が数片出土している。

【ＳＢ498 掘立柱建物跡】（第78･111 図）

調査区南東部に位置する東西 3 間以上、南北 2 間以上の建物跡で、南西部は調査区外になる。ＳＢ777･778 掘立柱建物跡と柱筋を揃えて南北に並ぶ。柱穴は基本層位Ⅲａ層上面および地山面で 4 ヶ所検出したが、柱痕跡は確認していない。ＳＢ499･807 掘立柱建物跡と重複し、ＳＢ499･807 より古い。

柱間寸法は、北側柱列で東より約 1.8ｍ･約 1.8ｍ、東側柱列で北より約 2.0ｍである。方向は北側柱列でみると東で約 12 度南に偏している。柱穴は一辺約 30～45cm の隅丸方形である。なお、本建物跡は北に棟を揃えて並ぶＳＢ777・778 と一連で、南北に長い建物跡になる可能性も考えられる。

遺物は出土していない。

【ＳＢ499 掘立柱建物跡】（第78･111 図）

調査区南東部に位置する東西 2 間以上、南北 2 間以上の建物跡で、南西部は調査区外になる。ＳＢ777･778 掘立柱建物跡と柱筋を揃えて南北に並ぶ。柱穴は基本層位Ⅲａ層上面および地山面で 3 ヶ所検出し、この中の 1 ヶ所で柱痕跡を確認している。ＳＢ498･807 掘立柱建物跡と重複し、これらよりも新しい。

柱間寸法は、北側柱列で東より約 2.0ｍ、東側柱列で北より約 2.3ｍである。方向は東側柱列でみると北で約 12 度東に偏しており、ＳＢ778 建物跡と柱筋をほぼ揃える掘立柱建物跡である。柱穴は一辺 30～45cm の隅丸方形で、柱痕跡は径15cm 前後の円形である。なお、本建物跡は北に棟を揃えて並ぶＳＢ777・778 と一連で、南北に長い建物跡になる可能性も考えられる。

遺物は柱穴埋土からロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏・高台坏・甕が数片出土している。

【ＳＢ590 掘立柱建物跡】（第78･110･111 図）

調査区南東部に位置する南北 3 間、東西 2 間の東西棟である。柱穴は地山面で検出し、この中の 7 ヶ所で柱痕跡を確認している。ＳＢ591･746･819 掘立柱建物跡、ＳＫ701・811 土壙、ＳＤ614 溝跡と重複し、ＳＢ746、ＳＤ614 より新しく、ＳＢ591･819、ＳＫ701 より古いが、ＳＫ811 との新旧関係は不明である。

平面規模は桁行が西側柱列で総長 6.06ｍ、柱間寸法が北より 1.93ｍ･4.13ｍ(2 間分)、梁行が北妻で総長 4.13ｍ、柱間寸法が西より 2.04ｍ･2.09ｍ、南妻で総長約 4.3ｍ、柱間寸法が西より 2.28ｍ･約 2.0ｍで、南妻がやや広くなる。方向は西側柱列でみると北で約11 度東に偏している。柱穴は一辺 36～70

cmの隅丸方形で、柱痕跡は径15～22cmの円形である。

遺物は柱穴埋土からロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏・蓋・甕、瓦片が数片出土している。また柱痕跡からは赤焼土器坏が数片出土している。

【ＳＢ591掘立柱建物跡】（第78･110･111図）

調査区南東部に位置する南北3間、東西2間の東西棟である。柱穴は地山面で検出し、この中の6ヶ所で柱痕跡を確認している。ＳＢ590・746・819掘立柱建物跡、ＳＤ614溝跡と重複し、ＳＢ590・746、ＳＤ614より新しく、ＳＢ819より古い。

平面規模は桁行が西側柱列で総長5.97m、柱間寸法が北より約1.8m･約2.1m･2.1m、梁行が北妻で総長4.24m､柱間寸法が西より2.14m･2.11m､南妻で総長約4.9m､柱間寸法が西より2.71m･約2.2mで､南妻がやや広くなる｡方向は西側柱列でみると北で約16度東に偏している｡柱穴は一辺45～95cmの隅丸方形で、柱痕跡は径16～21cmの円形である。

遺物は柱穴埋土から土師器坏・甕、須恵器坏・甕が若干出土している。土師器坏はすべてロクロ調整のもので、底部に手持ちヘラケズリや回転ヘラケズリが施されている。

【ＳＢ819掘立柱建物跡】（第78･110･111図）

調査区南東部に位置する南北2間、東西1間の南北棟である。柱穴は地山面で検出し、この中の5ヶ所で柱痕跡を確認している。ＳＢ590･591掘立柱建物跡､ＳＤ614溝跡と重複し､これらよりも新しい。

平面規模は桁行が西側柱列で総長2.91m､柱間寸法が北より1.36m･1.56m､梁行が北側柱列で2.14mである。方向は西側柱列でみると北で約11度東に偏している｡柱穴は一辺45～80cmの隅丸方形で、深さは24～26cmである。柱痕跡は径12～18cmの円形で、1ヶ所で柱の抜き取りがみられる。

遺物は柱穴埋土からロクロ調整の土師器坏・甕が数片出土している。

【ＳＢ746掘立柱建物跡】（第78･111図）

調査区南東部に位置する東西3間、南北2間の東西棟である。柱穴は地山面で検出し、この中の4ヶ所で柱痕跡を確認している。ＳＢ590･591･747掘立柱建物跡と重複し、ＳＢ747より新しく、ＳＢ590･591より古い。

平面規模は桁行が南側柱列で総長5.95m､柱間寸法が西から1.95m･2.04m･1.96m、梁行が東妻で総長約4.2m､柱間寸法が北より約2.1m･約2.1mである。方向は南側柱列でみると東で約6度南に偏している。柱穴は一辺44～59cmの隅丸方形で､柱痕跡は径15～25cmの円形である。

遺物は柱穴埋土からロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏・甕が数片出土している。

【ＳＢ747掘立柱建物跡】（第78･111図）

調査区南東部に位置する東西3間、南北2間の東西棟である。柱穴は地山面で9ヶ所検出し、この中の2ヶ所で柱痕跡を確認している｡ＳＢ591･746掘立柱建物跡、ＳＫ731土壙と重複し、これらよりも古い。

平面規模は桁行が南側柱列で総長4.72m､柱間寸法が西より約1.7m・約1.5m・約1.5m､梁行が東妻で総長約2.7m､柱間寸法が北より約1.5m･約1.2mである｡方向は南側柱列でみると東で約2度南に偏している。柱穴は一辺30～40cmの隅丸方形で､柱痕跡は径13～14cmの円形である。